

---

# 仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～

竜王の白翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディフェル〜世界の覚醒者〜

### 【Nコード】

N6294R

### 【作者名】

竜王の白翼

### 【あらすじ】

とある町に住む高校生、天醒てんせい 土つかきは幼馴染である日々野ひびの 美莉みりと下校中にディケイドドライバーのようなものを見つける。特撮好きである土は喜びながらそのドライバーを拾う。その時銀色のオーロラが現れ…

この物語のライダーの名はディフェル。全てを覚醒さくめさせ、全てを導け！

初心者の書く小説です。駄文かもしれませんが暖かい目でみられると嬉しいです。

時々加筆修正を行いますので宜しくお願いします。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。暖かい目で見てくれると嬉しいです。

## プロローグ

とある世界のとある町。

そこに突然銀色のオーロラのようなものから、本来いるはずのないグロンギやアンノウンなどの怪人が現れ、街を破壊し、人々を襲い始めた。

パニックとなる人々の中に1人だけその怪人の群れに歩を進める少年がいた。

髪は黒く、少しツンツン頭の学生服を着たどこにでもいそうな少年だった。

「ああゝあ。テメエらこんなにやりやがって。主役の登場を盛り上げすぎだろってな」

やや呆れたような口調で言うと、ディケイドライダーのようだが色は銀色でライダーズクレストはWとオーズのものまであるドライバーを取り出した。

それを腰に当てるとベルトが形成され、1枚のカードを取り出した。

「いくぜ。テメエらの望む世界はここでぶち壊す!…変身!」

カードをドライバーに装填し、翼のような形をしたサイドレバーをスライドさせる。

「KAMEN - RIDE DEFER」

音声がなると同時に、透明なディケイドを除く11人のライダーの影が現れ少年の体に集まっていく。

そして、顔に刀のように鋭いライドプレートが刺さり、鎧が黄色く染まる。

目は青く、スーツは紺色、顔の側面には翼を模したものがあり、肩の鎧も翼を模した形となっていた。例えるなら「天使」のようなライダーだった。

怪人達の視線はすべてそのライダーに向けられる。怪人たちの1体が荒々しい声でその天使のようなライダーに向けて叫んだ。

「貴様！ 何者だ！」

その言葉を聞いたライダーは軽く鼻で笑うとまるで当たり前のように言い放つ。

「決まってるだろ。俺は俺でしかねえよ！ 覚えられるなら覚えておけ！」

このライダーの名は仮面ライダーディフェル。すべてのライダーを越えた力を持つと言われる「世界の覚醒者」と呼ばれる者。全てを覚醒させ、全てを導け！

## プロローグ（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「祝！初投稿〜！イエーイ！ドンドンパフッパフ」

士「うるさいぞ駄作者 気持ちはわからなくもないが…ってなんで俺が（少年）で表記されてるんだ!？」

竜王「このほうがプロローグっぽいじゃん」

士「はあ〜 まっいつか こんなやつが書いてるけど読んでやってくれ」

竜王 士「それではまた次回！」

## 全ての始まり（前書き）

今回は超駄文です…orz

それでも見てくれることを祈ります



## 全ての始まり

とある高校にて

「やつと終わったあ〜！ とつとと帰ってアニメみますか〜」  
たった今教室のド真ん中で叫んだのは学校で「特撮オタク」として有名な天醒てんせい士つかさである。

ややツンツン頭となっているのが特徴で、それ以外は特に特徴はない。それでいてフラグ体質なのだが本人はあまり気付いていない。つまり鈍感のフラグ体質という腹立たしいタイプだ。特撮オタクと呼ばれているが、特撮が1番好きなのでアニメも守備範囲である。教室からであると廊下でこつちを向いて手を振ってる女の子がいた。

「お〜いつ 士くーん！」

この廊下で堂々と手を振っている女の子は日々野ひつる 美莉みり。

士の幼馴染でかなりの美人。黒髪ロング、スタイルはいい、明るい、家事もできると完璧超人なのだが天然なのがたまにキズである。

「お前さあ、恥ずかしくねえか？」

「ん？何が？」

呆れつつ美莉に尋ねるが逆に質問で返されてしまった。

「いや、別に」

答えると面倒くさそうなことになりそうなのでとりあえず話を切り上げ、校門へ歩いて行った。

「で、結局一緒に帰ることになるんだよね」

なんだかんだで現在下校中。あのあと美莉は土を追いかけて、流れと一緒に帰ることになった。ちなみにいつもこんな感じで下校している。

「そりゃ家近いし、幼馴染だし、あと近所だし」

「なんか同じこと2回言わなかったか？」

とこんな無駄な会話を繰り返していると、道の隅で土が何かを見つけた。

「なんだこれ？ってディケイドドライバー！？ やっほおおおおお  
おおおお！……！」

土の見つけたものはディケイドドライバーのようだが中央の赤い部分が黄色くなっていて、ボロボロであった。

「はあく。またこれだよ 少しは落ち着いてって聞いてないし…」

異常なまでにテンションのあがっている土を見て美莉が注意するが完全にスルー。前述のとおり土は「特撮オタク」で特撮ものには目がないのである。

「よし！ なんか違う気もするがこれはもらっていいこう うん、そうしよう」

一人で勝手に決めた土はそのディケイドドライバーのようなものをバツグにいれた。

「それもうボロボロだよ 動かないと思うけど…」

美莉が呟いたとほぼ同時に周りの人々が騒ぎ始めた。何やら後ろを指さしていた。不思議に思い、二人が振り返るとそこには銀色のオーロラ（……）が道をふさぐように現れていた。

「オイオイ冗談だろ…あれってディケイドに出る世界を行き来するオーロラじゃねえか！」

「わあくオーロラ見えるだなんて幸せ」

驚愕する土の横で美莉はあきらかに的外れなことを言って感動していた。

それを見た土は美莉の頭にチョップをくらわせた。

「バカか！ んなこと言っで…」

いいかけたところで何か考え始めた。

「いいーいいー」と言ってる美莉をほつといて、何かを考え1つの答えがでた。いくら特撮オタクでもあまり実現してほしくない答えが…

(まさかこれって…滅びの現象？ いや、さすがにそれはねえよな)

だが、この否定は裏切られた。なぜならそのオーロラから

無数の怪人が現れたのだから…

全ての始まり（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「終わった…駄文すぎて死ぬる…」

美莉「大丈夫だよ作者さん。初心者なんだしまだまだこれからだよ」

士「そうだぞ。見苦しいから落ち込むなよ」

竜王「美莉ありがとう！そして士は死ぬ」

士「なんだと！やんのか！」

竜王「次回ついに変身します」

士「無視すんなやゴラアアアアアアアア！」

美莉「いいじゃん。変身するんだし。気にしない気にしない」

竜王「おーい。そろそろ終わるぞー」

全員「それではまた次回！」

## 天使降臨（前書き）

今回は初変身の分長いです！

自分のなかではよくできたほうです。

それでは、どうぞ！

## 天使降臨

突如現れた怪人達にパニックになる人々。怪人達はその人々を襲い始め、町を破壊していった。

「えっ。あれ何！？ どうなってるの!?!」

「落ち着け！ とにかく逃げるぞ！」

士はパニックになりかけた美莉の手を引っ張り怪人達から逃げた。

あたりからは人の悲鳴や建物が崩れる音が聞こえてくるが、今の士には一切耳に入らなかった。いや、入れたくなかった。

（なんでこんなことになった!? 本当に滅びの現象が起こるだなんて!?! 「冗談じゃねえ！」

さすがに特撮好きでもこれは喜ぶことはできない。現実で怪人が現れ、人々を切り裂き、貫き、叩き潰している。平和だった町はもの数秒で地獄絵図となってしまった。

「ねえ。あれって仮面ライダーにでる怪人だよね…」

「ああ」

「人が…どんどん殺されてる…」

「ああ」

「私たち…グスツ…どうなるの？」

「…さあな」

美莉が泣いていたことに気づき、土は辛くなった。助かる保障もない。ただ逃げることしかできない。

(クソツ！ やっぱ本物のライダーがいりゃ…)

土の思考は途中で途切れた。自分の横を高速で通りすぎ、自分たちの前に現れたのだから。虫を模して、周りの時間が遅くなったかのような移動をしたこの怪人は

「ワーム!？」

逃げるしかできない状況で最も最悪の怪人だった。ワームはカブトに出てくる名の通り虫の怪人でクロツクアップという高速移動が使える。もちろん人間が逃げ切ることは不可能だ。

(クロツクアップなんてただの人間相手に反則だろ！ どうすりゃいいんだよ……ツ！)

もはや絶体絶命だった。だがそんな状況にもかかわらず、いつの間にか泣きやんだ美莉が変なことをいつてきた。

「ねえねえ。 あのスピードで転んだら痛そうだよね」

「はあ！？ バカなことってんじゃね…あつ、イケるかも」

「えっ。どつやって…キャッー!」



なにかを思いついた土は美莉の手を引いて再び走り始めた。当然、ワームはクロックアップでこちらへ向かってくる。あっという間に追いつかれる。ワームが土をつかもうとした…

そのとき突然土は横へ1歩引き足をだした。ワームはその足に引っ掛かり、高速のままこけて、10メートル先まで滑っていった。

「すごい！ 土くんかっこいい！」

「んなことより行くぞ！（できると思わなかった…）」

かなりの賭けだったらしく、成功したことに驚きつつも、目の前の交差点を曲がった。

だがそこには10体以上の怪人が先回りしていた。

「う、嘘……」

「最悪だ……ッ！」

2人が動けずにいると怪人が一斉に飛びかかってきた。

「ああもう！ 美莉、お前は逃げる！ 俺がこいつらを引き付けるから！」

「でもそんなことしたら土君が……」

「心配しなくていいからとっとと行け！」

そう言うと、士はバッグから教科書をだして投げつけた。

ぶつけられた怪人は何かを叫びながら士のほうへ向かってきた。しかもなぜか全員。士は全力疾走で逃げた。

「こいつら単純すぎんだろおおおおおおおおお！……！！！」

「絶対戻ってきてねー！」

士には美莉の声を聞きとることはできなかった。

（もうどんだけ走ったんだ……？）

あれから結構走ったと思う。しかし全く怪人たちから振り切っていなかった。

適当に走り回ると遠くに誰かがいた。しかし士は「誰か」は間違いだということに気づいた。「何か」が正しかった。いたのは怪人だった……

「絶体絶命……ってか？」

そう呟いた瞬間、怪人の1体が飛びかかってきた。反応はできなかった。そして怪人はその鋭い爪でバググ（・・・）を引き裂いた。

「……………は？」

理解するのに時間が掛かった。バググには爪痕がある。幸いかすっただけのようだ。

とりあえず別の方向へ走り、逃げながら考えた。

（なんで俺じゃなくてバググを狙った？ 俺なんか狙われそうなもの持ってたっけ？ 入ってるのは文房具に教科書にさっき拾ったドライバー……………それが！）

バググから急いでドライバーを出した。だが、なぜかボロボロだったはずのドライバーから傷はなくなっていた。

（これを投げつりゃあ助かるかもしれないな……………でも狙うってこととはまさか……………本物なのか？）

今土の頭には2つの選択肢があった。1つはとっと投げつけ逃げる。もう1つはためしにドライバーをつける。普通なら前者を選ぶのだが……………

（特撮オタクなら1度は特撮ヒーローになるのが夢だろ！ 少しでも本物の可能性があるなら、誰かを守る力が入るかもしれないねえなら、やってみようじゃねえか！）

覚悟をきめ、怪人の群れの方を振り向きながらドライバーを腰にあ

てた。

すると、ベルトが形成され、ライドブツカーのようなものから1枚のカードが土の手元へ飛んできた。

なんとかキャッチした土はカードをみた。そこにはディケイドのよ  
うなライダーが写っていた。

「誰だこれ？ 見たことねえ… でも」

土は怪人とカードを交互に見て、何かを決意したかのようにカードを構えた。ディケイドに変身するときの門矢 土のように…

「ここまできたらやるしかねえよな！！ 変身！」

掛け声の後にカードをドライバーに装填し、翼のような形のサイドレバーを閉じるようにスライドさせた。

「KAMEN - RIDE DEFER」

音声がなると同時に、透明なディケイドを除く11人のライダーの影が現れ土の体に集まっていく。

そして、顔に刀のように鋭いライドプレートが刺さり、鎧が黄色く染まる。

目は青く、スーツは紺色、顔の側面には翼を模したものがあり、肩の鎧も翼を模した形となっていた。例えるなら「天使」のようなライダーだった。

そのライダーを見た怪人の群れの1体が荒々しい声でその天使のようなライダーに向けて叫んだ。

「貴様！何者だ！」

その言葉を聞いたライダーは軽く鼻で笑うとまるで当たり前のよう  
に言い放つ。

「そう聞かれたら答えは1択だろ。俺は通りすがりの仮面ライダー  
だ！覚えておけ！」

仮面ライダーディフェル（天使） 降臨



## 天使無双（前書き）

今回も長いです。

でもなれるとこれが普通なのかなあ？

## 天使無双

「うおおおおおおおおお！！！！ マジで変身したああああああああああ！！！！」

夢だった仮面ライダーへの変身。それが叶ったことで士のテンションはMAXを超えていた。正直不謹慎である。

だが怪人はそんなことにお構いなく襲いかかってくる。

デیفエルはその群れの1番前にいた怪人を蹴り飛ばした。それにより後ろの数体が倒れる。

「さあて、さつきまでの分と……町の人の分、美莉を泣かせた分、全部しっかり受けてもらうぜっ！」

そう言うとデیفエルはライドブッカーへヴンをぬいて、ソードモードに変えた。一気に走り出し、倒れた怪人を飛び越え後ろの怪人に斬撃をくらわせた。次々とくらわせる中1枚のカードを取り出しドライバーに読み込ませた。

「ATTACK - RIDE SLASH」

すると刀身が白く光り、刀身の左右に2本ずつ光の刃ができる。そのまま周りの怪人に斬撃をくらわせると、怪人たちは爆発した。

後ろをみると最初に倒れていた怪人たちが起き始めた。

「お前ら起きないでそのまま潰れる」



「FORM・RIDE OOO SAGOZO」

「サゴゾ……サゴゾ！」

妙な歌が流れるとディフェルの姿が変わりオーズの白のコンボ、サゴゾになり、そのままゴリラのように胸を叩き始めた。

起きようとした怪人たちは何かに押しつぶされていく。耐えきれなくなつた怪人たちは爆発した。

サゴゾの特殊能力は重力操作であり、今のは怪人たちの重力を大きくして潰したのだ。

ディフェルの姿に戻りあたりを見回すとマシンディケイダーのディフェル版、マシンディフェンダーがあつた。マゼンタだった部分が黄色になっている。

「早く美莉のところに向かわねえとなあ…なんかいいカードは…」

バイクに乗りつつカードを見るとあるカードを見つけた。

それをみたディフェルは使うためにカードをドライバーに入れた。

「KAMEN・RIDE」



ディフェルがいた。

「さあ、お前たちの罪を数えろ！ 言えたああああああああああ  
！ 決め台詞言えたああああああああああ！！！！」

ドーパントに指さした後、またヒーローの面影をなくした士。正直うざったい。そこへアイスエイジドーパントから冷気が放たれる。

「FORM - RIDE HEAT x TRIGGER」

興奮したままカードを入れ、赤と青のW、ヒートトリガーになるとトリガーマグナムを構え炎の弾丸を連射した。冷気は破られ、そのままアイスエイジドーパントにあたる。弱点である炎を受けたためか、かなり苦しんでいる。

「やっべ、いつまでも笑ってちゃダメだよな。 吹っ飛べ！」

『FINAL - ATTACK - RIDE DO DO DO DO DO  
UBLE』

「トリガーエクスプロージョン！」

トリガーマグナムから炎の光線が発射され、あたりを薙ぎ払うように腕を動かす。炎の光線は全てのドーパントにヒットし、ドーパントは爆発した。

全滅したのを確認すると再びディフェルに戻り、マシンディフェンダーに乗ってその場を後にした。

次に現れたのは魔化魍だった。蟹や鳥、猫などの妖怪のようなものが無数にいた。

それを見たディフェルはカードを取り出した。

「ドーパントとかよりも多いな。なら、さつき見つけたとおきを使うか。変身！」

「FINAL - KAMEN - RIDE HIBIKI」

激しい炎が身を包み、ディスクアニマルが体に集まっていく。片手でその炎を振り払うと響鬼の最強フォーム、装甲響鬼アイムドとなっていた。  
(以下D響鬼)

実は土はさつきカードを見ていたとき全ライダーの最強フォームのカードがあることに気付いたのだ。

走り出したD響鬼は「夏の魔化魍」と分類される小型の魔化魍を炎を纏ったアームセイバーで切り裂いていく。切られた瞬間に消滅していき、あつという間に「夏の魔化魍」が全滅する。

「こいつでしまいだ！」

「FINAL - ATTACK - RIDE H I H I H I H I

BIKI」

「音撃刃 鬼神覚声！」

アームドセイバーを音撃モードに変え、気合いを込めた声をマイクのような部分に叫ぶ。そしてアームドセイバーで一閃すると、清めの斬撃が放たれる。

あれだけ巨大な魔化魍の群れが一瞬で消滅していく。圧倒的だった。するとタイミングはいいが、土の意思に関係なくディフェルに戻ってしまった同時に疲労感が溜まる。

「おいおい。今ので約5分かな……制限時間付きかよ、ファイナルカメンライド」

ファイナルカメンライドは時間制限だけでなく、負担もかかるのである。

少々ガツカリしていると近くから悲鳴が聞こえた。この声には聞き覚えがあった。

「美莉か！クソツ、間に合えよ！」

マシンディフェンダーに乗ると、全速力で走り出した。

美莉は走っていた。土から離れた後、怪人が全くいなかったためホツツとしていたが、先ほど見つかってしまった。見つけた怪人はグロンギである。

理解不能な言葉を発しながら追いかけてきたため、必死に走った。怖くて泣きそうだった。しかし今は守ってくれる人はいない。美莉の頭には2人の顔があった。

1人は土、もう1人は……

そのとき、エンジン音が聞こえたかと思うと、グロンギ達のはねられていった。

「やっと見つけたぜ。美莉！」

「えっ………もしかして土君!？」

「そうだよ。さっきヒーローとなった天醒 土さんですよー」

マシンディフェンダーから降り、美莉の元へ歩いていく。顔を見ると泣いていた。

「よ……よかったあ…グスツ。土君が…グスツ…生きてて…」

「俺が死ぬわけないだろ？泣き虫ほっといっているのかよ」

そういつて振り返ると、仮面の奥からグロンギの群れをにらんだ。

「美莉、隠れてろ。こいつらは……1体も残さず塵にしてやるっ！  
！」

「ッ！、う…うん」

美莉は士の怒声におびえながらも近くの建物の陰に隠れた。

「宣言どおり塵にしてやるよ。変身！」

「FINAL - KAMEN - RIDE KUUGA」

黒い闇が体を包み黒い鎧を纏っていく。そして正義の「究極の闇」  
クウガルティメットフォームレッドアイとなった。（以下Dクウ  
ガ）

クモのグロンギがDクウガに向かって糸を吐いた。しかし片手で振  
り払い、反応できない速度でそのグロンギの元へ走ると80tのパ  
ンチをはなった。あまりの威力にたったそれだけで爆発してしまっ  
た。

そして1枚のカードをドライバーに入れる。

「ATTACK - RIDE TYO - SIZEN - HAKKAN -  
ORYOKU」

Dクウガはグロンギの群れに手をかざした。すると全てのグロンギ  
の体が発火し、そのまま消滅してしまった。

ディフェルに戻ると向こう側に意外な相手がいた。アンノウンの上位個体であるエルロードの1体、水のエルであった。

「最後はこいつ自身で戦ってやる！」

駆けだして水のエルにパンチを放つ。しかしかわされてしまい、そのままクジラのひれのような形をした槍を横なぎに振る。だがディフェルには当たらず、後ろを向きながらライドブッカーヘヴンで受け止めていた。

「そうくるのはわかってたよ！」

槍をはじくと振り向きざまに斬撃をくらわせる。2発、3発とくらわせ、キックをくらわせると水のエルは吹っ飛んだ。

起き上った水のエルは手をかざし、水流を放った。

「ATTACK - RIDE BLUST」

カードを入れるとライドブッカーヘヴンをガンモードに変え、無数の光弾を放つ。

最初の1発が水流を避けて水のエルの腕に当たる。それにより腕を下ろしてしまい、水流が止まる。

残りの光弾が水のエルに炸裂し、かなりのダメージを負った。

ディフェルはライドブッカーヘヴンからディフェルのマークの書かれた黄色のカードを取り出す。



「いくぜ！てめえらの望む崩壊した世界は俺がぶち壊す！！！」

「FINAL - ATTACK - RIDE DE DE DE DE  
FER」

音声がなると12枚の白い3Dカードが1直線に並び、斜めになるように上昇していく。そのまま高くジャンプすると、キックの体制をとる。

カードをくぐりながら右足に白いエネルギーが集まっていく。

「デイメンションヘヴンキック！！！」

12枚すべてをくぐり、最大までエネルギーのたまったキックを放つ。くらった水のエルは約15メートル吹き飛び、大爆発した。

## 天使無双（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「つかれた…思っていたより戦闘描写が難しい…」

士「甘くみるからこうなるんだ」

美莉「それにしてもディフェル強いね！」

士「ああ。まさか最強フォームになれるとはな。こっちも見つけたときは驚いたよ」

竜王「それはやりたかったんだよ。でもディフェルのメインはそれではない！」

士「何！どういうことだ！」

美莉「詳しく教えて！」

竜王「ネタバレだから言わない！さあ、そろそろ終わるぞ」

士「チツ…逃げやがった…」

美莉「でも終わりだから挨拶しよう？」

全員「それではまた次回！」

## 登場人物 その1（前書き）

キャラクター紹介です。

5月15日、みてみんなユーザ名、野上幸太郎さんの描いたディフエルの絵を載せました！

注意

初見の人にはネタバレ要素があります。それでも良いという人は見てください。

## 登場人物 その1

天醒 てんせい 士イメージC V つかさ 阿部敦（とある魔術の禁書目録 上条 当麻）

16歳 5月3日生まれ

身長169cm 体重55kg

ややツンツン頭の黒髪が特徴でそれ以外に特徴はない。顔は中の上くらい。鈍感のフラグ体質である。

高校1年生で学校で有名な特撮オタク。ただ、特撮が1番好きなので、アニメも守備範囲である。二次元のタイプは黒髪ロングの巨乳。

性格は優しく、困っている人を放っておけない。だがキレるとやばい。

色っぽいことがダメで見るとすぐ気絶してしまい、ひどい時には鼻血を吹いて倒れる。

特撮物に目がなく、放送、玩具、さらには戦闘時にまでテンションがおかしくなる。玩具一式は家の地下に保管されているらしい。

ファイズの世界で乾 巧に会う口実としてわざと服を汚すなど少しバカ。

意外と勘がよく、戦闘で真価を発揮する。戦闘時のモットーは「放送を見てできんじゃね?」と思ったことを試す「で、これによって実行したことは大概成功する。」

仮面ライダーディフェル

身長198cm 体重97kg  
パンチ力10t キック力13t ジャンプ力ひと跳び約40m  
走力100mを4.5秒  
世界の覚醒者、全てのライダーを越える者、天使、滅殺者と呼ばれている。

目は青、ライドプレートは刀のように鋭く、基本カラーは黄色で、スーツは紺色。

顔の側面に翼のようなものがあり、肩は翼を模した形となっている。ディフェルドライバーで変身する。銀色になっていてドライバーのトリックスターは黄色、サイドレバーは翼のようになっていて。ライダーズクレストもクウガからオーズまでにふえている。

武器はライドブッカーヘヴン。ディケイドのものが銀色になり、ソードモードの刀身が少し長くなっている。

各ライダーの最強フォームに変身する「ファイナルカメンライド」があるが、5分しか変身できず、5分を過ぎると勝手にディフェルドに戻る。連続使用も可能だが、体に負担がかかる。

必殺技は12枚の白い3Dカードをくぐりながら飛び蹴りを放つ、「ディメンションヘヴンキック」、同じくライドブッカーヘヴンで斬撃を放つ「ディメンションヘヴンスラッシュ」、同じくライドブッカーヘヴンで黄色の光弾を放つ「ディメンションヘヴンブラスト」。威力は全て40t。

> i 2 3 8 9 3 | 3 1 5 6 <

> i 2 3 8 9 4 | 3 1 5 6 <

デイフェル ネオコンプリートフォーム

身長変化なし 体重105kg

パンチ力15t + 一緒に戦っている平成ライダーの人数×3t (平成のライダーは全て対象。呼び出したものは対象外) + ??? × 5t  
キック力19t + 一緒に戦っている平成ライダーの人数×3t  
(#) + ??? × 5t

ジャンプ力ひと跳び約50m 走力100mを4秒

黄色のケータッチを使って変身するデイフェルの強化体。だが、これは完全な形態ではないらしい。

目は黄色、体にはクウガからオーズの最強フォーム、ライドプレートの間にはネオコンプリートのカードがセットされている。鎧は銀色が中心になっている。背中には白い翼がたたまれており、展開することで飛行することができる。

デイケイドのように各ライダーの最強フォームを呼び出せるが、デイケイドと違い任意の場所に呼び出すことが可能。

さらに、???と一緒に戦うと胸のカードが全て???になり???のカードを全て使用可能になる。

この状態で放たれるデイフェル自身の必殺技は全て威力50t + 一緒に戦っている平成ライダーの人数×3t (#) + ??? × 5t

日々野<sup>ひびの</sup> 美莉<sup>みり</sup>イメー<sup>み</sup>ジCV高橋 美佳子(緋弾のARIA) 星伽 白  
雪)

15歳 8月12日生まれ

身長160cm 体重41kg

黒髪ロング、顔立ちもよい、スタイルもいい、明るい、家事もできると完璧超人の高校1年生。だが、天然で、的外れなことをいうときもある。

士の幼馴染で、泣き虫とからかわれるときもある。両親は幼い頃になくなっていて、兄と2人で暮らしていたが、1年前に兄が行方不明になっている。

学校では人気で、写真の販売まで行われるほど。

弓道部に所属していて弓矢の扱いが異常なまでにうまい。

前述で家事ができるとあるが、何故かお菓子類が作れず、作ると人を気絶させ、泡をふかせるほどにまずい。

仮面ライダーを「ライダーさん」と呼んでいる。

滅びの現象の件から士のが好きになり、すぐ顔が赤くなったりしてしまふ。だが、ごまかすことが下手で態度にもでてしまうため士以外のみんなが気付く。

渡から弓のようなツールとカードを与えられた。

> i 3 1 7 8 1 — 4 0 3 6 <

向井 むかい 聖麻イメージCV鈴木 達史（バカとテストと召喚獣） 坂本  
雄二

15歳 9月1日生まれ

身長174cm 体重63kg

髪が赤く、背が高い士の中学からの親友の高校1年生。モテそうなのだがガサツすぎてもてない。髪は本人いわく地毛らしい。

土程ではないが特撮好きでどちらかといったらアニメの方が好き。観察力がすごく、すぐに人の動作のクセなどを覚え、双子だろうかなんだろうがすぐに見極めることができる。

それを生かして相手の動きを観察してサポートしたり、人の気持ちを読むこともある。

美莉の恋心を知ってから美莉をからかうことにはまった。

足がかなり速く、1年生では1番速い。





## 戦いの後の休息（前書き）

また駄文です。グダグダです。

3話を書いたときのあれはいつたいたいどこへ…

## 戦いの後の休息

水のエルを倒したディフェルは変身するとき土に戻った。かなりの疲労感が見れる。

だが、水のエルのような上位個体がここで現れたということは、おそらくあれが最後だったのだろう。町から人々の悲鳴や怪人の雄たけびは止んでいた。

「はあ…はあ…、おーい美莉い、大丈夫か？」

「う、うん。土君が助けてくれたから大丈夫だよ」

多少涙の痕があるが、いつも通りの笑顔を見せていた。それを見て安心した土は

「そうか。よかった」

と言い、笑顔になる。

「ッ！／／／」

「ん？なんか顔が赤いが熱でもあんのか？」

「なっ、なな、なんでもないよ！／／／」

あわてながらも自身の無事を言う美莉。土は不思議に思っていたがとりあえず大丈夫そうだ。



わわわわツツツツツ！！！！）

心拍数がとんでもない状態で道路を走り、家へ向かうのだった。

「なんでこんなことになってるんだ〜！！！！」

先に見えた土の家は大崩壊していた。まるでミサイル（・・・）が当たったように……

実はジェットスラッガーで狂喜乱舞していたさい土の家の前を通っていて、特に狙いも定めずにミサイルを撃ったせいで土の家はもちろん周囲の家は崩壊していた。

「悲惨だね……………しかも周りの家まで……………これもさっきの怪人がやったの？」

美莉は若干悲しそうな顔で尋ねてきた。土はこうなった理由がわかり、冷や汗を流した。

「ええと…その…非常に言いにくいのですが…」

「ん？何？別に怒らないよ」

天使のような笑顔で言ったため土は意を決して真そつを言った。

「実はこれ、俺がやってしまいました！すみませんでした！」

バチン！と乾いた音がした。

美莉の家は無事だった。それを見た士はとんでもないことを美莉に頼んだ。

「お願いします美莉様！しばらく居候させてください！」

「うん。でもご近所さんの家をあんなにしてよくいえるね。そんなこと」

いつもの笑顔は消えていた。今は冷たい目で士を見ている。

「でも、今日は助けてくれたし、お礼にいいよ！」

「ありがとうございます！神様仏様美莉様！大変感謝します！」

てなわけで居候決定。

それから2時間後。（思いつかなかったとかじゃないんだからね！）

士はソファーに座りながら、ダルそうにテレビのチャンネルを変え、

美莉は食器を洗っていた。

流れをまとめると

風呂を沸かして土が入る。美莉はご飯を作る。

2人でご飯を食べる。

現在である。

「もう。少しは手伝ってよ」

土に呼びかけても全く反応しない。どうやら寝てしまったらしい。

洗い終わると土の隣へ座った。土はソファーにもたれかかるように寝ていた。

(なんかかわいいかも…)

顔をつつく。しかし起きない。

(昼間はあるなにかっこよかったのに……あれ？なんでこんなに胸が苦しいんだろう?)

今日ことを思い出す。パニックになりそうだった自分の手を引つ張って逃げてくれた。自分を囿にしてまで逃がしてくれた。本当にヒーローとなって駆けつけてくれた。最後に見せた笑顔。

(そうか……私好きになったんだ。土君のこと…)

自分の恋心に自覚し、もう1度士の顔を見る。顔が赤くなっていくのがわかった。体がかつてに動き、自分の顔を士の顔に近づけていく。あと少しで…

すると、土がいいのか悪いのかわからないこのタイミングで起きた。

「ん……………ってうわっ!」

「キャッ!」

2人ともビツクリして後ろに跳びあがった。それによって美莉がテレビに頭をぶつけた。

その瞬間、あたりが暗闇に包まれたかと思うといくつもの地球がまわりに現れた。

「うお!これってデイケイドの……………ってことは紅渡さんが!うおおおおおおおおおおお!!!!」

「えっ?それって誰?」

またテンションがおかしくなった士の横で、あまり特撮ものは見えない美莉が首をかしげていると

「僕のことですよ」

そこには例のごとく紅渡がいた。







## シヨツカーを超えた組織（前書き）

長くするつもりがなんか短くなった……  
どうしてこうなったorzいつもよりオワタよ、うん。

## シヨツカーを超えた組織

2人は声のした方へ振り返る。

「こちらでは初めましてですね。天醒 土君。そして初めまして日々野 美莉さん」

「はあ、初めまして。日々野 美莉です」

丁寧にあいさつをする渡。それに対して美莉もあいさつをするが

「は、ははは、初めまして！紅 渡さん！サインください！！！」

土はバカみたいにテンションが上がって渡の手を握ってぶんぶん振っていた……もう何も言えないくらいにバカである。

「本当にオタクなんですね……喜ぶ気持ちもわかりますが後にしてください」

苦笑していたがすぐに真剣な顔になる。やはりよほどのことらしい。

「わかっていているとは思いますが、天醒 土君、あなたには世界を旅してもらいたいと思っています（……………）」

「やっぱりそうなるんですね……お決まりの大シヨツカーですか？」

「一体何の話何ですか？ 世界ってどんな？」

話についていけない美莉は渡に尋ねた。

「簡単に言うと各ライダーのいる世界です。パラレルワールドといったところですね」

美莉に要点だけを言うと再び士の方を向く。

「士君。実は大ショッカーは乗っ取られました。たった15人によつて」

「ッ！！！」

「????？」

美莉はわけがわからず首をかしげているが、士は驚愕した。

大ショッカーは歴代ライダーの怪人全てを率いた悪の組織である。兵力、科学技術など全てをとつても脅威であり、オールライダー（Wを含めた27人）がそろつてはじめて相手にできるくらいである。それをたった15人によつて乗っ取られたとなると相手は今までの怪人たちよりケタ外れに強い。

「そいつらの名前は？それとどれくらい強いんですか？」

真剣な顔つきで尋ねる。渡はそれに対してあっさり答える。

「名はカエルム。強さは1番下でアルティメットクウガと同等らしいです」

想像していたものよりも次元が違いすぎる。誰が聞いたって絶望するような強さだ。だが士の顔は初めて変身したときと同じ顔をして

いた。

「どうせ世界が大変なことになってるんですね？」

「ええ」

士は拳を握りしめて敬語ではない、いつもの口調でさげんだ。

「だったら決まってるんだろ！それで悲しむ人ができるなら、俺達の世界のようになれるってんなら俺がそいつらの望むその世界を跡形もなくぶっ壊してやる！！！」

美莉も渡も驚いたような顔をしていた。渡は微笑みながら

「いい心構えです。ですが」

すると渡は士を睨むと冷静な声で

「今回はそれだけでどうにかなるような相手ではありません。キバット！タツロット！」

渡が何かを呼ぶとどこからともなく金色の蝙蝠のようなキバット・バット3世と龍とルーレットがあわさったタツロットがやってくる。

「よっしゃああ！キバって、いくぜー！ガブッ！」

「ビュンビューン！！テンションフォルテッシモッ！！！！」

「構えてください士君。変身」

キバットが渡の手に噛みつき鎖のようなもので赤いベルトが形成される。キバットはベルトの中央に宙ずりになり、タツロットは左腕にとまる。

その瞬間、黄金の蝙蝠が体を包んでいき左手で振り払う。そこには「黄金のキバ」ことキバエンペラーフォームが君臨していた。

「えっ？あのひとも仮面ライダーなの？しかもピカピカしてる！」

「何でお前はいつもズレてんだよ！で、やらなきゃなんですよね、渡さん」

そう言いつつもすでに土はドライバーを腰に当てベルトを形成し、カードを構えている。

「そうです。僕があなたを試します。合格してみせてください」

「上等だ！変身！！！」

『KAMENRIDE DEFER』

カードを装填し、ディフェルに変身する。そしてディフェルはライドブツカーヘヴンをソードモードに変え、キバはザンバットソードを手にして構えた。

美莉は心配していた。特撮を見ていなくても秀囲気でわかっていた。

（あの人は絶対土君より強い……土君が危ない……）

だが止めることはできなかった。土は背を向けているが恐らく顔は

もつやる気なのだろう。同じくライドブッカーへウンを構えていた。

（お願い！けがしないでッ！士君！！！！）

美莉が祈ったと同時に2人は走り出した。





## 覚醒の天使 vs 黄金の皇帝（前書き）

つ、つかれた…

でも、初5000字突破だあああああ！！！！

書いてて思ったけど今回の戦いは仮面ライダーにできんのだろうか？

## 覚醒の天使 v s 黄金の皇帝

辺りはいつの間にか夜の市街地に変わっていたが、2人は気づいていないかのように、互いの方を向き駆けだしている。先に攻撃を仕掛けたのはディフェルだった。ライドブツカーヘヴンを斜め一文字に振り、キバに斬撃をくらわせようとする。

しかし、キバはそれを最低限の動きで避けると、即座にザンバットソードによる一撃を放つ。それをディフェルは後ろを向きつつ、ライドブツカーヘヴンで受け止めた。水のエル戦で見せた防御である。そのまま、同じように剣を弾き、振り向きながらカウンター斬撃を放つ。

「いい動きです。戦い初めたばかりにしては素晴らしいですが」

賞賛を与えていたキバは途中で言葉を切った。

「僕には通用しませんよ」

斬撃を放っていたディフェルは腹部に何かの感触を感じた。ライドブツカーヘヴンはキバの鎧に当たる寸前で止まってしまふ。腹部には銃口にスクリューのついた緑色の銃、バツシャーマグナムが突き立てられていた。

「ぐッ！がああああああああああああああッッッ！！！」

それに気づいたときには既に遅く、水の弾丸がゼロ距離で連射され、ディフェルは大きく吹き飛んだ。1発の威力は低いがゼロ距離の連

射ならば、大ダメージである。

デیفエルは吹き飛ばされるも、なんとか受け身をとると再びキバの方へ走りだしながら2枚のカードを取り出し、そのうちの1枚のカードを装填する。

『FINAL KAMENRIDE KABUTO』

カブトの装甲が厚くなり、赤と銀を基調としたカブトの最強フォーム、ハイパーフォームとなる（以下Dカブト）。そして残りのカードを装填する。

『ATTACKRIDE HYPERCLOCKUP』

すると鎧が展開され、金色のボディが現れ、背中に昆虫の羽の形をしたエネルギーが噴射される。展開し終わるとともに超高速でキバに向かう。一方のキバは両手を軽く広げて余裕の体制だった。

「これで終わりにさせてもらっぜッ！」

『FINAL ATTACKRIDE KAKAKAKABUTO』

カードを装填すると、パーフェクトゼクターに全ゼクターが合体され、巨大なタキオン粒子の刃ができる。そのまま必殺技マキシマムハイパータイフーンを放とうとするが突如、Dカブトの体に赤い電撃のようなものが走り、動きが止まってしまった。

「まさか…これって…」

「そうです。魔皇力のキバの紋章です。どう切り抜けますか？」

足元には魔皇力でできたキバの紋章があった。魔皇力はキバなどフアンガイアのエネルギーのようなもので、ただの人間に流せば死につながることもある。先の体制の理由はこれを形成していたからだ。キバにとっては好機のため、ザンバットソードを構え、Dカブトに向かってくる。

「が…あ…くツ、なら！」

苦しみながらもパーフェクトゼクターをガンモードに変形させ、自分の少し前の地面にガンモードの必殺技マキシマムハイパーサイクロンを放つ。

「ツ!!!」

当然地面が砕け散り、激しい衝撃波が生まれる。キバにとっても予想外で衝撃波をモロに浴びる。いくら衝撃波でもダメージは免れず、10mも吹き飛んでしまう。

だがキバは何かを感じてすぐに起き上がると、タツロットの首を引いてスロットを回し、キバの紋章の目で止まる。

「ウェイクアップファイバーッ！」

Dカブトは爆風の勢いと飛行によって、上空にいた、そしてもう一度カブトのカードを装填する。

『FINAL ATTACK RIDE K A K A K A K A B U  
TO』

(単純にあのまま撃つてもよけられちまうし、だから変わった方法で攻めようとしたらこれも予測済みかよ。なら、勝負だッ！)

右足に膨大な量のタキオン粒子が集まる。飛び蹴りの体制になり、3つ目の必殺技ハイパーライダーキックを放つ。

キバの足には巨大な魔王力の蝙蝠の翼が生える。そして、エンペラームーンブレイクを後ろ回転蹴りの容量で放つ。

2つのキックが激突し、大爆発が巻き起こった。

美莉はもはや見ていることができなかつた。どう見ても土が劣勢であり、今も倒れているのはディフェルに戻ってしまった土だつた。

(お願いだから……もう、私の周りからいなくならないで……ッ！)

「はあ……はあ……、さすがに威力が違いすぎるよな……」

ディフェルはなんとか立ち上がるもすでにボロボロであった。キバはというとダメージを受けたもののディフェルとは違い、普通に立っていた。

「どうしました？ここで終わりですか？」

キバは挑発してくる。だが挑発などなくてもディフェルは戦うだろう。もう目の前で人が傷つかせないために、悲しませないために、そうなってる世界があるならいくらでも立ち上がるだろう。

「んなわけねえだろ。見せてやるよ、最終兵器」

するとどこからかあるものを取り出した。黄色のケータツチであった。専用のカードを入れ、ライダーのマークを順に押ししていく。

『 K U U G A   A G I T O   R Y U K I   F A I Z   B L A D E  
H I B I K I   K A B U T O   D E N - O   K I V A   D O U B L  
E   O O O   F I N A L K A M E N R I D E   D E F F E R 』

ディフェルの目が黄色に変わり、体に各ライダーの最強フォームのカードがセットされる。鎧から黄色が抜け、ライダープレートの間  
に今のディフェルのカードがセットされ、さらに背中に白い翼がた  
まれている。

これがディフェルネオコンプリートフォームである。

「さて、反撃開始だッ！」

その戦いを眺める男がいた。まるで鳴滝のような格好をしているが20歳ぐらいの男だった。

「まさかキバとやってるとはな。この戦いは勝ちだろうがいつかお前は死ぬよ、滅殺者」

そういうと口笛を吹きながら、人1人が入れる程度の銀色のオーロラの中へ消えていった。



ディフェルは武器を使わない格闘戦を仕掛けた。キバも対抗してザンバットソードをどこかに飛ばし、ディフェルの元へ両手を広げ走り出す。たがいにパンチとキックを放ち、それを避ける一進一退の攻防が繰り返される。だがこの均衡をディフェルが崩した。キバはジャンプしつつ、回し蹴りをディフェルの頭を目掛けて放つ。しかし、それをかがんで避けて、逆にミドルキックを背中にくらわせる。

初めてクリーンヒットし、そのまま2撃目をくらわせようと拳をにぎるが、キバが信じられない速さで体制を戻し、回し蹴りをくらわせる。パンチとキックの勝負だ。ディフェルのパンチはあたらず、痛みに顔をしかめた。さらにそのまま連続蹴りを浴びせ、計8発の蹴りのあとに9発目に突き飛ばすような形のキックを放つ。ディフェルは吹き飛びはしなかったが地面を滑りつつ、カードを装填する。

『ATTACK RIDE BLUSTER』

ライドブッカーへヴンから無数の光弾を撃ち、地面に踏みとどまると、そのまま走り出した。キバは背中のマントでなるべくダメージを軽減しようとする。撃ちながらジャンプしたディフェルはケータツチのスイッチを押し、1枚の黄色のカードを装填した。

『FAIZ KAMEN RIDE BLUSTER』

『FINAL ATTACK RIDE F A F A F A F A I Z』

ライドブツカーヘヴンをソードモードにして、ライフルのように構え、黄色のエネルギーが剣先に集束される。それとほぼ同時にキバはマントを払い、スロットを回す。

「バツシャーフィーバーツ！」

バツシャーマグナムを構えるとタツロットが銃口へ飛んでいき、「カチャ」といい連結する。地面に疑似水中空間が発生すると、水が全て巻き上げられ、水の弾丸が形成される。だがここでキバはあることに気づく。

（なぜファイズが現れないッ！？）

そのとき後ろからディフェルと同じエネルギーの集束音が聞こえた。首だけで振り返ると、そこにはファイズがディフェルと同じ体制でファイズブラスターを構えていた。

ディケイドの場合は隣に現れるが、ディフェルは任意の場所に出現させることができるのだ。

「くっ！」

さすがに意外だったが、対策を思いつき、ジャンプして斜め一直線になる。ファイズも照準を直す。そしてディフェルとファイズがフォトンブラスターを同時に発射する。キバは身をひねり、ファイズの方のフォトンブラスターを背中をかすめつつもなんとか直撃をまぬがれる。だがディフェルのフォトンブラスターが直撃しそうになり、マントで防ぐがあまりの大ダメージに意識がとびそうになる。

しかし、それをこらえ、金色の炎と水の弾丸を一斉に撃つエンペラーアクアトルネードを放つ。ディフェルはキバと同様に身をひねり、回避する。だがエンペラーアクアトルネードには追尾性能があり、避けることは不可能だ。だが、士は仮面の奥でニヤリと笑った。

なんとキバが回避したファイズのフォトンブラスターがディフェル目掛けてカーブしたエンペラーアクアトルネードに激突して、空中で相殺される。

そしてキバはフォトンブラスターによって地面に叩きつけられる。ディフェルは着地し、刀身をなでた。

キバはよろよろになりながらも立ち上がった。これで五分五分である。

「必殺技の押収とはやりますね…ではこうしましょう」

キバは高くジャンプすると体が光に包まれた。光がはれると、巨大な翼が生えた金と赤の龍、飛翔態となった。

「オイッ！それ反則だろ！ってこっちも飛べるんだっ」

ディフェルは背中の翼を展開すると、上空に舞い上がり、カードを装填する。

『ATTACK RIDE SLASH』

刀身が光り、光の刃が4枚ふえる。そして2人は空中で激しくぶつかりあった。ディフェルはライドブツカーヘヴンで、キバ飛翔態は翼でたがいを切り裂く。ディフェルはキバ飛翔体から放たれる無数

の火球をよけつつ、横一閃し切り裂いた。一見ディフェルが有利だが体格差がありすぎる。キバ飛翔態の体当たりによってディフェルは大きく吹き飛ばされ、体制を崩してしまう。

「長くなりましたが、これで終わりです」

飛翔態の頭部にある緑のランプが全て光り、金色の光線ブラッディストライクが放たれる。それをディフェルは回避できずにまともにくらってしまった。

キバは飛翔態から戻り、エンペラーフォームとなって着地するが、無傷ではなく肩で息をしている。ディフェルはダメージの受けすぎでネオコンプリートフォームから普段の形態に戻ってしまい、砕けた地面の上で倒れていた。

「あなたにはもう立つことはできない。あなたの負けだ」

キバに宣告される。確かにダメージの量ならディフェルの方が圧倒的に多い。だが、キバは驚愕する。なんとディフェルが立ち上がった。

「はっ。やなこった。こんなことで救えないだなんてことになってたまるかよー！」

『ATTACKRIDE ILLUSION』

音声の後に、ディフェルの分身が4体現れる。

「みせてやる。これが俺の最後の攻撃だ！」

5人は一斉に駆けだした。それに対してキバはもう1度ザンバットソードを取り、ウェイクアップフェッスルを外しキバットに吹かせる。

「ウェイクアップッ！」

蝙蝠型の装飾をスライドさせると刀身が赤く染まり、縦にして下にスライドさせる。

5人のディフェルは走りつつ同じカードを一斉に装填した。

「FORMRIDE OOO GATAKIRIBA」

「ガータガタキリツバガタキリバ！」

カードを装填するとオーズの緑のコンボ、ガタキリバへと変身した。

ガタキリバの特殊能力は人海戦術で50人の分身を作り出すことができる。それが5人いる。つまり今キバの目の前には250人のDガタキリバがいる。そのうちの1人が叫んだ。

「さあて、キバは250のライダーキックを防げるでしょうか！」

「FINALATT」

「ACKRIDE OOO」

250人のDガタキリバが一斉に跳びあがり、ガタキリバキックを

放つ。キバはファイナルザンバット斬の斬撃波で相殺させるが、それでもまだ約230人は残っていた。

全滅できるはずもなく約230のガタキリバキックがキバに炸裂し、大爆発が起こる。

時間が経ち、爆炎が消える。そこに立っていたのは1人、ボロボロになった土であった。

「うっしやああああああ！俺の勝ちだああああああああ！！」

そして笑顔で美莉にむかってサムズアップをした。

覚醒の天使vs黄金の皇帝(後書き)

〔雑談コーナー〕

竜王「……………」

士「……………」

美莉「2人共大丈夫？」

竜王「か、書いたぜ5000字……」

士「か、勝つたぜエンペラーキバに……」

美莉「お疲れ様！お礼に」

竜王「士にキスしてやれ！」

美莉「えっ／＼／＼えつとその……／＼キュ／＼／＼／  
バタツ

士「えっ？なんで？おい、しっかりしろー！」

竜王「それではまた次回！」

## 旅立ちの日（前書き）

今回、展開がひどいです。  
文章力を一定に保ちたい…



## 旅立ちの日

美莉は嬉しかった。土が生きていてくれたことが。土の元へ駆けよると土が糸が切れたかのように倒れてしまった。

「土君ッ！大丈夫！？しっかりして！！」

倒れて当然である。今日1日でファイナルカメンライドを3回も使い、滅びの現象と先のキバとの戦闘でかなりの疲労とダメージが蓄積されている。

土を必死に揺るが起きない。そこへ同じくボロボロになった渡が足をふらつかせながらやってきた。

「そつとさせてあげてください。彼はおそらく今日1日は起きませんが明日になれば普通に起きると思いますよ」

「あつ。そうなんですか。よかつた」

渡の言葉で美莉はホッと胸をなでおろした。だが、何かを思い出したかのように渡の方を振り返ると

「これでテストは合格なんですよね。それと旅というのはいつからなんですか？」

「ええ。彼は合格ですよ。旅は明日になればわかります」

「はあ」

旅についての質問だけあまり答えてくれなかった。すると渡は何かを差し出した。それは弓のようなツールと絵のないカードだった。

「これはディフェルドライバーと同時に現れたものです。念のためこちらが回収していました」

「これを私に？」

受け取ったがさすがに困った。仮に変身するにしても美莉には戦闘のセンスはない。得意な弓矢だったのは幸いだが。

「これは何のライダーに変身できるんですか？」

「それは僕にもわかりません。今回の件はディフェルとカエルムのことを少しずつしか知らないもので」

どうやら渡にもわからないようだ。

「とりあえず今日はもう休んでください。次は僕の世界で会いませよ」

そういうといつの間にか家のリビングに戻り、渡はいなくなっていた。とりあえず土がボロボロで弓のようなツールが手にあるため夢ではない。時計をみると1分程度しか経っていなかった。

「あんなに長くいたのに不思議」。あつ、お風呂入ってなかったっけ」

とりあえず土をソファの上に寝かせて、風呂場へ直行した。

それから30分後、何と土が起きた。タフにも程があるが、やはりふらついている。起きた理由は

「ぶつ壊れた家の地下から玩具一式回収しねえと…」

どうやら地下があるらしく、そこに玩具一式を保管しているらしい。意外と豪華である。だが

「もう動けねえ…そして眠い…せめて歯みがいてから寝よ。回収は明日にしよう。どうせ無事だし」

床にぶつ倒れると貞子のように地面を這いずりながら洗面所へ移動し、なんとかかたどりに着いた。ドアを開け、また貞子移動をしようとするが

目の前には白い下着姿の美莉がいた。

「……………は？」

「つ、土君！？どうして!？」

「い、い、いやあのそのええとんと……………って美莉さん顔赤くしながらキツクの体制に入らないでください。この体でやられたら俺死んじゃブゲラッ！」

美莉に顔面をけられ、体質で鼻血をふいた。そしてこの日1日、土は完全に起きなくなつた。

## 次の日

何故だかあんなことがあつたのに、学校は通常通りだった。先生が言うには学校の被害は0で生徒もけが人だけで済んだとのこと。やはりドライバーを拾つた土とそばにいた美莉が主に狙われていたらしい。

土は体中に絆創膏だの包帯だの湿布だのと色んなものがついた痛々

しい姿で登校していた。昨日1日に何があつたかを物語っている。美莉はそれを見て最初はあたふたしていたが顔の絆創膏を見た瞬間顔を赤くして俯いてしまった。士には何故かわからなかったのだが、現在昼休み。士と美莉は屋上に來ていた。美莉は士が気絶した後のことを話し始めた。

「えっとまずテストは合格って言ってたよ。あと旅は今日なんかわかるって言ってた」

この言葉を聞いた士の顔は一瞬で明るくなり

「マジ!?俺本当に渡さんのなったエンペラーキバに勝つたのか!それと旅は今日から!?いやっはああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

当然のように壊れた士を見て溜息をついた美莉だが何かを思い出した。

「そつえば渡さんから変な弓みたいな物もらっただけで何かわかる?」

「弓?弓使うライダーは平成でカリスとキバのFFR使ったディケイドとディエンドくらいだな。でもどれも弓が変身ツールじゃねえし新しいライダーじゃねえか?って新しいライダー!?頼む今すぐ変身して!」

新しいライダーの言葉で再びテンションが上がった士は美莉の肩を掴んで無理なお願いをした。美莉はというと肩を掴まれたことで少し顔が赤くなっている。

「む、無理だよ！／＼土君みたいなカードももらっただけで絵が描いてないし今持ってきてないし：／＼／」

「何だ：絵がないのか：まあ、いいや。とにかく教えてくれてありがとな」

「うん！話も終わったしご飯食べよう！」

ちなみに土の弁当は美莉が作ってきたものである。もちろん美莉が赤面しながら作ったのは言うまでもない。

「ねえ、何やってるの？」

「まーほはふきん（カード確認）」

土は弁当を食べながらライドブッカーヘヴンの中からカードを取り出し見ていた。何枚か見ていると不思議なカードを見つけた。

「あ？なんだこのカード？何で青いんだ？」

本来通常のカードはふちがマゼンタ、ファイナル系は黄色である。だが、土のもっているカードは変わっていた。ふちが青く、絵はない。枚数は１１枚だ。

「１１枚ってことはこれがキーカードか：なんなんだろう？」

とりあえずしまつと自分を呼ぶ声がした。

「うーい、土あ。一緒に飯食おうぜってなんで日々野まで？お前らついにそういう関係になったか？」

さりげなく2人をからかったのは向井 聖麻。髪は赤く、本人いわく地毛。土の中学からの親友で土程ではない特撮好きである。

「い、いや、違うよ向井君！／＼私たちは幼馴染なんだよ！／＼／付き合っでなんかいないってば！／＼／／／／」

美莉は必死に否定するが誰がどう見たって顔が赤くなっていて、あたふたしている。前にも同じようなことがあったが、美莉はそれを笑って否定していた。態度があまりにも違っていた。

（ああ、いつの間にか落ちたか。こりや学校が戦場になるな……このフラグ乱立野郎今度殺してやる）

土の方を睨むと何のことかわからない顔でみていた。

「そついや土。昨日怪人もそつだが仮面ライダーでたんだがよ、俺見ちまっただよな」

「ッ！ー！！」

土は絶句した。見られたのはまずい。だが、正体まで見られてはいないだろう。

「でもさあ。かっこいいとは思いたくないんだよな」

というと聖麻は土の顔をみてこういった。

「だってあれ、お前（．．）だろ？」

「……はあ、ああ、そうだよ。あれは俺が変身したディフェルってライダーだ」

やけにあっさり認めてしまった。いや、認めざるを得なかった。聖麻は観察力がすごく、覆面かぶった同じ服装の同じ背の人を並べてもほんのちよつとの仕草で誰か見切ってしまうほどだ。

「やっぱりな。ジェットスライガーで狂喜乱舞するも、トリガーエクスプロージョンを薙ぎ払いながら撃つのもお前の望みだし、何より声や戦い方がお前だったし」

士も美莉も驚く他ない。仕方なく事情を話した。返ってきた言葉は「マジで世界旅するのか！？俺も連れてってくれ！頼む！」

大声あげながら土下座していた。

「じゃあ何でもいいからもって美莉の家に来い」

士の言葉と同時に昼休み終了を告げるチャイムがなった。



現在6時、士、美莉、聖麻の3人は美莉の家のリビングにいた。

士は聖麻に戦いのことを自慢していた。

「んで、エンペラーキバとやることになって…」

「エンペラーキバと戦闘!? 何でお前生きてんだ!?!」

「2人ともうるさいよ。人の家なんだから静かにしてよ」

ずっとこんな調子である。美莉はため息をつく暇なのでテレビをつける。ニュースをやっていたが突然ノイズがはしり、ついには何も見えなくなった。

「あれ、故障したの? おねがだから直ってよ」テレビさん

これに反応したのかテレビからノイズが消え、1枚の絵が写った。

男子2人はこの絵をみて狂乱し、騒ぎ始めた。美莉もCMでみたことがあり、この絵は知っていた。

空は緑、何もない砂漠に線路があり、その上を走る赤い電車。

そう、これはまぎれもなくデンライナーだった。つまり

「最初は電王の世界だあああああああああああああああああああああああああ  
あああああ!!!」

とある世界。

モグラのような青と銀の怪人が宙を舞い、地面に倒れた。その向こうには、赤い目の体中に電車のレールのようなものついた左手で剣を肩に担ぎ、右手で電車のパスのような物を見せつけるように持つライダーがいた。

「テメエみてえな雑魚に見せんのもあれだが、特別にみせてやるよ。  
俺の必殺技パート1!」

『FULL CHARGE』



俺と天使、参上！（前書き）

ついに電王編スタート！  
それではどうぞ！

## 俺と天使、参上！

士と聖麻は興奮気味に、美莉は呆れながらそのあとについて行くようについていくように外に出た。

夕方だったはずなのに、外は真昼間で人が賑わっていた。

「本当に来たあああああああああああああああああああああ  
あ！！！！」

「マジかよ！」

「すごい…！」

三者三様のリアクション。どれが誰かは言わなくなっただけでわかるだろう。聖麻はテンション（ry士の方へ走ると

「叫ぶのは後にしろ士！まずどうするんだ？」

士を押さえつつ尋ねる。最初はジタバタしていたが、何とか落ち着いていた。

「適当に歩いて、イメージが自転車乗ってすっ転んでる男の子かミルクディッパ―って喫茶店を見つけたら直行」

「ええと、最初の2つは何なの？」

士の言葉に首をかしげる美莉。

「ああ、日々野は知らねえのか。1つ目はこの世界の怪人。2つ目のはこの世界の主人公ってとこだな」

「ふう〜ん。なるほど」

納得したのか手をポンと叩いた。

「そうと決まればいざしゅっぱーっ！っ！っ！」

士が歩きだし、2人も歩きだした。後ろにキバ戦を傍観していたあの男がいることも知らずに…

とあるサラリーマン、健吾はイラだっていた。原因は上司にあった。その上司にひたすらコキ使われ、しまいにはダメだしをくらうというのをもうかれこれ3年もやっている。

始めは仕方ないと思っていたが3年もやられれば腹が立つ。

考えるだけでイヤになり近くの壁を殴った。

(あのクソ上司を見返してやりたいッ！)

そこへ不安定な動きをしながら健吾のもとへ向かう光球があった。

それは健吾に激突すると体に入り、同時に衣類から大量の砂が溢れた。

すると後ろに八工のような上半身が下、下半身が上にある砂でできた怪人がいた。

「お前の望みを言え。どんな望みも叶えてやる」

「あの上司をみかえしてやりたいって言ってるだろッ！」

見向きもせずには叫ぶ健吾。そして怪人は体に色がつき、上半身と下

半身が本来通りにくつつく。(以下フライイマジン)

そのまま飛び立とうとすると

「イマジンみー………っけ！」

「グアッ！」

フライイマジンに飛び蹴りをくらわせる少年、土がいた。みごとにクリーンヒットし、フライイマジンは転倒した。

「な、言ったとおりだろ。無茶苦茶悩んでるから付きそっだって」

「ほんとにあたったよ！すごいよ向井君！」

後ろには土に指をさす聖麻とキラキラした目で聖麻をみる美莉がいた。

実は3人はしばらく歩いた後にうつむいて歩く健吾を見かけていた。聖麻お得意の観察によると「周りのやつよりかなり悩んでる。だからイマジン付くかもしんねえ」というので試しにつけた結果が今である。

「すごいよお前は。美莉、そのリーマンさんを近くに逃がしてやれ」

「うん！じゃ、がんばってね土君！」

元気よくつなずくと、事に気付き慌てている健吾をなだめて、誘導して近くまで逃がした。



「2人が仕事したんで、最後は俺の番だ」

士はドライバーを腰にあて、カードを取り出す。

「変身！」

『KAMENRIDE DEFER』

カードを装填し、ディフェルに変身する。

「貴様、電王か？」

「俺が電王に見えるのか？ 光栄だけど」

適当にあしらうと、走り出しフライイマジンにパンチをくらわせる。続けざまにキックを2発放ち、回し蹴りをくらわせ大きく吹き飛ばす。

「くっ。なめるなッ！」

起き上がると口から針を連射する。ディフェルは走りながらよけるが、連射力が尋常ではなく追いつかれそうになる。対抗するためにカードを取り出し、装填する。

『KAMENRIDE RYUKI』

音声の後、周りに鏡でできた人型の影が現れディフェルに集まっていき龍騎に変身した（以下D龍騎）

D龍騎は走りながら、窓ガラスに飛び込んだ。本来激突するはずだ

がまるで吸い込まれるように入っていた。

不思議な光景をまえに針の発射を止める。あたりを見回し後ろを向くと、車の窓ガラスに波紋ができ、そこからD龍騎が現れパンチを顔面にくらわせる。

フライイマジンは逃げるためにハエ独特のあの音を発しながら飛び立った。D龍騎はカードを装填した。

『ATTACKRIDE SWORD VENT』

すると上空からドラグセイバーが降り、フライイマジンに激突した。羽をやられたため、地面に落ちる。

「ハエのウェルダン焼きを作ってる」

『ATTACKRIDE STRIKE VENT』

上空からドラグセイバーと同じようにドラグクローが降り、D龍騎の右手に装備される。

ドラグクローを構え、パンチの容量で突き出しドラグクロー・ファイアを放つ。フライイマジンはそのまま直撃し爆発した。

ディフェルに戻り、一息ついたその時聖麻が叫んだ。

「おいッ！土、後ろ！」

振り返った直後にドリルが体に直撃した。吹き飛ばされ、攻撃が来た方を見ると2体のモールドイマジンがいた。

鉤爪を装備したモールイマジン（以下かモールイマジン）は走るとデیفエルに鉤爪を振り下ろす。腕をクロスさせることで防ぐが、ドリルを装備したモールイマジン（以下ドモールイマジン）に腹部を蹴り飛ばされる。ここで土はあることに気付いた。

「何で2体だけなんだ？」

モールイマジンとは本来3体で行動するはずなのだが、目の前にいるモールイマジンは2体しかない。その疑問に対しかモールイマジンが答えた。

「俺らはなあ、人間に憑かずに実体化出来るようになったんだよ！」

「は！？何でだよ！」

驚きながらも起き上がり、ライドブッカーヘヴンソードモードでドモールイマジンに斬撃をくらわせる。さらにかモールイマジンにキックを放つが受け止められ、投げ飛ばされてしまう。

完全にペースを崩され、不利な状況に追い込まれる。いくら強くてもペースが乱れれば本来通り戦うことはできない。

2体が走り出したその時、後ろからブレーキ音が聞こえた。全員が音の鳴った方を向くと、自転車から降りる12歳くらいの少年がいた。

その少年はベルトのようなものを取り出すと腰にまわし、電車のパスのようなものを取り出した。

『オイッ！良太郎！俺にやらせろ！』

『いや、先輩。ここは僕が』

『なに言うつとるんやモモの字、カメの字。ここは俺やで！』

『やあーだ！僕が行くー』

「はあ…誰でもいいや、いくよ」

何やらうんざりした様子でベルトの赤のスイッチを押す。すると電車の発車音のようなメロディーが流れる。

『よっしゃあああああ！俺を呼んだぜ！というわけで引っこんでくれたまえ後輩君』

『調子に乗って痛い目見てきなよ、先輩』

『いや、なんかの間違いやで、これは』

『うるさいモモタロス。耳が悪くなるから黙って』

「変身」

電車のパスのようなものをベルトにスキャンする。

『SWORD FORM』

黒を中心としたスーツを纏い、周りを飛ぶ赤い鎧が次々と装着され、頭に桃のような仮面が滑り顔の位置で止まると斜めに展開される。

そう、この少年は野上 良太郎、今変身したのは仮面ライダー電王ソードフォームである（以下M電王）。つまり

「俺、参上！」





シャーをふり、斬撃をくらわせる。

息継ぐこともままならない怒濤の攻撃を前にかモールイマジンは防御もできず、M電王はどんどん追い詰めていった。

が

『やっぱ僕に変わってよ、先輩』

「やめるカメ公！今いいとこだからくるんじや」

突如M電王からモモタロスが抜け変わりに青いイマジン、ウラタロスが憑依するとベルトから音声が鳴った。

『ROD FORM』

鎧が青中心の亀をイメージしたものとなり目がオレンジの電王ロッドフォームへと変化した。

「お前、僕に釣られてみる？」

決めゼリフを言うとデンガツシャーソードモードを分解し長い銛のようなロッドモードへ組み立てる。

「はあ！」

それを振りまわしたり突くことで同じく追い詰めていった。かモールイマジンは走りながら向かってくるがロッドモードで足払いをして転ばせた。



が

『亀の字。俺と変われ!』

「ちょっと待って!」

今度はウラタロスが抜け黄色のイメージ、キンタロスが憑依した。

『AXE FORM』

音声が鳴ると黄色中心の熊と斧をイメージした仮面を身に付けたアックスフォームへと変化した。それと同時に大量の紙が降ってきた。

「俺の強さにお前が泣いた!」

決め台詞を言うと右手で顎を殴るようにして首を鳴らした。

「誰が泣くかよ!バカ野郎!」

かモールイマジンがキレ気味に突撃するがツツパリの一撃で吹き飛ばされてしまう。

ロットモードを分解しアックスモードへ変化させると次々と切り裂いていった。

が

『クマちゃんクマちゃん!僕にもやらせてよ!』

「まだ始まったばかりかやん!」

次はキンタロスが抜け紫色のイマジン、リュウタロスが憑依した。

『GUN FORM』

また音声が鳴ると紫中心のドラゴンをイメージした仮面のガンフォームへと変化した。

「お前倒しちゃうけどいいよね？答えは聞いてない！」

「もうコロコロ変わんじゃねえよ！」

決めゼリフを言った直後にやや涙声のかモールイマジンが突撃してきたが瞬時に組み立てたガンモードで撃ち抜かれた。

軽快なステップで接近しながらモールイマジンを撃ち抜いていく。

『おい！ハナ垂れ小僧！俺と変われ！』

「べーっだ！追い出せるもんなら追い出してみなよ！」

リュウタロスは他より憑依する力が強く追い出せるのは白鳥のイマジン、ジークしかいない。

『クソ！こうなりゃ…』

モモタロスは左手だけ無理に憑依した。そして徐序にフォームスイッチへ手を伸ばしていく。

「うわぁ！やめろよモモタロス！」

必死に抵抗するリュウタロス。そこへかモールイマジンが襲いかかってきた。

それを撃ちぬいたが意識を一瞬かモールイマジンへ移してしまった。

その隙について赤いフォームスイッチを押し、パスをスキャンすることに成功した。

『SWORD FORM』

『先輩に立てつくから悪いんだよ！ガキはおとなしく引っこんでろ』！

「モモタロスなんか吹っ飛んじゃえー！！！」

虚しい叫びとともにリュウタロスが抜けモモタロスが憑依すると最初のソードフォームへと戻った。

「よう！待たせたな！」

「待つてなんかいるかよ！」

既にボロボロになりつつもかモールイマジンは襲いかかる。しかし斬撃1発で吹き飛んでしまった。

「すげえ！1回で電王4フォーム見れた！やつほおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

ディフェルは電王を見ながら興奮しつつ近づいてきたドモールイマ

ジンにライドブツカーへヴンで斬撃を放つという荒業をやっていた。正直気持ち悪いが。

「クソ！なめんじゃねえ！」

ドモールイマジンはドリルを振り下ろすも簡単に受け止められ、左手のパンチの連打とキックをくらい吹っ飛ばす。

そしてほぼ同時にディフェルは黄色のカードを装填し、M電王はライダーパスをベルトにスキャンする。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE DE  
R』 『FULL CHARGE』

「いくぜ。俺の必殺技パート2、！」

ベルトからデンガツシャーに赤い稲妻のようなものが流れると赤い刀身がその稲妻を紐のようにして分離する。

M電王はデンガツシャーを大きく振りまわし、刀身もそれと同じように動く。

左から右へ降り、同じように動いた刀身がモールイマジンを切り裂き爆発する。

ディフェルの目の前に12枚の白い3Dカードが並ぶ。それに向かってライドブツカーへヴンを構えて走る。くぐるたびにエネルギーが刀身に集まり、巨大な剣となる。

「デイメンションへヴンスラッシュー！」





俺と天使、参上！（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「さあて、ついに旅が始まりましたあ！イエーイ！」

士「イエーイ！」

聖麻「それよりも、お前、はしゃぎすぎだろ！」

美莉「もう子供みたいに……」

士「だって生俺、参上！だぜ？盛り上がなくてどうする！」

聖麻「たしかに生でみれたのはうれしかったが……」

美莉「それよりも変なのって思うほうが強かったよ」

士「え………なんで？」

竜王「はい、絶妙な空気になったのでそれではまた次回！」

PS 電王の人物についてあまり知らないのですが少しでもいいので教えてください。お願いします

超来客パーティー（前書き）

今回はギャグ回なんでちょっと変ですが…フフフ…





かむしる良い影響を与えている。それにオーロラは無理にでも良太郎をくぐらせようとした。

わけがわからなくなり考えていた土は知恵熱を出しそうになった。

「とりあえず戻ったし……」

良太郎の言葉に土は何かを思いつきイヤな笑みを浮かべ、良太郎に言い放つ。

「さっきのことを教えるんで、デンライナーに乗せてください！」

というわけで道中で良太郎が空き缶ふんずけて転んだり、飛んできたサッカーボール、野球ボール（硬球）が頭に当たったり、また空

き缶ふんずけて転んだり、突然靴紐が切れて転んだり、またまた空  
き缶ふんずけて転ぶということがあったが現在本編1話の初めてデ  
ンライナーに乗ったあのビルの前にいる。

「なんであんなに転ぶことになるの……もついや」

「大丈夫ですか？今日1日で5回も転んでますよ。よかったら絆創  
膏使いますか？」

心配した美莉が常備している絆創膏を良太郎にさしだした。すると  
良太郎が泣きだした。

「グスツ…ありがとう美莉ちゃん…グスツ、あれ？なんで泣いてん  
だろ？」

（（どれだけ不幸なんだこの人？））

士と聖麻がそう思っていると時計は2時22分15秒だった。

「良太郎さん！泣いてないでパスだしてください！」

デンライナーへの入口というのは一定の場所で時計の数字がゾロ目  
になったときに、パスをかざすことで現れるのである。

なんとか良太郎が泣きやみ、急いでかざす。

そのまま建物へ入るとなぜか空が緑、あたりは一面の砂漠、目の前  
にはデンライナーが入口を開けていた。

「これがデンライナーなんだけど…その様子だと知ってるか」





食べているのは、電王内ある意味最強であるオーナー。

「うわあ！元の良太郎ちゃんに戻りましたね！よかったあ」

この現在進行形でコーヒー（？）を作っているのは、アナウンス等を務めるアルバイトのナオミ。

「うっひゃあああああああああああああああああああ！！！！  
！本物ばっかあああああああああああああああああああああ  
ああああああ！！！！」

こいつはもう言わない。

「ええと、みんな落ち着いて。お客さん連れてきたし、その人と話をしたいから」

良太郎の言葉でみんなが落ち着く。かに見えたが

「よっしやあああああああああああああああああああ！！！！  
これで徐々に不良どもぶつとばせるぜえええええええええええ！！！！」

「最近ほったらかしにしてた女の子たちにやっと会えるよ。みんな元気かなあ？」

「よーし、修行や！泣けるでー！」

「イエーイ！ひっさびさにおっどれるうー！」

イマジン4人組は良太郎が子供になったことでできなくなっていた



「ねえ土君。はやく良太郎さんに事情説明しなよ」

美莉がチヨイチヨイと引つ張り、土も気づく。

「わりい、語るのは後にしようぜ！」

「オウ！待ってるぜ！」

といい、土は良太郎との話に戻した。モモタロスは手を振っている。

「ねえ。先輩がすごく輝いてるんだけど…」

「なんか気味のわるい笑い方してるし…」

「ますますキモくてウザくなったあ」

ウラ、キン、リュウはモモタロスの変貌っぷりに呆れていた。3人はもちろん他のみんなにもモモタロスから光が発せられているように見える。

「で、ええと。デイケイドと同じってことは世界をまわってるの？」

良太郎もなんとか話の軌道を戻す。

「はい。最初がここなんです。そういやモールイマジンが突然現れるって何かあったんですか？」

そう。さつき戦ったモールイマジンはあきらかに人から生まれたものではない。アントホッパイマジンのような特殊なタイプもいるがあれとは明らかに違っていた。



「うん。最近になって突然イマジンが現れて街を破壊するようになったんだ」

「カイのときみたいなことですか？」

今土が言ったのは本編最終話のことである。カイという少年によって大量のイマジンが生まれたことがある。

「そこまでしってるんだ。なら早くすみそつだね」

「そうですね。まあ、後はなんで元に戻ったかですけど、それはたぶんこっち関係なんで調べときますよ」

「うん。ありがとう」

案外はやく終り、2人とも席をたつ。そして

「よっしやあああああああああああ！！！！！デンライナー満喫するぞおおおおおおおおお！！！！」

これについてはもうノーコメント。

あの後士と聖麻がイマジン4人組と良太郎と騒いでたり、美莉がコハナやナオミと語り合っていた。その際美莉がコーヒーの作り方を習っていた気がするが気にしない方がいいだろう。

「それじゃあこっちも調べときますね！」

「コハナちゃん、ナオミさん。さようなら」

「やっぱり本物見ると騒いじまうよな」

「うん。それじゃあまたね。こっちなにかあったら連絡するから」

それぞれあいさつして3人はデンライナーをでた。

「あの土つて子。なんで先輩のあれをカッコいいって言えるんだろ」

「ホンマやな。ちょっとセンスがおかしいんちゃうか？」

「良太郎ですらカッコいいと思わないのに」

「わかるやつにはわかるんだ。お前らとはちがっていい奴だぜ、あいつ」

「僕ですらっつて…」

いつもの風景があった。だがそれは一瞬で崩れることになる。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

突如の轟音とともにデンライナーが大きく揺れ、全員がその場に倒れ、停車してしまう。

みんなが起き上るといつのまにか7歳程度の服装は年相応な子供らしいものを着た男の子がいた。

「テメエ、誰だよ！」

モモタロスが敵意をあらわにしながら尋ねる。その子供は少し怖がると明るいが、子供から発せられるとは思えない雰囲気ではしゃべり始めた。

「初めまして、デンライナーのお兄ちゃんお姉ちゃんたち。僕はヒューマンイマジンことライ。電王の世界代表のカエルムです。よろしくね」

ライはかわいらしい笑顔でペコリとお辞儀をした。

3人は帰路をたどって家に向かっていった。

その途中「旅立ちの日に」の口笛が聞こえた。これに美莉は絶句した。そして慌ててあたりを見回すと1人の男がいた。

20歳くらいの鳴滝のような恰好をしたあの傍観者であった。その男は顔を上げる。優しそうな顔付きだった。

土と美莉は言葉が出なかった。なぜならその男を知っていたから。その男が近い存在だから。その男が

美莉の実の兄、日々野<sup>ひびの</sup> 風牙<sup>ふうが</sup>だったから。風牙は口を開いた。

「久しぶりだな美莉、土。1年の間だが大きくなったな」

懐かしそうな顔で2人を見る。そして何かを思い出すと土の方を向いた。

「そつだ。今日は土に用があるんだよ」

「なんですか。風牙さん」

すると驚愕の一言を発した。

「君には改めて自己紹介するよ。僕は日々野 風牙。カエルムのN03としてお前をここで倒すよ」

すると風牙は懐から緑の1つにSとGの書かれたガイアメモリとロストドライバーを取り出した。風牙はガイアメモリのスタートアップスイッチを押す。

『STORM      GOD』

ロストドライバーに装填し斜めに傾ける。

「変身」

『STORM GOD HUZIN!』

するとあたりにWをはるかに凌駕する暴風が吹き荒れる。その影響で3人は大きく吹き飛ばされ、あたりのガラスは粉々になり、標識が地面から抜け宙を舞い、車ですら宙を舞い、建物には亀裂がはいり、倒壊するものまであった。

もはや台風の領域だった。暴風がはれると全体的にはWのサイクロンサイクロンにアルティメットクウガの荒々しさがある。角は金色の王冠のような4本角で、スカーフは2本、目は青のまさに風神のようだった。

「この姿の名は仮面ライダーストーム。この瞬間だけよろしく」

## 超来客パーティー（後書き）

竜王「はい、ついに登場しました。カエルムの2人に来てもらってまーす」

風牙「みなさんよろしく」

ライ「やっほー。読者のお兄ちゃんお姉ちゃん、初めまして！」

竜王「初登場どうだった？」

ライ「ちょっとしか出てないけどこれからが楽しみだなあ」

風牙「特にはないけど、強いて言うなら次に期待かな」

竜王「まあ、そんなもんか。それではまた次回！」

## 風神と無邪気な子供（前書き）

前回出てきたカエルの能力がでてきます。  
自分てきにはアルティメットクウガより強いんだけど…



## 風神と無邪気な子供

なんとか起き上った3人は風牙 仮面ライダーストーム を見て絶句した。特に美莉に至っては泣いていた。

1年前に行方不明になって以来の再会。そして発せられた言葉は「士を倒す」。幼馴染であり、思い人である士が自分の兄と闘うことになる。さらにその兄は最強のライダーであるアルティメットクウガよりも強いカエルムという組織のNo.3である。1度にこれほどの現実を叩きつけられて耐えきれぬわけがない。

士の表情も変わっていた。だが、それはいつもの喜んでいるときの表情ではなく、ぶちギレたときの表情だった。

「どうした士。そんなに自分がやられることが嫌か？」

「んなことじゃねえ！ テメエ、今自分が何言ったかわかってんのかつ！！」

そのまま士は言葉を続ける。

「美莉の、アンタの両親が亡くなったとき美莉がどれだけ悲しかったか知ってたんだろ！ 俺なんかよりも家族であるアンタの方がわかってるはずだ！ いつも明るかったコイツが一瞬で絶望の表情になった。そんなコイツを支えてきたのはアンタだった。コイツの唯一の心の支えだったアンタが1年前行方不明になった。そんなときコイツどうなったか知ってるか？ またあのときと同じ表情だったよ。もう見ることはない、もう見たくもなかったあの表情に戻っちまった。そんなで再会したら、俺を倒すだと。違うだろ！ もっと他に言わなきゃな

らない言葉があるだろうか！」

この言葉を黙って聞いたストームは当たり前のように言い放った。

「いや、ないな」

「ッ！！！！」

『KAMENRIDE DEFER』

音声が鳴り響いた瞬間ストームの顔を何かか横切った。それはディフェルの放ったライドブッカーヘヴンの弾丸だった。

「そうかよ。だったら……」

ライドブッカーヘヴンをソードモードに変形させる。

「デメエをブツ飛ばして地べたに這いつくばらせて美莉に土下座させてやるッ！！！！」

「来い。僕の目的は初めから君を倒すことだ」

そして、ディフェルは駆けだした。

突然デンライナーに乗り込んできたヒューマンイマジンと名乗るライという少年。彼を見て良太郎はまず尋ねた。

「カエルム？」

「うん！そう、そのカエルム。えっとカエルムっていうのはねえ、君たちシヨツカーは知ってるでしょ？あれを乗っ取ってやった15人の小組織のことだよ」

「は！？アイツらに乗っ取っただと！？」

元気よく話すライの言葉に良太郎とモモタロスは驚いた。理由は土と同じである。彼らはディケイドの件とオーズの件でシヨツカーを見てきた。大規模な組織であり、とても乗っ取れるものではない。

「それと、君この世界の代表っていったよね？」

ウラタロスがライを指さして尋ねる。

「そうそう。カエルムってのはね、15人のうち11人が各ライダーの怪人なんだ。残りの4人はライダー。でも、11人の中にもラ

ライダーいるんだけどね。僕もなりたいなあ、仮面ライダー」

テーブルに座り足をバタつかせている。次はリュウタロスが敵を前にしたやや暗い口調で尋ねる。

「で、そのお前は何しに来たの？デンライナーを乗っ取りに来たの？」

これを聞いたライは何故か笑いだした。笑いながら話始めた。

「そんなことしないよ。だって僕の能力は簡単に言っちゃえば人間デンライナーだよ。詳しく言うとか好きな物を好きなだけ好きな場所の好きな時間に置ける。そして、その好きなものの中には僕自身も入る。どう、おもしろいでしょ？」

意外にもあっさり自分のことを話したライは指を鳴らした。

「というわけで10年前の1から12月全ての3日午前10時にイマジンを3体ずつ置きました。第1ゲームのスタートだよ。過去の君たちを殺すなんて卑怯なことはいらないから僕を楽しませてね。じゃ、あでゅ〜」

そして手を振りながら消えていった。

「とりあえず行ってみよう。本当だったらかなりまずいことになる」

良太郎の言葉により、2001年の1月3日に向かうことになった。

デンライナーは動き出しその時間へ向かった。

ディフェルはライドブッカーへヴンを、ストームは風で剣を形成し互いに斬撃を放っていた。互角に見えるがストームはディフェルの怒濤の攻撃を最低限の動きだけで止めていた。

ストームは何やらうんざりすると、空いている左手を軽く前に出した。

すると、ディフェルは何かを受け、吹き飛んでしまう。ストームはさらに左手を振るう。ディフェルは振った方向と同じ方へ吹き飛ぶ。これが5回繰り返し返され、6回目で下に振ったことによりディフェルは地面に叩きつけられた。

かなりのダメージを負いながらもカードを取り出し、起き上がる。

「カエルム相手ならこいつしかねえだろ！」

『FINAL KAMENRIDE KUUGA』

カエルムに対抗できる可能性のあるアルティメットクウガに変身する。（以下Dクウガ）

Dクウガは高速で走り出すとストームにパンチを放つ。ストームは軽く足をふみならず。すると足から暴風が吹き荒れ、Dクウガの上に吹き飛ばしてしまう。ビルの壁に叩きつけられそうになるが、身をひねり壁を足でけることで再びストームの元へ向かう。

『FINAL ATTACK RIDE KU KU KU KUUGA』

カードを装填し1回転すると足に炎を纏ってアルティメットキックを放つ。しかしそれを見てもストームは動かずに手を軽く振ると、暴風が吹き荒れストームを包む。

炎の蹴りと暴風の盾が激突する。激しい衝撃波が生まれ、周りの建物が倒壊する。聖麻は美莉を連れ隠れていたがそれでも吹き飛ばされてしまう。

アルティメットキックが暴風の盾を突き破りそうになる。勝てるとDクウガは確信するが

「やるな。少し面白い事をしてやる」

ストームは手を上空に掲げる。風が一点に集まりあるものが生み出される。電撃の塊、プラズマである。さらに風を凝縮することでプラズマは巨大化した。

それを無数の風でできた龍と共にDクウガにぶつける。Dクウガを中心に轟音が鳴り響いた。

「おい、デネブ！2001年5月3日午前10時に行くぞ！」

「ん？野上たちに何かあったの？」

ゼロライナー内。最初にやや怒鳴り声で叫んだのはゼロノスの変身者、櫻井 侑人。

返事をしたのが強いがどこか間の抜けたイメージ、デネブである。

彼らは過去にいったイメージを追って良太郎たちとは別の時間に行ったのだが、連絡を受け1番近い2001年5月3日午前10時に向かうことになった。

「ヒューマンイメージって奴が2001年の全ての月の3日午前10時にイメージを生み出したらしい」

「そんなことになったら…」

「尋常じゃないくらいにヤバい！だからとつとと行け！」

それから2分後につくと暴れまくってるイメージン3体がいた。

「早速これかよ。全員倒す！」

表が緑、裏が黄色のゼロノスカードを取り出し、ゼロノスベルトのチェンジレバーを右へスライドすることでカードを装填できるようにする。電王とは違うメロディーが流れる。

「変身！」

緑の面が表になるようにゼロノスカードをアプセットするとベルトにAの文字が浮かぶ。



『ALTAIR FORM』

緑色の鎧を纏い、牛のような仮面が顔にセットされる。これがゼロノスアルタイルフォームである。

「最初に言っておく。俺はカーナーリ、強い！」

決めゼリフを言うのと走り出し、ゼロガツシャーを組み立てサーベルモードにする。

そのままイマジン3体に斬撃を放つが、やけに連携がとれてなかなか当たらない。イマジンAに攻撃するとイマジンBに後ろをやられ、その先に待ち構えているイマジンAとイマジンCに攻撃され吹き飛ばされる。

起き上がり、ゼロガツシャーをボウガンモードにして、追撃しようとした3体を撃ちぬく。さらにデネブが加わり両手からバルカンを連射する。

「デネブ、いくぞ！」

「了解だ。侑人」

デネブがゼロノスの後ろに立ち、両手をクロスさせ、肩にのせる。ゼロノスはカードをベルトから外し、黄色の面をアップセットする。

『VEGA FORM』

肩にデネブのバルカンが付き、胸にはデネブの顔、ドリルのような仮面を装着され、背中には黒いマントがある。ゼロノスベガフォー

ムである。

「最初に言っておく。いつまでたつても胸の顔は飾りだ！」

『だから、なんでズレてんだよ！お前は！』

決めゼリフ？を言った直後に3体が走り出しそれぞれ武器を振り下ろす。それを再びサーベルモードにしたゼロガツシャーで軽く受け止め、ベルトのフルチャージスイッチを押す。

『FULL CHARGE』

カードを取り出し、ゼロガツシャーにセットする。

3体の武器を弾き、サーベルモードの必殺技スプレンドッドエンドを放つ。斬られた3体の体にVの文字が浮かび爆発する。

アルティルフォームに戻ると、ゼロライナーに乗り次の時間へ向かった。

デIFエルは倒れていた。アルティメットクウガは先の攻撃を受け、解除されてしまった。完全に変身が解けないだけでも幸いだった。

「君が来たことで早速世界が歪んだことに気づいてるか？」

ストームが何やら話した。

「野上 良太郎が元の姿に戻ったこと、イメージが突如生み出されるようになったこと。全ての原因は士にある」

「な…なん、だと…？」

デIFエルは倒れたままストームの話聞く。

「君の異名は世界の覚醒者。存在するだけであらゆるものに新たな力を与える。善人にも悪人にも。その影響で野上 良太郎は元に戻り、イメージは人に付かずとも肉体を手に入れることができるようになった。それに加え、滅びの現象が起きる可能性がある。さらに君には破壊者の上をいく裏の姿、滅殺者の力がある。わかるか？君はあのデIFケイドを超える力を持っているんだ」

「それがどういわけかお前らにとって有害因子になるから消しに来たと？」

「そついつことだ」

ディフェルは立ち上がった。目の前にいる家族よりも妙な目的を選んだこのバカを倒すために。ケータッチを取り出しカードを押し。

『 KUUGA AGITO RYUKI FAIZ BLADE  
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA DOUBLE  
E OOO FAINAL KAMENRIDE DEFER 』

ディフェルはネオコンプリートフォームへ強化するともう1度カードを押し、黄色のカードを装填する。

『 KUUGA KAMENRIDE ULTIMATE 』

『 FINAL ATTACKRIDE KUKUKUKUUGA 』  
ストームの後ろにアルティメットクウガが現れディフェルと同時にアルティメットキックを放つ。ストームは暴風の盾を作り防御するが1つのアルティメットキックで破られかけているのだ。2つでは耐えきれず破壊されてしまう。

だが、アルティメットキックを相殺した。しかし、これはディフェルの狙いだった。

そのまま吹き飛ばされながらカードを装填した。

『 FINAL ATTACKRIDE DEEDEE DEFER 』

再び暴風の盾を作りだすが何かに阻まれた。白い3Dカードである。ディフェルは飛行の速度を追加したディメンションヘヴンキックを

放つ。

「これで終わりだあああああああああああ！！！！」

完全に虚をつかれ、キックがストームに炸裂した。そしてストームの体をすり抜けた（……………）。

今攻撃したのはストームが風で作り出した分身だった。

「なっ！？」

着地してあたりを見回すと拍手しているストームがいた。

「不完全な姿だから侮っていたが間違いだった。30秒でいいか」

するとディフェルの体が何かに斬られ火花を散らす。さらにそれは連続で起こり体中を斬られる。

謎の攻撃が終わった直後に上から何かに叩きつけられさらに、下から何かに打ち上げられる。空中でも謎の攻撃に追撃され、そこをストームの放ったプラズマの光線をくらい吹き飛ばされる。

ディフェルは元の姿に戻り動かなくなってしまった。

「どんな小さな風でも固体化させ、風速、風向を自在に変えるのが僕らの能力。まあ、もう聞こえないか」

ストームはロストドライバーからメモリを抜き、マキシマムスロットに入れ、スイッチを押した。



## 風神と無邪気な子供（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「どうなんだろうこの能力？強いんだろうか？」

ライ「知らないよおそんなの。読者のお兄ちゃんお姉ちゃん次第だもん」

竜王「ストームはいけると思うんだが、君のは…」

ライ「電王代表だから時間系の能力にしたら…」

竜王「いいのがあまり思いつかなかった」

ライ「作者さんを第2次世界大戦の真つただ中へGO！」

竜王「人間態だけの話だよ！イマジン形態のときはもっとすじ」

ライ「よし、飛んでったね。それではまた次回」

ヒロインだって見てるだけじゃ始まらない(前書き)

いいセリフが全然浮かばない…

今回は無駄に行を使い、戦闘描写も微妙です。

それでもいろいろ起こりますので大丈夫だと思います。  
それではどうぞ！



ヒロインだって見てるだけじゃ始まらない

ストームの必殺技がディフェルに炸裂しそうになる瞬間

突如青いデンライナーがその間を通り、必殺技を防ぐ。だがデンライナーにも大きなダメージが与えられる。

ストームはデンライナーを蹴り1回転して着地した。デンライナーが通り過ぎ現れたのはスーツが青く、目は電王より鋭く、体中にレールのようなものがついたNEW電王であった。

「じいちゃんが連れてこいっていつから来てみたら一体何なんだよ」  
少しヤサそうな口調でばやくNEW電王。そして背中に背負っていた相棒のデイが変形した剣マーチェデイを抜き構える。

『気をつける。アイツはヤバイ』

「わかってるよ。デンライナーあそこまでボロボロにできんだからな」

ストームはNEW電王が来たことに付くに驚きもせず手を構えた。

「NEW電王が来たところでどうにもなりはしないよ」

ディフェルの上にプラズマができ、そこから光線が放たれる。確実にトドメをさされた。だが当たることはなかった。なぜなら

ディフェルから黒く禍々しい何かが発生して防ぎ消滅させたから。

どこか翼のように見えるがそんなことすら考えないくらい異常だった。ストームにもNEW電王にもわかった。

（（アレは確実にヤバイ！））

そしてディフェルから出ている得体のしれない翼のような謎の力がストームに向かって放たれる瞬間、変身が解け士に戻ってしまった。ストームはそれを見た後背を向け歩き出した。

「滅殺者の力が見れたし今日はもういいや。それじゃまた会おう」

「オイツ！待て…グワツ！」

NEW電王が追いかけるが暴風が吹き荒れ、吹き飛ばされる。暴風がはれたときにはストームはすでに消えていた。

キンタロスがデンライナーから降りて戦っていた。キンタロスはキンタオノを3体に向かって振るう。それによってイマジンは爆発した。

「ダイナミックチョップ生」

技名を後に言うのが彼のクセである。

2001年8月3日

こちらではリュウタロスがひたすらリュウボルバーを乱射していた。

「よーし。ぶっ飛べーッ！」

光弾が放たれ3体が爆発した。

2001年6月3日

ウラタロスがウラタロッドを振り、3体を本人曰く釣っていた。

「でえやッ！」

ウラタロスの飛び蹴りが炸裂し爆発した。

2001年4月3日

モモタロスが戦っていた。いや、暴れていた。モモタロスオードにより3体とも吹き飛ばされる。

「いくぜ、俺の必殺技！邪魔だ消えろおおおおおおお！！！」  
怒りまかせの斬撃が放たれ爆発した。

2001年3月3日

ゼロノスアルティルフォームがゼロガッツシャーボウガンモードで連射していた。

『FULL CHARGE』

カードをセットしボウガンモードの必殺技グランドストライクを3発放つ。

1体ずつに当たりAの文字を浮かべ爆発した。

2001年2月3日

コハナの命令によって快く降りたジークが戦っていた。向かってくる奴をひたすら手刀で薙ぎ払うというやり方だけで圧倒していた。

「私にはにつかわしくないな」

そついうと無数の羽手裏剣を放ち3体にヒットすると一斉に爆発した。

2001年12月3日

「はあ、久しぶりになるなあコレ」

良太郎はベルトにケータロスを装着するところからともなくデンカメンソードが降ってきた。

「相変わらず重い…変身」

ライダーパスをデンカメンソードにセットする。

『RAINER FORM』

デンライナーの影が良太郎を通り抜けるとスーツが赤く、白い鎧、ソードフォームに似てるが鋭く側面に青黄紫の装飾のついたライナーフォームへ変身する。(以下R電王)

3体が一斉に向かってくる。

少し不安定な横なぎの1撃をくらわせ、さらにその不安定な攻撃を放ち続ける。

だが、途中でよけられてしまいカウンターを受け吹き飛ばされる。

「いたたた…」

デンカメンソードのレバーを奥に押す。

『モモソード』

再びデンライナーの影が現れ、黄色の線路の上にR電王が飛び乗ると高速で滑りだす。

「電車斬り！」

ダサイ名前とともに斬撃を放ち、3体が爆発する。

「1月は終わったしあとは7、9、11か。幸太郎も向かってるだろっし11月に行こう」

良太郎はデンライナーに乗り、11月へ向かった。

こちらにはNEW電王が戦っていた。NEWデンライナーはストームの攻撃で損傷はしたが走れなくなるほどではなかった。

「カウントいこう」

『何秒だ？』

「7秒」

マーチエテディとなにやら相談するとパスを取り出し金色のベルトにスキャンした。

『7』

『FULL CHARGE』

『6』

イメージンに向かって走り出す。

『5』

1体目に斬撃をくらわせる。

『4』

2体目の剣を防ぐ。

『3』

剣を弾き斬撃を放つ。

『2』

3体目の攻撃を小さくジャンプしてよけ、後ろに回る。

『1』

振り向いた3体目に斬撃を放つ。

『0』

3体が爆発した。

「で、士は大丈夫か？」

幸太郎に戻り、NEWデンライナーに乗ると士の元へ行く。

現在は士がベッドで寝ている。体中に包帯を巻き痛々しい姿である。

美莉も別の部屋にこもったきりである。聖麻は士の元にいた。

「たぶん大丈夫ですよ。こいつタフですし」

笑いながら幸太郎に言うが、実際はかなり心配している。

最後は怒濤の攻撃を受けていて、カードの反動もある。無事なわけ



がない。

「……そうか」

幸太郎にもわかっていているらしくつらそうな顔で軽く返事をする。部屋を出て行ってしまった。

聖麻は士をしばらく見た後に同じく部屋を出た。

しばらくして、2001年9月3日に着いた。

「じゃあ、俺行くから。テディ」

「わかった」

「わかりました。頑張ってください」

幸太郎とテディがNEWデンライナーから降りる。

外にはやはり3体のイマジンがいたが、1体は見覚えがあった。

「マンティスイマジンか」

「あら、久しぶりね坊や」

幸太郎は金色のベルトを巻き、ライダーパスをスキャンする。

「変身！」

『STRIKE FORM』

青いスーツと金色の鎧に身を包みNEW電王に変身する。

「テディ」

呼ぶと指を2回連続で鳴らす。

それにこたえるかのようにマーチエディに変わりNEW電王の手に収まる。

2体のイマジンが同時に襲いかかるがその攻撃をかわし、斬撃を数発放つ。

その後ろからマンティスイマジンが鎌を振るう。後ろへのけぞってしまい、そこを2体のイマジンの攻撃が襲つ。

マンティスイマジンの攻撃を再び受け吹き飛ばされる。

「テディ、あれやろう」

『あれか。わかった』

パスをスキャンする。

『FULL CHARGE』

するとマーチエディをマンティスイマジンに向かって投げた。鎌で弾く寸前に方向を変え2体のイマジンを切り裂く。2体目を斬ると真上へ飛ぶ。そこにはNEW電王がジャンプしていた。マーチエ

デディを持つとそのまま上空から振り下ろす。その斬撃がマンティスイマジンに炸裂すると3体が一斉に爆発した。

2001年11月3日

「電車斬り！」

必殺技を放ち3体を倒す。これで全滅した。

変身するとき良太郎に戻るとケータロスが鳴った。

とりあえず電話にでると以外な奴だった。

『やつほーお兄ちゃん。第1ゲームクリアおめでとー！』

他でもないライだった。変わらず楽しそうな声で話続ける。

『第2ゲームをやるね。ええとそうだなあ。あ！いいの思いついちやった！』

それはとんでもないゲームだった。

『プレイヤーはNEW電王とディフェルのお兄ちゃん。2人が今いる場所にアルビノレオイマジン1体とレオソルジャーを30体置いたから。他の人来たらゲームオーバーね』

「ゲームオーバーになったら？」

『昨日に原爆落とすよ。あ、ごっめ〜ん。ディフェルのお兄ちゃん  
けがして動けないんだった。ま、がんばってね〜』

通話がきれた。最悪のルールだった。

良太郎はとりあえずできることとして降ろしたイメージを迎えにい  
った。

「オイ!どついうことだよ!」

NEW電王はパニックっていた。突然イメージが大量に現れたのだから仕方がない。

『こいつらは恐らく第2ゲームだ。とにかく戦おう!』

テディの言葉を皮きりに戦闘が開始した。

NEWデンライナー内。

美莉は別室で泣いていた。その顔は両親が亡くなった時や兄が行方不明になったときと同じだった。

「うう…お兄ちゃん…」

乗ってからずっとこれである。本当に自分の兄が土を襲い、結果土は大けがを負ってしまった。何より傷ついたのは「いや、ないよ」というあの無慈悲な言葉であった。

自分の知ってる兄はどこへ行ったのだろうか。あの優しい兄はもういないのか…

するとドアが開いた。入ってきたのは士だった。

だが入ってすぐに倒れてしまう。美莉は急いで駆け寄った。

「士君！無理しちゃダメだよ！」

「いや、お前に比べりゃ大丈夫だよ…お前に言いたいことがあつてきた…」

士は話し始めた。

「あそこまでキレてた俺が言つとほんとに説得力ないけどさ…」

「うん」

「お前風牙さんのこと今信じてるか？」

少し意外な言葉だった。

「お前ブラコンじゃね？って思うくらいにベツタリでいつも信頼してきたからさ」

「ブ、ブラコンじゃないッ！」

顔を赤くしながら否定した。士は笑いながら話続けた。

「なあ、あの人信頼してみようぜ」

「えっ？」

「あんないい人なんだ。なんかあるはずなんだよ。もう1度あの人に会うその日まで絶対にお前をあの顔にしないように守り抜いてやるから」

「ッ／／／」

士は美莉の頭に手を置いた。

「お前は今まで通り笑って、お兄ちゃんベツタリでいろよ。お前に起こる絶望は全部破壊してやるから」

「…厨二／／／」

「ほつとけ…」

「じゃあ決めた！」

何やらグツと拳を握りしめ士に言った。

「そうしてくれる士君を私が守るよ！」

「…は？」

「私は誰にも傷ついてほしくない。良太郎さんも今戦ってる幸太郎さんも向井君も士君もみんな。いつまでも守られてばかりじゃダメなの！守ってくれる士君が今見たいに傷つかないように私が守るよ！」

「それなんかさ、俺かっこわるくね？」

すると美莉のポーチから何かがとんできた。それは渡からもらったあのカードだった。だが、今は絵があった。

「あ！絵がある！」

「え！？マジでいぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！?!？」

騒ぎ始めた土だがけがのせいで痛みを苦しんでいた。

そして美莉はあの弓のようなツールを持ち、土を見る。

「じゃ、行くね。幸太郎さんも土君も守るよ」

そういうと出口へ向かった。

「なんか、俺かっこわりいしだせえ…」



NEW電王は苦戦していた。そもそもレオソルジャーというのは個々の戦闘力が高く、それが集団で攻めるとなればとんでもないものになる。

レオソルジャーの1体が向かってくる。だが、何かに当たりレオソルジャーは吹き飛んだ。

見ると、弓矢を放った体勢の美莉がいた。

「ほ、ほんとに撃てたくー！すごーい！」

何やら感激しているご様子。

「オイ！危ないからくんない！」

美莉はその言葉に対し、首を横に振った。

「いいんです。私はだれにも傷ついてほしくないから、守られてばかりじゃダメだから戦います！」

カードを弓のようなツールに装填する。

『KAMENRIDE』

そして上に構え見えない弦を引っ張る。

「変身！」

『DEKAE L』

光の矢が放たれるとそこから3つの影が現れ、滑るような移動をすると美莉に集まって行く。

やや丸みを帯びた赤いライドプレートが顔に装備され、スーツの一部が赤く染まる。

全体的に女性らしさがあり、左手の装備が右手よりも重厚で、鎧は弓道の防具をイメージしたような形した形で、スーツは白。仮面はやや丸みを帯びたライドプレートが角のように2本、側面にはディフェルと同じく翼のようなものがついている、目は赤。

名は仮面ライダーディカエル。少女の思いで生まれたもう1人のライダーである。

ヒロインだっで見てるだけじゃ始まらない(後書き)

士「美莉が変身した…だと…」

竜王「なんか微妙な文だけどとりあえず変身させることができたよ」

聖麻「どんな能力なんだ？」

竜王「それは次回でわかるよ。それではまた次回！」

登場人物 その2 (前書き)

ここには風牙のことについてのみを記述します

## 登場人物 その2

日々野<sup>ひびの</sup> 風牙<sup>ふうが</sup> 19歳 8月1日生まれ  
身長178cm 体重64kg

1年前に行方不明になった美莉の兄本人。

電王の世界で再会するも、カエルムのNO.3となっていた。なぜカエルムになったかは不明。

普段は優しく、面倒見のいい性格で美莉や土は慕っていた。美莉にとっては両親がいなかったため唯一の家族で心の支えでもあった。

「旅立ちの日に」の口笛を吹くのが癖。

普段から鳴滝のような格好をして、土たちを傍観していた。

デIFエルを警戒しており、デIFエルを倒すことを望んでいる。

### 仮面ライダーストーム

身長195cm 体重87kg

パンチ力70t キック力90t ジャンプ力ひと飛び100m

走力100mを2秒

風牙が「STORM GOD」のガイアメモリを使いロストドライブによって変身した姿。

カエルムのライダー4人の内の1人。

変身時には台風レベルの暴風が起こり、それだけであたりは崩壊する。

Wのサイクロンサイクロンの体にアルティメットクウガの荒々しさが付いたような姿。仮面は目が青で、角は王冠のような4本角。スカーフは2本首に巻いている。

どんな小さな風でも固体化させ、風速、風向を自在に変えることが

能力でそれによる攻撃力は風速が速いほどあがる。風の分身、暴風の盾、風による不可視の打撃とその強化の風の龍、鎌鼬、竜巻による飛行、風向を操りプラズマを作るなどさまざまな使い方がある。また、そのプラズマもいくらか操ることができる。

必殺技は変身時よりも激しい暴風を起こして上空に舞い上がり、無数の風の龍とプラズマの光線とともに竜巻を纏った両足蹴りを放つ「ゴッド・ザ・エクストリーム」で威力は龍とプラズマを合わせて200t。

登場人物 その2（後書き）

風牙「4人いるからあと3人だよね」

竜王「うん。どんなのくんだろ」

風牙「知ってるくせに。あんまつるみたくないな」

竜王「そういふなよ、おもしろいのですから」







矢を放つとそこからパトカーをイメージした電王、G電王とガシャポンのカプセルが体中にあるライダー、バースを召喚した。

2人はそれぞれデンガツシャーガンモードとバースバスターでレオソルジャーを撃ち始めた。

「見たことあるから出してみたけど2人ともすごい！あ、私もやんなきゃ」

するとディカエルドライバーの弓部を折りコンパクトな形にする目にもとまらぬ速さで弾丸を撃ち始めた。これはディカエルドライバーマシンガンモードである。

アローモードのように吹き飛ばすことはないが、充分怯んでいる。さらにカードを装填した。

『ATTACKRIDE BLUST』

発動させるとさらに連射力と威力が上がり、3人の射撃によって半分のレオソルジャーが爆発した。それとともにG電王とバースが消えた。

ここで美莉はある疑問を感じた。

（あれ？変身は土君ぼくやつたけど何で戦い方わかるんだろ？なった瞬間いろいろ流れてきた気が…）

だが、今は気にしている暇はない。

不利と判断したのが大半のレオソルジャーがNEW電王に襲いかかった。

「幸太郎さん！」

「俺はいいからそのボスを倒してくれ！そうすればこいつらは消える！」

少し困ったディカエルは3枚のカードを装填した。

『KAMENRIDE BLADE SASSWORD』

『FORMRIDE AGITO FLAME』

弾丸を放ちブレイドとカブトのライダーであるサソリの剣士サソード、アギトフレイムフォームを召喚した。どうやら別フォームのライダーを召喚できるらしい。

「3人置きますので頑張ってください！」

NEW電王を心配しつつディカエルはアルビノレオイマジンの元へ向かった。

アルビノレオイマジンの周りにはレオソルジャーが3体いた。

再びアローモードにすると刃のついた弓部でレオソルジャーを切り裂いた。だが、2体の攻撃を受けてしまう。

「いったーい。じゃあ、これ」

カードを取り出すと装填し、発動させた。

『ATTACKRIDE EYE』

一瞬ディカエルの目が光る。再び2体がモーニングスターで攻撃を仕掛けるがディカエルはその攻撃の隙間を通過して避け、近距離で1体に矢を放つ。さらに、ディカエルドライバーを振りかぶりもう1体を切り裂く。3体目がくるとマシンガンモードに変形させ連射した。

斬撃をくらったレオソルジャーが後ろから襲いかかるとディカエルは見えているかのようにしゃがんで避け、足払いを放ち転ばせる。

アタックライドアイの能力は360度に視界を作り、もともとの視界の動体視力と視力をあげるというものだ。だから後ろの攻撃をよけることができたのである。

3体の攻撃を小さな動きでかわし、ドライバーで攻撃を仕掛ける。3体を相手にして圧倒していた。3体が一斉に攻撃するがジャンプでそれを避け、少し離れた場所へ着地するとカードを装填した。

『ATTACKRIDE BLUST』

矢を放つと5本に分裂し、3本がレオソルジャーに当たり爆発する。残り2本はアルビノレオイマジンに向かうが2発の火球によって相殺されてしまった。

「小娘が。生意気なことを」

「守らなきゃならないの。私を守ってくれる士君やみんなを！」

2人は走り出した。

NEW電王はレオソルジャーと戦っていたがさっきのように苦戦はしていなかった。ディカエルの召喚した3人のライダーのおかげで有利になり、本調子で斬撃を放っていた。

するとNEWデンライナーから銃弾が放たれレオソルジャーに当たる。そこにいたのは窓から身を乗り出しているディフェルであった。

「土、お前大丈夫なのか!？」

攻撃を避け、斬撃を放ちながら尋ねる。

「いや、まだちょっとアレなんですけどこうなるとみてるほうが辛いんで。あ、もうトドメさしますよ」

デIFエルはややくったりしたままカードを装填した。

『FINALFORMRIDE B B B BLADE』

するとブレイドの体が折れていき、巨大な剣ブレイドブレードに変形した。そのまま浮遊するとNEW電王の手元に収まった。

「え！？なんだよこれ!？」

「はい幸太郎さん、いきますよー」

『FINALATTACKRIDE B B B BLADE』

ブレイドブレードに困惑していると青い稲妻を纏ったため、円を描くように振り回し斬撃を放つ。

すべてのレオイマジンにヒットし爆発を起こす。

「あとはアイツだ「待ってください」「え?」

NEW電王がアルビノレオイマジンの元へ向かおうとするが、デIFエルがそれを止めた。

「しばらく待ってください。アイツ妙なところで意地張るから」

その言葉に渋々うなずくとデIFカエルの戦いを見始めた。

ディカエルはアルビノレオイマジンと戦っていたがやはり苦戦を強いられた。もともとアルビノレオイマジンは電王ライナーフォームとゼロノスゼロフォームをまとめて相手して圧倒するほどの実力である。ディカエルはパンチの連打を受け吹き飛ばされてしまう。

起き上がるとすぐさま矢を放つが避けられ逆に火球をくらってしまふ。美莉は土のようにタフではなく女の子である。そのためすでに体力が限界だった。

「どうした小娘。さっきまでの威勢はどうした」

「はあ…はあ…まだ…」

「おい、美莉！守るんじゃないのか？」

見ると士が叫んでいた。さらに言葉が続く。

「だったらやってみろ！俺も聖麻も幸太郎さんもそいつから守ってみろよ！」

そこまでいいセリフでもない単純な言葉だった。だが、今の美莉にはそれで十分だった。

立ち上がるとドライバーをマシンガンモードに変形させ弾丸を放つ。ヒットするがそれをもとめせず走ってくる。ディカエルはカードを装填した。

『ATTACK RIDE BLUST』

エネルギー弾を連射しアルビノレオイマジンを怯ませる。連射しながらアローモードに変形させ発射する。5発の矢が放たれ、怯んで動けなかったアルビノレオイマジンに炸裂する。

そこを追撃するためにディカエルは走り出し次々と斬撃を放つ。さらにキックを連続で放ちつつ弓を引き、キックを止め矢を放つ。近距離で受け大きく吹き飛ばされる。

「よし。トドメ！」

ディカエルは黄色のカードを取り出し装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEKA  
EL』



無数のカードが輪を作り、それが連続で並ぶ。ディカエルはめいいつぱい弓を引く。

アルビノレオイマジンが火球を放つと同時にディカエルが矢を放つ。カードの輪を次々と取り込んでいき巨大な赤い矢となる。それは火球をもとせずアルビノレオイマジンに炸裂し、ついに爆発した。

「え？私勝つたの？ほんとに」

変身を解いて美莉に戻ると自分が勝つたことを疑った。だが、確信すると笑顔になり走り出した。

そしてNEWデンライナーから降りてややぐったりしている土に抱きついた。

「土君やったよ！私勝てたよ！」

「えっとそれはわかってますので離してくれると嬉しいというか悲しいというかそのえっと……」

抱きつかれ胸が当たっていることではたしていた土はやがて気絶してしまった。そこにニヤニヤしている聖麻が降りてきた。

「おーい日々野。ちょっと状況把握しようぜ」

聖麻の言葉にとりあえずあたりを見回す。いたのはあきれ顔で美莉と土を見ている幸太郎とティ、ニヤニヤして見ている聖麻、そして自分が抱きしめている気絶した土。

気付いた美莉は顔が真っ赤になって手をバタバタ振りはじめた。

「ち、ちがうよ／＼。これは勝ったことが嬉しかっただけで、土君が好きとかそういうのじゃなくてその…／＼」

かなり無駄な弁解をしているとデンライナーがやってきて良太郎が降りてきた。

「幸太郎、土君大丈夫だった？」

「ああ、そこで顔真っ赤にしながら手をばたつかせてる子のおかげでなんとかあった。てかじいちゃんなんで元にもどってんの!？」

驚きながらも幸太郎が良太郎に状況を説明しているとケータロスが鳴った。良太郎がでると相手はやはりライだった。

『クリアおめでとう！まさかお姉ちゃんが変身するとは思わなかったけど特にルールにもないしいや』

「で、次のゲームは？」

『もっと長くなるはずだったのにお兄ちゃんお姉ちゃんが早く終わらせちゃったせいでもう最終ゲームだよ』

「内容は？」

『時間は現在。そこに僕とイマジン100匹がいます。さあ、ラスボス戦だよ。がんばっていこー!』

最後まで明るい調子で話し、切れた。

「みんな。現在に戻るよ。そこにライがいる」

そしてデンライナーとNEWデンライナーにそれぞれ乗ると現在へ向かった。

## ヒロイン・イズ・アーチャー（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「はーいついに美莉が戦いましたー！」

美莉「イエーイ！」

士「ああ。ディエンドみたいにライダーを召喚するのか」

聖麻「すごかったな！特に最後の自爆が（笑）」

美莉「それは関係ないよ！／／／」

竜王「あー見てて楽しい。それではまた次回！」

## 主催子供のラストゲーム（前書き）

あゝ長かった。今回いろいろ感じることもあると思いますが許してください。

突然だけどクウガの47、48話の予告ほど敵が強そうに見えて悲しくなれるものはないと思った。

## 主催子供のラストゲーム

現在へ向かう途中、士たちはそれぞれ起こったことを話していた。

「美莉ちゃんのお兄さんが…」

良太郎は士たちのことを聞いて暗い表情になる。唯一の家族なら良太郎にだっている。姉の愛理である。もしも彼女が自分たちの敵のような立場になったらと考えるだけで辛くなる。

「そつちにもカエルムが出たんですか。てかそういう構成なのか…」

士はカエルムのことを聞いていた。今聞いたライは少なくとも風牙ほどではない。だが、悔るわけにはいかない。過去にイマジンを自由に仕掛けるなんてカイ以上の能力である。カイは側近の精神体のイマジンと契約して自分を使って過去へ飛ばすという方法だったが、ライは自由気ままに望むイマジンを過去へ飛ばせる。あきらかに差がありすぎる。

「なあ。2人とも大丈夫か？士はけががあるし、日々野はいつか兄さんと戦わなくちゃいけないんだぞ？」

聖麻が心配して2人に尋ねる。2人はそれに普通に答えた。

「けがはもう大丈夫だよ。ただファイナルカメンライドの負担が残っててな」

「正直戦いたくない。でも、またお兄ちゃんがきて士君を傷つけるならその時はお兄ちゃんと戦う。守るって決めたから」

2人ともい로운な意味で強かった。それを聞いて聖麻はホツツとした。

「美莉ちゃん。今度よかつたらお茶でも…」

突然ウラタロスが来ていつも通りナンパし始めた。そこに聖麻が口をはさんだ。

「やめとけウラタロス。日々野にはもう相手がいるんだ」

見るとすでに顔が赤くなっていて、チラチラと土を見ている。ウラタロスは少々がっかりしながら席に戻った。

「へえ〜。美莉ちゃん土のことムグツ！」

リュウタロスがばらす寸前でキンタロスが口を塞ぐ。

「リュウタ、そういうのはいうもんやない！」

「そうだよリュウタ。ああいうのは眺めてればいいんだよ」

「私には既に姫という麗しき花嫁が…」

「テメエのことなんか聞いてねえよ！手羽野郎！」

相変わらずのクオリティ。状況には全くあわないが。良太郎は苦笑いしながらその光景を見ていた。

「みなさん。まもなく現代につきますよ〜」

ナオミのアナウンスによつて雰囲気が一気に変わった。

「アイツ、カインに似てるからブツ飛ばしてやる」

リュウタロスは既にキレていた。他のみんなも真剣な顔つきになっている。

そして現代に到着した。

全員が降りるとライと後ろにイマジンの大群がいた。本当に1000体呼んだらしい。

「やつほーお兄ちゃんお姉ちゃん。到達おめでと〜ございますー!」  
と相変わらず明るく喋ると、なぜか敬礼した。

「オイ!ハナ垂れ2世!さんざん面倒なまねしやがって」  
モモタロスが指さしながらライに言い放つ。





ードを装填した。

『KAMENRIDE』

イマジン5人もベルトを装着するとモモ、ウラ、キン、リュウはそれぞれフォームスイッチを押し、ジークのベルトにはウイングバツクルが装着される。

侑人は赤いゼロノスカードを取り出しチェンジレバーをスライドさせる。幸太郎もベルトを装着する。

「変身!!!」

良太郎とイマジン5人、幸太郎がパスをスキャンし、土がカードを装填しサイドレバーを押し、美莉が上空に矢を放ち、侑人がカードをアップセットし、全員が一斉に変身した。

『RAINER FORM』 『KAMENRIDE DEFER  
『DEKAEL』

『SWORD FORM』 『ROD FORM』 『AXE F  
ORM』 『GUN FORM』 『WING FORM』

『CHARGE AND UP』 『STRIKE FORM』

音声が鳴り響き、全員が変身した。

「俺、参上!」 「お前達、僕に釣られてみない?」 「俺の強さにお前らが泣いた!」 「お前達倒しちゃうけどいいよね。答えは聞いてない!」 「降臨!満を持して」

「最初に言っておく。俺はかーなり強い！」 「テディ」

NEW電王が指を2回鳴らす。

「えっと、よろしくお願いします！」 「ゲーム感覚で人を悲しませるならそんな世界は俺が破壊してやる！」 「うーん、特にないや」

それぞれが決めゼリフ(?)を言うとデネブがデネビツクバスターに、テディはマーチエテディに変形しゼロノスゼロフォーム、NEW電王の手元に収まる。他のみんなも武器を取り出した。

「「よし、行け！」」

何故か聖麻とコハナの合図で全員が走り出した。(以下電王はそれぞれ電王、M電王、U電王、K電王、R電王、W電王)

「うっしやあ！いくぜいくぜいくぜえ！」

M電王がいつも通り叫んだ。

「はっ！変身に見とれてた！ゲームスタート！」

ライの合図でイマジンの群れも走り出した。

「なんか映画と似てんなあっと！」

デیفエルは目の前のイマジンをライドブツカーへヴンで切り裂く。そのまま次々と切り裂きながら前へ進んでいく。そしてカードを装填した。

『ATTACK RIDE SLASH』

ソードモードを強化し、再び斬撃をくらわせていく。後ろからイマジンの剣がくるが後ろ向きで止め、カウンター斬撃を放つ。次々と爆発していくが一向に減らない。

「ああ、多すぎ！そういうときはこれだな」

『FORM RIDE FAIZ ACCEL』

カードを装填し、銀色のファイズの高速形態アクセルフォームに変身する（以下Dファイズ）。さらに黄色のカードを装填し、ファイズアクセルのスタータースイッチを押した。

『FINAL ATTACK RIDE F A F A F A F A I Z』

『START UP』

Dファイズはフォトンブラッドによって赤く発光しているファイズエッジを構えると音速で走り出し10秒の間に大量のイマジンにアクセルパークルカットをくらわる。

『TIME OUT』

時間切れになり、デIFエルへ戻る。それと同時に の文字を浮か  
ベイマジンが爆発した。だが、数体が残っていた。

「まだいるのかよ。いい加減懲りろ」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEFE  
R』

カードを装填すると白い3Dカードが現れ、上空へ浮かびそこへ向  
かってデIFエルがジャンプした。

「デIFメンションへヴンキック！」

カードを全てくぐりキックを放ち、全滅した。

デIFカエルはアローモードによる遠距離戦をやっていたが数が多  
すぎて攻められてしまった。

『ATTACKRIDE EYE』

視力強化のカードを使い、近距離戦へ変更する。イマジンは攻撃を仕掛けるが小さく避けられ斬撃をくらう。後ろから来てもあっさり避けられ斬撃をくらう。今のディカエルに死角はない。どこからきても対応できるのである。

「やっぱり多いなあ。じゃあこの人で」

カードを装填し、矢を放った。

『FORMRIDE OOO RATORATER』

矢からオーズの黄色のコンボラトラーターが召喚されると、灼熱光線ライオディアスを放出しイマジンごとあたりを焼き尽くした。

「うわわわ。危ないよ！このライダーさん！」

危うく巻き込まれそうになりディカエルはジャンプして離れた。だが、相当少なくなっていた。それを見て黄色のカードを装填した。

『FINALATTACKRIDE DE DE DE DEKAE  
L』

無数のカードの輪が現れ、ディメンションアローシユートを放つ。輪をくぐりながらラトラーターごとカードの輪を取り込んで巨大化し、イマジン達に炸裂した。

ライはその光景を見てつまらなそうにして溜息をついた。

「もっと楽しむ気はないのかなあのお兄ちゃんお姉ちゃん。あつ  
そうだ！」

何かを思いつき手を叩いた。するとレオソルジャーとゲルニユート  
100体以上が現れた。

「ボーナスステージ！さらに追加だよ！がんばれー！」

いつも通りの笑顔だった。

「うわわ。なんでぶやしちゃうのー!?!」

電王はデンカメンソードを振り攻撃していた。せつかく有利だった

ところにレオソルジャーとゲルニユートが追加されてしまい、不利になってしまう。

「ゲームオーバーで原爆落とされちゃう。それはダメだ!」

ゲームオーバーのことを考えイマジン達に突撃していき、デンカメンを回した。

『ウラロッド』

後ろからイスルギの影が現れ、一緒に現れた線路に乗った。

「電車斬り!」

デンカメンソードで突きを放ち、イマジンは爆発する。技が終わるがその勢いのままさらに突撃しイマジンに斬撃をくらわせる。だが、イマジン達も攻撃を放ってくる。

攻撃を避けながら斬撃を放つが何発かくらってしまう。それでも負けずに攻撃し続ける。そしてデンカメンを素早く1周させる。

すると全てのデンライナーの影が現れ、線路に乗り滑り出す。

「電車斬り!」

真の必殺技正式名フルスロットルブレイクを放ち、ついに全滅した。



「俺は最初からクライマックスだぜ！」

M電王は叫びながらデンガツシャーソードモードを振るう。次々と蹴散らされるもやはり減らない。

だが、むしろ楽しむかのように斬撃を放ち、キックをくらわせる。

だがその絶好調の途中で後ろからイマジンの1体に頭を殴られた。

一瞬訪れる沈黙。M電王は振り返った。当然殴ったイマジンがいる。

「邪魔だテメエ！」

再び攻撃を放ち、イマジンたちも動き出した。やはりM電王が有利でそのまま全員薙ぎ払われてしまう。M電王はパスを取り出しスキヤンした。

『FULL CHARGE』

「俺の必殺技パート5！」

刀身が分離され、デンガツシャーを右へ振る。刀身も同じ軌道を描きイマジンを切り裂く。

「うおりゃー！」

左へ振り、同じように斬撃を放つ。

「せりゃ！」

上に振りかぶり、縦に振りおろす。刀身も動きイメージ達を一刀両断した。

U電王はデンガツシャーロッドモードでイメージンを薙ぎ払っていた。

「大漁にも程があるよね、これ」

少々呆れながらもデンガツシャーを振り、キックを放ちイメージンを吹き飛ばしていく。囲まれても大きく振りまわすことで全員を薙ぎ払った。

デンガツシャーをつりざおのように振ると先端から糸が伸び、イメージン1体に引つ掛かる。そのイメージンをイメージンの群れに放り投げ全員を転倒させる。

「んじゃ、決めますか」

『FULL CHARGE』

パスをスキャンし、デンガツシャーを銚のようにイマジンに投げつける。するとデンガツシャーはイマジンに吸い込まれるように進み亀の甲羅のような紋章を浮かべた。

このソリッドアタックによって固定されたイマジンたちに向かってU電王は走り出し、デンライダーキックをくらわせた。

「上等やないか。泣けるで！」

K電王はデンガツシャーアックスモードによる斬撃を放っていた。あまりのパワーにイマジンは吹き飛ばされていく。

さらにツツパリを放ち吹き飛ばす。次々とイマジンが押し寄せてくるがどんどん吹き飛ばされていった。

あまりに強くて泣きだす奴…はさすがにいないがそのままデンガツシャーやツツパリによる漢らしい戦いを繰り広げ、パスを取り出した。

『FULL CHARGE』

デンガツシャーを上空へ投げるとK電王も高くジャンプした。空中でキャッチするとイメージンの群れ目掛けて振りおろした。

真つ二つに切り裂き、周りのイメージンを円を描くようにデンガツシヤーを振り切り裂き、爆発した。

「ダイナミックチョップ」

やはり技名は後に言った。

「イエーイ！」

R電王はデンガツシャーガンモードをダンスのような動きをしながら撃っていた。

イメージンはこの動きに翻弄され次々と被弾していった。さらにダンスのステップのような動きで近づきキックをくらわせる。R電王は電王5フォームでは最もキック力があるのである。

イマジン達はキックとデンガツシャーによって翻弄され続け、全くついていくことができなかった。

R電王は軽く足をふみならず。すると風が巻き起こりイマジンを吹き飛ばした。もちろんストーム程ではない。そしてパスを取り出しスキャンした。

『FULL CHARGE』

「お前達これで吹っ飛ぶけどいいよね。答えは聞いてない」

デンガツシャーの銃口に雷が集まり、さらに肩のドラゴンジェムからも雷が現れ銃口に集まっていく。

トリガーをひきワイルドショットを放つ。全てのイマジンにヒットし爆発した。

W電王はデンガツシャーブーメランモードとハンドアクセスモードによる二刀流で闘っていた。

一切の無駄な動きを見せず、イメージを切り裂いていく。だが、W電王の視線の先にあるものが目にとまった。コハナを襲おうとしているイメージがいた。

真っ先にブーメランモードを投げそのイメージを切り裂き、他のイメージを蹴散らしながらコハナの元へ駆けつける。

「姫。ご無事で」

コハナの安否を確認すると近くで適当にイメージを蹴り飛ばしていた聖麻の方を向いた。

「下部よ。私と共に姫を護衛しろ」

「下部って俺かよ！はいはい、わかりましたよ王様！」

皮肉を込めて「王様」と呼ぶとW電王の方へイメージを蹴り飛ばした。そのイメージを切り裂くというのを繰り返す。何気に息が合っていた。

コハナにイメージが近づくと聖麻が走り、飛び蹴りをくらわせた。

「ありがとう、聖麻！」

「ふっ。その働き、褒めてつかわす」

最後まで偉そうにしたまま戦い、ハンドアックスモードを一旦宙へ投げると、パスをスキャンした。

『FULL CHARGE』

ハンドアックスモードをキャッチすると両側へむかってブーメランモードとハンドアックスモードを投げるロイヤルスマッシュを放つ。2つは意思があるかのように動き次々と切り裂いていく。

2つがW電王の手元へ戻ると同時にイマジンが爆発した。

ゼロノスは相棒であるデネブが変形したデネビックバスターをぶっ放していた。

イマジンの群れに突っ込みながら弾丸を撃ちまくり、近づいたら銃口で殴っていき隙があれば撃ちまくりの繰り返しだった。

「ほんとキリがねえな！」

やけくそ気味にデネビックバスターを撃ちまくる。高威力のため次々とイマジンは吹き飛ばされていく。イマジンが後ろから襲いかかるも、そのイマジンを蹴り飛ばし弾丸を放つ。

再び走り出しイマジンの群れをジャンプで飛び越えながら弾丸を撃ち、着地するとフルチャージスイッチを押しした。

『FULL CHARGE』

ベルトからカードを取り出し、デネビックバスターにセットする。

「お前ら吹き飛べ！」

銃口から巨大なレーザー、バスターノヴァが放たれ同時にゼロノスも反動で少し後ろに下がる。

レーザーは全てのイメージンを飲み込み、爆発させた。

NEW電王はマーチエデイを使い、斬撃を放っていた。

だが、何やら苛立ちが見える。なんせ今日は嫌になるくらいイメージンを見ている。とくにレオソルジャーを。

「なんか一生分はイメージンみたな！」

キックと斬撃を交互に放ち、イメージンを蹴散らしていく。他に比べれば普通らしい戦いだだがそれでも充分強かった。



イマジンの攻撃を巧みに避け、カウンターの一撃を放ち、パスをスキャンした。

『FULL CHARGE』

マーチエテディにエネルギーが集まるとNEW電王は走り出した。

走りながら次々とイマジンにカウンタースラッシュをくらわせていく。イマジンが武器を振り下ろすもそれを受け止め再び斬撃を放つ。それを繰り返していき、ついに全てのイマジンを切り裂き爆発した。

「もう、あのライオンみたくねえ……」

ちなみに何故かNEW電王のところに最もレオソルジャーが集まっていたらしい。

たった10人に200体近くのイマジンは全滅させられた。

全員が集まり、ライの前に立つ。

「ライ、残ったのは君だけだよ」

電王がライに告げるとライは笑いはじめた。

「ほんとにすごいね！すごく楽しいよ！で、あとは僕だけなんだよね。じゃあ僕と戦うプレイヤーは電王のみんなとデイフェルのお兄ちゃんだけ。他の3人には特別ステージ！」

説明をし、手をたたく。するとディカエル、ゼロノス、NEW電王の3人が消えてしまう。

「オイ！テメエ、美莉達に何しやがった！」

士が尋ねるとライは当たり前のように話し始めた。

「だから特別ステージだって。勝てば帰ってこれるよ。卑怯な真似はしないから心配しないでね」

ディカエルはどこかの工場に飛ばされていた。

「ん？あんな街中にいたのに……」

すると後ろから足音がしたため振りかえる。そこには赤黒反転したモモタロスに似たイマジンがいた。

「あれ？モモタロス？」

首をかしげながらそのイマジンに尋ねる。そのイマジンは鼻で笑うと

「あんな奴と一緒にするな。俺はネガタロス。悪党だ」

自己紹介をするとベルトを装着する。何やら暗い音楽が流れそのままパスをスキャンした。

「変身」

『N E G A F O R M』

音声になるとM電王と全く同じ形だが奇妙な模様がある紫色の鎧がついたネガ電王になった。

「やっぱモモタロスだよね？」

デйкаエルは何故か気付かなかった。

ゼロノスはどこかの荒地に飛ばされていた。ここには見覚えがあった。

『侑人。ここって前に』

「ああ。確か牙王つてやつと戦った場所だ」

「その通り。久しぶりだな小僧」

振りかえるとその牙王本人がいた。もちろんベルトを装着している。

「またあんたとやることになるとはな」

「色が変わったくらいで勝てると思うなよ。変身」

するとパスが宙に浮くと勝手にベルトに吸い込まれていった。

『G A - O F O R M』

茶色の鎧に、ワニをイメージした仮面を装着しガオウへと変身した。

「最初に言っておく。俺はかーなーり強くなった!」

ゼロノスは走り出した。

NEW電王は草原に飛ばされていた。やはり見覚えがあった。

「こいつてあいつと…」

すると無数のコマが襲いかかってきた。それを避け、激突しそうなものはマーチエテデイで弾いた。

「やっぱりお前か」

「よく避けれたな」

そこにはかつて戦った死郎がいた。

「もう1度敗北を味わえ。変身」

鞭を使いパスをベルトにスキャンした。

『HIJACK FORM』

赤いマフラーに左手には鉤爪のようなガントレット、黒い仮面を装着した幽汽に変身した。

「あん時は負けたが、今は違っつてとこ見せてやるよ！」

「うん。3人とも始めたね。じゃあ僕と戦うので本当の姿を見せちゃうぞ！」

するとライが砂に包まれていく。そして砂がはれると灰色一色の腕は6本、顔が3つあるまさに阿修羅のような姿のイマジンがいた。

「はッ！確かに人間らしいな」

ディフェルはライドブッカーヘヴンを発砲するが、剣で弾かれ真正面の顔から放たれた火炎放射をまともに食らってしまふ。

ヒューマンイマジンは火炎放射を電王たちにもヒットさせ、全員を吹き飛ばした。

「良太郎さん！あれ！」

士の呼びかけに良太郎もうなずく。

「うん。みんなてんこもりいくよー!」

「オッシャー!」

「了解」

「泣けるで!」

「イエーイ! てんこもり!」

「苦しゅうない。ちこつよれ」

それぞれがうなずくと電王はケータロスを外しボタンを押し始めた。

『M O M O U R A K I N R Y U 』

そしてケータロスの横にあるフォームスイッチを押し、ベルトに装着した。

『C L I M A X F O R M 』

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、さらにジークが電王に憑依するとそれぞれのフォームのデンカメンが両肩、胴体、背中に装着されソードフォームの仮面の皮がむける。

全て装着され衝撃波が起こり電王の最強形態、超クライマックスフォームになる。

「やっぱかっけえ! んじゃこつちも」

ディフェルはケータッチを取り出し押し始めた。

『KUUGA AGITO RYUKI FAIZ BLADE  
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA DOUBLE  
E OOO FINALKAMENRIDE DEFER』

ケータッチを装着し、ネオコンプリートフォームへと強化する。

「さて、こつちもラストゲームといきますか。カエルム！」

「いくぜいくぜいくぜえ！」

それぞれの場所でラストゲームが開始された。



## 主催子供のラストゲーム（後書き）

（雑談コーナー）

竜王「とりあえずこれで電王のライダー全員登場！」

士「ただのクライマックスフォームでてないぞ」

聖麻「映画パクリだし」

竜王「うっちゃいうっちゃいうっちゃい！あれが1番電王らしいやつなんだ！本当の全員集合変身がやりたかったんだ！」

美莉「すごく必死だね…」

士「そのクレームでる覚悟で書いたってさ。絶対譲れないって」

聖麻「逆に尊敬するな…」

竜王「ちなみに予定上次回でディフェルのメインカードが登場します。自分が1番やりたかったことです。それではまた次回！」

離れまくり、戻りまくり、変わりまくなって伝説級（前書き）

ついにメインカード登場！自分的にはディフェルらしいと思うんですが…

あとダークライダーさんが小物っぽく見えますが気にしないでください

それでは、どうぞー！

離れまくり、戻りまくり、変わりまくって伝説級

デイカエルはデイカエルドライバーマシンガンモードで、ネガ電王はデンガツシャーガンモードで激しい銃撃戦を繰り広げていた。

どちらも一歩も譲らない勝負だった。だが、ネガ電王が動いた。

ガンモードからロッドモードに変え、マシンガンモードの弾丸を全て弾きながらデイカエルに近づいていき突きを放つ。

避けきれずモロに受けて吹き飛ばされてしまう。起き上がるとアロモードに変形させ近距離戦を仕掛ける。ネガ電王は次にソードモードに変形させる。

互いの剣をぶつけ合い火花が散る。しかし、ネガ電王の方が上手であった。つばぜり合いになるとネガ電王は蹴りを放ち吹き飛ばす。

デイカエルは起き上がろうとするがそこをガンモードで追撃される。何発か浴びてしまっても転がることで避ける。

ネガ電王はパスを取り出しスキャンした。

『FULL CHARGE』

銃口に雷が集まっていく。デイカエルも対抗してカードを装填する。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DEKAER』

カードの輪が並びドライバーを構えディメンションアローシユート

を放つ。ネガ電王はそれを狙っていたかのように身をひねってかわすと、その体勢のままネガワイルドショットを放つ。同じく必殺技を放った状態であるため避けられるはずがない。

まともにくらってしまい大きく吹き飛ばされる。

「射撃戦をするやつはバカで単純なやつしかいねえのか？」

フラフラの状態で起き上がると矢を放ち爆風を起こす。はれるとデイカエルは消えていた。

「かくれんぼか。あいにく楽しむつもりはねえな」

そういうとあたりにガンモードを乱射した。次々と回りのものが壊されていく。そして一瞬だが弓の先端が見えた。

そこにソードモードを構え歩いていくとしゃがんだデイカエルがいた。デイカエルは見つかると同時に矢を放つ。ネガ電王はそれをギリギリのところかわす。かわされたデイカエルはそのまま1歩下がった。

「万策つきたか。終わりだ」

「いいや。追いつめたよ」

呆れたネガ電王はソードモードを振りかぶる。その時ネガ電王の背中に複数の銃弾がヒットした。見ると遠く離れたビルの屋上には緑のクウガペガサスフォームがいた。

実はさっき放った矢は「フォームライド クウガ ペガサス」の力

ードを使って放ったものである。つまり最初から避けられるつもりで放っていた。

怯んだ隙を逃さずディカエルは走り出しアローモードで切り裂いていく。次々と振りおろされネガ電王は避けることはできなかった。さらに矢を放ち大きく吹き飛ばす。

「これで決めるよ！」

カードを装填した。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』

ディカエルの前にはカードの輪が現れ、ペガサスクウガはめいっぱいペガサスポウガンを引く。

そしてディメンションアローシユートとブラストペガサスを同時に放つ。今度は避けることができず2つとも炸裂した。

「悪は永遠に…不滅…だ」

その言葉を残し爆発した。ディカエルはそれを聞いて溜息をついた。

「そんなこと言ってるから悪い人になっちゃうんだよ」

ゼロノスは苦戦していた。ガオウの力はとんでもなかった。前の戦いでは電王4フォームとゼロノスベガフォームと同時に戦い圧倒していた。

デネビツクバスターを放ち続けるが全てガオウガツシャーで受け止められ斬撃をくらってしまふ。しかも一撃が重くたった1発で大ダメージを負ってしまう。

「やはりこんなものか」

「ふざけんな！こんなもんなわけないだろ！」

ゼロノスはデネビツクバスターをデネブに戻しゼロガツシャーサベルモードを構える。

「デネブ援護しろ！」

「了解だ！」

デネブが銃弾を放つと同時にゼロノスは走り出した。デネブの銃弾をものともせずガオウは突っ込んでくる。

互いに剣で戦うもガオウのパワーにつばぜり合いにすらならない。そのせいで押されてしまいついにゼロノスは吹き飛ばされてしまっ

た。ガオウが近寄りガオウガツシャーを振り下ろした。

すると、デネブがガオウに突っ込みガオウガツシャーを受け止めた。

「デネブ!?」

「侑人、いまだ!」

戸惑いながらもフルチャージスイッチを押した。

『FULL CHARGE』

カードをゼロガツシャーにセットするとガオウに赤いスプレンドェッドエンドをガオウに放つ。まともにあびたガオウは吹き飛ばされる。

「デネブ!大丈夫か!?!」

デネブは膝をついていた。あのガオウの一撃をもろに受けたのだから。

「大丈夫だ。奴はまだ生きてる」

「ああ、そうだな」

デネブは再びデネビックバスターとなる。ゼロノスはゼロガツシャーからカードを抜きデネビックバスターにセットし構える。

ガオウも起き上るとパスをスキャンした。

『FULL CHARGE』

ゼロノスがバスターノヴァを、ガオウがタイラントクラッシュを同時に放ちレーザーと刀身がぶつかり合う。タイラントクラッシュがやや有利だったが

「デネブが作ったチャンスだ。無駄にしてたまるか！」

この言葉に反応したかのようにレーザーが勢いを増し、刀身ごとガオウを飲み込んだ。

「お前らはどいつもこいつも…」

ガオウは砂になって消えてしまった。それを見届けるとゼロノスは倒れた。

「侑人！大丈夫！？」

「ハッ！大丈夫にきまってんだるバカ！」

ゼロノスはデネブの頭をひっぱたいた。



NEW電王も同じく苦戦していた。幽汽の鞭、コマ、独楽の多彩な攻撃に翻弄され、近づくことすらできなかった。

(このままじゃやられる！何かいい手は…)

そして何かを思いつくとマーチエテディを上にはり投げデンガッシャーを組み立てソードモードにする。

マーチエテディをキャッチし、二刀流となった。

『幸太郎、二刀流なんてできるのか？』

「少なくともウラタロスやキンタロスの武器使うよりはいける」

「二刀流になったところでどうにもならん！」

幽汽は独楽を取り出し鞭で弾く。すると無数に分裂しNEW電王に襲いかかる。

それをマーチエテディとデンガッシャーを使い弾き、あたりそうなものはかわし全て避けきった。

「意外といけるかも！」

そのまま幽汽にマーチエテディを振り下ろすがサヴェジガッシャーに止められてしまう。だがソードモードによる横なぎの一撃が炸裂した。そのまま斬撃を放っていき吹き飛ばす。

「くっ！おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

突如幽汽が叫びだすと独楽とコマを一齐に放ってきた。マーチエディとソードモードで受けるが弾ききれずくらってしまふ。

さらに走り出すとサヴェジガツシャーをがむしゃらに振りまわしてきた。全く動きが読めず斬撃をくらってしまふ。

（ちくしょお、まずいかも…でも、冷静じゃなくなった今がチャンスだ！）

吹き飛ばされるとパスを取り出しスキャンした。

『FULL CHARGE』

2本の剣にエネルギーが集まり、幽汽に向かって走り出す。

幽汽は独楽を放ちまともにくらう。だが、体から火花が散ることも関わらず突っ込んでいった。独楽から抜けるとマーチエディによる斬撃を放つ。幽汽もサヴェジガツシャーによる斬撃を放つ。

互いに斬撃を放ち合い火花が散る。だがNEW電王がそれを押し切り2本の剣の斬撃を浴びせ続け、最後に2本で突きを放ち幽汽の腹を貫いた。

「ソ、ソラ…」

幽汽も砂となって消えた。NEW電王はその場に座り込んだ。

「死ぬかと思った…」

ディフェルと電王はヒューマンイマジンに立ち向かった。

最初に電王がデンガツシャーを振るう。だが、槍で受け止められハンマーのようなもので殴り飛ばされる。

ディフェルは逆側から攻めると右側にある顔から雷が放たれ吹き飛ばされる。どこから攻撃しても隙がなかった。

「クソツ！おいハナ垂れ2世！腕6本はほんそあっち！」

ハナ垂れ2世と呼んだ瞬間に火炎放射を放たれ電王は後ろに下がった。

「人数だつたらそつちの方が反則だもん」

正論である。ディフェルはカードを装填した。

『ATTACKRIDE BLUST』



予想外の攻撃を前に2人はなすすべがなく、全てくらってしまった。

「どうしたのお兄ちゃん達。もつと楽しませてよ。ゲームオーバーになったらそうだな…まあ現代が吹っ飛ぶね」

2人がかりでも歯が立たなかった。だが、電王は立ち上がりヒューマンイマジンに突っ込んだ。

ヒューマンイマジンはうんざりすると右手の武器を放り投げ電王に触れた。

その瞬間何故かプラットフォームに戻ってしまい蹴り飛ばされてしまう。

「良太郎さん！」

ディフェルが駆け寄ると電王は途方に暮れていた。

「みんな…いなくなってる」

「なっ！何しやがった！」

ヒューマンイマジンはとんでもないことを話した。

「ん？簡単だよ。イマジンの時間を戻して消滅させた。僕ね、この姿のとき人間以外だったら時間を巻き戻せるんだ」

「じゃあみんなは…」

良太郎の問いにヒューマンイマジンは明るく答えた。

「うん！死んだよ！」

「死んでねえよ」

デIFエルは立ち上がり口を開いた。

「知ってるか？誰かが死ぬときはそいつが忘れ去られたときだ。現にあの5人もイマジンの消滅のときに良太郎さんが覚えていたからこそ生きていられたんだ。今回だって同じだ。たとえ時間巻き戻して消滅されたって忘れない限り永遠にそいつは生き続け、そいつとの絆はいつまでも残り続けるんだ！」

「そんなの屁理屈だよ。現に消滅したし」

すると電王が口を開いた。

「いや。それでも戻ってくるよ。だって僕はみんなのことは絶対忘れないから」

するとライドブッカーから2枚のカードが飛んできた。

デIFエルはカードをキャッチした。見ると1枚目は見たことのない電王の書かれた黄色のふちのカード、2枚目は白い電王のマークの書かれたあの青いふちのカードだった。

「やっと絵がついたか。じゃあ使ってみますか！」

そういうと1枚目のカードをしまい、青いカードを装填した。







するための力やアイテムを与えるものである。

「な、なんで生き返ったの!?!」

ヒューマンイマジンはたじろいだ。

「決まってるよ。だって…」

「『『『『『僕（俺）（私）達だから!!!』』』』』」

手をかざすとウイングフォームのデンカメンが追加された超デンカメンソードが降ってきてキャッチし、普通のパスをはめる。

それと同時にディフェルの胸のライダーのカードが全てレジェンドフォームになる。

「お！なんか力わいてきた！」

「おっしやあ！みんな、いくぜいくぜいくぜえ！」

電王とディフェルは走り出した。それに対しヒューマンイマジンは6つの斬撃波を放つ。ディフェルは1枚のカードを装填した。

『 ATTACKRIDE MOMOSWORD 』

剣が赤く発光し、荒々しい動きで斬撃波を全て切り裂いた。

そこへ電王が突っ切り超デンカメンソードでヒューマンイマジンに斬撃を放つ。反応できない速さできたため防御できずにくらってしまふ。さらにあの重い剣を振っているとは思えない速さで斬撃を放

っ。

そこへディフェルが追加され2人の攻撃に対応しきれなかった。

「どうせ僕が触ればそれまでだ！」

武器を捨て電王に触れる。だが、イマジンは消えることはなかった。

「なっ！」

驚いているところに2人のパンチがとび、吹き飛ばされてしまう。

起き上がったヒューマンイマジンは頭を回転させ火炎放射と雷、吹雪を一斉に放つ。

ディフェルはカードを装填し、電王はデンカメンを回し、ウイングフォームの仮面で止める。

『ATTACKRIDE RYUGUN』

『ジークブーメラン』

電王の後ろに白いデンライナーの影が現れ、超デンカメンソードをブーメランのように投げつける。

ディフェルは紫に発光したライドブッカーヘヴンを銃のように構え、紫の光弾を放った。

紫の光弾が全ての攻撃を止め、超デンカメンソードがその攻撃を全て破壊した。



離れまくり、戻りまくり、変わりまくって伝説級（後書き）

竜王「やっとメインカードだせたああああああああああ  
！……！」

士「まさかオリジナル形態にさせるとはな……！」

美莉「レジェンドフォームだっけ。かつこいいと思うよ！」

聖麻「でもこれで展開よまれることになるな」

竜王「そうなんだよ。これで読者がきまるよね。嗚呼、死亡フラグ  
……」

士「自身もて。なんとかなるだろ」

美莉「それではまた次回！」

PS 士の説教はあのアニメのキャラが言ったものが元です

## クライマックスな電王伝説（前書き）

電王編完結です！でもちょっと微妙かもしれません…  
明日ライやレジェンドフォームについて書きますので見てください  
！

## クライマックスな電王伝説

ヒューマンイマジンを倒し、ディフェルと電王はハイタッチをした。

そしてディカエル、ゼロノス、NEW電王が戻ってきた。

「はあゝ暴走しないかな」

「不吉なこと言わないでよ」

妙なことを期待しているディフェルに電王がつっこむ。だが、不吉な展開は起こってしまふ。

「暴走なんか…しないよ…」

なんとヒューマンイマジンが立っていた。だが体中から砂があふれ出ている。もうすぐ消滅してしまっただろう。

「どうする？そんな体でゲームするか？」

ディフェルが尋ねるとヒューマンイマジンは笑った。

「確かにもうすぐ消えちゃうから無理だね。だから変わりを呼ぶね…最後まで…楽しんで…」

ヒューマンイマジンは手をたたくと消滅してしまった。同時に上空から大量のギガンデスが現れた。

『ふざけたことしてんじゃねえー！』

モモタロスもいやになったのかキレていたが後ろ4車両が切り離されてやってきたデンライナーに乗り込んだ。同時にゼロノスがゼロライナーに、NEW電王はNEWデンライナーに乗り込んだ。

マシンデンバードに乗るとリュウタロスが提案をしてきた。

『ねえねえ良太郎。さっきの赤いパスさしてやってみない？』

「う、うん。大丈夫かなあ？」

心配しながら赤いパスをマシンデンバードに差し込んだ。するとけたたましい汽笛に似た音が鳴り響いた。

するとイスルギ、レッコウ、イカズチはもちろんキングライナー、ゼロライナー、NEWデンライナーが勝手に動き出し連結し始めた。前からキングライナー、デンライナー、イスルギ、レッコウ、イカズチ頭、ゼロライナー、NEWデンライナー、イカズチ尾で連結し武装展開した。

「おい、野上！お前何しやがった！」

「じいちゃん！制御利かなくなっただけど！？」

赤いライダーパスで操縦すると制御すら利なくなるくらいに時の列車を支配下におけるらしい。恐ろしい。

ブーイングされながらもギガンデスヘヴンに向かってレーザーを放つ。ギガンデスヘヴンは火球を放つがデンライナーはそれを避ける。

さらに爆弾を投擲しギガンデスを落としていく。

全ての武装を巧みに使いギガンデスを減らしていく。だがあまりにも多く数発攻撃を受けてしまう。

負けずにキングライナーの主砲を放つ。イカズチからレーザーを放つ。NEWデンライナーからもデンライナーと同じ装備を発射する。ゼロライナーからエネルギーの刃を発射する。なんとか減っていったが突如ギガンデスが一点に集まりはじめ、巨人へと変化してしまった。

「うそ…」

「マジかよ!」

「なんでそうなるんだよ!」

巨人は体中から火球を発射する。デンライナーはそれを避けきれずにくらってしまう。内部では激しい火花が起こっていた。

さらに巨人はデンライナーを掴み握りつぶそうとしていた。

「くっ!このままじゃ…」



一方その戦いを見ていたディフェルとディカエルは悩んでいた。

「ねえ、危ないよ！あのままじゃ電車が！」

「わかってる！ええと助けるには…あ、あれだ！美莉、クウガと龍騎呼んでファイナルフォームライド！」

「うん！」

ディカエルはカードを2枚装填し、矢を放つ。

『KAMENRIDE KUUGA RYUKI』

さらに2枚装填した。

『FINALFORMRIDE KU KU KUUGA  
RYU RYU RYU RYUKI』

2人に矢を放つと折れ曲がりクウガゴウラムとリュウキドラグレッツターへ変形した。

「で、俺はこうする」

『FINALKAMENRIDE KIVA』

カードを装填しキバエンペラーフォームに変身する。さらに1枚装填した。

『FORMRIDE HISYOUTAI』

黄金の龍のような蝙蝠飛翔態へと変化した。(以下飛翔態)

「乗れ！5分間で決めるから急ぐぞ！」

デйкаエルは飛翔態に乗ると高速で上空へ舞い上がった。同時にクウガゴウラムとリュウキドラグレッターも上昇した。

クウガゴウラムが巨人の腕に激突すると巨人はデンライナーを放した。リュウキドラグレッターと飛翔態が火球を放ちデйкаエルが矢を放つ。

デンライナーも続き砲撃する。形成が逆転し始め巨人を追い詰めていく。そして飛翔態がデンライナーに乗りデйкаエルはカードを2枚装填した。

『KAMENRIDE KIVA』

『FINALFORMRIDE KIKIKIKIVA』

キバが召喚されると折れていきキバアローへ変形した。

「良太郎さん、一気に決めますよ！」

「うん！」

デンライナーが赤く輝きだしレジェンドモードとなる。デйкаエルはカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE K I K I K I K I V A』

キバアローを引くと矢がウェイクアップされ蝙蝠の羽が現れる。

『キバっていくぜー！』

「超伝説クライマックス砲！！！！」

デンライナーが全武装で集中砲火、飛翔態がブラッディストライクを、クウガゴウラムがリュウキドラグヘッダーの炎を纏って突撃、ディカエルがキバの矢を放つ。

一斉攻撃を全てくらい巨人は大爆発した。

戦いを終え士達はデンライナーにいた。

「まさかデンライナーで送られるとは思わなかった」

士はリムジンによる送迎よりも遥かに豪華なことにさすがに驚いた。

聖麻はというと飯をくつついでにとオーナーと勝負していた。



「美莉ちゃんともお別れかあ」

「なんや。あきらめへんのか」

「カメちゃんカメちゃん。それはさすがに無理だよ。でも恋する乙女って始めてみた」

リュウタロスの言葉に一瞬沈黙する。そして良太郎が尋ねた。

「リュウタロス。なにかウラタロスに教えてもらったの？」

「うん！恋する乙女は無敵ってことと、好きな人のことで怒らせると怖いって。あと下手するとヤンデ…」

「おい、カメ公！ガキに変なこと吹き込んでんじゃねえよ！」

モモタロスの怒声からギャーギャーと騒ぎ始めた。士はそこから離れて眺めていた。

「しよっぱなからいろいろあつたな」

士が今回のことを懐かしんだ。

「最初なんてどれもそうだよ」

「ていうかライダーになつてないの俺だけじゃねえか」

2人もそれぞれ反応した。そしてデンライナーが美莉の家の前に到着した。

「じゃあね3人も！また来てね！」

「士！また語り合おうぜ！」

「美莉ちゃん、がんばってね」

「お前らは強かった！泣けるで！」

「今度は一緒にダンスしようよ！」

「いつでも来るがよい、我が下部よ」

「じゃあな！また来ます！」

「今日は楽しかったです！」

「下部って呼ぶな！」

それぞれあいさつするとデンライナーは線路を形成し夜空へ消えていった。

士は今回でたカードを見ていた。だが、そこにアウェイクライドはなかった。

「1回きりの使い捨てか…それとシン・ファイナルカメンライド。レジェンドフォームになれるのは嬉しいけどすごく疲れんだろうなあ」

「でもあの強い電王になれるじゃねえか。有利になるぜ」

2人で今回のことを話しあっていたが士はあることに気付いた。

「なあ、美莉はどこ行った？」

「ん？なんか着替えるっていったな。女だし普通だろ」

すると部屋のドアがあいた。もちろん美莉なのだが

「帰る前にナオミさんからプレゼントもらっちゃってせっかくだから着てみたんだけどどう？」

服装がナオミの着ているあの奇抜な服だった。この服はかなり体に密着するため一部分かなり目立っていた。

これを見た士は鼻血を吹いて倒れ、聖麻は後ろを向いた。

「士君！？大丈夫なの？しっかりして！」

美莉が必死に揺すが起きるわけがない。するとなんでかこのタイミングで勝手にテレビがついた。

そこにはタイヤの盾をもったロボットと後ろに の文字が描かれていた。

「次はファイズの世界か…」

とある世界

不気味さの漂うトンネルの中で灰色の海老の怪人が何かを呟いた。

「もうすぐ復活の時…」

呟いたあと女の笑い声が響いていた…



## クライマックスな電王伝説（後書き）

竜王「デンライナーの戦闘描写はむずいよ……」

士「人じゃないしな」

美莉「でも楽しい世界だったね」

聖麻「イマジンみんなおもしろい奴だったしな」

竜王「さあ、次はファイズの世界です。キャラの口調、呼び方、性格などを教えてください。お願いします」

3人「それではまた次回！」

ディフェル能力とディカエル紹介&設定〈電王編〉(前書き)

電王のオリジナル設定です。

## ディフェル能力とディカエル紹介&設定(電王編)

アウエイクライド

ディフェルの持つ青いふちのカード。絵柄は白い各ライダーのマーク。

発動すると各ライダーに真・最強フォームに変身させる力やアイテムを与える。

使用後は消滅してしまう。

シン・ファイナルカメンライド

真・最強フォームに変身するカード。

強すぎるため2分30秒しか耐えられず、ファイナルカメンライド以上の負担がかかる。

ふちの色はファイナルアタックライドと同じ黄色。

仮面ライダーディカエル

身長190cm 体重92kg

パンチ力右6t、左9t キック力11t ジャンプ力ひと飛び4

5m 走力100mを4.7秒

ディカエルドライバーで美莉が変身した姿。異名は特にないが立場上ディフェルと同等らしい。

目は赤く、ディフェルと同じように側面に翼のような物がついてい

る。左腕が弓を撃つために右腕よりも重厚になっていて、胴体が弓道の防具をイメージしたもので、全体的に女性らしさがある。ライドプレートはやや丸みを帯びている。

視力はデифエルを上回っている。それを強化する「アタックライド アイ」というカードがある。

基本は遠距離戦のサポート型だが弓部の刃による近距離戦を行うときもある。

デイエンドのようにライダーを召喚でき、別フォームのライダーも召喚可能。同時召喚は3人までである。「ファイナルカメンライド」は1人で3人分の扱いで、別のライダーを召喚してる状態でだと最初にいたライダーは全て消えてしまう。制限時間は2分。

戦闘時にライダーを知らない美莉ですら各ライダーの性能を把握できるようになっていて、美莉曰く「勝手に流れてきた」とのこと。

必殺技は無数のカードでできた輪が連続で並び、それに赤い矢を放つ「デイメンションアローシユート」。威力は35t。

デイカエルドライバー

デイカエルの変身ツール。基本カラーは赤で白のラインが入っている。形的にはカリスアローに似ている。

弓部には刃があり、両刃剣として扱うことが可能。

弓の形をして高威力の矢を放つアローモードと、弓部を折りたたみコンパクトにした威力が少ない分連射力の高いマシンガンモードがある。

電王 レジエンドフォーム

身長198cm 体重132kg

パンチ力16t キック力18t ジャンプ力ひととび約60m

走力100mを3.2秒

ディフェルの「アウエイクライド」によって現れたレジエンドパスをスキャンして誕生した電王の真・最強フォーム。

姿はスーツがライナーフォームと同じ赤、鎧はクライマックスフォームのものが白くなりデンカメンが装着されている。仮面はライナーの目がオレンジになり、ソードフォームの目が皮がむけた時のように装着され青黄紫白の装飾が付いている。アンテナは両端が変身の時に鋭く伸び、伸びた部分から角のように折れている。

永遠に残る伝説の如く時空の歪みなど時間に関する影響を受けない。

武器はウイングフォームのデンカメンが追加された超デンカメンソード。

この形態でデンライナーに乗ると赤く発光した「レジエンドモード」となり、全性能が上昇する。

必殺技は「CHARGE AND OVER」して上空に舞い上がり、全デンライナーの影とともにキックを放つ「レジエンドボイスターズキック」と超デンカメンソードのデンカメンを1周させて全デンライナーの影とともに斬撃を放つ「超電車斬り」こと「オーバーロットルブレイク」（2つとも威力60t）

レジエンドパス

デیفエルの「アウエイクライド」によって現れたレジェンドフォームへの変身アイテム。

ライダーパスが赤くなったもの。

デンライナーの操縦時にこれをマシンデンバードにセットすると汽笛に似た音が鳴り、全ての時の列車を呼び寄せ支配下における。このときゼロライナーやNEWデンライナーは操縦できなくなり電王の意のままに動く。

超デンカメンソード

デンカメンソードにウイングフォームのデンカメンが追加されたもの。

今まで通りの4つの技はもちろん使える。ウイングフォームの仮面でとめると『ジークブーメラン』の音声になる。

その際の技は白いデンライナーの影とともに超デンカメンソードをブーメランのように投げる「デンカメンスマッシュ」

ライ

電王の世界代表のカエルム。

この時の姿は7歳くらいの少年で服装も年相応の子供らしいもの。

性格は常に明るくモモタロスの怒声や悪口（ハナ垂れ2世）で怖がったり泣くなど子供らしい。だが、残酷な言葉も明るく言ったり、冷酷な考えを持つなど腹黒い一面もある。

ゲームが好きで敵と戦う際もゲームのようなルール付きで戦うが卑怯な真似はしない。このため能力が強いが序列は13番目。

能力は自分を含めた好きなものを好きなだけ好きな時間の好きな場所に配置すること。何もせずに発動できるが基本は手を叩いて発動させる。

### ヒューマンイマジン

身長201cm 体重150kg

ライの本来の姿で性格はそのまま。

姿は灰色一色の子供っぽくなった腕が6本、顔が3つの阿修羅のようなもの。

武器は剣、槍、ハンマーのような鈍器を2つずつ。

正面の顔から火炎放射、右の顔から吹雪、左の顔から雷を放つ。

首は360度に高速回転させることができる。

ライの能力に加えて手で触れた人間以外のものの時間を巻き戻すことができ、ほとんどが時間を無くされ消滅させられる。

ディフェル能力とディカエル紹介&設定〈電王編〉(後書き)

竜王「これが電王の設定ですが」

士「改めてみるとすごいな」

美莉「ほんとだね」

聖麻「ライがチートだな」

モモタロス「うざかったけどな」

4人「!!??」

モモ「よ!」

士「モモタロス!会いたかったぜ!」

士、モモ「あっはっはっはっはっはっは!!!」

美莉「何でいるの?」

竜王「呼んだ。でも突然来るからビビった」

モモ「レジェンドは最強だな!」

士「ああ!しかも超カッケエ!」

モモ「よし、士!やるぜ!」



士、モモ「俺、参上！」

聖麻「この2人っていったい…」

竜王「ただのバカさ。次からファイズ編です！それではまた次回！」

灰と新世代 前編（前書き）

今回からファイズ編というのに少し短いしグダグダです。  
ここにきて再び落ちた…クソ！

## 灰と新世代 前編

鼻血を吹いて倒れた土が起きるまで美莉と聖麻は待った。

数時間後土は起きてファイズの世界と知り半狂乱したのち言った言葉は

「よし！カレーうどん食って服汚そう！」

直後に美莉の鉄拳がとんだ。

「洗うこっちの身にもなってよ！」

「でもこの世界の主人公がいそうなところってクリーニング屋だけだし」

「いてて…とにかくそういうこと。そこに行く口実作らねえと」

美莉は嫌がったが仕方なく服に着にカレー数滴を垂らした。はたから見ればバカなことだが仕方ない。

その服を持って3人は「西洋洗濯舗 菊池」に向かった。

「ねえ、たつくん。いつになったら洗剤の量覚えるの？」

「真っ白にすんだから多いほうがいいだろ」

2つ目のセリフを言ったのはこの世界の主人公であり、ファイズの  
変身者及びウルフォルフェノクの乾 巧。

最初のセリフを言ったのがここ「西洋洗濯舗 菊池」が実家で夢が  
「世界中の洗濯物を真っ白にする」ことの菊池 啓太郎。

「巧は不器用だし仕方ないよ」

「おい！どういうことだよ真理！」

巧を少しバカにしたのが美容師が夢である園田 真理。

3人でもめているとドアが開いた。

「い、いらっしやませ！」

啓太郎が慌ててあいさつする。客は当然士たちである。

「すみません。定番のカレー食ったら飛んで汚れましたという状態  
になってしまったんで真っ白にしてください」

すごくバカなセリフである。ちなみにこの服は美莉のものである。

それを土が持ってきたのだから不自然極まりない。

「いや、普通に洗濯すりゃいいだろ」

「そんなこと言ったらお店潰れちゃうよ！すみません。騒いでしま  
って」

「いつものことですから大丈夫ですよ」

「ん？いつもってどうして知ってるの？」

真理が土に尋ねてくる。

「いえ。なんでもないです」

ごまかして代金を払うと店を出た。

「土君！なんで私の服なの！あれ気にいったのに！」

「お前の服は犠牲になったのだ。ウルフォルフェノクになってくだ  
さいって言ったらなってくれたかな？」

「夢と希望に溢れた目で100%怪しまれること言うな」

3人はとりあえず家に帰るということで来た道を戻っていた。

すると道を塞ぐように1体の怪人と数人の男がいた。

「初めまして滅殺者君。あなたにお礼を言いに来たの」

この怪人のことを土は知っていた。なぜなら

「ほう。不死身のロボスターオルフェノク様が何の用だよ？」

この怪人はロボスターオルフェノクである。

「あなたのおかげでもうじき王が復活するわ。だからお礼にプレゼント」

そういうと立ち去ってしまった。土が追いかけてようとすると数人の男は灰色一色の怪人オルフェノクになった。

「やるってんのか。上等だ。美莉！」

「うん。いくよー！」

2人はそれぞれドライバーを腰に当て、カードを装填した。

『KAMENRIDE』

「変身！」

『KAMENRIDE DEFER』 『DEKAELE』

ディフェルとディカエルに変身するとディカエルがマシンガンモードでオルフェノクを撃ち、ディフェルが殴り飛ばした。

ディカエルはアローモードに変え斬撃を放っていく。ディフェルは変わらず打撃による攻撃で圧倒していた。

「あのカード使いたいけどこんな雑魚相手にはごめんだな！」

ディフェルがオルフェノクを蹴り飛ばすと2人はカードを装填した。

『ATTACKRIDE BLUST』

ディフェルが無数の光弾を、ディカエルが5つに分裂した矢を放つとオルフェノクは爆発した。

「こんな弱いんじゃあれ試せないだろうが」

「それにしても王の復活って言ったよな。まさかアークオルフェノクが」

士と美莉は変身をとぎ、聖麻と話し始めた。

「そのアークオルフェノクって？」

「ここのボスだな。尋常じゃなく強い」

話しながら再び歩き出した。

啓太郎は店の配達のため車に乗っていた。もちろん巧と真理も一緒である。

「ああ〜なんで壊れちまったのかなあ〜あのバイク」

巧の言うあのバイクというのはオートバジンのことである。最終決戦でアークオルフェノクによって破壊されてしまったのだ。

「仕方ないじゃん。あれ来なかったら勝てなかったよ」

「あと木場さんも…あ」

木馬という名前が出た瞬間巧の表情が暗くなった。

「ごめん巧…」

「いや。別にいい」

車内が暗い雰囲気になったその時目の前にロブスターオルフェノクが現れ、急ブレーキをかけた。



「アイツ！なんでこんなところに！」

3人は車を降りた。

「久しぶりね乾君。懐かしいわ」

「んなことよりなんでここにいる！？」

冴子は小さく微笑むと灰を取り出した。

「おもしろいものを見せてあげるわ」

そういうと灰を巻き散らした。すると近くにいた男女2人が苦しみだした。

…そしてオルフェノクへと変貌した。

「な、どういうことだよ！」

巧が振り返るとロブスターオルフェノクは既にいなかった。

「どうして…」

「たっくん！オルフェノクが！」

「んなことわかってる！クソ！ベルトはねえし…」

その言葉に何かを思い出したのか啓太郎は車の中をあざるとアタッシューケースを持ってきた。

「おい、何でこれ…」

「念のために持ってた」

「都合いいな。久々にやってやる！」

巧はアタッシュケースを開け、ベルトに懐中電灯とカメラを取り付けて装着し、携帯に「555」と入力し「ENTER」のボタンを押した。

『STANDING BY』

携帯ファイズフォンを閉じ上に掲げる。

「変身！」

ファイズフォンをベルトに装着した。

『COMPLETE』

音声が鳴ると体中に赤いラインがめぐり、鎧を取り付け をイメージした仮面が装着され仮面ライダーファイズとなる。

右手首をスナップするとオルフェノクに向かって走り出しパンチをくらわせる。

さらにキックをくらわせていき、ファイズフォンを銃のように曲げ「103」と入力した。

『SINGLE MODE』

ファイズフォンのトリガーを引くとアンテナである部分からレーザーが放たれ、それを2体のオルフェノクにくらわせていく。だが、途中で止めてしまった。

(こいつらは元々ただの人間だ。倒していいのか…)

悩んでいるとオルフェノクの1体が剣を振り下ろしてきた。なんとか受け止めキックを放つ。そこをもう1体に攻撃され、次第に追い詰められていった。

剣が振り下ろそうになるとそのオルフェノクがバイクではねられた。

「なんでオルフェノクがここにも…4人残して全滅じゃねえのか？  
って本物のファイズ!? 変身見たかったああああああああああ  
あああああ!!!」

乗っていたのは土であった。あの後家についてすぐにマシンディフェンダーで出ていたのだ。

ドライバーを腰に当てカードを取り出した。

「変身!」

『KAMENRIDE DEFER』

ディフェルに変身すると3人は驚いていた。

「お前何者だよ?」

「俺は通りすがりの仮面ライダー。宜しくな乾さん」

デیفエルは走り出そうとするが真理の声で止まった。

「ダメ！その人たちはオルフェノクにされた人なの！」

「された？どういうことですか!？」

「変な灰浴びたらオルフェノクになっちゃったんだよ！」

「な！あの海老が…ッ！」

拳を握りしめると走り出しキックをくらわせる。だが、上手く戦うことができずに攻撃をくらう。

ファイズも同じように攻撃していても人であったことでためらいがあった。2人はそのまま追い詰められてしまい吹き飛ばされた。

「どうすりゃいいんだよ…ッ！」

「倒しやいいだろ」

どこからが声がして全員がその方向を向く。

そこには紫のフォトンストリームが4本。鎧は灰色で仮面はをイメージした目が赤いライダーがいた。

そのライダーは銃を取り出しベルトのアイフォンのようなものをタッチした。

『EXCEED CHARGE』

4本のフォトンストリームにエネルギーが流れ、その銃に集まる。

銃のトリガーを引くと紫のレーザーが放たれ1体に直撃する。さらに、レーザーは曲がりもう1体にも直撃する。

2体は のマークを浮かべ爆発した。

全員が啞然としていた。その中でそのライダーは変身を解いた。

白い髪につりあがった目をした怖い印象が見受けられるその男は全員に向かって自己紹介をした。

「初めまして。仮面ライダーガイロ（916）こと九条院 蓮夜だ。よろしくな旧世代のできそこないども」

灰と新世代 前編（後書き）

竜王「はい。ファイズ編突入」

士「何か暗いぞ。大丈夫か？」

美莉「肝心の1話目で文が腐っただって」

聖麻「バラつきすぎだろ！電王編の最後地味にいつてたじゃねえか  
！」

竜王「だからおちこんでんだろ。あゝ」

士「それにしても新ライダーでたな」

美莉「元々人のオルフェノクを普通に倒すなんてひどい……」

聖麻「どうせ次わかんだろ。てか文章よくしろ、クソ作者」

竜王「わかったよ……それではまた次回！」

灰と新世代 後編（前書き）

今回は結構場面が変わります。

おかげでごちゃごちゃしてるかも…

ですが今回ガイロの能力がでます！

## 灰と新世代 後編

突然現れたガイロこと九条院蓮夜に全員が啞然としていたが変身を解いた巧が歩み寄り襟首を掴んだ。

「おい！オマエはあのオルフェノクがただの人間だってわかったのか！？」

蓮夜はその手を払いこう告げた。

「所詮はオルフェノクだろ。あいつらもお前も！旧世代のくせにさらにオルフェノクなんてどれだけクズだよ！今はいいがお前が使えなくなつたとき、俺はお前を容赦なく潰す！」

そういうと黒いオートバジンに乗り去ってしまった。巧も機嫌を悪くし、どこかへ歩き出した。

「巧！どこ行くの？」

「ちょっとそこらへん」

適当に言つとそのままどこかへ行ってしまった。

「クソツ！なんであそこまで言うんだよ！乾さんがクズだと？ふざけんじゃねえ！」

土も相当キレていてマシンディフェンダーに乗ると巧とは別の方向へ言ってしまった。



「2人とも…」

残された真理と啓太郎はしばらくすると車に戻り、配達に出た。

士は家には戻らずアークオルフェノクと戦った場所へと向かっていった。だがそこはファイズブラスターフォームの超強化クリムゾンスマッシュで崩壊している。

（最終回で崩壊したがそれでもなんかあるはずだ！早く啓太郎さんの言った変な灰がなんなのか調べて止めねえと！）

マシンディフェンダーを加速させ道路を駆け抜けた。

巧はとある霊園に行き1つの墓の前で止まった。そこには「木場」と書いてあった。

「悪いな、何も持ってこなくて。なあ、木馬。できるよな、人間とオルフェノクの共存って」

墓の方を向きながら話し続ける。

「なんかまた厄介なことになっちまってさ。もう変身することはな  
いって思ってたのにファイズになるはめになったよ。……また守れ  
るよな、みんなの夢」

そういつと自分の手のひらを見るとやや灰化していた。崩壊が進ん  
でいる証拠だ。

「…また来るな」

巧は空と墓を何回か交互に見ると、霊園を出るために、もう1度夢  
を守るために歩き出した。

「土君はどこ行ったの!」

現在正午。昼食時なのだが土が帰ってくるはずもなく美莉はそのこ  
とに腹を立てていた。

「俺に怒鳴るなよ日々野。愛しの旦那さんが帰ってこないからって  
よ」

「だ、旦那さん…／＼／」

聖麻がからかうことで暴走は止まったが今度は動かなくなってしまう。  
った。

(アイツのことだから海老でも探しに行ったかな…となると考えられる場所は…)

「おい、妄想中悪いが土を探しに行くぞ」

「えっ！う、うんってどこにいるかわかるの？」

「大体な」

2人は家を出た。目的地は土と同じである。

とあるマンション。ここには2人の男子と1人の女子が住んでいた。

「三原君、そのお田とって」

「うん、はい」

皿を渡したのがデルタの変身者である三原 修一。

最初のセリフはその三原のパートナー的存在の阿部 里奈。

この2人は普段は養護施設である「創才児童園」で働いているが今日は休みである。

では3人目とは

「ちゅくか飯まだ？」

スネークオルフェノクでありこの家の居候である海堂 直也である。最終決戦後にどこかへ行ってしまったのだが2日前に何故か帰ってきて、いろいろあってここの居候となった。当然何もしない。

「そんだったら少しは手伝ってよ海堂さん」

「居候なのに何やってるの！早く手伝って！」

「へいへい」

毎日こんな感じである。その時三原のデルタフォンが鳴った。出ると相手は真理だった。

「もしもし」

『三原君、悪いんだけどさ巧探してくんない？』

『ねえ、あの子はどっしりよ？』

『あ、あと黄色と白のバイクに乗ったちよつと髪がツンツンした高校生くらいの男子探して』

「乾さんはともかく後に言ったの誰？」

『よくわかんないけど変身したの。こつちも探すからお願い！』

言うだけ言って電話は切れてしまった。

「真理ちゃんどうしたの？」

「よくわかんないけど乾さんとツンツン頭の高校生探してだって」

「うーん、久々に何かあったのかしら？」

「とりあえず行こう」

三原と里奈は外に出た。

「お、おい！飯は!？」

海堂も2人を追いかけて、2人は普通のバイクに、海堂はなんとサイドバツシャーに乗り走り出した。

士は最終決戦の行われた場所へとたどり着いた。もちろんテレビに映っていたものより遥かに荒れていたが

「まさか、当たるとは思わなかった…」

士の目の前には灰色の巨大な心臓のような物があり、その周りには灰が積もっていた。

「なるほど、あれが例の灰な。さっさとあの気味の悪いもん潰して終わりだ！」

ドライバーを構え近づくと、20人のサングラスをかけた黒服の男が立ちふさがった。その腰にはライオトルパーのベルトの紫版が装着されていた。

その男たちは一斉にベルトのバックルを倒した。その瞬間男たちの身がスーツに包まれ、紫色のライオトルパーに変身した（以下ライオトルパーver2）。

「紫は流行色かよ…とにかく力づくで通してもらっぜ！変身！」

『KAMENRIDE DEFER』

ディフェルに変身するとライドブッカーへヴンを構え走り出した。

美莉と聖麻は土の元へ行くための道を歩いていた。

「向井君まだなの？」

「少しくらい待てよ。アイツだから無事だった」

こんな話を何回か繰り返すと1人の女が現れた。青が目立つことなくともこの場に似合わないハデな格好をした女だった。

「はい、こんにちはスマートレディです」

幼児に対するような喋り方で話してきた。

「スマートレディってあの!?!」

「はい、そうです。実は用があつて来ました〜お1人いないよ  
うですが大丈夫です」

「用つて何ですか？」

美莉がやや警戒心を出しながら尋ねた。

「ええ、あのお方（……）に言われてあなた達を殺しに来ました。」

すると青と水色の間あたりの色一色の蝶の羽の生えたオルフェノクへと変貌した（以下バタフライオルフェノク）。

『KAMENRIDE』

「ッ！変身！」

『DEKAE』

すぐさまディカエルに変身して矢を放つ。しかしそれは身をひねりかわされてしまった。

「あのお方（……）が言うにはあなた方がいると邪魔らしいんです。」

羽からりん粉のようなものが撒かれ、それを浴びたディカエルの装甲から火花が散った。

「よくわからないけど土君を狙う前に倒すよ！」

『ATTACKRIDE EYE』

視力強化をするとドライバーを構え走り出し、斬撃を放つ。だが、何故かディカエルの装甲から再び火花が散った。



そのせいで斬撃は止まり逆にバタフライオルフェノクの手刀で吹き飛ばされる。

バタフライオルフェノクはその羽で羽ばたくと、とても蝶とは思えない速度で飛行しデйкаエルを追撃する。さらにりん分が撒かれダメージを負う。

アローモードを構えることができずマシンガンモードに変形させ弾丸を放つが全てかわされてしまう。

全ての攻撃をかわされ次々と攻撃を受け苦戦を強いられてしまい、倒れてしまった。

「は〜い、トドメですよ〜」

デйкаエルは立ち上がるうとするがダメージのあまり力が入らない。

すると2台のバイクが来た。

デйкаエルとバタフライオルフェノクが戦う数分前。

三原、里奈、海堂は巧を探すために互いのバイクを走らせていた。

「ちゅ〜か乾の奴何やってんだよ」

「あの人だっているいるあるんだって」

海堂の愚痴を三原がなだめる。海堂は昼食を抜かれたことで少し不機嫌なようだ。

その時海堂は上空に浮くバタフライオルフェノクを発見した。

「おい！オルフェノクだ！」

「え！？何でこんな時に！」

そのまま3人はバタフライオルフェノクの元へ向かった。

そう、ディカエルの前に来たバイクとは三原と海堂のものだった。

「誰だかわかんねえけど大丈夫か？」

「は、はい。ありがとうございます」

「よせよ、そう褒めんな！」

「お礼言っただけですよ？」

何やら勝手にテンションの上がってる海堂に不審がるディカエル。

「あ、海堂君！お久しぶりで〜す」

バタフライオルフェノクの声に海堂は一瞬驚いたがすぐに険しい顔つきになる。

「その口調、スマートレディか。ようやく化けの皮はがしたな。三原行くぞ！」

「はい！」

海堂と三原はドライバーを装着し、海堂はカイザフォンに「913」と入力し三原はデルタフォンを口元へ持っていく。

『STANDING BY』

「あれ言っならやっぱこれだよな」

「変身！」

『STANDING BY』

構えたカイザフォンをドライバーに装着し、デルタフォンをデルタポインターに装着した。

『COMPLETE』

海堂は2本の黄色いフォトンストリームが体をめぐり、カイザをイメージした仮面が装着されカイザに変身した。三原は3本の銀色のフォトンストリームが体をめぐり、をイメージした仮面が装着されデルタに変身した。

「どつだ。やれるか？」

「はい！大丈夫です」

「とにかくこいつを倒して乾さんを探さない！」

こうしてカイザとデルタが加わり再び戦闘が開始された。

巧はある場所へ歩いていった。そこは土と同じく最終決戦の場所だった。

入ろうとすると入口の前にロボスターオルフェノクが立ちふさがった。

「デメエ、また関係ない人を！」

「人のいないここでやっても無意味でしょ。今回はただのオルフェノクが相手するからここには入らないでちょうだい」

そう言って立ち去ろうとすると黒いオートバジンに乗った蓮夜が現

れた。だが、同時に亀をイメージしたオルフェノク（以下トータスオルフェノク）が現れた。

「逃がさねえ」

恨みがましい声で言うとガイロドライバーを装着し、ガイロフォンを取り出した。

ガイロフォンの画面の「CODE」とある部分をタッチすると画面に019の番号と「ENTER」の文字が表示され、「916」と入力し「ENTER」を押した。

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

ガイロフォンを装着すると4本の紫のフォトンストリームが体をめぐり、をイメージした仮面が装着されガイロへと変身した。

ガイロは走り出しロブスターオルフェノクにパンチをくらわせた。

ロブスターオルフェノクはレイピアを使い得意のフェンシング戦法にでる。ガイロはそのレイピアを腕でいなし距離を取ると、ガイロフォンの「WEAPON」とある部分をタッチする。

すると画面に6つのアイコンが現れその内の1つをタッチした。

『GAIRO EDGE』

音声が鳴ると手元にデータが具現化するようにファイズエッジが紫色になったガイロエッジが現れる。それを手に取ったガイロはレイピアを受け止め次々と斬撃を放つ。

一方の巧はトータスオルフェノクの攻撃を避けながらドライバーを装着しファイズフォンに「555」と入力した。

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

ファイズに変身し手首をスナップするとトータスオルフェノクにキックをくらわせる。さらに追撃にパンチを放つと後ろの甲羅で受け止められた。

「いつてえ！」

逆に手を痛めるとトータスオルフェノクに掴みかかり前を向かせると、顔面に3発パンチをくらわせ吹き飛ばす。

左腰からファイズショットを取り出しミッションメモリーをセットする。

『READY』

するとグリップが現れそこに手をはめ、ファイズフォンを開き「ENTER」のボタンを押した。

『EXCEED CHARGE』

右手にフォトンストリームにエネルギーが流れファイズショットに集まる。

走り出しグランインパクトを放つが再び背中の中甲羅で受け止められる。しかし耐えられるはずもなく甲羅が割れトータスオルフェノクは吹き飛ばされた。

ファイズは右腰からファイズポインターを取り出しファイズショットから外したミッシュンメモリーをセットする。

『READY』

ファイズポインターが伸びると右足にはめ、再び「ENTER」のボタンを押した。

『EXCEED CHARGE』

右足のファイズポインターにエネルギーが集まるとファイズはジャンプした。1回転しトータスオルフェノクにドリル状のポインターを放つ。

「おりゃあああああああああ!!!」

そのポインター目掛けて飛び蹴りを放つ。ポインターが激しく回転しトータスオルフェノクを貫くとすり抜けたかのようにファイズが現れる。

必殺技クリムゾンスマッシュをくらったトータスオルフェノクの文字が浮かび上がると青い炎を放ちながら灰化した。

「おい！そっち頼んだ！」

そういうとフェイスは中へとはいって行った。

「クソが！」

ガイロはその行動に腹を立て、八つ当たりなのかロブスターオルフェノクに荒々しく斬撃をくравせ吹き飛ばした。

「くっ。私は王によって不死身になったのよ。いくらやっても倒すことは不可能」

確かにそうである。人間の体を捨てたことでロブスターオルフェノクは不死身になっている。

「それが俺には倒せるんだよな。自信持ったまま死ね」

「FINISH」のアイコンをタッチすると画面に「ENTER」の文字1つが現れると2回タッチした。

『EXCEED CHARGE LEVER 2』

ガイロエッジに2連続でエネルギーが集まると拘束用の斬撃波を放ち動きを止める。

ガイロはカイザのゼノクラッシュのような構えを取ると紫色のポインターに身を包み必殺技テオブレイクを放つ。



吸い込まれるかのようにロブスターに突撃し斬撃を放つとすり抜けたように現れる。

ロブスターの体に　のマークが浮かび上がると灰化も許さない紫色の大爆発を起こした。爆炎がはれるとそこには何も残ってはいなかった。

そう、あのロブスターオルフェノクを消滅させたのだ。

ディフェルは相手がライオトルパーということまで侮っていた。戦闘力が段違いで追い詰められてしまった。

「新型強すぎだろ！　だったらこいつの被験体にしてやる！」

そういつと電王レジェンドフォームのかかれたカードを取り出し装填した。

『SIN FINALKAMENRIDE DE DE DE DE  
EN・O』

全デンライナーの影が通り抜けると電王レジェンドフォームへと変身した。(以下D電王)

D電王は超デンカメンソードを構えるとライオトルパーver2に斬撃をくらわしていく。

たちまち戦況は逆転し斬撃とキックを次々とくらわせていく。

さらにそこへファイズが現れ、打撃をくらわせていく。

「ん？お前あんときのライダーだよな？」

「はい、あんときのライダーですよ。姿変えられるんで」

「へえ、便利なもんだな」

納得したファイズは倒れたライオトルパーver2にも容赦せず蹴り飛ばしていく。

2人は全員を吹き飛ばすとファイズはファイズポインターを装着するとファイズアクセルのアクセルメモリーをファイズフォンにセットした。

『COMPLETE』

装甲が展開され目が赤くなり、フォトンストリームが銀色になると

ファイズアクセルフォームへ変身した。

D電王は黄色のカードを装填し、ファイズはスタータースイッチを押した。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEN -  
O』 『START UP』

「はあ！はっ！はあ！おりゃあ！！」

ファイズが音速でジャンプすると先頭にいた10体のライオトルパ  
I v e r 2にポインターが放たれ次々とアクセルクリムゾンスマツ  
シユが放たれ の文字を浮かべながら爆発する。

その爆炎の中をD電王が全デンライナーの影とともに突っ切り残り  
の10体へ

「超電車斬り！」

ことオーバースロットルブレイクを放つと爆発した。

『TIME OUT』

元のファイズに戻るとファイズフォンを变形させフォンブラスター  
にし、さらにそれにファイズポインターを装着し「ENTER」を  
押した。

『EXCEED CHARGE』

ファイズフォンを心臓のようなものに向けると赤いレーザーを放つ。

それをくらった心臓のようなものは、の文字を浮かべると消滅した。それと同時に下に落ちていた灰も消滅した。

2人は変身を解いた。そして土は苦しみながら倒れてしまった。

「おい！大丈夫か！？」

「ええ。アレになると負担がすごくて…」

「ったくしゃあねえな。ほら、肩貸してやる」

肩を借りて立ち上がると2人は歩き出した。

だが、2人は知らない。これがまだ序章であることに…

灰と新世代 後編（後書き）

竜王「文的には言うこと特になし！」

士「自信あるわけでも無いわけでもないんだな」

美莉「あの人強すぎるよ…」

聖麻「まさかスマートレディがオルフェノクになるとはな…」

士「ガイロが不死身のロブスターを消滅させたしな。なんで倒せたんだ？」

竜王「それは後にわかるよ〜ん。それではまた次回！」

## 本当の始まり 前編（前書き）

お待たせしました。やっと投稿できました！

が、今回は前回の続きが少しとプロローグっぽいものとなっているため戦闘は少ないです。

そして相変わらず表現が偏っています。それでも読んでくれることを祈ります

## 本当の始まり 前編

ディフェルとファイズが地下で戦っている一方でディカエル、カイザ、デルタはバタフライオルフェノクに追い詰められていた。

カイザが銃にもなる逆手剣カイザブレイガンで斬りかかるがやはり近づくと共に装甲から火花が散りダメージを受けパンチをくらってしまふ。デルタも同じくパンチを放とうとするがカイザの二の舞となる。

「くそ！何でコイツに近づくとコッチがやられんだよ！」

カイザである海堂は謎の現象を前に苛立っていた。その時ディカエルはあることに気付いた。

「あの怪人の周りにりん粉が舞ってます。あれがある限りは近づけません！」

ディカエルの強化された目にはバタフライオルフェノクの周りに細かいりん粉が舞っていた。

「だったらこれで！」

デルタは右腰からデルタムーバーを取り出し口元に寄せる。

「ファイア！」

『BLUST MODE』

デルタムーバーを構えバタフライオルフェノクに水色のレーザーを放つ。しかし相手もわかっているためか飛行して避けられてしまう。カイザもガイザブレイガンをガンモードに戻し光弾を放つがやはり異常な速度で回避されバタフライオルフェノクのキックを腹部にくだらい吹き飛ばされる。

カイザが吹き飛ばされたことを確認すると標的をデルタに変え迫ってくる。デルタは次々と攻撃を受け膝をついてしまう。そしてキックが炸裂しそうになるがその瞬間

『KAMENRIDE DOUBLE』

デルタの前にディカエルの召喚したダブルが現れ右脚で蹴りを放つ。するとダブルはダメージを受けずにキックをくらわせた。

バタフライオルフェノクは受け身を取るが既にダブルが目の前まで迫っていた。ダブルは次々と右脚でキックをくらわせていくがりん粉のダメージを受けていない。完全に虚をつかれたバタフライオルフェノクは追い詰められていった。

「くっ！なんでりん粉を受けない!？」

「このライダーさんの右側は風を纏った打撃を放てるの。つまりそれで打撃の瞬間だけりん粉を吹き飛ばしたってこと」

「なっ！そんなこと…!」

バタフライオルフェノクが驚愕していると遮るように海堂の音が響いた。



「気付いたとこでおせえ！」

『EXCEED CHARGE』

さらにデルタがデルタムーバーにミッションメモリーをセットする。

『READY』

素早く口元に寄せコードを言う。

「チエック！」

『EXCEED CHARGE』

カイザは回し蹴りの容量でカイザポインターを装着した右脚を突き出し、デルタはデルタムーバーを構えトリガーを引き同時にそれぞれ黄色と水色のドリル状のポインターが発射する。

バタフライオルフェノクはそれを両方の羽で防いだが動きを固定されてしまった。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEKA ER』

さらにバタフライオルフェノクの前に無数のカードでできた輪が並ぶ。

そして3人は一斉にディメンションアローシユート、ゴルドスマッシュ、ルシファーズハンマーを放つ。



そういうと背を向けどこかへ羽ばたいていった。

「みんな大丈夫!？」

3人も元へ里奈が駆けつける。3人はそれぞれ肩で息をしながら立ち上がった。

「ちくしょー!あの女今度会ったらブツ飛ばしてやる!」

「あの人次は土君を襲うつもりだよ!早く行かないと…」

海堂はそばにある壁を殴った。美莉はフラフラになりながらも土の元へ向かおうとするが聖麻に腕を掴まれ止められる。

「落ち着けよ。3人でも勝てなかったのに1人じゃ尚更無理だろ」

「でも!土君が…」

「ねえ、その土って誰なの?」

2人の会話を聞いていた里奈が尋ねた。

「俺達の連れで仮面ライダーです。ツンツン頭のバカなんですけどどうしましたか?」

「!ツンツン頭ってまさか」

「うん!真理ちゃんが探してって言ってた子だ」

「ちゅーか一体どうなってるの？」

三原と里奈が何やら気付いたが海堂だけはわからなかったようだ。

「とりあえずまずはその子のところに行こう！」

三原が里奈とバイクに乗り、海堂、美莉、聖麻がサイドバッシャーに乗った。

「アイツたぶんアークオルフェノクと戦った場所にいるんでそこま  
で向かってください」

「何でそのことを知ってたんだ？」

海堂が不審がる中全員はその場へ向かった。

士は巧の肩を借りながら外へでた。そこには蓮夜がいた。

「よう、お前らに用があるんだよ」

「あ？何だよ」

「いや、大したことじゃねえよ。お前がオルフェノクでもう一人が今回の元凶だから死んでもらおうかと思ったただけだ」

「な！」

蓮夜はガイロフォンにコードを入力し無言でガイロに変身すると襲いかかった。

巧は土を抱えたまま何とか避けた。

「おい土！お前大丈夫か！？」

「生憎ですがちとやばいっすね…」

「ああ！ちくしょう！」

土を壁に寄り掛かせると巧はファイズフォンにコードを入力した。

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

ファイズフォンをドライバーにセットしファイズへ変身するとガイロにパンチを放つ。

しかしガイロはそれを容易に受け止め蹴り飛ばした。互いにパンチとキックで押収するがスペック上ガイロが上なためファイズが押され蹴り飛ばされた。

ガイロは「WEAPON」のアイコンを押し、6つの内の1つのアイコンを押しした。

『GAIRO LANCE』

手元にデータが具現化するように紫の槍ガイロランスが現れる。

ガイロはそれを横に振り回す。ファイズはファイズエッジのような武器がないため素手で戦うことになる。リーチに差があるため徐序に押され、ついにガイロランスによる突きが炸裂し吹き飛ばされる。

「おい、土が元凶って言ったがどうということだ」

「ああ、その滅殺者が来たせいであの灰が生まれ王の復活が早まったんだ！」

「まさか…風牙さんの言ってた覚醒なのか」

『君の異名は世界の覚醒者。存在するだけであらゆるものに新たな力を与える。善人にも悪人にも』

かつて風牙に言われたことを思い出していた。

（まさか今回は王に力を与えちゃったのか？さらに人をオルフェノクに変える灰まで…）

士は頭を抱えた。自分のせいで平和になつたはずの世界を再び戦いへと誘つてしまったことに。

「そのせいであの忌々しいオルフェノクが再び現れた！ やつと滅んだと思つたのによお！」

ガイロは再び突きを放つがファイズは無言でそれを片手で受け止めた。

「な！？」

「どういうわけか知らねえがなあ、お前は本当にオルフェノクを全員見てきたのか？」

ファイズは巧は怒っていた。明らかにオルフェノクを侮辱したガイロに。

「何？」

「俺はいろんな奴を見てきた。確かに人を殺す奴もいたしそのせいで恨む奴だつていた。だがな、優しい奴だつていた！ ウザりたいが明るい奴、人間と共存するために頑張つた奴だつていた。誰もがみんな人を殺す奴ばっかじゃねえんだ！」

「黙れ！ そいつらも同じだ！」

「違う！ オルフェノクだつてな同じ人間なんだ！ お前みたいなの偏見のせいでそいつらがどうなつたのかわかつてんのか！」

ファイズはガイロランスを強引に奪い投げ捨てるとパンチの連打を放ちさらにキックをくらわせ吹き飛ばしガイロは地面を転がった。そしてファイズショットを取り出しミッションメモリーをセットした。

『READY』

セットしたことで出てきたグリップを握るとガイロへ向かって走り出した。

「俺だつてオルフェノクだ。お前が恨むな。でもな、人間もオルフェノクも何かを守ったり、夢を叶えることができるんだよ！」

『EXCEED CHARGE』

ファイズの右腕にエネルギーが流れファイズショットに集まる。

「もう1度しっかり見てこい！お前が恨んできたその人間達（・・・）を！」

ガイロがパンチを放つがファイズはそれをかがむことで避け、グラインパクトを放つ。

腹部に直撃しガイロは大きく吹き飛ばされ変身が解除された。

「くっ！クソッ！」

蓮夜はダメージに顔をしかめながらオートバジンBに乗るとどこかへ走り去ってしまった。



ファイズは変身を解き巧に戻ると土の元へ歩いた。

「おい、アイツの言ってたことは本当なのか？」

巧の問いに一瞬表情が暗くなるがすぐに戻り話し始めた。

「はい。俺は世界を旅してるんですが行った世界で必ず善人悪人の差別なく何らかの力を与えてしまうらしいんです。いるだけで発動してしまうらしいんで止めることはできませんが」

「……………」

巧は難しい表情をしていた。それを見た土は慌てた。

「でもその分その被害は絶対食いとめますから…いてっ！」

何故だか巧は土の頭をひっぱたいていた。だが、そこから悪意は感じられなかった。

「バーカ、まさか出てけ！なんて言うと思ったのかよ。前に決めたんだ。誰かを守ることが罪になるなら俺が背負うってな。お前にだって何か守りたいものがあるだろ？ だったらお前はそれを守れ。それだけで充分だろ。それで感じるものは俺が背負ってやる。だからお前は何も悩まずに守りたいものを守り抜いてみる」

「乾さん…ありがとうございます！」

「礼なんていいから行くぞ」

土が礼を言うと巧はすぐに後ろを向き歩き出した。やっぱりシンデレ

なのだろうか。

「はい」

士もそれに続いた。

しばらく歩いていると見覚えのある車が目の前に止まった。中から出てきたのは真理と啓太郎だった。

「巧!どこ行ってたの!」

「心配したんだよ!」

「だからそこからへんつっただろ」

またしばらく3人でもめていると真理が土の方を向いた。

「ねえ、君は何て名前なの？」

「ああ、天醒 士です」

「私は園田 真理。よろしくね」

「僕は菊地 啓太郎！夢は「世界中の洗濯物を真っ白にすること」  
そうそうってえ？何で知ってるの？」

「世界を旅してるんで大概知ってますよ」

本当はテレビでやってただがそんなこと行っても仕方ない。

「何かコイツ世界を旅してんだとって世界？」

「ええ。世界ですよ。地球1周じゃなくてパラレルワールドってのを」

3人は顔を見合わせ不思議がった。そこに2台のバイクが止まった。おりた人間は5人だが。

「あ！乾さん！やっと見つかった！」

「とりあえず無事みたいね」

「ちゅーか何面倒なことにさせてんだよ！」

三原、里奈、海堂の3人が巧の元へ向かう。

「あ？てか海堂なんでここにいんだ？」

「そついえばどっか行ったんじゃない？」

「まあ、気分で帰ってきた」

「…どうでもいつか」

「おい！どういうことだよ！」

巧が面倒くさかったことに海堂が詰め寄って2人はもめ始めた。それを4人が止めようと向かう。

「土君！どこ行ってたの！」

「ほら見る。奥さんが心配してんぜ」

「お、奥さんじゃないよ！／＼／」

「何言つてつかわかんねえが心配かけたんなら悪い」

こちらももめごとになりそうだったが聖麻がからかったことで止まった。ちなみに聖麻は美莉をからかうことがブームらしい。

「ところで土。お前最終決戦の場所にいたろ」

士は驚くと溜息をついた。

「はあ、やっぱわかってた？かなわねえな」

「バレバレだバカ。で、片付いたのか？」

「一応な。まだ何かありそうだが」

「もう！物騒なこと言わないでってそうだ！」

「どうした？」

「何か変な青い服着た人に襲われた！士君を狙ってるよ！」

その言葉に士と巧は驚愕した。

「おい！それってスマートレディか！」

士は美莉の方を掴んで尋ねた。

「ッ！う、うん／＼」

巧も三原に尋ねた。

「おい、それ本当か？」

「はい。海堂さんはスマートレディって言っていました」

「本当だよ。口調がわかりやすいから間違いないよ。野郎やっぱオルフエノクだった」

巧は若干諦めたような表情をした。

「平和ボケでもしたか？こんくらいで終わるわけねえか」

真理も少し悲しそうな表情だった。また巧が戦うことになることが辛かった。

「ん〜とりあえず帰ろう。アレ使ったせいで体中痛いし実を言っと立ってるのもやばい」

聖麻は心底呆れていた。

(コイツいつか使いまくってぶっ倒れちまうんじゃないかね?)

美莉は聖麻とは違い心配していた。士を良く見ると大量の汗をかいていた。

「大丈夫なの？あの電王のカード？」

「ああ。嬉しかったけどつら」

士は話の途中で倒れてしまった。それを見た全員が駆け寄る。

「コイツ無茶しすぎだろ！仕方ねえから帰るか」

巧の言葉に全員がそれぞれのバイクに乗った。

「あ！士君載せるから！」



その日の深夜

各地の墓地に覆いかぶさるように銀色のオーロラが現れた。

オーロラが消えた後しばらくはいつも通りの静寂があたりを包んでいたがボコツという土から何か突き出たような音によってそれは破られた。

その音は1つだけでなく全ての墓から響いた。音の鳴った場所からは灰色の異形の手が伸びていた。

さらに別の霊園には灰がまるで雪のように降っていた。

そして同じように墓から灰色の異形の手が伸びた。

その上空には青白い光が見下ろすように漂っていた…



本当の始まり 前編（後書き）

竜王「お久〜」

士「ふつとべ！」

竜王「グヘツ!?!」

美莉「ちよつとやめなよ！作者さんだつて忙しかったんだよ！」

聖麻「で、何してたんだ？」

竜王「…ジャンプ読んでVシネマ見てた」

3人「潰そう」

竜王「こつちも疲れてたんだよ！学校行くのに自転車ですら1時間もか  
かんだぞ！それがどれだけ辛いかわかるぎゃああああああああ  
あああ！！！！」

士「読者のみなさんすみませんでした。こんな馬鹿の馬鹿な理由で  
遅れて」

美莉「それではまた次回！」

PS・OPを作りたいので曲を募集しています！なので感想及び活  
動報告に書いてくれると嬉しいですよ！

**本当の始まり 後編（前書き）**

今回何か最終決戦みたいな雰囲気ですが違いますのでそこを  
を宜しく願います。

それではどうぞ！

## 本当の始まり 後編

ファイズの世界2日目

「くそ〜体がだりい…」

目が覚めた土にはいまだにシン・ファイナルカメンライドの反動が残っていた。それでも昨日よりは良さそうだ。

「おはよう土君！朝ごはんできてるよ〜」

「何て新婚さんみたいな光景だよ。俺は邪魔か？日々野」

「もういい加減にしてよ！／／／／」

はまりすぎにも程があるだろうが今の聖麻の顔はかなり楽しそうだった。

「いつもありがとな美莉」

「う、うん…／／」

はたから見ればただの夫婦である。土は鈍感なため何もだが美莉からは朝から甘ったるい雰囲気か漂ってきていた。だが、それを潰すように聖麻が土に話し始めた。

「昨日お前と乾さんが人をオルフェノクにする灰の原因を潰したらしいが、スマートレディが何か企んでるらしいし気をつけるよ」

「わかってるよ。大体まだカードに絵がついてないし、ブラスターフォーム見てないし」

「最後のはどうでもいいよね？」

昨日のことをふまえながら無駄話をして朝食を終えると3人は「西洋洗濯舗 菊池」に行くことにした。

「西洋洗濯舗 菊池」に行くための道を歩き始めもうすぐ到着というところで聖麻は何かを考えていた。

「聖麻、どうかしたのか？」

「いや、何か昨日より人増えてないか？」

「そうかな？同じだと思うけど…」

士と美莉はあたりを見回した。2人の目からは別に昨日と変わったことはないし、何より人が増えたかどうかなんてわかるわけがなかった。

「店がいっぱいあるからじゃねえか？」

確かに周りはさまざまなお店が並んでいて休日でもある。増えていてもおかしくはない条件だ。

「そつだよな…」

「向井君がそうということ言うと本当に思っちゃうよね」

何やら微妙な不安を残したまま3人は「西洋洗濯舗 菊池」に到着した。

「すみませ〜ん、遊びに来ました〜」

士が誰が見ても、バカだ、と思うような挨拶をして店に入った。

「いらつしゃいませーって士君？体は大丈夫？」

真つ先に啓太郎が奥から出てきた。昨日のことで心配しているらしい。

「ええ、大丈夫ですよ。乾さんは？」

「たつくんなら今起きたんだよね。奥にいるから入って」

啓太郎の案内で奥へ行くとそこには「コーヒー」と格闘している巧とそれを笑いながら見ている真理がいた。以外にも巧は猫舌なのである。ちなみに猫舌の人には優しいとか。

「おっ！よっ！」

本人からして熱すぎるコーヒーを机に置き土の元へ歩いた。

「おはようございます」

「押しかけちゃってすみません」

土があいさつしその隣で美莉が頭を下げていた。

「気にしないでいいよ。今日はどうしたの？」

真理が美莉に頭を上げさせ要件を尋ねた。

「生憎特にないですよね。このバカが行こうって言うんで」

聖麻が土を指さしながら来た理由を言った。それに真理は苦笑していた。

土はというと巧がコーヒーを飲む様子を昆虫を観察する子供のような目でみていた。

「何見てんだ？」

「こづいづのギャップ萌えって言うのかなあ〜って」

「？」

「土君何言ってるの!?!」

「いや、別に。そっだ!」

士が何か思いつき啓太郎の方を向いた。

「この際なんで手伝います！」

「ねえ士君。洗剤の量くらいわかってよ」

「真つ白にすることがモットーなんだぞ。多い方がいいって」

何やら見たことのあるやりとりをしている士と美莉。

「なんかあの様子見たことある気すんだが」

「そりゃ巧がやってたことと一緒にだし」

当然巧もデジャヴを感じていた。手伝いの様子といえば美莉は元々器用なためすぐに慣れていた。聖麻はこれといった点はなく普通に仕事していた。士は先のセリフからどうなのかはわかるだろう。

「んじゃ配達行ってくるね」

「うん。がんばってね」

啓太郎が土と巧を連れ車に乗ると出ていった。

「あ、美莉ちゃん。昨日土君が出した服終わってるよ」

真理はそう言うと他の服とは別に保管していた土の出した美莉の服をだした。当たり前だがカレーの染みは落ちている。

受け取った美莉は何故かプルプルと震えだし

「土君のバカー！！！」

と叫ぶと服にパンチしていた。

何のことかわからない真理はその不思議な光景を眺めていた。



一方の啓太郎達は相変わらず配達していた。ダルそうにしている巧の横で士は1人目を輝かせていた。

「啓太郎さんの配達ってオルフェノクとのエンカウント率高いんですよね!？」

「よくそんなまぶしい目で物騒なこと言えるなお前」

「そうだよ士君。怖い事言わないでよ」

すると近くに1人の女性が走っているのが見えた。その顔からは恐怖の感情が見てとれた。そしてそのあとをゆっくりと追うクワガタをイメージしたオルフェノクがいた。(以下スタッグビートルオルフェノク)

「た、たたたたつくん!オルフェノクが!」

啓太郎はあわてながらお決まりのセリフを言っていた。

「それ久々に聞いたな。士、行くぞ」

「わかってますって」

2人は車から飛び出し今まさにクワガタのはさみのような剣を女性目掛けて突き刺そうとしていたスタッグビートルオルフェノクを蹴り飛ばした。

「大丈夫ですか?早く逃げてください」

「ノノノは、はい!」

士が女性を促し逃がした。その女性の顔がやや赤かったのは気にしない方がいいだろう。

2人はそれぞれベルトを装着すると巧はファイズフォンに「555」と入力し士はカードを取り出した。

『STANDING BY』

「「変身！」」

『KAMENRIDE DEFER』

『COMPLETE』

2人はデIFエルとファイズに変身するとファイズは軽く両肩を上げ、デIFエルが走り出す。そしてパンチを放つが剣で止められ、空いているほうの剣の斬撃をくらってしまふ。

「ぐあッ!？」

士が吹き飛ばされ入れ替わるようにファイズがキックをくらわせた。だがスタッグビートルオルフェノクはあまり効いていないのか2本の剣でファイズの装甲を切り裂いた。

「相手がクワガタならコッチはカブトムシだ!変身！」

『KAMENRIDE BLADE』

カードを装填すると青い光のカードが現れデIFエルをすり抜ける。

スーツが青く仮面がスピードとカブトムシのような形をしたブレイドに変身した。（以下Dブレイド）

Dブレイドはブレイラウザーを構えると走り出しスタッグビートルオルフェノクに斬撃をくらわせるとこれは効いたのか怯んだ。さらにそこにファイズがパンチをくらわせ吹き飛ばした。

スタッグビートルオルフェノクはDブレイド目掛けて斬撃を放ちに襲いかかる。Dブレイドはカードを1枚取り出し装填した。

『ATTACKRIDE METAL』

するとDブレイドの体が銀色一色になる。そこに斬撃がヒットしたのだがまるで鉄に振り下ろしたかのようにスタッグビートルオルフェノクの剣が弾かれ大きくのけぞった。Dブレイドはさらにカードを装填した。

『ATTACKRIDE BEAT』

Dブレイドの右手にエネルギーが集まりそのままスタッグビートルオルフェノクを殴り飛ばした。

そのスキを逃さずファイズはファイズポインターを取り出すとミッシェンメモリーをセットし右脚に装着した。

『READY』

そしてファイズフォンの「ENTER」のボタンを押す。

『EXCEED CHARGE』

ファイズはジャンプし1回転する。右脚からドリル状のポインターが発射するとクリムゾンスマッシュを放つ。

直撃したスタッグビートルは体から青い炎を出しながら吹き飛ばされた。

『ATTACKRIDE MASH』

音声になるとDブレイドが音速で先周りしカードを装填した。

『FINALATTACKRIDE B B B BLADE』

Dブレイドの周りにトカゲとシカの紋章が浮かぶと2つともブレイドラウザーに吸収された。

吹き飛ばされたスタッグビートルオルフェノクに雷を纏ったブレイドラウザーでライトニングスラッシュをくらわせ の文字を浮かべながら爆発し灰と化した。

2人が変身を解くと同時にしの携帯が鳴った。相手は聖麻だった。

「もしもし。どうした？」

『今すぐ乾さん連れて戻ってこい！お前の言ってた人をオルフェノクにする灰がまだあったんだよ！』

啓太郎、士、巧が配達に言った数分後。

「やっと終わった〜！」

「お疲れ様。はい、コーヒー」

美莉と聖麻の手伝いもあつて予定より早くクリーニングが終わった。

3人が休憩していると何やら外がざわついていることに気付いた。

「ん？何かあつたのか？」

聖麻が外に出てみると犬のようなオルフェノクが暴れていた。（以下ドッグオルフェノク）周りには外傷はないものの息をしていない人がたくさんいた。これはオルフェノクが人をオルフェノクとして目覚めさせるために心臓にオルフェノクのエネルギーを注入する「使徒再生」というものである。オルフェノクになる可能性は極めて低い。

「三原君！オルフェノクが！」

真理はドッグオルフェノクを見るとすぐに三原に電話した。

2人を追って外にでた美莉はすぐさま変身しようとドライバーを構

えるがドッグオルフェノクが突然暴れるのをやめた。

2人は不思議そうに見ていたがドッグオルフェノクの出した物に驚愕した。それは巧達の見た人間をオルフェノクに変えるあの灰だった。

「オイ！あれって……」

聖麻が声を上げるとドッグオルフェノクは「使徒再生」を行った人と自分自身にその灰を撒いた。

すると「使徒再生」を行われた人々が起き上がりオルフェノクへと変貌した。そしてドッグオルフェノクはさらに荒々しい姿の「激情態」へと強化した。

「これ以上誰かを傷つけさせない！変身！」

『KAMENRIDE DEKAELE』

美莉はディカエルへ変身するとマシンガンモードにしたドライバーを構えオルフェノクへ光弾を連射した。

ひるんではいるものそのままでダメージを受けていなかった。だが1体は全く怯んでいなかった。そう、ドッグオルフェノクである。

ドッグオルフェノクはかなりの速さでディカエルへ近づくと強化された爪でディカエルの装甲を切り裂いた。ディカエルはドライバーをアローモードに変形させると弓部についた刃でその爪を止めた。だがそれに構うことなくドッグオルフェノクは爪を次々と振り下ろしていった。最初は対応できたものの徐序にそのどうもうな動きに

苦戦していき、さらに別のオルフェノクに後ろから襲撃され完全に防御ができなくなりドッグオルフェノクの爪をくらい吹き飛ばされてしまう。

「数が多すぎるよ！だったらこの人で…」

カードを装填しようとしたときドッグオルフェノクに追撃されカードを落としてしまう。そこに蹴りが放たれ腹部にモロにくらってしまふ。

「ッあ…！」

吹き飛ばされ同時にこみ上げてくる吐き気をこらえながら立ち上がると数体のオルフェノクの攻撃をくらってしまふ。そこへどんどんオルフェノクが集まっていきディカエルは袋叩きのような状況に追い込まれてしまった。

聖麻はその状況を見て土に電話した。

それとほぼ同時に群がっていたオルフェノクに光弾とレーザーが放たれた。

袋叩きから解放されたディカエルを見るとサイドバツシャーに乗ったカイザとデルタがそれぞれの銃を撃っていた。

「オラオラ！海堂様のお通りだ！」

「何言ってますか！前見てくださいよ！」

そしてやはり運転を誤り転倒してしまったのだが、結果的にその転

倒し地面を滑っていったサイドバツシャーがオルフェノクを跳ね飛ばしていったのでよかったのかも知れない。

「ほ、ほら見る！計算通りだ！」

「絶対事故ですよね……」

起き上がり調子に乗ったカイザにデルタがつっこむ。

「大丈夫？えつと美莉ちゃんだっけ？」

「はい！何とか」

「んじやとつととブツ飛ばすぞ！」

カイザの言葉で第2ラウンドが開始された。

カイザはカイザブレイガンを取り出し光弾を連射しながらミッシェンメモリーをセットした。

『READY』

すると銃の下から黄色の刀身が現れ逆手剣ブレードモードへと変化する。そして次々と相手の攻撃をさけながら斬撃くらわせていった。

「これが海堂無双だ！おりゃあああああああ……！」

すごく舞い上がっていた。そのせいで後ろに隙ができていた。当然オルフェノクがそこを狙うが





ギルスは咆哮すると両腕からギルススクロウを伸ばしまさに獣の如くオルフェノクをなぎ倒していった。

カリスは走り出し俊敏な動きでディカエルと同じように弓部による斬撃を放っていった。

「グルルルルルルル…」

ガルルキバは唸りながら左手に持つガルルセイバーでこちらも獣のごとくなぎ倒していった。

「なんかあのカリスってライダーさん武器が私のと似てるなあ」

ディカエルはどうでもいいことを呟きながらそれでも確実にオルフェノクを射抜いていった。

徐序にみんなが押し始める中さらなる増援がビルの上に現れた。それは4人目のライダーであるガイロこと蓮夜だった。

「もう1度見てみる…か…」

蓮夜は巧に言われた言葉を思い出しながら昔を思い出していた。

『くんなよ化け物!』

『お前は俺らと同じなんだよ。人間じゃねえ』

『蓮夜。すまないが実験体になつてくれ』

『あなたがオルフェノクの希望になるの。だから少しの間…ね?』

『奴らのせいで俺らの仲間は何人も死んだ!全部お前の親のせいだぞ!』

『もう信用できるか!アイツらを殺す!』

『やめて!父さんと母さんは!』

そして自分の目の前で…

蓮夜はそこまで思い出すと忘れるように頭を振った。

「1度だけ付き合つてやるよ乾」

ガイロフォンに「916」と入力する。

「変身！」

『COMPLETE』

蓮夜はガイロフォンをドライバーに装着しガイロに変身するとビルから飛び降りた。

ガイロは「WEAPON」のアイコンを押しさらに別のアイコンを押しした。

『JET ATTACKER』

背中にデータのような物が現れると具現化され、サイガの使うフライングアタッカーがさらに強化されたジェットアタッカーとなった。

「え？何あのライダーさん？」

『空飛んでやがる！』

「オイ！お前ら全員伏せろよ！」

ガイロは忠告を与えると操縦桿から無数の光弾を発射した。相当な威力を誇っているため次々とオルフェノクが黄色の炎をあげながら灰化していく。

ガイロはガイロフォンを取り出すと「VEHICLE」のアイコンをタッチしそこからでた2つのアイコンの内の1つを押しした。

『AUTO BAZIN - B BATTLE MODE』

するとどこからともなくあの黒いオートバジンがバトルモードとなつて現れマシンガンを連射し始めた。

「お前！あぶねえだろ！」

「倒せるからいいだろうが海堂直也！」

ガイロがオートバジンBとともに空中ハメをしているとジェットスライガーが上空から舞い下りドッグオルフェノクを跳ね飛ばした。

そこからファイズが2人現れた。片方は本物、もう片方はディフェルのなつたものである。

「え！？ファイズが2人！？」

「ちゅーか何でこんなにライダーとエンカウントするんだ！？」

「どつなつてんだ？」

ディフェルを見ていないカイザとデルタはともかく何故かディフェルも気づかなかった。

「多すぎだろ！面倒だし一気に決める！」

Dファイズはケータッチを取り出し押し始めた。

『 KUUGA AGITO RYUKI FAIZ BLADE  
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA DOUBLE  
E OOO FINALKAMENRIDE DEFER』

Dファイズはドライバー本体をを右腰に装着し元あった場所にケー  
タッチを装着した。

デیفエルネオコンプリートフォームへ変身するとドッグオルフェ  
ノクに向かって走り出した。

「なあ！コイツって俺は使えんのか？」

ファイズはというとガイロに尋ねていた。

「元々量産型改良した奴だ！使えるはずだからとつとと戦え！」

オートバジンBがファイズの元へ降下してきた。ファイズはミッシ  
ョンメモリーをファイズフォンから外すとオートバジンBのグリス  
プにセットした。

『READY』

「お！」

音が鳴ったのでグリップを刀を鞘から引き抜くように抜いた。する  
とグリップから赤い刀身が現れファイズエッジとなった。

「やっと使えるな、コレ！」

ファイズはデیفエルと同じくドッグオルフェノクの元へ向かう。

オルフェノクはだいぶ減っていた。そのため全員が必殺技の準備を  
した。

カイザはカイザフォンの「ENTER」を押した。

『EXCEED CHARGE』

カイザの右腕を経由してカイザブレイガンにエネルギーが集まると手前にあるコッキングレバーを引く。銃口をオルフェノクに向けると一点に集まっているオルフェノク数体に向かって光のネットのようなものを発射し拘束する。カイザブレイガンを構えると黄色のポインターに身を包みオルフェノクに向かって吸い込まれるかのように斬撃をくらわせすり抜けるゼノクラッシュをくらわせた。

オルフェノクにXの文字が浮かび爆発すると灰化した。

デルタはミッションメモリーをセットしたデルタムーバーを口元に寄せた。

「チエック！」

『EXCEED CHARGE』

デルタムーバーから水色のドリル状のポインターが発射されオルフェノクの1体を拘束する。

デルタはジャンプしそのオルフェノク目掛けてルシファーズハンマーを叩きこむ。

「だあああああああああああああああ！！！！」





コンを2回押した。

『EXCEED CHARGE LEVER 2』

右脚にエネルギーが2回連続で集まると上空から地面スレスレを滑空するように飛び蹴りを放った。

不死身をも消滅させる大出力の必殺技バイオレットスマッシュをくらいたるオルフェノクは紫色の大爆発を起こし灰化する間もなく消滅した。

ディフェルとファイズはドッグオルフェノクと戦闘していた。

ドッグオルフェノクは得意の荒々しい攻撃を放つがこの2人の前では無力に等しかった。

ファイズが切り裂き蹴り飛ばしディフェルがそこに斬撃をくらわせる。ディフェルはそのまま斬撃を連発し吹き飛ばした。

ドッグオルフェノクは起き上がると走り出すがライドブッカーヘヴンの銃弾によって阻まれてしまう。

ファイズはファイズフォンの「ENTER」を押した。

『EXCEED CHARGE』

右手を経由してファイズエッジにエネルギーが集まると赤い拘束用の斬撃波を放つ。それによってドッグオルフェノクは身動きできなくなってしまうた。

ファイズは走り出しスパークルカットをくらわせようとするが直撃する寸前に倒れてしまった。そしてそのまま動かなかった。

「乾さん!？」

ドッグオルフェノクは拘束を破りファイズに爪を突きたてようとするが間一髪ディフェルがそれを腕を掴んで止める。

「邪魔だ!」

ドッグオルフェノクを蹴り飛ばすとケータッチを押した。

『RYUKI KAMENRIDE SURVIBE』

隣に龍騎サバイブが現れるとカードを装填した。

『FINAL ATTACKRIDE RYU RYU RYU RYU  
UKI』

ディフェルがライドブツカーヘヴンを、龍騎サバイブがドラグバイザーツヴァイを構えるとそれぞれ黄色と青白いメテオバレットを放ちドッグオルフェノクは爆発した。

ディフェルは変身を解除するとファイズの元へ駆け寄った。

「大丈夫ですか!？あ…!」

ファイズの元でしゃがみこんだ士はあるものが目に入った。

それは右手から出てきた微量の灰であった。崩壊が進んでいた。

そう、既に巧に時間は残されていなかった…

本当の始まり 後編（後書き）

竜王「1週間に1回の投稿になっちまったぜ」

士「んなことどうだっていい！乾さああああああん！！」

美莉「大丈夫なの！？」

聖麻「確かに崩壊進んでる描写は前にもあったしな。それと蓮夜の過去が少し映ったな。何があったんだ？」

竜王「それはもうじきわかるよ。巧の体はかなり危ない状態です。どうする巧！？」

士「それではまた次回！」

#### 4人目の過去（前書き）

注意

- ・下手すると鬱になる。（たぶんならないが）
- ・わけわかんない

深夜に書いた結果こんな悲惨な話となりました。  
それではどうぞ！

#### 4人目の過去

「乾さん、しつかりしてください！」

もうすぐ消滅するかもしれないことを思い、士は焦った。どのオルフェノクもいずれは崩壊するが巧の場合は崩壊を促進させる薬を投与されているためほかよりも早く崩壊してしまう。

「巧！大丈夫なの！？」

「乾！どうしたんだよ！」

真理と海堂が巧の元へ駆け寄りそれに続くように全員が集まった。

「士君、乾さんどうしたの？」

美莉は不安げな顔で尋ねるが士には答えられなかった。巧の性格上みんな、特に真理や啓太郎には心配をかけたくはないため言うのは彼を傷つけることになる。

全員が心配する中巧が目を覚ました。

「巧！どうしたの！？」

真理が1番最初に巧を心配する。その時手を握ったのはまずかった。普通ではありえない感触に真理は驚愕した。

「ッ！…巧、これ…」

「何でもねえよ!！」

巧は真理の手を振りほどくと三原や海堂を押しのことかへ歩き出した。

「巧!なんなのか言ってよ!巧ってば!」

「乾さん!話してください!」

真理や三原が呼びかけるがそのたびに足を速めるだけだった。

「おい乾!待てよ!」

海堂が小走りで巧を追いかけるとやはり答えなかった。

「待てって言うてんだろツ!」

だが、海堂は巧の肩を掴み強引に振り向かせると怒りに満ちた表情で襟首を掴んだ。

「テメエわかってんのか!ここにいる全員がテメエを心配してんだぞ!特に誰がなんて言わなくなつてわかるだろ!」

「……………」

海堂が必死に話しかけるが巧は無言のままだった。そして真理と同じように手を払いまた歩き出した。海堂は追いかけてよとはしなかった。

そして誰も巧を呼び止めようともせず遠ざかる巧を見ているしかで

きなかった。そのまま巧の姿は見えなくなった。

「おい、土。どうすんだよ？」

聖麻が土に尋ねるが珍しく何も答えなかった。この反応で土の感情がわかったのかそれ以上は尋ねなかった。

「巧…どうして何も言わないの…辛いなら…グスツ…話してよ…」

真理は巧がどういう状況か理解し、それでも普段通り話さないことで涙を流していた。海棠はやり場のない怒りにむしゃくしゃしながらサイドバスチャーに乗った。

「おい、三原。行くぞ」

「え、はい…」

三原は真理の方を見ながらサイドバスチャーに乗ると2人は走り出した。

車の音がして振り返ると啓太郎の車だった。

「ごめん！おくれムグツ！？」

啓太郎が降りるとすぐに蓮夜が口を塞いだ。目線だけ動かすと蓮夜と目があい「今は喋るな」と目で話された。啓太郎は雰囲気ではわかったのかコクコクと首を2回縦に振った。

「啓太郎さん、俺ら帰るんで真理さんを家へ入れてやってください」



士が啓太郎に軽くお辞儀をして頼むと歩き出した。美莉と聖麻もそれに続いた。

「あ、あの…蓮夜さんは…」

「用ができたから行く」

蓮夜は啓太郎の質問に即答するといつの間にかビークルモードに戻ったオートバジンBに乗り2組とは違う方向へ走り出した。

啓太郎は泣いている真理を連れ店の中へと入って行った。

士達は家に着いたがそれでも無言のままだった。

「ねえ…乾さん本当にどうしたの？」

美莉が口を開くが士は変わらず答えなかった。

「それについては聞くなよ日々野。たぶん一生答えねえから」

「う、うん…」

そして再び沈黙が訪れた。

(何かしなきゃ変わらねえのに何もできない…良太郎さんの時みたいな奇跡は起こらないんだ)

士は心の底ではオーロラによって良太郎が大人に戻ったように巧の崩壊が止まることを望んでいた。しかし、やたらめったに起こるわけでもない。動かなければ何も変わらない。そして士はソファアーカー勢いよく立ちあがった。

「こうなりやどんなことでも構わない！とにかく何かしなきゃ変わらないんだ！」

「うん！それでこそ士君だよ！」

「そうだよな」と

2人も立ち上がった。そう言った士の最初にとった行動は外に出てドライバーを装着した。

「え、何で？」

「まあ、いいから。変身！」

士はカードを取り出し装填した。

『KAMENRIDE DOUBLE』

士はディフェルにはならず直接ダブルへと変身した（以下Dダブル）  
。そしてカードを2枚取り出し順に装填した。

『ATTACKRIDE STAG PHONE』

『ATTACKRIDE BAT SHOT』

音声が鳴るとクワガタの形をした携帯スタッグフォンと蝙蝠の形をしたカメラバットショットが現れた。

「このクワガタやるから美莉と聖麻で乾さん探して」

「了解！」

美莉は元気よく敬礼のような動作をした。

「わかったがお前はどうすんだ？」

「俺は蓮夜さんを探す」

士の答えに聖麻は首をかしげた。士のことだから巧を探すと思っていたが何故か違っていた。

「何でだ？」

「たぶん今回の件はあの人が何か知ってる」

「まあ、突然4人目が来てもな。んじゃ頑張れよ」

「そっちなもな」

美莉と聖麻はスタッグフォンを連れて巧を、Dダブルはバットショットを飛ばし蓮夜を探しに向かった。

蓮夜はあまりにも周りとは違った潰れた研究所にいた。それを懐かしくも忌々しい目で眺めると中へと歩を進めた。蓮夜の頭にはある出来事が浮かんでいた。11年前の出来事が：

11年前。

蓮夜が9歳の時である。

父、母ともに研究員であり、基本1人でいることが多かった。

それでも彼は明るい性格でどこにでもいそうな少年だった。あの日が来るまでは。

ある日、いつも通り友達と学校から帰ろうとし、正門をくぐった時だった。トラックが突然突っ込んできた。彼を含めた何人かの生徒は跳ねられた。蓮夜は何故だかこの時覚えのある中では初めて人を恨んだ。もちろんこのトラックの運転手である。あちらに悪気が無いのはわかっているし、何より理由が友達を跳ねたことだ。恨みとは言っても理由としてはありえないかもしれないが、みんなが納得するかしないかなら納得する方なのかもしれない。善意を持ったまま恨むと何ともおかしいことだが、確かに恨んだ。

生徒は当然即死だった。のだが、突然蓮夜が頭から血を流し、全身がボロボロの姿で起き上った。その場にいた誰もが驚愕した。

彼はゆっくりと運転手の元へ歩み寄った。そして体に異形の模様が浮かぶとユニコーンをイメージしたオルフェノクへと変貌した。(以下ユニコーンオルフェノク)

運転手は逃げ出したがユニコーンオルフェノクは誰も捉える事の出来ない速さで回り込み右手に現れた槍を運転手に突き刺した。運転手の心臓は灰化し、その場に崩れ落ちた。

ユニコーンオルフェノクの姿から蓮夜に戻ると辺りを見回した。そこにいる誰もが恐怖の表情を浮かべていた。そして蓮夜の友達の1人が叫んだ。





着いたのは小さくも大きくもない研究所だった。どうやら2人が働いているところらしい。

母の案内で1つの大きな部屋に入った。母は仕事へ戻って行った。

部屋には数人の高校生くらいの人や大人の人が男女両方いた。蓮夜は何なのかからず茫然としていると、1人の大柄な男が近寄ってきた。

「お前みたいな子供までオルフェノクになっちまうのか。辛いな…」

その男は蓮夜を見るなり1人ごとを呟き始めた。

「おじさんは誰？」

「おっと、悪かったな。俺は安斎 涼ってんだ。よろしくな」

安斎は自己紹介すると手を差し出した。蓮夜は戸惑いながら握手した。そして別のことを尋ねた。

「えっと、オルフェノクって？」

「やっぱり知らねえよな。簡単に言っちゃまえば死んだら稀になっちゃう怪人ってとこだな。こんな風な奴」

安斎はそう言うとバイソンをイメージしたオルフェノクへと変貌した（以下バイソンオルフェノク）。

蓮夜は驚いたが自分も同じ怪人になったことを思い出しすぐに慣れ



た。

安齋は元の姿へ戻ると蓮夜の頭を撫でた。

「わりいな驚かせちゃって」

だが、少し離れた場所から高校生くらいの男が蓮夜に向かって冷たい一言を放った。

「お前は俺らと同じなんだよ。人間じゃねえ」

蓮夜はその言葉に少し傷ついたが安齋は励ました。

「あんな奴の言うこと気にすんな。今はそれでもここにいたりや怪人の姿ともおさらばだ！」

「え？ほんとに？」

「ああ、何でもここはオルフェノクと人間の姿の内オルフェノクの姿を消すための実験をやってた」と

何やら誇らしげに語る安齋だが蓮夜にはわからなかった。

「消えるとどうなるの？」

「そりゃ人間の姿しか残らねえから元通り人間になるんだ！」

「ほんとに!？」

「ああ、本当だ！」

これをきっかけに2人は仲良くなった。蓮夜が事情を話すとあちらも話してくれた。なんでも同じように事故にあって家族とともに死んでしまったのだが自分だけ生き返ってしまったとのことだ。蓮夜は自分の両親がここで働いていることを話した。

「そりやすげえな！大事にしろよ！家族を失うのは辛いからな」

「うん！」

2人は毎日話していた。

しばらくしたある日、研究が終わったらしく徐序に別の部屋から人が戻るために順番に出て行った。そして1年後、彼らの番になった。

蓮夜は戻れることの嬉しさもあつたが、何より嬉しかったのは戻す作業をしているのが両親であつたことだ。

蓮夜と安斎は他の人10人くらいと待機するための部屋にいた。2人はいつものように話しあっていると安斎の番が回ってきた。

「おっ！ついに戻れるな。戻ったらまた会おうな」

「うん！僕も後で行くね」

そして安齋は待機部屋から出て行った。

安齋が出て5分ほどすると外が少し騒がしくなった。何なのか気になったが蓮夜の番になったため気にならなくなった。

研究員に案内され、病院の手術室のような部屋に入った。そこには自分の尊敬すべき両親がいたが明らかに不審な点があった。オルフェノクだけを消滅させるため灰があたりには落ちているのは蓮夜もわかった。だが、何故部屋のいたるところに、両親の手術着のような服に血が付いているのか。

「ねえ、何で血が付いてるの？」

「……」

母は黙っていたが父が口を開いた。

「それは…失敗したからだ」

言葉の意味がわからなかった。単純に考えればわかるはずなのに全くわからなかった。

「父さんたちは戻す研究をしていた。だが、あの会社に目をつけられた。もう時間がなかった。だから希望があるなら未完成のままでもやるしかなかった。蓮夜。すまないが実験体になってくれ」

「アナタがオルフェノクの希望になるの。だから少しの間…ね？」

蓮夜の頭には不審な点が頭をよぎった。何故不完全なまま行うのか？だがその考えは一瞬でなくなり恐怖が芽生えた。自分も死ぬかもしれない恐怖に…

「ねえ、どうして平気な顔してるの？戻すことに失敗したのになんで平気な顔してるの？」

「アイツらが父さんたちの利益でしかないからさ」

アイツら？利益？だんだんわからなくなってきた。そして蓮夜は気付いてしまった。両親の自分を見る目が息子を、人を見る目じゃなかったことに。

怖くなった蓮夜はその部屋から抜けだしあてもなく廊下を走った。その途中に1年前に言われたあの男の言葉を思い出した。

『お前は俺らと同じなんだよ。人間じゃねえ』

結局自分は化け物でしかないのか？悩みながらも走り続けると血痕が目立ち始めた。不思議に思っ先を見ると見なれたオルフェノクがいた。信じたくなかった。バイソンオルフェノクが安齋が人を殺していることを。

「おじさん！」

「大丈夫か！早く逃げるぞ！早くしねえと捕まるぞ！」

「ねえ、今まで人間に戻った人はいたの？」

「いるわけねえだろ！奴らのせいで俺らの仲間は何人も死んだ！全部お前の親のせいだぞ！」

自分たちと一緒に人間に戻る仲間。それを両親が殺した。受け止められるわけがない。

「もう信用できるか！アイツらを殺す！」

そう叫ぶとバイソンオルフェノクは走り出し蓮夜の両親の元へ向かった。

蓮夜は慌てて追いかけるがオルフェノクにもならず追いつけるわけがない。

息を切らしながら部屋に入った。映ったのは

ハンマーのような武器で頭を潰される両親の姿だった。

なんで？家族を失うことは辛いんでしょ？何で人のは殺せるの？あんなに信頼してたのに。なんで…なんで…

徐序に悲しみがこみ上げ怒りへと変わっていった。

オルフェノクトノシンライモクズレテシマッタ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお！！！！！！！！！」

蓮夜は吠えるとユニコーンオルフェノクへと変貌した。そして手にした槍でひたすらバイソンオルフェノクを切り裂いた。何度も何度も何度も何度も…

何回目かわからないが青い炎を上げながら灰化していった。

ユニコーンオルフェノクはその後メチャクチャに研究所を破壊し外へでた。外は蓮夜の気持ちを表すような土砂降りだった。

すると目の前にヤギをイメージしたオルフェノクがいた。そのオルフェノクはベルトとこの時代では珍しすぎる 아이폰 のような物をユニコーンオルフェノクに投げた。

「頼む。君の手でオルフェノクを滅ぼしてくれ」

それだけ言うと目にもとまらぬ超高速で走り去ってしまった。蓮夜の姿に戻ると全くわからないままベルトと 아이폰 のような物を拾った。何故だかあの時のような後悔や悲しみはなかった。だがわかったことがあった。

人もオルフェノクもどっちもクスだ。友情も信頼も何もかも破壊される。

こうして彼は心を閉ざしてしまった。

「何で思い出しちまったな」

蓮夜は研究所の中を歩いていた。そして目の前に数体のオルフェノクが現れた。

「たぶんお前らはあの土だからって奴の覚醒だかなんかで蘇った死人どもか。乾は俺の知らない場所にいた。明るい場所に。まだ見てねえんだ。だから」

ガイロフォンにコードをコードを入力した。

『STANDING BY』

「汚すんじゃないよ。変身！」

『COMPLETE』

絶望を歩んだ者は光を守るため戦士となり走り出した。



#### 4人目の過去（後書き）

竜王「自分で鬱になるとこだった…」

士「深夜にこんなもの書くからだろ」

美莉「蓮夜さん、こんなことあったんだね」

聖麻「残酷すぎるだろ」

士「友達にも親にも信頼できる人にも裏切られたんだもんね」

竜王「次回は戦闘に戻ります。それではまた次回」

王（かみ）の夢は滅亡と復活（前書き）

お待たせしました！でも微妙な展開です。（えー  
それではどうぞ！

## 王（かみ）の夢は滅亡と復活

美莉と聖麻はスタッグフォンを飛ばしながら巧を探していた。しかし全く見つからずさらに辺りも暗くなってきた。

「はあ、こんなに探しても全然見つからないよ……」

「あの人本当にいなくなるのうまいな……」

2人もバテ始めていた。さすがに諦めるわけにもいかなかったため再び歩き出した。すると美莉があるものを見つけた。

「ねえ、向井君。あれ……」

美莉の指さした方向を見るとそこは霊園だった。だが、本来漂うはずの悲しい雰囲気は1つ1つの墓の前に空いた穴のせいで失われていた。

「なんだ？墓荒らしか？気の毒だが今はそれどこじゃな……」

聖麻は途中で言葉を切った。視線の先には見覚えのある男性が背を向けて歩いていた。美莉も同じ方向を見て驚いた。

「乾さん!!」

2人は少ない体力で走り寄ると以外にも巧は逃げずにその場で止まり振り返った。

「お前ら…確か美莉と聖麻だったけ？」

「はい…乾さん、早くみんなのところに帰りましょうよ…」

美莉が息を整えながら説得するが巧は何も答えなかった。そこに聖麻が話しかける。

「どうせあなたのことだから心配かけたくなかったんだろ？」

一瞬巧が驚いた表情をした。

「あなたは素直じゃないから仕方ないだろうがもう無理だ。現に既にバレた。それだけはもう何したって変わらないし、いちいち逃げたら尚更だ」

聖麻は今までのような敬語ではない普段通りの口調だった。巧は苦虫をかみつぶした表情をすると声を荒げた。

「うるせえよ！俺はアイツらには絶対に知られたくなかったんだ！もうじき俺の体が崩壊することを！アイツらだから必ず心配して無駄茶しやる！それだけは本当に嫌だったんだ！でも知られて心配かけちゃった。どうすりゃいいかわかんねんだよ…」

聖麻は驚いていた。巧が自分の胸中を話すことは滅多にないからだ。だが、すぐにあきれた表情になった。

「やることなんて決まってるだろ。アンタの夢を叶えに行く。それだけだ」

「俺の夢…」

「アンタの夢の対象はみんなだろ。だったら今この状況なんだし叶えに行くしかないだろ」

巧はしばらく考え込むと硬くなった表情を解いた。

「高校生に諭されるってバカみたいだな…わーったよ。叶えに行つてやる」

聖麻は小さく笑い美莉も意味を察したようで明るい表情となった。

3人は土の元へと向かった。巧はその時ある墓を見て辛そうな表情を浮かべた。目の前に穴のあいた「木場」と刻まれた墓を…

一方Dダブルは前が黒、後ろが緑のマシンハードボイルダーに乗り道を走っていた。すると飛ばしたバットショットが寄ってきた。

「お！見つかったか！んじゃ行くか！」

Dダブルは片手をハンドルから離しカードを取り出し装填した。

『ATTACKRIDE MACHINE HARD BOILER  
DER』

後ろに巨大なブースターが装着されると轟音を響かせながら爆走した。

ガイロは研究所内で圧倒的強さで襲いかかるオルフェノクを薙ぎ払っていた。

右手にガイロエッジ、左手にガイロガンを持った一丁一刀の戦いで次々と切り裂き、撃ち抜いていった。

ガイロは「FINISH」のアイコンから「ENTER」を押した。

『EXCEED CHARGE』

左手を經由しガイロガンへエネルギーが集まると必殺技テオイレイザーを近くのオルフェノクに放つ。

そのオルフェノクにヒットすると別のオルフェノクの元へ曲がりヒットし、さらに曲がり結果的に全てのオルフェノクを撃ちぬきの文字を浮かべて黄色の爆発をしながら灰化した。

「さすがに死人を直にオルフェノクにしたんじゃ雑魚だな」

ガイロは歩き出し地下最深部へ向かった。不思議なことにオルフェノクは全く現れなかった。

たどり着くとガイロは拳を握りしめた。

「ここにねぐら移してたかよ…王様よお！」

目の前にはファイズたちライダーの元となったバツタをイメージした王と呼ばれる最強のオルフェノク、アークオロフェノクが空中で横たわっていた。

「今回の騒動も、お前を倒して終わりだ！」

ガイロは「WEAPON」のアイコンからでた6つの内の1つのアイコンを押した。

『GAIRO POINTER』

音声が鳴ると右脚に紫の懐中電灯のようなガイロポインターが装着された。

さらに「FINISH」からの「ENTER」のアイコンを2回押した。

『EXCEED CHARGE LEVER2』

右脚を經由し2連続でガイロポインターにエネルギーがたまるとジャンプしサマーソルトをしつつアークオロフェノクに2重のポインターを放つ。





わせた。

制御できなくなりガイロは墜落してしまった。墜落のダメージに呻きながらも操縦桿を抜きトンファーのような物取り出した。

ガイロは再び走り出しトンファーを振るうが全てかわされさらにん粉を浴び火花が散った。そこにみぞおちを思い切り蹴り飛ばされ吹き飛ばされた。

「が…あ…ッ」

腹部を抑えながら立ち上がるうとするがそれよりも速くバタフライオルフェノクが近づいてきた。

「そろそろさよならしてもらいますよ」

とどめの一撃が炸裂しそうになったその時

「じゃあ俺はこんばんは！」

2人の間をマシンハードボイルダーに乗ったDダブルが通り抜けブースターをバタフライオルフェノク目掛けて切り離れた。バタフライオルフェノクは瞬時にそれを回避し少し離れた場所に着地した。

「探しましたよ。蓮夜さん」

「は？何でだ」

「色々知ってそうだったから」

「それだけかよ…」

ガイロは少し呆れながら立ち上がった。Dダブルは右手を軽く回すとバタフライオルフェノクに指差した。

「おいスマートレディ。何企んでるか知らねえがぶっ潰してやる！」

「フフ。できますか」

バタフライオルフェノクは再び上空へ舞い上がった。

「おい天醒 士。アイツ足止めしてろ。俺は王を消滅させる」

「やっぱアレ王様かよ。てかできんのか？」

「できる。ガイロのエクスインクシオンシステムならな」

聞きなれない言葉にDダブルは首をかしげた。

「なんだそれ？」

「オルフェノクの細胞を完全に消滅させる特殊なフォトンブラッドを本来流れている以上の量で技を放つってことだ」

「つまり不死身でも倒せると」

「そう言うことだ。任せたぞ」

ガイロは王のもとへと走り出すがいつの間にか10人のライオトルパー2が王を囲んでいた。



めるとティラノザウルスの尻尾が現れ1回転しながら地面にたたき落とした。

Dオーズは着地するとメダガブリューの刃を撫でた。

「やっぱり強すぎだろコレ。どうなってんだよ…」

プトティラコンボの強さに驚愕していると何かに蹴り飛ばされた。それはもはや蝶としての鮮やかさがほとんどなくなり荒々しい姿のバタフライオルフェノク激情態だった。どうやら自分にあの灰を撒いたらしい。

何とか立ち上がった時には既に目の前にバタフライオルフェノクが蹴りを放っていた。2発目には耐えきれずディフェルに戻ってしまった。

「は！？おい、嘘だろ！？」

驚愕しているディフェルに迫るバタフライオルフェノクの追撃を何とかライドブッカーへヴンで受け止めそれを弾き斬撃をくらわせる。確実に当たったのだがそれをお構いなしに攻撃してきて、ディフェルはあまりの攻撃に吹き飛ばされてしまった。

吹き飛ばされたディフェルにりん粉が放たれディフェルの装甲から火花が散りダメージを負った。三度目の追撃を放つため迫ってきたが

「土君に手を出さないで！」

『KAMENRIDE』

『DEKAE L』

突如放たれたライダーの残像に弾き飛ばされる。その残像は駆けつけた美莉に集まりディカエルへと変身した。

「士君！大丈夫！？」

「こんくらい何ともねえよ。で、見つかったのか？」

「見つかったからここにいんだろ、士」

見ると探していた巧がファイズフォンにコードを入力していた。

『STANDING BY』

「乾さん！」

「わりいな、心配かけて。後でアイツらには謝らないとだが」

巧は目の前のバタフライオルフェノクを睨む。

「先にコイツらを倒してからだな！変身！」

『COMPLETE』

巧はファイズへ変身し両肩を軽く上げるとバタフライオルフェノクの元へ向かいパンチを放った。

ディカエルは加勢しようとするがディフェルに引きとめられた。

「美莉。お前は蓮夜さんを手伝ってやってくれ」

「え？でもあのスマートレディの方が危ないよ」

「それよりももっとやばいんだよ！早く行ってやれ！」

「う、うん！」

デйкаエルはガイロの元へ走り出した。

ガイロはガイロランスで戦い相変わらず圧倒していたが相手は時間稼ぎが目的なためほとんどの攻撃を避けられていた。

そこにデйкаエルのマシンガンモードによる乱射が炸裂し怯んだため攻撃が炸裂した。

「お前は…日々野 美莉か」

「はい。あと苗字か名前の片方で呼んでくれますか？何か違和感あった…」

「今そんなこと言う場合じゃないだろ！」

ツッコミながらもガイロランスを大きく振りまわしライオトルパーver2を薙ぎ払う。デйкаエルもドライバーを使い切り裂いていた。

しかし相手も受けっぱなしなわけもなくアクセレイガン使い一斉に光弾を放ってきた。ガイロとデйкаエルはまともにくらってしまうがデйкаエルは堪えながらカードを取り出し装填した。

『ATTACKRIDE ILLUSION』

するとディカエルの分身が4体現れマシンガンモードで応戦した。連射力では上なためアクセレイガンを押し切り10人全てを吹き飛ばした。

「あとはこれで終わり！」

ディフェルはファイズと共にバタフライオルフェノクと戦い始めた。

ディフェルはライドブッカーヘヴンで斬りかかり、ファイズは殴りかかった。どちらも冷静さを無くしたバタフライオルフェノクには当たるのだがダメージを全く気にせず2人を攻撃する。さすがにダメージの無視などでできず2人は徐々に押されていった。

2人は吹き飛ばされてしまいが即座に互いの銃を強化させた。

『ATTACKRIDE BLUST』

『BIRST MODE』

同時に弾丸とレーザーを連射しバタフライオルフェノクへヒットすると激情態になって初めて怯んだ。それを逃さずディフェルは走り出しカードを装填した。

『ATTACKRIDE SLASH』

ライドブッカーヘヴンをソードモードにすると走りながら一閃した。ファイズはファイズショットを取り出しミッションメモリーをセツトする。

『READY』

ファイズフォンを開き「ENTER」のボタンを押した。

『EXCEED CHARGE』

右腕を通りファイズショットにエネルギーをためるとバタフライオルフェノクの腹部目掛けてグランインパクトを放った。

避けることができずクリーンヒットしたバタフライルフェノクは吹き飛ぶが立ち上がった。だが、既にふらついていた。

「いくぜ士」

「わかってますって」

ディフェルはカードを装填し、ファイズは右脚にファイズポインタをはめ「ENTER」のボタンを押した。

『FINALATTACKRIDE DE DE DE DEFER』

『EXCEED CHARGE』

ディカエルもカードを装填した。



『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEKA  
EL』

ディカエルは分身を消しディカエルドライバーを構えるとディメンションアローシュートを放ちライオトルパーver2を爆破させた。

バタフライオルフェノクの目の前に白い3Dカードと赤いポイント  
ーが放たれた。

それを目掛けてディメンションヘヴンキックとクリムゾンスマッシュが同時に放たれバタフライオルフェノクに炸裂した。

バタフライオルフェノクは青い炎を上げ今にも灰化しそうだった。

「フフフ…これであの方が復活する…」

「誰だよあの方って」

ディフェルが尋ねるとバタフライオルフェノクはこう答えた。

「あの方とはオルフェノクの神の…」

そこで言葉は途切れた。なぜなら突如青白い発光体がバタフライオルフェノクを吸収したのだから。

発光体はディカエルとガイロを高速で跳ね飛ばしアークオルフェノクをも吸収した。

発光体の通ったところにはあの灰が積もっていた。



王（かみ）の夢は滅亡し復活し（後書き）」

竜王「ついに登場、2人目のカエルムだ！」

士「クリエイターオルフェノクか。最初からとんでもないことしやがる」

美莉「いかにも強そうだよ…」

聖麻「研究所吹き飛ばしたって大丈夫なのか？」

竜王「さあ？えー1つすごくどうでもいいお知らせ」

士「何だ？」

竜王「前の活動報告のバトンに美莉のスリーサイズ載せたので興味ある方は見てください（笑）」

美莉「何してるの作者さん！／／／」

士「既に気絶」

聖麻「激しくどうでもいいよなそれ」

美莉「何か傷ついた」

竜王「それではまた次回！」

王（かみ）の夢は滅亡了守護神vs創造神（前書き）

クリエイターオルフェノク戦決着です！

そしてあの人が来ます。扱いが微妙だけど…

それではどうぞ！

王（かみ）の夢は滅亡し守護神vs創造神

クリエイターオルフェノクが復活する少し前

啓太郎はいまだに落ち込んでいる真理を見ても声をかけることが出来なくなっていた。

最初は「大丈夫？」や「元気出して」とかけることができたのだが、どれにも応じることが無く、啓太郎自身も困っていた。

（真理ちゃん相当だなあ。たっくんも素直になればいいのに…）

少々巧のことで文句を言っていると店の中に誰かが入ってきた。来たのは海堂、三原、里奈だった。

「真理ちゃん大丈夫？」

里奈が尋ねてくるが啓太郎はそれに対して少し悲しい顔をした。

「そう……」

それを見て察したらしく里奈の表情も悲しいものとなる。

「乾さん、どこ行ったんでしょ？」

「知ってりゃ苦労しねえよ。真理ちゃんに心配させやがって」

やはり2人も心配していた。海堂はしばらく考え込むと奥の部屋へと進み真理の元へ向かった。

「か、海堂さん！」

啓太郎が止めに行くが既に入ってしまった。海堂が部屋に入ると真理も気づいたらしく顔を上げた。

「海堂…さん？」

「なあ真理ちゃん。今から乾探しに行くがどうする？」

海堂の出した質問は最もシンプルで最も複雑なものだった。

「私は…」

「無理して来いとは言わねえ。だがよ、動かなきゃ何にもならないぜ。あてなんかなくてもいい。とにかく動く。それだけでも何か変わるんじゃないか？」

すると轟音が鳴り響いた。三原と里奈が外に出ると遠くで青い火柱が上がっていた。

「何よあれ…」

「まさかオルフェノク!？」

遅れて海堂が外に出ると溜息をついた。そして奥の部屋まで聞こえるよう叫んだ。

「おい！乾のいる場所がわかった！行くのか!？」

すると真理が奥の部屋から出てきた。

「私も一緒に行きます。巧に会ってしつかり聞きます」

「海堂さん！いくらなんでも危険すぎますよ！」

三原が止めようとするが海堂は連れて行く気らしい。

「ぼ、僕も行きます！」

さらに啓太郎が手を上げたため三原は困った顔をした。

「よし！んじゃ行くか！」

場に合わない明るいノリで海堂が全員を促し火柱の上がった方向へと向かった。

そして場所は変わって研究所

ディフェル、ディカエル、ファイズ、ガイ口の4人はクリエイター  
オルフェノクの放った炎によって地上へと吹き飛ばされていた。元  
々地下最深部にいたためどれほどの威力かが想像出来てしまう。変  
身が解けなかったのが奇跡である。

聖麻はディフェルがかばったことによつてけがは少なかつた。

「大丈夫か？」

「何とかな。それより神様がお待ちかねだぜ？」

振りかえるとあたりから青い炎が上がり、その中央でクリエイター  
オルフェノクは立っていた。

「どうする？これほどの力を目にしても立ち向かうか？」

「ハッ、決まってるんだろ！絶対ぶつ飛ばしてやる！」

ディフェルはライドブッカーへヴンを構え走りだしそれに続くよう  
にファイズとガイ口も走り出した。

ディカエルはディカエルドライバーを構えクリエイターオルフェノ  
クに矢を放つが片手で弾かれてしまった。

クリエイターオルフェノクは2つの葵炎の輪を外すと輪が回転し始  
めた。そして無数の火球が放たれた。

3人はそれを避けながらも進み、ディフェルはカードを2枚装填し、  
ファイズはアクセルメモリーをセットし、ガイ口は「ACCCEL」



と書かれたアイコンを押した。

『KAMENRIDE KABUTO』

『ATTACKRIDE CLOCKUP』

『COMPLETE』

『START UP』

『ACCELERATION』

デیفエルはカブトへ変身しクロックアップを発動、ファイズはアクセルフォームとなって高速移動、ガイロも音声で鳴りガイロフォームに10秒のカウントが表示されると高速移動をした。3人は火球を避けながらクリエイターオルフェノクの元へと一気に距離を詰め、それぞれ一撃は放とうとした。

だがクリエイターオルフェノクは全く臆することなく瞬時に炎の輪を戻し再び爆発を起こした。

それによって大きく吹き飛ばされデیفエルとファイズは元の姿に戻り、ガイロは高速移動が解除されてしまった。

「まだまだ終わらんぞ」

クリエイターオルフェノクは再び輪を分離し回転させた。すると今度は回転鋸のように当たりのものを切断しながら4人へ襲いかかった。

デイクエルはカードを装填した。

『ATTACKRIDE BLUST』

矢を放つと5本に分裂し2本と3本の矢で2つの炎の回転鋸に激突するが少し止まっただけで矢の方が碎けてしまった。

「うそ!？」

「クソ！威力高すぎだろ！」

デイクエルは迫ってきた回転鋸をライドブツカーヘヴンで受け止めるがすぐに弾かれくらくらしてしまう。回転鋸はその勢いを殺すことなく3人を切り裂きさらに先の火球を放ち4人に大ダメージを与えた。4人とも変身は解けていないが立つのがやっとの体力であった。

「ちくしょお、まだ俺は…！」

ファイズが立ち上がると後ろからバイクが現れた。海堂と三原のものであった。

「お前ら、何で…！」

「あんな目立つことすりゃ誰だってわかるだろ。三原行くぞ」

「はい！」

海堂はカイザフォンにコードを入力し、三原はデルタフォンを口元へ寄せた。

『STANDING BY』

「変身！」

『STANDING BY』

2人はそれぞれのアイテムをドライバーへ装着した。

『COMPLETE』

2人はカイザ、デルタへ変身するとファイズの元へ駆け寄った。

「で、あのオルフェノクは何だ？」

「神様らしいぜ」

「そりゃご大層に」

ディフェル、ディカエル、ガイロも立ち上がった。

「美莉、大丈夫か？」

「大丈夫だよ！がんばる！」

「クソツタレが、消し飛ばしてやるよ」

計6人のライダーが立ち上がり身構えた。クリエイターオルフェノクはそれを見て笑いだした。







「くっ…乾…さん」

士は体を起こそうとするが力が入らず再び倒れてしまった。

「死にぞこないの子犬が。処刑してやる」

クリエイターオルフェノクは巧目掛けて無数の火球を放った。

「クソツ！乾！」

「乾さん！くっ、どいて！」

デイカエルとガイロが駆けつけようとするがライオトルパーバー2やオルフェノクに邪魔されて前へ進めない。

士、海堂、三原の3人も立ち上がろうとするが間に合わない。巧に火球が直撃しそうになった瞬間、何者かが巧を抱えて連れ出し火球を回避した。

「うっ…一体誰が…」

何者かに抱えられながら起きた巧はその顔を見て驚愕した。さらにその場にいた海堂、三原も驚き、士に至ってはこの状況なのに目が輝いていた。

その馬をイメージしたオルフェノク、ホースオルフェノクは巧を降ろすと人間の姿へと戻った。

「お前…木場なのか？」

「うん、久しぶりだね。乾君」

巧を助けたのは巧と友人でありながら何度も対立し、アークオルフエノク戦で消滅してしまつた木場 勇治だつた。

「木場！お前なんで…」

「僕にもよくわからないけど気が付いたら霊園にいたんだ。自分のお墓見て驚いたけど。そして久しぶり海堂君」

「なんか知らねえけど良かった…」

海堂は木場が復活したことに驚きながらもうれし泣きした。

実は霊園にオーロラがかぶさり死人がオルフェノクとなつて復活した際、木場も復活していたのだ。

「すげえ！会えないと思つてたけど本物の木場さんだ！」

士は大ダメージにも関わらず立ち上がつてテンションが上がつていた。

「立てるかい、乾君」

「あつたりまえだろ！」

木場が差し伸べた手を掴み巧は起き上がった。

すると啓太郎の車がやってきて中から真っ先に真理が降りてきた。



「巧！」

「真理！なんでここに来たんだよ！」

しばらく沈黙が訪れると真理は何かを巧へと投げた。

何とかキャッチして見るとそれはファイズブラスターであった。

「お前……」

「先にそのオルフェノクを倒して。そのあとしっかり聞くから」

その言葉に巧は驚いていたが小さく笑った。

「わかった」

それだけ言うところクリエイターオルフェノクの方を向いた。

「フツ、木場 勇治の復活は予想外だったが結果は変わらん」

「お前がオルフェノクの神様なのか」

木場の問いにクリエイターオルフェノクは答えた。

「そつだ。我が過去さまざまな死人に2度目の生を授けてやってきた張本人だ。人間を超えた存在へと生き返るとは素晴らしい事だろう。なのに貴様らは下等な人間らしく生きおつて。全くもつてくだらん！我はそうなる原因が人間にあると考えた。ならば人間を滅ぼし全てをオルフェノクへと変えてしまえば人間と同じように生きるオルフェノクはいなくなる。その計画をよりにもよって王を守護す

るための物で邪魔しおつた。貴様らの行いは万死にあたいする！」  
すると士が口を開いた。

「ごちゃごちゃうるせえよ。オルフェノクが人間と同じように生きることがくだらないだと？ふざけんじゃねえよ！オルフェノクだってな同じ人間なんだよ！同じように生きて、同じように仲間と笑いあい、同じように夢を抱けるんだよ！それが出来る人間は下等なんかじゃない。テメエみたいなクソ野郎より遙かに上だ！いくぜ。テメエが人間が下等で、人間と同じように生きようとするオルフェノクが下らないっていうならそんな世界は破壊して、誰もが同じように生きて夢を抱ける世界へ覚醒めくめくさせてやる！」

それを聞いた木場は巧の方を向いた。

「乾君。僕はまだ何が正しいかは確信が持てない。だが、彼の言葉で今何をするかが正しいかはわかった」

それを聞いた巧は

「そうか。士、木場、海棠、三原、美莉、蓮夜、俺達の答えはもう出てるはずだ。だから、後はそれをやるだけだ！」

すると木場の目の前にオーロラが現れすぐに消えた。そこには帝王のベルトの1つであるオーガドライブバーがあつた。

士は苦笑いしながら

「ご都合主義万歳だな」

とやや呆れていた。

木場は驚きながらもそれを拾い装着した。

そこにライオトルパー ver2 とオルフェノクを倒したディカエルとガイロが来た。

「土君、あと少しがんばろ！」

「お前らはすげえよ。それと答えなんてとっくに出てる」

士はドライバーを装着しカードを構えた。巧はファイズブラスターに「555」と入力し「ENTER」のボタンを押した。木場はオーガフォンに「000」と入力し同じく「ENTER」のボタンを押した。

『STANDING BY』

海堂と三原も変身の構えをとった。

「「「「変身!」」」」

『STANDING BY』

士がカードを装填し、巧はファイズブラスターにファイズフォンをセットし、木場、海堂、三原はそれぞれのアイテムを装着した。

『KAMENRIDE DEFER』

『AWAKING』

『『『COMPLETE』』』』

それぞれデیفUEL、ファイズブラスターフォーム、オーガ、カイザ、デルタに変身しディカエルとガイロを合わせ計7人のライダーが集結した。

クリエイターオルフェノクは回転鋸を放つが7人はそれを避ける。

『『EXCEED CHARGE』』』

ファイズがフォトンブレイカーを、オーガがオーガストランザーを横なぎに放つがクリエイターオルフェノクの両手で受け止められてしまう。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE KAE L』』

両手がふさがれたクリエイターオルフェノクにディカエルのディメンションアローシュートが炸裂し大きく吹き飛んだ。だが、ディカエルの後ろから2つの回転鋸が襲いかかる。

『EXCEED CHARGE LEVEL 2』』

ガイロが回転鋸にテオイレイザーを放つとレーザーが2つの回転鋸の間で何度も跳ねかえりしまいには相殺した。

「あ、ありがとございますー！」

「礼なんていい！戦いに集中しろー！」

『 EXCEED CHARGE 』

吹き飛ばされたクリエイターオルフェノクに2つのポインターが突き刺さる。それ目掛けてカイザがゴールドスマッシュを、デルタがルシファーズハンマーを放つ。

クリエイターオルフェノクは輪を形成し爆発を起こそうとしたが

『 プットティラ〜ノザウル〜ス! 』

ディフェルが変身したオーズプトティラコンボ（以下Dオーズ）によって全身を凍らされてしまう。そこに2人のキックが炸裂し吹き飛ばす。

「さっき扱いが不純だったからもう1度変身したら成功したな。もう1回吹き飛ばす！」

案外適当な理由だったことをカミングアウトしつつカードを装填した。

『 FINAL ATTACK RIDE O O O O O O O 』

メダガブリューを取り出しバスターモードへと変化させると銃口に紫のエネルギーがたまる。さらに

『 EXCEED CHARGE 』

ファイズがファイズブラスターをバスターモードにし銃口にエネルギーをためる。

そしてストレインドウムとフォトンバスターが同時に放たれクリエーターオルフェノクに向かっていく。

だが、クリエーターオルフェノクはそれを背中から生えた青い炎の翼で破壊してしまった。

「何!?!」

全員が驚愕する中クリエーターオルフェノクは上空へ舞った。

「貴様ら、よくも我に傷をつけたな…許さんぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

翼から今までにない量の火球が放たれ全員まともにくらってしまった。さらにオーガ目掛けて炎の鞭が襲いかかり体中にくらってしまった。

他のライダーには回転鋸が放たれ全員吹き飛ばされてしまい、Dオーズはディフェルに戻ってしまった。

「クソッ！あれだけ受けたのにまだやんのかよ！」

「どうすりゃアイツに…」

士はファイナルカメンライドの負担によるめきながらも起き上がった。するとライドブッカーヘヴンからカードが2枚飛んできてキャッチした。

1枚目はファイズの真・最強フォームの書かれた黄色のカード、2

枚目は白いファイズのマークの書かれた青いふちのカードだった。

「どうせなら一斉変身の後に出て欲しかったけど文句言ってもらえないか」

ディフェルは青いふちのカードを装填した。

『AWAKERIDE FAFAFIFAIZ』

音声が鳴るとファイズの手元に赤い 아이폰 のようだがガイロフオンとは細部の異なるアイテム、ガーディアフォンが現れた。画面には「CODE 555」と表示されていた。

ファイズはそれに従い数字のアイコンを使い「555」と入力し「ENTER」を押した。

『OPERATION FAIZ』

「させるか！」

それを見たクリエイターオルフェノクは無数の火球を放った。

「これが何かはわかんねえがみんなを守れるなら力貸せ！」

ファイズはガーディアフォンをドライバーに装着した。

『FINALIZE』

するとファイズの体から凄まじい赤い光が放たれ火球を全て破壊した。

スーツの赤が濃くなり、胴体以外のフォトンストリームは4本に増え、金色のフォトンブラッドが流れ、両肩、両腕に小さなキャノン砲が装着され、胴体はカブトハイパーフォームのように横に展開され、展開された装甲が赤く染まった。目の黄色は黄金に輝き、背中のフォトンフィールドローターは形が変化した。これがファイズの真・最強フォーム、ガーディアンフォームである。

「何だと!？」

クリエイターオルフェノクが驚愕する中ディフェルも動いた。

「こつちも行くぜ。見せ場はこれからだつてな」

ディフェルはケータッチを取り出しカードを押し始めた。

「KUUGA AGITTO RYUKI FAIZ BLADE  
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA DOUBLE  
E OOO FINALKAMENRIDE DEFER」

ケータッチをドライバーに装着しネオコンプリートフォームへと強化した。それと同時に体のカードが全てファイズガーディアンフォームへと変化した。

ファイズはファイズブラスターを手にした。するとファイズブラスターの色が濃い赤と金色となったガーディアンブラスターへと変化した。

そして「5246」と入力し「ENTER」を押した。





『BLUSTER MODE』

ガードイアンブラスターを180°展開させブラスターモードになると再び「ENTER」を押した。

『EXCEED CHARGE LEVEL3』

ファイズはポンプ式の銃のように銃身をスライドさせるとフォトンバーストを火球目掛けて放った。エネルギー弾は火球に激突すると大爆発を起こし相殺した。

「なっ…バカな…」

最後の手段を潰され後ずさるクリエイターオルフェノク。

『ATTACKRIDE BLUST』

「ファイア！」

『『BIRST MODE』』

デйкаエルがドライバーから5本の矢を、デルタがデルタムーバーから、カイザがフォンプラスターとカイザブレイガンからレーザーを放ちクリエイターオルフェノクを追撃した。

『EXCEED CHARGE LEVEL3』

そこにガイロがガイロポインターから三重のポインターを放つ。

「はああああああああああああああああああああああああああ





王（かみ）の夢は滅亡（守護神 vs 創造神）（後書き）

竜王「ついに決着だ！」

士「ガーディアンフォームか。夢を守るって言った乾さんにはぴったりかもな」

美莉「しかもすごく強かったよね」

聖麻「翼生やして本気になったクリエイターオルフェノクを圧倒したしな」

士「それと木場さん来たあああああああああ！！！！」

美莉「生き返るだなんて思わなかったよ」

聖麻「でも出番少くないか？」

竜王「それについては許して。あの人は助っ人ポチで出したからあなっただ。絶対感想で書かれるから何も言わないで。木場さん好きの人、本当にすいません」

士「決着ついたし次でファイズ編終了か」

美莉「乾さんどうなるんだろ？」

竜王「それは次回わかるよ。それではまた次回！」

みんなの夢は……（前書き）

ファイズ編最終回！

感動できるようにできただろうか？

みんなの夢は……

まばゆい光と巨大な爆発が晴れるとそこにはディフェルとファイズが肩で息をしながら立っていた。

変身を解いた士は先の戦いのダメージとファイナルカメンライドの疲労で膝を折った。

「はあ… はあ…、乾さんは……？」

士はファイズの方を向いた。ファイズが変身を解くとガーディアフオンは灰化して消えた。そして

巧はそのまま地面に倒れてしまった。

「ッ！乾さん！」

士や他のみんなはすぐに巧の元へ駆け寄った。巧の体はほぼ灰化していてあと数分しかもたないだろう。

「やっぱりあの状態であんなフォームになるのは無茶だったってことか…」

聖麻が辛そうな顔で呟いた。

ガーディアンフォームはブラスターフォームの全身に赤のフォトンブラッドを流す、オーガの最も出力の高い金のフォトンブラッドを

流すという2つの特徴を合わせた形態である。プラスターフォームもオーガもどちらも負担が尋常ではないのに、その2つの特徴をもった形態となると負担は遥かに大きい。それを徐々に体が崩壊している状態で変身するとなれば無事で済むはずがない。

「巧！しっかりしてよ！」

真理が必死に呼びかけるが返事がない。

「おい乾！テメエ起きろよ！」

「乾さん！大丈夫ですか！」

「たつくん！」

「乾君！」

「乾！早く起きやがれ！」

海棠、三原、啓太郎、里奈、蓮夜が呼びかけるが反応は変わらなかった。

「乾さん…グスツ…大丈夫だよね……？」

「泣くなよバカ。助かるに決まってるんだろ……ッ」

泣き始めた美莉をどうにか安心させようとするが土自身も助かる見込みのないことはわかっていた。だからこそ「助かる」という言葉を言うときは辛かった。自分の方が泣きそうになった。



「乾君！君にはまだやることがあるはずだろ！乾君！」

木場が呼びかけるとわずかに手が動いた。そして少しずつ顔を上げた。

「……………木場…そうだな…あと1つだけあったな……………」

聞きとるのがやっとなくらいの小さな声で言うと真理の方を向いた。

「おい……………1回しか言わねえから聞けよ」

「うん…グスツ…」

真理は涙を拭くと巧の顔を見た。

「毎回毎回心配させて悪かったな……………」

最初の一言で全員が驚き真理に至っては再び涙を流した。みんな彼が胸中を明かさない人間だということはわかっていたからこそこの一言は余程のものであった。

「今までお前らを遠ざけてきたのはよ…何より巻き込みたくなかったんだよ。つっても心配させちまったけどな」

巧は苦笑すると言葉を続けた。

「いつもいつもさ、俺なんかのために動いて、正直嬉しかったけどよ……………同時に怖かったんだ。これが原因で傷ついちまうんじゃないかってさ……………でも、結局お前らは駆けつけてくるからああでもやって離すことしか俺じゃ思いつかなくてな。本当に……………悪かった」

「乾さん……」

士は巧が語る胸中を聞き悲しくなった。そして自分に責任を感じていた。それを察したのか巧は士の方を向いた。

「おい、士。お前責任なんか感じてんなよ。お前はお前の守りたいものを守れたんだろ。俺がこうなったのはお前のよくわかんねえ力のせいじゃない。だからお前は胸張れよ」

その言葉に涙を流しながら士は首を横に振った。

「守れてなんかありませんよ……俺が守りたかったのはあなたを含めたここににいるみんなです。あなた一人でも死んだら俺は何も守れない……ッ」

「士君……」

士の言葉に美莉も悲しくなった。士のことをわかっているからこそ……

「お前もか……何で俺なんかのために……」

すると蓮夜が巧に向かって言った。

「俺はお前らに会って少ししか経ってないからあまりわからねえがその疑問の答えはわかる。簡単だろうが、仲間だからだろ」

「仲間……か……」

「そうだろ。俺なんかより遥かに明るい世界にいただろ。こんだけ

たくさんの人に囲まれてよ。全員テメエを信頼した仲間だからこそみんなテメエの為に必死になれるんじゃないかねえのか」

巧はその言葉に小さく笑った。

「お前……変わったな」

蓮夜は鼻で笑うと

「誰のせいだよ、バカが」

皮肉っぽく呟いた。

巧は再び真理の方を向いた。

「なあ、そんなに信頼してたのか？」

真理は泣きながらそれに答えた。

「何言ってるの。グスツ……当たり前じゃん」

「そうだよ！みんなたっくんのこと信頼してたんだよ！心配して当然だよ！」

「ちゅーか俺はお前のことどうでもいいんだけどな」

「みんなあなたのことを心配してるんです！だから死んじゃダメですよ！」

「海堂君！はあ……あんなこと言ってる海堂君も心配してるわよ。そ

れだけあなた信頼されてるのよ」

真理に続き啓太郎、海堂、三原、里奈が巧に言葉を告げていく。

「ちくしょお……ありがとな………」

巧は顔を右手で抑え感謝を表した。おそらく泣いているのだろう。

「乾君。君は生きなきゃならないんだ……だから死ぬな！」

木場が巧に叫ぶ。巧は泣きながら笑った。

「そうかもな……でもわりい。自分のことは自分が一番わかるってな。わかるんだよ。もうじき死んじまうのがさ………」

見ると巧の体は変身を解いた時よりもひどくなっていた。体の殆どが灰色にみえるくらいである。

「ふざけるな！僕や誰よりもオルフェノクと人間の共存を考えてきた君が！いなくなったらどうすればいいんだよ！」

「何言っただよ……それを考えたのはお前だろ。なあ、木場。みんなのこと頼んだ………」

その言葉に木場は叫んだ。

「何言っただよ……何で僕が生き返ったら君が死ななくちゃなんないんだよ！せつかく平和になったのに……何でみんな一緒にいることができないんだよ！」

士も口を開いた。

「そうですね。あなたの夢が人の夢を守ることなら尚更死んじやダメだ。ここにいるみんなの夢を守ってない。みんな個々に夢を抱いてますけど少なくとも今みんなの夢はあなたと一緒に、つまりみんな一緒にいることが夢です。だから……それを守りましょうよ。あなたが死んだらその夢は守れませんから」

巧は全員の顔を見た。全員が首を縦に振った。そして全員で言葉と言った。

「……生きて」ろ」「てください」！巧「乾君」「たつくん」「乾さん」「乾」！」「」「」「」「」

すると巧の真上に一人分の銀色のオーロラが現れ巧をすり抜けていった。

全員その光景に驚いたが巧を見てみんなの表情が明るくなった。

なんと巧の体が灰化する前の元の状態に戻っていた。

「ん？体が元に……どうなってるんだ？」

巧は自分の体を見て不思議がっていたが誰かに手を握られた。見ると真理が両手で巧の右手を握っていた。

「良かった……巧が生きて……」

巧は溜息をつくと会っている手を真理の頭の上に置いた。

「とにかく、心配かけて悪かったな」

すると右側から衝撃が来て倒れてしまった。

「たつくくくくん！！！！良かったあああああああッ  
！！！！」

啓太郎が涙だのとにかくいろんな物でグシャグシャになった顔で抱きついていた。

「せめて顔拭いてこい！気持ちわりい！」

巧は必死に啓太郎を引きはがそうとするが全く離れない。それを見た真理は笑った。

「ちゅーか乾がありがとって似あわねえな。なあ三原」

「え？いや、えつと…」

「確かにあまり言わない分不自然よね」

海堂、三原、里奈もいつも通りのやりとりをしていた。

「乾君。えつと……ただいま？」

木場の言葉に何とか啓太郎を引きはがした巧は苦笑した。

「何だそれ。何で疑問形なんだよ」

「何て言ったらいいかわかなくてね。死にかけの人間が助かるな



「ああ、どっかの学校の制服着た中学生くらいの女にお前がオルフェノクを生んだって言われてな。実際はあの神様だったが」

士はその言葉に首を傾げた。

「あの、他に特徴ないですか？」

蓮夜は思い出したことを士に話した。

「変わったところは錫杖っぽいものを持ってたってぐらいだな」

(錫杖？一体誰なんだよ、その鳴滝ポジション)

士はまた首を傾げたが結局答えがでないので考えるのをやめた。そして巧の方を向いた。

「乾さん。俺たちもう行きますね」

「ん？ああ、世界を旅してるんだったよな。気がむいたら来いよ」

「また服がカレーで汚れた時に来ますよ。それじゃあ」

「ああ、またな」

手を振りながら士、美莉、聖麻は家へ戻った。空を見ると朝日が昇っていた。



家に戻ると3人はまず眠った。夜通しで巧を探して結果朝になってしまっていたからである。

そして夕方。

「よし、決めた!」

士が突如ファイズガーディアンフォームのカードを持ったまま言った。

「何を決めたの?」

夕食の支度をしていた美莉が疑問に思い聞いてきた。

「怪人とかに『何者だ?』って聞かれたら『俺は俺以外なんでもない。覚えられるなら覚えておけ!』と答えることにする!」

ソファアに座って転がっていた聖麻は溜息をついた。

「何だその適当な答え?」



とある風の吹く街。

そこのある場所でまるで炎をイメージした怪人が暴れていた。

するとそこへソフト帽をかぶり腰に何かを差し込むドライバーを付けた男が現れた。

「フィリップ。ドーパントだ」

「わかったよ翔太郎」

別の事務所のような建物でクリップを髪留めにした先の男と同じドライバーをつけたフィリップと呼ばれた青年は何も書かれていない本を閉じ緑のUSBメモリを取り出しスイッチを押した。

『CYCLONE』

場所は戻りソフト帽をかぶった翔太郎と呼ばれた男はそれに続くように黒いUSBメモリを取り出しスイッチを押した。

『JOKER』

そして2人は同じタイミングで左右対称の構えをした。

「変身」

フィリップはドライバーの右側にメモリを差し込んだ。するとメモリは粒子となって消え、同時にフィリップは倒れてしまった。

一方、翔太郎のドライバーの右側には緑のメモリが半分差し込まれた状態で転送された。

翔太郎はそれを完全に差し込み自身の持っていた黒いメモリを左側に差し込んだ。

そしてドライバーをWの形へと展開した。

『CYCLONE JOKER』

音声が鳴ると翔太郎の周りに風が巻き起こり足から徐々に変身した。

右が緑のマフラーをつけ、左が黒いライダーが風の中から現れた。

怪人がそのライダーの方を向くとライダーは左手で指差し2人分の声でこう告げた。

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」



みんなの夢は……（後書き）

竜王「まず最初に長田さんの復活を望んだ方、本当に申し訳ございません！展開上どうしても出すことが出来ずこのような形になってしまいました」

士「やっぱ会いたかった」

美莉「それは作者が悪いよ。とにかく乾さん助かってよかったね」

聖麻「本当に奇跡だよな。にしても蓮夜さんが妙なこと言ってたな」

士「錫杖を持った中学生くらいの女か…何者なんだ？」

美莉「誰なんだろうね？いつか会うのかな？」

士「うん。まあ、今はいいや」

竜王「てわけで次はWの世界です！」

聖麻「早くないか？」

竜王「ちゃんとした理由がある」

美莉「何？」

竜王「俺自身が待ち切れなかった」

士「潰そう」



仮面ライダーディフェルジャンクションその1（前書き）

竜王「てわけで前からひそかに考えてたジャンクション（この後すぐ）を発表！」

士、美莉「イエーイ！」

聖麻「いや、待て作者」

竜王「ん？」

聖麻「ジャンクションなんて小説にいるのか？」

竜王「新しい話読むとき絶対あの最初のページに行くじゃん。あのタイミングで思い浮かべてくれると幸せ指数が30程アップする」

聖麻「なるほどな」

美莉「というかジャンクションなんて変わってるね」

竜王「うん。おかげで描写の文が変になったよ。それではどうぞ」



## 仮面ライダーディフェルジャンクションその1

ジャンクション

プロローグ（トンネル内で逆光を浴びながら歩くディフェル）

### 第1章

1話、2話（トンネルでFARのカードを装填し構えるディフェル）

3話、4話（荒れ果てた町で士がカードを構え「変身！」と叫んだ瞬間ライドブツカーへヴンを持つディフェルに変わる）

6話、7話（宇宙空間のような場所に立つ紅 渡。その際一瞬エンペラーキバの姿が重なる）

8話、9話（夜の市街地でライドブツカーへヴンを構えるディフェルネオコンプリートフォーム）

### 第2章

1話、2話（駅のプラットフォームで武器を振るうディフェルと電王5フォーム）

3話、4話（霧の立ちこめる森で立ち止まり手を払うように振るストーム）

6話、7話（朝の市街地でドライバーを構え弦を放すディカエル）

8話、9話（交差点の真ん中に立つディフェルネオコンプリートフォームと決めポーズをするレジエンド電王）

### 第3章

1話、2話（暗闇で目が発光するディフェルと全身が発光するファイズ）

3話、4話（河原で並び立つディフェルとディカエル）

5話、6話（地下でガイロエッジとガイロランスを振るうガイロ）

7話、8話（夜空でガーディアンブラスターブレードモードを構えるフォトンウイングを展開したガーディアンファイズ）

### 第4章

1話、2話（風都タワーを背に構える、ディフェル、ディカエル、  
W アクセル）

仮面ライダーディフェルジャンクションその1（後書き）

竜王「以上ジャンクションその1でした」

士、美莉、聖麻「ちょっとストップ」

竜王「何？」

士「何だその1って」

美莉「2があるの？」

竜王「一応やる予定」

聖麻「マジかよ……」

竜王「次回は毎度の如く設定です」

士「ジャンクションについての感想よろしくな。それではまた次回  
！」

## 設定ㄥファイズ編ㄥ（前書き）

ファイズの世界のオリジナル設定です。

未登場の設定があるとふざけていますが許してください。  
にしてもガイロの設定多すぎ…

## 設定（ファイズ編）

九条院 蓮夜 20歳 9月16日生まれ

身長173cm 体重64kg

白い髪につり上がった目と怖い印象が見受けられるガイロの変身者でありユニコーンオルフェノクの正体。

人間やオルフェノクを信頼することができない。

その原因は11年前に事故死しオルフェノクへと変貌したことで迫害を受け、周りの生徒や教師を殺害してしまったところを研究員であった父と母に研究所へ送られた。その後出逢った安斎 涼と親しくなるのだが1年後に研究が不完全なままオルフェノクからオルフェノクの体のみを消滅させる実験を行った両親に裏切られ、さらに両親を安斎のなったバイソンオルフェノクに殺されたことにより信じていた人間、オルフェノク全てに裏切られたことだった。最初は巧たちを「旧世代の出来そこない」と罵っていたが、今まで見たことのない巧たちの信頼関係に改心し後半から協力するようになった。

錫杖を持った女に「土がオルフェノクを生み出した」と言われ土に襲いかかったが後に和解し巧たちと同様に協力した。人を呼ぶ時はほとんどフルネームになる。

仮面ライダーガイロ

身長192cm 体重94kg パンチ力4.2t キック力8.

2t ジャンプ力ひと跳び約50m 走力100mを5秒

ガイロフォンによつて蓮夜が変身した4人目のライダー。番号は「916」。

仮面は をイメージして複眼は赤、鎧は灰色で全身に紫色のフトンストリームが4本流れている。出力は銀<紫<金となっている。

ガイロフォンから6種類の武器を呼び寄せするためあらゆる状況に対応することが可能な万能なライダー。

武器にミッションメモリーをセットする必要がなく、そのまま使用できる。

オルフェノクを倒したときの炎は黄色。

「エクスシンクシヨンシステム」が搭載されていて、これはオルフェノクを完全に滅ぼすために花形が取り付けたものであり、エクシードチャージを2回、3回連続で使用することで発動しレベルが上がる。これを使用すると技の威力が上がり技を受けたオルフェノクは紫色の大爆発を起こし灰化する間もなく体内から粉碎されるため不死身のオルフェノクをも倒すことが可能。

## ガイロフォン

ガイロに変身するための紫色のIphoneに似たアイテム。11年前には既に完成していた。

基本は通常のIphone同様の機能に「CODE」というアプリがついていてこのアプリで「916 ENTER」と入力し、ガイロドライバーに装着することで変身する。

変身するとアプリが「WEAPON」「VEHICLE」「ACC  
ELERATION」「FINISH」の4つになる。

## 「WEAPON」

### ・ガイロエッジ

「GAIRO EDGE」のアイコンを押すことで現れるファイズエッジに似た紫色の剣。

性能はファイズエッジを上回る。

必殺技は「スパークルカット」のように拘束用の斬撃波を放ち、「ゼノクラッシュ」のように紫色のポインターに身を包み相手に突撃して切り裂く「テオブレイク」。

威力は通常時20t、レベル2、24t レベル3、30t。

尚、ガイロの武器は全てデータが具現化するように現れる。

### ・ガイロガン

「GAIRO GUN」のアイコンを押すことで現れる銃口の長い紫色の銃。

威力はデルタムーバーのバーストモードを上回っている反面、バーストモードへはならない。

必殺技は全ての標的を砕ききるまで反射し続ける紫色のレーザーを放つ「テオイレイザー」。

威力は「テオブレイク」と同様。

### ・ガイロショット

「GAIRO SHOT」のアイコンを音声を押すことで現れるファイズショットに似た紫色のカメラのようなアイテム。

性能はカイザショットを上回る。

必殺技は相手を殴りつける「テオインパクト」。



威力は通常時 8・2 t、レベル 2、10 t レベル 3、13・3 t。

・ガイロランス

「GAIRO LANCE」のアイコンを押すことで現れる紫色の刃が1本の身の丈ほどある槍。

必殺技はフォトンブラッドを纏った刃で相手に突きを放つ「テオストライク」。

威力は「テオブレイク」と同様。

・ジェットアタッカー

「JET ATTACKER」のアイコンを押すことで背中に現れるライジングアタッカーに似た操縦桿がバルカン砲となっているジェットパック。

性能はライジングアタッカーを上回る。

必殺技は高速低空飛行をして相手にキックをくらわせる「バイオレットスマッシュ」。

威力は通常時 24 t、レベル 2、30 t レベル 3、34・2 t。

・ガイロポインター

「GAIRO POINTER」のアイコンを押すことで右脚に現れるファイズポインターに似た紫色の懐中電灯のようなアイテム。必殺技はサマーソルトをして紫色のポインターを放った後両足蹴りを放つ「エンドスマッシュ」。レベルが上がるごとにポインターが二重、三重となる。

威力は通常時 30 t、レベル 2、35 t レベル 3、40 t。

「VEHICLE」

・オートバジンB

黒いオートバジンで性能はファイズのそれよりも上。

「AUTO BAZINB」のアイコンを押すと「BEACLE MODE」「BUTTLE MODE」のアイコンが現れ押すとそれぞれバイク型の「ビークルモード」、人型の「バトルモード」となる。

ハンドルはフェイスエッジとして使用することが可能。

・ジェットスライガー

「JET SLIGER」のアイコンを押すことで呼ぶことが可能。原作のものと同じ。

「ACCELERATION」

押すことで10秒間高速移動が可能となる。

この時ガイロフォンにはカウントが表示される。

速度はドラゴンオルフェノクの龍人態と同等。

「FINISH」

押すと「ENTER」のアイコンが表示され押すことでエクシードチャージを発動する。

2回、3回と連続で押すことで「エクスインクッションシステム」を発動する。

音声は『EXCEED CHARGE LEVEL（押した回数）』となる。

フォトンブラッドは押した回数分連続で流れる。

ユニコーンをイメージしたオルフェノク。姿はホースオルフェノク激情態と似ているが角が長く鎧も軽いものとなっている。

武器はドリル状の槍で高速移動が可能。

使徒再生を行う際は心臓目掛けて槍を刺す。

ファイズガーディアフォーム

身長プラスチックフォーム同様 体重100kg パンチ力8t キック力16t ジャンプ力ひと跳び70m 走力100mを4.5秒  
「ファイエル」の「アウエイクライド」によって現れた「ガーディアフォーム」をドライバーに装着することで変身したファイズの真・最強フォーム。

変身時に発せられる赤い光には攻撃力がある。

スーツの赤が濃くなり、胴体以外のフォトンストリームは4本に増え、金色のフォトンブラッドが流れ、両肩、両腕に小さなキャノン砲が装着され、胴体はカブトハイパーフォームのように横に展開され、展開された装甲が赤く染まった。目の黄色は黄金に輝き、背中のフォトンフィールドローターは形が変化している。

ブラスターフォームの全身にフォトンブラッドを流す、オーガの最高出力を誇る金のフォトンブラッドを流すという2つの特徴を持っており負担はかなり大きい、その戦闘力はクリエーターオルフェノク完全体を遙かに上回っている。

触れただけでほとんどのオルフェノクは灰化してしまう。

両肩、両腕についたキャノン砲は一撃で弱いオルフェノクを消滅させることが出来るほど。

ガイロ同様「エクスインクシヨンステム」が搭載されているが常時レベル3状態となっている。

必殺技は右脚にファイズポインターを装着し、ガーディアンプラスターに「5532 ENTER」と入力すると「FAIZ POINTER EXCEED CHARGE LEVER3」と鳴り、さらにガーディアフォンの「FINISH」のアイコンから「ENTER」を押すと「TWIN EXCEED CHARGE LEVERMAX」と鳴る。この状態でフォトンウイングを展開して上空へ舞い上がりキックを放つ「ガーディアンクリムゾンスマッシュ（究極クリムゾンスマッシュ）」

威力は55t。

ガーディアフォン

ガーディアフォームへの変身に必要な赤いガイロフォンに似たアイテム。

「CODE」のアプリで「555 ENTER」と入力すると「OPERATION FAIZ」の音声で鳴り、ドライバーに装着すると「FINALIZE」の音声とともに変身する。

変身後はアプリが「BEACLE」「FINISH」の2つになる。

ガーディアンブラスター  
ファイズブラスターがガーディアンフォームの力によって強化されたもので色は赤と金。

フォトンバーストモード

「103 ENTER」と入力し、「BLUSTER MODE」の音声で巨大な銃へと変形した形態。銃身は金色。  
必殺技は巨大なエネルギー弾を放つ「フォトンバースト」

フォトンクラッシュモード

「143 ENTER」と入力し、「BLADE MODE」の音声で巨大な剣へと変形した形態。刀身は赤色。  
必殺技は巨大なフォトンブラッドの刃を形成し相手を切り裂く「フォトンクラッシュ」

フォトンウイング

「5246 ENTER」と入力し、「FAIZ GUARDIAN TAKE OFF」の音声でフォトンフィールドローターが展開されたことで生み出される赤いフォトンブラッドの翼。

翼から無数の光弾を放つ事が出来る。

バタフライオルフェノク

スマートレデイが変貌した蝶をイメージしたオルフェノク。

他とは違い体色は水色で、背中には蝶の羽が生えている。

羽から触れるとダメージを受ける目に見えないほど小さいりん粉を撒き散らす。

飛行速度は蝶とは思えないくらいに速く、その速度を生かしてのキックを主に戦う。

羽の防御力は凄まじく、ディカエル、カイザ、デルタの三人の必殺技に耐える程。

激情態になると蝶としての鮮やかさが無くなった獰猛な姿となる。

クリエイターオルフェノク不完全態

青白い光を放つ光球。

移動すると後を引くように灰を撒き散らす。

この灰は人を死人でさえもオルフェノクに変え、オルフェノクを激情態に変える力がある。

ただ、死人が変貌したオルフェノクは通常の個体よりも弱い。

灰を大量に生み出すために巨大な心臓のようなものを地下に生み出

した。

カエルム内ではこの状態でいたため、序列は15番目。

#### 完全態

アークオルフェノクとバタフライオルフェノクを取り込んで復活した姿。

白に近い灰色でライダーをイメージした、青い炎の輪が交差するように身を包んでいる。

炎の輪を自在に操り、回転鋸、鞭、翼など様々な形にしたり、火球を放つたり、爆発させることで攻撃する。

また、オルフェノクやライオトルパーver2を生み出すことができる。

戦闘力も高く、必殺技を複数受けても耐えた。

ライオトルパーver2

身長175cm 体重85kg パンチ力2.5t キック力4.

5t ジャンプ力ひと跳び約30m 走力100mを6秒

クリエイターオルフェノクが生み出した戦闘員。

姿はライオトルパーが紫色になったもの。

人間態の姿は原作同様。

性能がやや上がっていて、コンビネーション力も高い。



設定ㄥファイズ編ㄥ（後書き）

竜王「ガイロの設定疲れた…」

士「その分強いな。ブラスターフォームと同じくらい強いし」

聖麻「改めて見るとやばいな。色々と」

美莉「真・最強フォームもすごかったね！」

竜王「てわけでゲストにたつくと蓮夜さん呼びました」

巧「たつくん言うな作者」

蓮夜「何で俺まで…」

士「久しぶりです！」

巧「ああ、久しぶり」

蓮夜「また会うとはな…」

美莉「蓮夜さんって俗に言うダークヒーローなの？」

竜王「そりゃイメージが禁書の一方通行だし」

聖麻「マジかよ」

巧「てかお前これからどうすんだよ」



**感想100件&総合100pt越え記念コラボパーティー（前書き）**

今回何か初めて10000字越えてた。

注意

カオス。

文がグチャグチャ。

今回は闇夜の黒鳥さんの「黒と白の物語」とのコラボです！どうぞ

## 感想100件&総合100pt越え記念コラボパーティー

ファイズパラダイス・ロストの最終決戦のドームばりにでかいパーティー会場

「はい！というわけで感想100件&総合評価100pt越えに…」

「……かんぱーい！！！！」

全員グラス（中身はジュース、ただし作者は水）を鳴らす。

「って待て」

すると何故か士が待ったをかけた。それに美莉は首を傾げた。

「どうしたの？」

「感想100件だけだったんじゃないのか？」

「そうだったんだけどさ…その間に評価が100越えしたもんでついでごと」

なるほど、と納得した横で聖麻はどうでもよさそうに料理を食べていた。

「どっちにしろやることは変わらないんだ。別にいいだろ」

美莉はジュースを飲みながら作者に聞いた。

「で、今回は何をやるの？」

「えっとー、超おおまかに話しを振り返った後に死にかけるぐらい楽しいゲームをゲストと一緒にやる」

「『死にかける！？』」

確かに折角のパーティーで「死にかける」なんて言葉を聞けば驚く。しかし作者はその反応を無視して企画を進める。

「では、まず最初に1分でアホの土もわかるパーフェクトディフェル教室やるぞ」簡単に言えば第1章の振り返りだ」

何やら聞き覚えのあるネーミングだが気にしないでほしい。(ここからしばらくは台本式になります)

士「最初は俺がドライバーを拾った瞬間に町で滅びの現象が起こったんだよな」

美莉「うん。あの時は怖かったよ……」

2人は懐かしみながらも少し辛そうな表情をしていた。やはり目の前で人が殺されていくのは辛いことだ。

聖麻「んで逃げながら士が変身したんだよな。一か八かの賭けで」

士「あまりにも怪人が狙うからな。もしかしたらって思って」

美莉「そのあとはすごかったよね。あれだけいた怪人を全部やっつけちゃったんだもん！」

聖麻「元々ディケイドっぽいってわかってたり喧嘩ばかりしてそれなりに戦えたってのが良かったんだろっな」

竜王「さりげにネタバレしたなコラ」

作者の言葉をスルーして話を進める。

士「んで終わった後は…まあ、あれだ！うんあれ！／／／」

美莉「／／／／／／／／／／／」

聖麻「ようはここではまだ気付かなかったが日々野が士を好きになつて、その後2人で帰ったんだ。そんな時は日々野の胸が当たった状態で帰ったんだよね（小声）」

士「とにかくその後渡さんに会ってカエルムや旅のことを聞かされたんだよね」

美莉「渡さん強かったよね。こっちはずっと心配だったよ」

聖麻「話は聞いたが本当に何でお前勝てたんだ？」

士「250人がタキリバキツクで大勝利」

竜王「書いた本人が言うのもあれだけどえげつねえ」

美莉「しかもドライバーの音声がすごくうるさかったよ…耳痛かつ

た」

聖麻「勝った後に日々野がディカエルドライバーをもらって家に戻ったんだよな」

竜王「そんで士が美莉の白下着姿を目撃したんだよね」

美莉「言わないでよ！／＼／＼／＼／＼」

士「俺何にも覚えてないですよ」

といいつつ冷や汗かきまくっている。本当に変態である。

聖麻「そのあと俺が初登場したんだよな」

士「それで3人で旅出てでんおう、ファイズの世界を行って今に至ると…」

美莉「ディフェルの能力ってライダーを真・最強フォームにする」とだよな」

聖麻「考えるととんでもない能力だよな。カエルム圧倒しやがるし」

士「こっから先どうなるか、応援宜しくお願いします！」

竜王「おまけに現在の勢力図公開！」

ディフェル側

天醒 士（仮面ライダーディフェル）

日々野 美莉（仮面ライダーディカエル）

向井 聖麻

ここから先増えるかも？

原典ライダー

仮面ライダー電王（レジェンドフォーム）

仮面ライダーファイズ（ガードイアンフォーム）

残り9人

カエルム

NO・3 日々野 風牙（仮面ライダーストーム）

NO・13 ライ（ヒューマンイマジン）

NO・15 クリエイターオルフェノク

残り12人



「とうわけでいよいよゲスト様7人のご登場だ！」

本当にくだらないことで待たせてしまいすみません…

「7人もいるの!？」

美莉は人数に驚いた。そりゃ7人もいればそうなるだろう。

「どういう人なんだ？」

「案外人じゃなかったりしてな」

「それ半分くらい正解」

「マジかよ!？」

冗談で言ったはずが半分当たったことに驚いた。

「それではゲスト、闇夜の黒鳥さんの「黒と白の物語」からこの7人の登場です！」

会場の奥にあるステージの幕が上がると中学生くらいの7人の少年

少女がいた。

「それでは自己紹介お願いします！」

最初に黒いロングコートを着た肩まである黒髪、ルビーのような紅い瞳の刀を持った少年が自己紹介をした。

「『黒と白の物語』の主人公、火渡 優也だ。宜しく」

次にその隣にいた背中まである黒髪に青い瞳の元気そうな少女が自己紹介をした。

「神道 美優です！宜しくお願いします！」

優也のもう片方にいた腰まである黒い髪に優也と同じくルビーのような紅い瞳の優也によく似た少女がおじぎをしつつ自己紹介した。

「天道 優花です。呼んでくれてありがとうございます」

次にどこにでもいそうな黒い髪、黒い瞳の一見地味な少年が一步前に出て自己紹介した。

「水野 進です！そして竜王さん、地味って言いませんでしたか！？」

自己紹介するなり作者を見て指差した。

「いや、言っていないよ（棒読み）」

本当に身に覚えがない。何のことがさっぱり。

「言ったな！絶対言ったな！」

少ししつこく指摘していると優花がなだめた。

「落ち着いて進。事実を言われたからって怒らないでよ」

「なあ、俺ゲストだよな？優也」

優也に救済を求めたが帰ってきた言葉は

「詰まってるから早く変われ」

救済する気0の言葉だった。

「チクシヨー！！！！」

それを聞いて進は膝から崩れ落ち床を殴りまくったが他の6人はまるでいつも通りという表情だった。

「ねえ、大丈夫かな？進君」

さすがに美莉も心配している。しかし士と聖麻は空気を読んでか特に心配してはいなかった。

進を置いて次に藍色の腰までありそうな髪を束ねたイケメンが自己紹介をした。

「霧藤 総司むとう そうじです。宜しくお願いします」

次に銀髪のアートヘアの10人が10人振り返る程の美女が自己紹介をした。

「黒城くろぎ 流香りゅうかよ。宜しくね」

最後に首までである金髪で目が金色のクールそうな少年が自己紹介をした。

「雷道らいどう 仁にだ。宜しく」

7人を見た士たちは驚いた表情をしていた。

「すぐただものじゃねえって感じがするな…」

「そもそもただものな奴がいるのか？あ、1人いるか」

「言っちゃダメだよ！きつと気にしてるから…」

時すでに遅し。進は完全に落ち込んでいた。その進の肩に優也は手を置き励ました。

「まあ、いつも通りだから落ち込むな」

「お前は俺を励ましたいのか！？それとも絶望のどん底に落としたいのか!?!」

声を荒げる進に美優が声をかける。

「早く行こうよ。みんな待ってるよ」

「そつだな…」

7人はステージを降りると士たちの元へ来た。

「天醒 士だな。宜しくな」

「確か優也だつたな。こつちこそ宜しく！」

こうして2作品の主人公があいさつした。

竜王「「黒と白の物語」を知らない人のために簡単なキャラ説明！  
おもしろいのでぜひ読んでみてください！」

火渡 優也 朱雀の炎と黒刀を使うこの作品の主人公。ツンデレ。  
甘い物好きで女顔だけどそのこと言ったら殺されちゃうぞ

神道 美優 ある力を持ったこの作品のヒロイン。大食いの目覚ましクラッシャー。他の女子曰く胸が大きい。

天道 優花 この作品のもう1人のヒロイン。お酒を飲むと誰よりも強い。胸のことについては指摘してはダメ。

水野 進 物語の中盤である力を手に入れる優也の友達。地味なツッコミキャラ。

霧藤 総司 幻術が得意なイケメン。変態という名の紳士。

黒城 流香 吸血鬼のお姉さんキャラ。胸の事を言つと干からびるまで血を吸われるぞ

雷道 仁 雷の銃使い。天然でテンションが上がるとおかしくなる。

「こんな感じでいい？」

「「「「「「いや、おかしいだろ！」「「「「「「

何故だ…しつかり出来たのに…

「何回も作品で見てきたが朱雀の炎、生で見たいな」

「みんなすごいよね。色んな能力があるし」

「まあ、恋愛もおもしろいし文句なしだな」

聖麻の発言に美優と優花の顔が赤くなる。それを不思議そうに眺める優也。どういふことは察してください。

「え〜しばらく雑談してて。次やることの準備するから」

作者が手を叩きながら言うとおーディンの瞬間移動を使いどこかへ消えた。

「雑談って突然言われてもな…」

士が頭を掻きながら困ると聖麻が全員の前に出た。

「んじゃあよ、ヒロイン3人話すのは確実だな。んで主人公2人も後は…勝手に散るか」

という訳で士と優也と進と総司、美莉と美優と優花、聖麻と流香と仁で別れた。

主人公&進、総司組

「はあ…本当に優也ってリア充だったんだな」

士が落ち込みながら呟く。どの口が言っただやがるんだか。

「何言ってるんだ。俺なんかを好きになる奴がいるわけないだろ。大体モテるかどうかなら士の方がそうだろ」

コツチもコツチであった。これぞ主人公クオリティ。

「んなわけないだろ優也。俺は駄フラグすら立てれないんだぜ。モテっこないって」

この2人のやりとりを見ていた進と総司は2人に聞こえないように小声で話しあっていた。

「この2人見てるとすごくムカつくんだが」

進は青筋を浮かべながら引きつった笑みを浮かべている。きっと殴りたくて仕方が無いのだろう。

「仕方ないですよ。きっとそういう星の下に生まれてしまったんですよ」

総司は笑顔で進を抑えるが心の中は進と同じだった。

その後士と優也でどっちがモテているかについての言い合いが始まり2人はさらに苛立つのだった。

439

### ヒロイン3人組

「えっと…とにかくみんなそれぞれの恋について知ってるんだよね？」

美莉が確認を取ると美優と優花は頷いた。

「美莉さんは士さんが好きなんですよね？」

美優の質問に多少顔を赤くしながらも喋りはじめた。



「だって…／＼格好いいし優しいし…／＼それと普通に話してくれていいよ」

「あ、えつと…わかった」

美優は美莉の言葉に甘え普段通りの喋り方に直した。そして美莉のターンである。

「で、2人は優也君が…でしょ？」

「優也だって格好いいし優しいよ！」

「うん。少し素直じゃないんだけどね」

こうして語りあっていると共通の課題が見つかった。

「…どうして気付いてくれないんだろう…」「…」

3人は一斉に大きな溜息をついた。

聖麻と流香、仁の3人組

「お前らの中でからかって楽しいのは誰だ？」

聖麻が最初に言った言葉である。何て失礼な…だが、流香は微笑みながら答えてくれた。

「そうね、あなたの性格だと美優や優花じゃない？個人的には優也  
なんだけれどね」

優也をからかうというのは後に判明します。

「どっちも迷惑だがな」

仁が冷静な口調で2人に言う。

「あら、いいじゃない。からかうと可愛いし最高よ」

「だよな。見てて笑えてくる」

(この2人、どこかで似ているんじゃないのか?)

仁は若干呆れながら思うと何かを思い出しっや興奮気味に聖麻に尋  
ねた。

「聖麻、仮面ライダーになるにはどうすればいい?」

「(本当にテンションおかしくなりそうだな)運とかじゃないか?」

すると仁は右手を握りしめながら宣言した。

「なら俺は明日から開運グッズを買ってやる!」

「それ関係ないんじゃないかしら?」

流香は仁の宣言に苦笑していた。

こうして話している内に作者が戻ってきた。

「おい集まれー！次行くぞー」

「というわけでゲームやりますー！」

作者の言葉に全員が首を傾げた。その中から優也が尋ねた。

「竜王さん。何をやるんだ？」

作者が指を鳴らすと床にある図がかかれた。

「ねえ、これって…」

「すすくろくよねっ？」

美優と流香が床の図を見て呟いた。

「その通り！これは闇夜さん提案の巨大すごろくです！」

「アイツ…！」

優也が憎しみを込めた表情で拳を握りしめる。それにしても闇夜さんをアイツ呼ばわりなんて失礼な。俺からすれば神なのに。

「ちなみに闇夜さんから優也たちへメッセージがあります」

「何だ？」

仁が聞くと作者はメッセージを伝えた。

「優也たちへ 死なない程度に楽しんでください」

「潰す」

優也が刀を抜こうとする。それを土と進が慌てて止めた。

「落ち着け優也！」

「そつだ！早まるんじゃねえ！」

今にも暴れそうな優也をよそに作者がルール説明をした。

「ルールは2人1組でやります。マスの全てに命令が書かれているので必ずやってください。優勝した2人には景品があります」

士が景品について尋ねた。

「景品って何出すんだ？」

「景品は超高級店のプリン1週間分」

「……プリン!?」「」

プリン好きの美莉、甘いもの好きの優也、大食いの美優は目を輝かせた。

「おもしろそうだな」

「死なない程度に楽しませてもらうわ」

「すげえ嫌な予感……」

「命令がある以上タダですみそつにはないですね」

「がんばるよ!」

「さあて、どうなるかな」

仁、流香、進、総司、優花、聖麻が意気込む。

「ちなみにチームは決めてあるから。コレな」

士、優也

美莉、美優

優花、流香

進、総司

聖麻、仁

「妥当なグループだな」

仁が呟いた。確かにありきたりなグループである。本当は主人公とヒロインで（ry

「何か変なこと言わなかったか？」

士が作者を睨んできた。やっぱり記憶にないな（棒読み）

こうして地獄の巨大すごろくが始まった。ちなみに全20マスである。

「士。プリンのために行くぞー！」

「お、おう。（すげえ変わりようだな…）」

士が巨大なすごろくを投げると目は4だった。

2人が進むとマスに字が浮かんできた。内容は

『トータスアンノウン2匹と戦え』

するとそれぞれ金と銀のトータスアンノウンが現れた。

「さあて、行くぜ優也」

「ああ、コイツら相手なら容赦なくていいな」

士はカードを構え装填した。

「変身！」

『KAMENRIDE DEFER』

デIFエルに変身する光景を見て優也以外の6人は驚いた。

「すごい！生で見れた！」

「かっこいい……」

「特撮ヒーローが現実に出やがった……」

「リアルだとすごいですね」

「不思議なものね」

「一回変身したいな…」

それぞれが反応する中優也は刀身が黒い刀を抜いて構えた。

「士、とつとと決めるぞ」

「もちろんそのつもりだ」

ディフェルはカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEFE  
R』

ディフェルはジャンプしディメンションヘヴンキックを放つ。

「はあああああああああああああ!!!」

くらった金のトータスアンノウンは頭に白い輪を浮かべ爆発した。

優也は刀に炎を纏わせると自分自身を不死鳥の形をした炎で包み込み、その状態で銀のトータスアンノウンに突撃する。

「鳳凰閃火！」

技名を言うと同時に甲羅を構えた銀のトータスアンノウンを貫き、同じように白い輪を浮かべ爆発した。

「すいっー!」



「熱くないのかな？」

「ラノベかよ…」

こちらの3人も驚いていた。1人おかしなことを言っているが。

士は変身を解き、優也は刀を納めた。

「これでクリアだな」

「ああ。で、こういふのばかりなのか？」

作者の方を向いて優也が尋ねる。

「まあそうだね。あっそつて言えるくらい楽な物から命の危険にさらされるくらいのものであるよ」

「さらつとすごい事言わなかったか!？」

やっぱり進がツツコんできた。気にしなくていいのに…

「気にするわ!」

「地の文に書いたこと読むんじゃねえ! あ、次は美莉と美優の番だよ」

2組目の美莉と美優がサイコロを持った。

「コッチもプリンのためにがんばろう!」

「うん！」

ちなみにこの二人偶然にも姿が似ている。パクツてなんかいないよ！サイコロを投げると目は3だった。

2人がマスに立つと命令が浮かび上がってきた。

『1回「ニヤン」って言葉』

「うん少し恥ずかしいけど楽だからいいか。いいよね美莉ちゃん？」

美優が美莉に聞く。美莉も少し悩んだがすぐに決断した。

「これで終わるならいいよ。じゃあ私から。ニヤン！」

「次は私だね。ニヤン！」

こうして何事もなく終わったが3人不審な奴がいた。2人は膝まづいていて1人は何かを持っていた。

2人とは士と総司の変態組であった。

「クソ…リアルで萌えるだなんて…！」

「たった一言でこの威力ですか…何て恐ろしい…」

この2人は紳士じゃない。ただのスケベ野郎である。



「明らかにハズレだろ！マスがどんどん黒くなるんだが！？」

「命令が出てきましたよ……」

2人は恐る恐る命令を見た。その内容は

『ン・ダグバ・ゼバと戦ってこい』

「無茶だろ（ですよ）！！！！」

命令は何とも死亡フラグビンビンのものだった。他のみんなは憐れむような目で2人を見ていた。

「2人ともよくがんばったわ。ここでお別れね」

「いなくなると思うとさみしいな」

「さようなら2人とも。元気でね」

「今まで楽しかったよ。ありがとう……」

「お前らはうるさかったがいい奴だった」

流香、仁、優花、美優、優也からそれぞれお別れの言葉が伝えられる。

「待てよ！何でお前ら俺達が死ぬってムードになってんだよ！？」

「んなこと言ったってどうやってダグバから生き残るんだよ」

聖麻から辛い一言を浴びせられる進。ここで作者はあることを思い出した。

「そつだそつだ。進はまだ知らない人のネタバレになるから戦えないや」

一瞬訪れる沈黙。進は総司の元へ歩みより肩に手を置いた。

「がんばれよ！応援してるぜ！」

清々しい笑顔でサムズアップする進。総司は啞然とした後に慌て始めた。

「待つてください！2人でも勝てる可能性0なダグバ相手にどうやって僕1人で勝つんですか!？」

抗議を続ける総司の後ろに作者が現れた。

「その小屋の中にいるから頑張つてこい！」

襟首を掴むといつの間にか建っていた小屋目掛けてぶん投げた。扉が勝手に開き総司を吸い込むように中へ入れると勝手に閉じた。

以下中から聞こえてきた音。

『わあああああああああああああああああああ!!!!!』



優花が心配すると総司は引きつった笑みを浮かべていた。

「ははは…いやあ、あんなのにいくら同じくらいの力を持ってたとはいえ勝利した五代さんを尊敬しますね」

遠い目で語る総司。さすがに全員心配した。最初の進の時とは大違いだ。

「おい！今余計なこと言つたる！？」

「いちいち地の文にツッコむなって。気にしたら負けだぞ」

「「「かわいこぶつてもキモイだけだからな！」「」」

進だけでなく何故か土と聖麻に罵倒される作者。何がいけなかったんだ…

というわけで次は優花、流香のペアの番である。

「優花が投げていいわよ」

「うん。それじゃあ」

流香に勧められ投げると目は1だった。

「はあ…1か」

「まだ始まったばかりだし気にすることないわ」

落ち込む優花を流香が励ましながらマスの上に立つ。そして命令が浮かび上がってきた。

『箱の中身を1分以内で当てろ』

女子にとっては厳しいゲームだ。2人とも嫌そうな顔をしている。

「ああいうのって気味悪いのが入ってるんだよな」

士が余計なことを呟き、2人の表情がますます嫌そうなものになると箱が現れた。

「ちなみに間違えるとマイナス10秒、最後まで当たらないと上から中身の物が大量に降ってくるよ。それではいちについてよーい…」

「は、早いよ!」

「少し落ち着かせて!」

「ドーン!」

2人をスルーしてストップウォッチを押す作者。慌てながらもまず優花がはこの中に恐る恐る手を入れた。だが入れてすぐに手を出してしまった。

「ひゃっ!何かヌルヌルしてしてる…えっと、ウナギ?」

「違うよー。次は流香の番」

「何なのよ…うっ…」





「んじゃ次は聖麻と仁の番だな」

またもスルーしてゲームを進める作者。何がしたいんやら。

「仁、お前が投げるか？何か投げたそんな感じがするし」

「ああ、じゃあ投げるな」

聖麻に譲られサイコロを投げる仁。目は5だった。

2人が進むと命令が出てきた。内容は

『何でもいいからライダーの変身ポーズやれ』

美莉と美優が当てたものと並ぶくらい簡単な命令だった。

「で、何やる2人とも？」

作者が聞くと聖麻が前に出た。

「んじゃリュウガの変身ポーズで」

「楽なの選んだ!？」

士がツッコむ中聖麻は左手をゆっくりと前にかざす。

「変身」

その左手を腰にスライドさせる。これで終了。

「かつこいいけどつまんねえー」

士がぼやくが聖麻は一切無視した。

「次は仁か」

優也が確かめると仁は何やら遠足前の子供のような表情で士の方を勢いよく向いた。

「士。一番かつこいいのはどれだ!？」

「テンションおかしくなつてたか…」

仁の反応に優也は額に手を当て呆れた。

「それならやつぱ1号だな!あれこそ元祖だ!」

士も興奮気味に言つと仁は増々テンションが上がった。

「ライダー……変身!とお!」

仁は伝説のあのポーズを取りさらには一回転ジャンプまでしてキレイに着地した。

「チクショー俺にもやらせろお!…!」

「私もやりたいいいいいい!…!…!」

士と美優がじたばたしてるがこれは相手にすると本気でマズいので

スルー。

こうして一週目が平和（笑）に終わった。

この後士と優也が『恥ずかしかつたことを語れ』という命令を当て士が何故か鼻血吹いて倒れて優也が女装のことを話しつつ黒いオーラを放出したり、美莉と美優が『理想のキスは？』という命令で赤面しながらぶつ倒れたり、進と総司がまた黒いマスを当てカツシスワーム第1形態にフリーズをやられて2人そろってぶん殴られたり、優花と流香が『自分が恨んだことは？』という命令で2人そろってドス黒いオーラを出しながら美莉と美優のある部位を見つめて無言の解答をしたり、聖麻と仁が『主人公についてどう思う？』という命令について仁が優也について本気で信頼してることを話したため士が聖麻の言葉を期待したら「毎日殺意に満ち溢れさせることが出来るド変態の馬鹿」と言われ士が落ち込んだりという感じで進んでいった。

確信犯ぽかったり展開が速いことについては気にするな！（アंक風に）

現在の様子

士、優也 残り3マス

美莉、美優 残り4マス

進、総司 残り6マス

優花、流香 残り2マス

聖麻、仁 残り5マス

「うっし！これで決めるかっし！」

士がサイコロをぶん投げると目は2だった。

「惜しかったな…プリン…」

優也もプリンのことでも落ち込んでいるがとりあえずマスの上立つ。

『女装してこい！』

2人の表情が固まった。お互いの顔を見た後もう一度マスを見る。

『女装しろって言うてんだろ！』

何か文面が変わっていたがやることは変わらないようだ。

「ふざけるな！絶対断るからな！俺はぜったいやらねえぞ！」

「俺も同じだ！女装したら何か失う気がするんだ！」

優也は必死に嫌がる。士も同じように否定する。だが作者はそれを許さない。

「やっぱりこうなったか…流香、2人を連行して」

「わかったわ」

流香は誰もがときめく様な笑顔で2人の元に向かう。しかし、2人にとってはその笑顔は邪悪なものでしかない。

「さて、2人も逝くわよ」

「字がちがあああああああああああああああああああああああああああああああう!!!!!!!!!!!!!!」

流香によって更衣室へ連行される主人公たち。だが、今のかれらに主人公らしさは全く感じられない。

5分後だよ

「さてまずは士から！出てこい！」

作者が呼ぶとおどおどした様子で士が更衣室から出てきた。

士はツンツン頭はとかされてウィッグをつけたことで優也くらいの髪の長さになり、ウエイトレスの格好をしていた。

「何かかわいい…」



『字が違っつておわ!』

流香の手によって更衣室から出された優也。だが、みんな目を疑った。

どこからどう見ても女の子にしか見えなかったからだ。変わっていたのは顔がある程度化粧をされたこととミニスカメイド服になっていたことである。さらに屈辱からか涙目になっていた。

「「かわいい!」」

美優と優花が歓喜の声を上げる。

「よくあそこまで変わるよな優也って」

「一種の才能ですね」

「優也にとってはただの迷惑だがな」

「自分でも良くできたわ。2人とも最高」

進、総司、仁も優也ゆうやを見てあまりの変わりように驚いていた。流香は女装の出来栄えに満足していた。

「なあ優也。俺ら終わったな」

「ああ、終わった。もう終了だ…」

一方の女装主人公2人からは負のオーラがこれでもかというくらいに溢れ出していた。





2人も落ち込みながら進むと命令が浮かんできた。

『LET'S PUT ON BUNNYGIRL COSTUME!』

「えっと…何て書いてあるの?」

美優が美莉に尋ねる。それに美莉は顔を引きつらせながら読み上げた。

「バニーガールの衣装を着ましょう!だって…」

「え?本当に?」

「…うん」

2人とも沈黙。そして後ろを向くと逃亡した。

「逃がすか!」

2人に飛びかかる2つの影。それは女装主人公たちであった。

ものすごい速さで2人を捕まえた土と優也は一斉にある人物を呼んだ。

「流香!頼む!」

「ちよつと土君!逃がして!」

「優也お願いだよ!逃げなきゃならないの!」

2人が抗議すると土と優也はまたも同時に言葉を発した。

「お前らも1回地獄を見てこい！」

この言葉と同時に死刑執行人である流香がやってきた。

「今日は忙しいわね。行くわよ」

こうしてヒロイン2人組も更衣室という名の死刑執行部屋に連れ去られた。それを見届けた土と優也はハイタッチをした。

「アイツらひどいな…」

「楽しみですね」

「総司。自重しろ」

2人の行動に進と仁が呆れる中、へんたい総司は楽しそうにしていた。

『いつそのことウサ耳もつける？』

『『やめて！』』

中から聞こえた声に土は鼻を抑えていた。

「お前、まさか…」

優也が尋ねると土は、そのまさか、と返した。

(噂通りの変態だな…総司と気が合いそうだ)

優也は心の中で土の変態っぷりに呆れつつ驚いていた。

それから1分後に流香が更衣室から出てきた。

「準備できたわよ！竜王さん！」

「わかった！出てこいって言うても嫌がるだろうから更衣室を消すか」

作者が指を鳴らすと更衣室が跡形もなく消えた。その中には美莉と美優がいた。

「ちょ！何で消えたの！？」

「心の準備が出来てないよ！」

あまりにも突然の出来事に2人は驚いていた。

2人の格好はウサ耳バニーガール姿だった。2人とも胸が大きいためその部分が強調されていた。

「ゴベア！？」

土は当然鼻血を吹いて昇天した。そして

「ガフツ！」

総司は吐血しその場に倒れた。

「ちよつと…やばい…」

進は鼻を抑えて膝まづいた。

「くっ！最初のセリフよりも遥かに破壊力が高い！これで死ぬなら本望…！」

こうして総司へんたいは力尽きた。

「恥ずかしいよ／＼／＼」

「優也に見られた／＼／＼」

2人とも顔が真っ赤になっていた。そして例の通り聞こえるシャッター音。

「やっべ。これ需要ありまくりだわ。配布確定」

「撮らないで！／＼／＼」

美莉と美優が叫ぶが作者は完全にスルーする。

優也は土を起こすために体を揺すっていた。それによって土は起きた。

「おい土。俺達は勝ったぞ」

「ああ、やったな優也」



の一文。進はキレたのか無言で立ち上がると描写はしないが能力を使いマスを粉々に破壊した。

「はあはあ…ふざけんな…」

進は溜息をつくとその場に寝っ転がってしまった。

「とりあえず…私たちの番だよね？」

「ええ、進みましょう」

優花は困りながらもサイコロを投げた。目はゴールするのに必要な2だった。

「やった！ゴールだね！」

「あら。優勝しちゃったわ」

2人はマスの上に立つと字が浮かび上がってきた。

『おめでとございます！賞品として1人につき1週間分の高級プリンを上げます！』

「やったよ！優也と美優と一緒に食べよ！」

「半分は自分で食べて残り半分は優也を呼ぶのに使わせてもらっわ」

優花と流香はプリンを手に入れたことを喜んだ。

「ということとは俺達は無しか」

「もう碌なものはないだろ」

聖麻と仁は大きく溜息をついた。

「てわけで閉会式」

作者は写真をコピーしまくりながら適当に進めた。

「今日は楽しかった。また会おうな」

「何かヒドイ目にあってばっかだったけど呼んでくれてありがとな  
」！  
」

「良いものも見れましたし満足です」

「ああ、また会おうな！いつかそっちの世界に行きたいしな！」

「美莉さん頑張っつてね！応援するから！」



「私も応援するよ。今日はありがとう」

「うん！みんな頑張ろうね！」

「今日は楽しかったわ。ありがとう」

「変身出来て良かった」

「悪いな。うちの作者の暴拳に付き合わせちゃまって」

士と優也と進と総司、美莉と美優と優花、聖麻と流香と仁でお別れの言葉を言つと向こう側に銀色のオーロラが現れた。

「じゃあ行くな」

「おう、またな！」

こうして『黒と白の物語』のメンバーは帰って行った。

パーティーこれにて閉会！

感想100件&総合100pt越え記念コラボパーティー（後書き）

士「今日は楽しかったな。生『鳳凰閃火』も見れたしみんなに会えたし」

美莉「うん！恥ずかしい事もあったけど／＼」

聖麻「士の女装姿は傑作だったな」

士「もう言うんじゃない！」

竜王「よっしゃ！できた！読者プレゼント！」

士、美莉「嫌な予感…」

竜王「読んでくれた方に以下のものをプレゼント！」

- ・士の女装写真
- ・美莉のウサ耳バニーガール写真
- ・美莉の猫ボイス
- ・優也の女装写真
- ・美優のウサ耳バニーガール写真
- ・美優の猫ボイス

竜王「各1億ずつあるんで好きなだけ持ってってください」

士、美莉「撤去しろおおおおおおおおおお！……！！」

聖麻「次回からW編だな。それではまた次回」

PS、闇夜さん、何かご不満な点がありましたら遠慮なく言ってください。覚悟してますので。

**Dの介入／暴走風都観光（前書き）**

おまたせしました！W編第1話です！

前回のジャンクションとともにお楽しみください！（しゅにん）

それではごっごぞー！



士は言い張るが仮に行かせたら間違はなく「迷走」していたらろう。美莉は溜息をつきながら士たちの元へ来た。

「私も向井君の言う通りだと思うよ。それと風都って何？このこと？」

美莉は聖麻に聞いたが答えたのは士だった。

「ああ、ここが『Wの世界』の舞台の風都だ。見たいもんいっぱいあるんだよなあ。鳴海探偵事務所、風都警察署、風都タワーに風麵、ペットシヨップに後……」

ただの説明のはずがいつの間にか欲望をダダ漏れにしている士。その目はきらきら輝いていた。

「ははは……とにかく観光名所なんだね」

「観光名所っていうか他のライダーの世界と違ってそういう場所が多いだけだ」

聖麻は美莉の方から今だに目を輝かせる士の方を向いた。

「いろんなところを見て回りたい気持ちはわかるがまずは鳴海探偵事務所に行こうぜ。あの人たちもディケイドを知ってるし事情は早めにわかってくれんだろ」

「依頼無しに行きたくねえ」

せつかく聖麻が良い案を出したのに士がダダをこねた。士はしばらく



美莉はとりあえず土の腕を話して解放した。

「そつえばここのライダーさんは探偵なの？」

「ああ探偵だ。二人で一人のな」

聖麻の言葉に美莉は首を傾げる中聖麻はある提案をした。

「そもそも依頼なら良いのがあるじゃねえか。最も簡単であの人たちが最も喜ぶ依頼が」

この言葉に土も首を傾げることとなった。



今日も変わらずに良い風が吹くこの街、風都

相変わらずガイアメモリは出回って街の危機は終わらねえ。だが俺は平和になってきたと思っている

そのことをこの心地良い風が証明してくれている

「なあにかっこつけとんじゃあ！」

パソコン、という音とともに窓を眺めていた男がスリッパで頭を引叩かれた。

「いつてえな！何してくれてんだ亜樹子お！」

叩かれた頭を抑えながら男は振り返る。

「いつつも変にかっこつけないでよ！そんなんだから『ハーフボイルド』って言われんのよ！」

「俺は『ハーフボイルド』じゃねえ！『ハードボイルド』だ！」

このソフト帽をかぶり自称『ハードボイルド』を名乗るこの男はWの変身者の一人である左ひだり翔太郎しやうたろう。ちなみに『ハーフボイルド』というのは『半熟』という意味だ。

そして「かっこつけんな！」と書かれたスリッパで翔太郎を引叩いたのはここ「鳴海探偵事務所」の所長の鳴海なるみ 亜樹子あきこもとい照井てらい 亜樹子である。

「うるさい！このハーフボイルド！」

『ハーフボイルド』の部分強調してきたため翔太郎も負けじと悪口を言う。それに対して亜樹子がまた悪口を言う、という状況が続きまるで子供のようにギャアギャアもめる二人。

「うるさいなあ。せつかく検索していたのに邪魔をしないでくれ」

二人がもめる中、右半分の髪をクリップでまとめた不思議そうな青年が奥のガレージから出てきた。

彼の名はフィリップ。本名は園咲そのさき 来人らいじんでWのもう一人の変身者である。

フィリップが来たことで二人は落ち着きを取り戻した。

「俺としたことが…ところでフィリップ。また何か検索してたのか？」

翔太郎が尋ねるとフィリップはフフフと笑い始めた。

「よく聞いてくれたね翔太郎。今回ののは今までで一番興味深いんだ！」

興奮気味で語るフィリップに翔太郎は額を抑えて呆れていた。

「今度は何だ？卵か？ムササビか？それとも畳か？」

とても人が興味をもちそうにないものをあげていく翔太郎。だが、フィリップにとってはそれが興味の対象になってしまいうことがあ

「いや、今回はある現象について調べているんだ」

「現象？」

亜樹子が尋ねるとフィリップは語りだした。

「僕は昨日の夜、どうも眠れなくて検索していたものも興味をなくして暇だから仕方なくテレビを見ていたら深夜アニメをやっていたんだ」

まさかのいきさつから話し始めたフィリップに翔太郎は溜息をついた。

「そのアニメというのが学園物でね。主人公の男の子はかなりモテるんだ。それも学校の女の子のほとんどに！」

だんだん熱くなりはじめたフィリップにさすがの亜樹子も少し眠そうになっている。

「メインである5人の女の子はそれぞれのやり方でアタックするわけだ。誰がどうやったって好意を抱かれていると感じるはずなのに不思議な事が起こったんだ」

翔太郎は仕方なくそれについて尋ねて話を進めようとした。

「不思議な事って何だ？」

「そう！そこが今回僕が調べることとなったことさ！主人公の男の子は何故かその全ての好意に全く気付かないんだ。中にはひたすら

「好き」と言う子もいるのにそれでも全く気付かない。そこで僕は思ったんだ！何故モテる男の子は鈍感なのかってね」

ようやくいきさつを語り終わると翔太郎は、またかよ…、と呟きながら項垂れ、亜樹子はいかにも今日を覚ましたという感じの表情をしている。

「どうだい翔太郎、アキちゃん！ゾクゾクしないかい！」

何とも輝かしい笑顔で語りかけてくるが翔太郎にとっては少し迷惑だった。フィリップが一度何かに興味を持った時の執着心はすごく、これが原因で戦闘に遅れたことも少なくない。

「まさか…いや、それでは根拠がなさすぎる…」などと真剣に考えているフィリップをとりあえず放っておき翔太郎がイスに座ろうとすると玄関の呼び鈴が鳴った。

呼び鈴の鳴る数分前。

士たちは鳴海探偵事務所の元へやってきていた。

「すげえ！本物の事務所だ！」

来るなりさっそく目を輝かせている士。だが美莉と聖麻はツッコミも何もせずスルーした。

「呼び鈴を鳴らせばいいんだよね？」

「そうだな。せっかくだから最高の笑顔で呼び鈴を鳴らしてそのま  
ま中の人が来るのを待つてろ」

「何で？」

「うけがいいからだ」

聖麻の言葉で再び美莉は首を傾げた。

「早く鳴らそうぜ！待ちきれなくて死にそうなんだ！」

士は足を地団太を踏むように足をふみならしている。

「だったら死ぬ」

聖麻は士の言葉に対して冷たく返した。しかし今の興奮状態の士にとつたはそんなのは全く気にならない。



翔太郎がジタバタと抵抗するが土は全く離れない。だが、さすがに迷惑と思ったのか離れた。

「あ、すみません。俺翔太郎さんのファンだもんでつい」

「「ファン!?!」」

土の言葉に喜びの意味で驚く翔太郎と、驚愕の意味でガチで驚く亜樹子。

「えっと君、どうして翔太郎君のファンなの？」

亜樹子が尋ねると土は身を乗り出してきた。

「そんなの決まってるじゃないですか!あの行動力とか左手スナッブとか人情とかかっこいいじゃないですか!」

土の熱弁を聞いて首を縦に振る翔太郎。

「そして何より…」

土が次の言葉を溜めたことで翔太郎と亜樹子との3人の間の空気が張り詰めたものとなる。

「何より…」

翔太郎がつばを飲み込むと言葉が発せられた。

「ハーフボイルドなところですよ!」





「私は日々野 美莉です。で、今転んだのが天醒 土君です。土君が騒いでしまつてすみません」

美莉は亜樹子に向かって深々と頭を下げる。

「別にいいよ。あんまり気にしてないから」

「土、ねえ」

翔太郎が思い浮かべたのは一度だけ会った俺様な通りすがりの仮面ライダー。

(アイツ今頃どんな世界にいるんだろうな)

亜樹子が美莉に顔をあげるように言つと美莉は言う通りに顔をあげた。

「で、3人とも何かあつたの？」

亜樹子が依頼について尋ねると聖麻が話し始めた。

「えつと俺は向井 聖麻です。実は3人で遙々遠くから風都に来たんです。俺ら初めて来たもんでこのこと全然わからないんですよ。なので案内をお願いできないかなあつて」

聖麻の言つた『最も簡単で最も翔太郎たちが喜ぶ依頼』というのはこれであつた。聖麻の言葉に翔太郎は真つ先に聖麻の元へ近づいてきた。

「ここは交番じゃねえんだが俺たちにそれを頼むのは大正解だ。い  
いぜ、この風都を愛するハードボイルド探偵、左 翔太郎がバツ  
ツチシ案内してやる」

聖麻を左手で指さす翔太郎。やはり風都のことを自慢できるとなっ  
て張りきっているのだろう。

「そつえばどこから来たの？」

亜樹子が尋ねると土が起き上がった。

「そうですね、翔太郎さん。これを見ればどこから来たかわかりま  
すか？」

そう言って出したのはディフェルドライバーである。それを見た翔  
太郎は驚愕した。

「お前、それディケイドのドライバーじゃねえか！！何でお前が」

「ディケイドとは少し違いますよ。ただやってることはディケイド  
と同じです」

「まさかああいうライダーが他にいるだなんてな…で、次はこの『  
Wの世界』ってわけか？」

「そついうことです」

なるほどな、と翔太郎は意外にもあっさり納得した。意外と言っ  
てもディケイドを知っていれば当然だが。

「あれ？結構簡単に信じてくれたね」

「そりゃ似たライダーを見てるしな」

美莉と聖麻が会話しているといつの間にか士はフィリップの元に行った。

「フィリップさん、何検索してんですか？」

「ん？君は…」

「ああ、俺は天醒 士です。今何を検索してるか興味があるんですけど」

その言葉を聞いた瞬間フィリップは目の色を変えてイスから立ち上がった。

「本当かい！実は今『何故モテる男の子は鈍感なのか』について調べているんだがゾクゾクしないかい？」

「むっちゃゾクゾクしますね。何で気づかないんでしょうねああいうのって」

「そうなんだ。そこが不思議なんだ…一体何故？うーん」

「普通気づきますよね。俺だったら絶対気づきますよ」

（どの口が言ってやがるクソ野郎！）

聖麻は拳を握りしめながら心の中でキレた。そしてたぶんみなさん

期待しているであろう美莉はというと

「気づく自身があるなら気づいてよ……」

と顔を少し赤らめ指をモジモジさせながら小さな声で呟いていた。それを不思議そうかつ嫌な予感を感じながら見ている翔太郎。それに気付いた聖麻は笑いながら言った。

「ああ、未来のお嬢さんが気づいてくれなくて悩んでるんですよ」

「お、お嬢さん！？／＼／＼……えへへ／＼／」

聖麻の言葉で顔が一気に赤くなり何を考えたのか顔がにへらーと緩んでいた。

翔太郎と亜樹子は土と美莉を交互に眺めた。

「さつきからいくつか答えらしいものは出るんだがどうも根拠がないんだ……」

「案外難しいんですね。そう言う人が実際にいけばいいんですけど」

と語りあう土とフィリップ。当たり前だが土は美莉に好意を抱かれていることを知らないし気づかない。

そして緩んだ顔を隠すように両手で顔を覆う美莉。

「……いるんだね、こうい子」

「ああ、俺も怒りを通り越してビックリだ…」

2人は一斉に溜息をついたのであった。

あの後依頼は依頼なので翔太郎と亜樹子は士たちを連れて風都案内に出かけた。フィリップは当然留守番である。

「まずは…やっぱ風都タワーか？」

「早いような気がするけどいいんじゃない？」

やりとりが終わると翔太郎はとりあえず行く場所を士たちに伝えた。

「まずは風都タワーに行くぞ」

「ひゃっほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

お!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

士が叫んだため翔太郎は思い切り驚いた。そもそも今日だけで何回叫んでいるのか。

「風都タワーってあの大きな風車ですか？」

美莉が少し遠くに見える風都タワーを指さす。

「うん。あれこそ風都の象徴だしね」

というわけで翔太郎たちを先頭に風都タワーへ向かい始めた。

「そういえば、最近事件とか何かありませんか？」

風都タワーに向かう途中、士は翔太郎に尋ねた。

「最近は特にねえな。ただ妙な噂がたってる」

「噂ってのは？」

聖麻が聞くと翔太郎は話し始めた。

「実は何か最近雪女を見たって人が多くてな」

「ゆ、雪女ってあの…よくあるあの妖怪の?」

美莉が怯えながら聞いた。さすがに女の子なのでホラーはダメなのである。

「でも時期外れすぎませんか?」

士の言う通り現在は6月中旬のもうすぐ夏の雪女が出るにしてはあまりにも不似合いな時期である。

「そうなんだよなあ、でも目撃者が言うにはそいつの周りにだけ雪が降ってたらしいんだ。ま、特に人に危害を加えたって情報はねえし気にしなくてもいいんだけどな」

士は目を輝かせ対照的に美莉はやや怯えていた。聖麻はふぐん、と割とどうでもよさそうな反応をした。

しばらく話していると結構早く風都タワーの前、本編でいう最終回でみんなが感動したあの場所である。

「よおし、もうちよつとだな」

「風都くううううううううううううううううううううううううううううううん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「うわぁー、大きい」

「随分立派なもんだな」

「そりゃ30年もこの風都の象徴でいたんだしな」

「そつえばここでフィリップ君が復活したんだよね」

亜樹子が言つと翔太郎は懐かしそつに辺りを見回した。

(思えばそつだな…あん時はもう言葉で表せないくらいに嬉しかったな)

翔太郎がしみじみとするとすすり泣く声が聞こえた。

振りかえると士が涙でグチャグチャになった顔で立っていた。

「あれ…すごく感動しました…復活して良かったですね…」

「お、おう…」

さすがにどう反応していいかわからなかったためとりあえず一歩後ろに下がった。

「士君…ん？」

美莉が呆れていると向こう側に何かを見つけた。何かというよりは誰かが正しかった。

「どうしたの美莉ちゃん？」

亜樹子の言葉で全員が美莉の視線を追う。そこには30代くらいの男がいた。だが、様子がおかしい。足元がどうもおぼつかないのがある。



「あのー！大丈夫ですか！」

「たぶん近づかない方がいいな」

士が駆け寄ろうとしたのを聖麻が止める。

「何で？あの人酔ってるかもしれないんだよ？」

美莉が聞くと聖麻は首を横に振った。

「いや、よく見る。顔に赤みが差してない。あそこまで足元がおぼつかなくなるのは酒が原因なら相当顔が赤いはずだ」

聖麻の言う通りその男の顔は赤いどころかむしろ少し青ざめていた。すると突然男は動きを止め懐からこの街の危機の元凶であるガイアメモリを取り出しスイッチを押した。

『MAGMA』

音声が鳴ると腕のコネクタにメモリを刺し炎をイメージしたマグマドーパントへと変貌した。

「ドーパント！？私聞いてない！」

「さっそくお出ましか」

亜樹子が驚く中、士はドライバーを取り出した。

「人が変身したけど…倒して平気なの？」

「メモリブレイクつてのをやれば人自体に危害はねえよ。アンデッドでも倒すことが出来る俺たちならたぶん出来るはずだ」

士の言葉に納得した美莉はディカエルドライバーを取り出しアローモードへと変化させた。

「おい！美莉ちゃんも仮面ライダーなのかよ！？」

「ここじゃあ女性ライダーは珍しいですよ。一応うちはこの2人がライダーだ」

聖麻が言つと翔太郎は少し不安な顔をした。

「こんな子供が仮面ライダーだなんてな……とにかく今はアイツを止めるぜ」

翔太郎はダブルドライバーを取り出し腰に当てる。するとベルトが勝手に形成された。

「さあて、いくぜフィリップ」

翔太郎は黒いガイアメモリを取り出すとスイッチを押した。

『JOKER』

そしてフィリップが緑のサイクロンメモリを押して変身…

しなかった。フィリップから応答がないのである。

翔太郎は苛立ち始めジョーカーメモリを連打し始めた。

『JOKER JOKER JOJOJOKER』

やはり反応がない。

「あれ？大丈夫なの？」

「いつも通りだからいい。先に何とかするぜ」

美莉が心配するが士がそれを無くす。

2人はそれぞれ変身の準備をした。

『KAMENRIDE』

士がカードを構え、美莉が上空にドライバーを構える。

「変身！」

『KAMENRIDE DEFER』

『DEKAER』

士がカードを装填してディフェルに、美莉が上空に矢を放ちディカ

エルに変身すると駆けだした。

マグマドーパントは火球を放つがディカエルが矢を放つことで全て撃ち落とされてしまった。

ディフェルはライドブッカーヘヴンをソードモードにして刀身を撫でると素早く切り裂いた。

「はあ！おりゃ！」

そのまま5発の斬撃を放ちさらにキックで吹き飛ばした。

一方翔太郎は

『JOJOJOJOJOJOJOJOJOJO JOJOKER JOJOKER』

半分遊びに思えるリズムでメモリを連打していた。するとようやく反応があった。

『もう、さっきからづるさいなあ』

「んなこたあどうでもいい！ドーパントだ！早くしろ！」

フィリップはうんざりしながら緑のサイクロンメモリを取り出しスイッチを押した。

『CYCLONE』

そして翔太郎もちゃんとスイッチを押す。





「何？どうしたの？」

デイクエルがディフェルに聞くがわからないようだ。

「あんな状況見たことねえ……」

3人が茫然とする中さらに異変が起こった。

『LASER』

どこからか別のメモリの音声が鳴るとマグマドーパントの姿が変わり、両腕に銃口のついた銀色のレーザーパントへと姿を変えた。

「別のドーパントになった!？」

「おい!どうなってんだフィリップ!」

『あんな現象を見るのは僕だって初めてだ!』

「な、何で!？」

全員が予想外の展開に驚愕した。レーザードーパントは両腕を構えた。

「ガアアアアアアアアアアアアアア!……!」

方向とともにレーザードーパントは光線を乱射した。

「ぐああああああああああああああああああ!……!……!……!」





Dの介入／暴走風都観光（後書き）

竜王「やっとかけた！」

士「やっと会えた！」

美莉「今回ずっと士君はしゃいでたよね」

聖麻「バカみたいにな」

士「バカって言うな！翔太郎さんからサインもらっちゃまった！一勝の宝物決定！」

聖麻「フィリップさんも相変わらずだな」

美莉「妙なこと調べてたよね…」

士「今回伏線もそれなりにあったな。雪女とか姿が変わるドーパントとか」

竜王「後者についてはちょっと批判されるかも…」

美莉「次回も頑張ってください！」

## 迫りくるM/悪化する闇(前書き)

竜王「さっそくですが今回も微妙です」

士「読む前に楽しみを潰すなよ……。てか何で最初から俺がいるんだよ」

竜王「声優発表するから」

士「登場人物紹介でやったじゃねえか」

竜王「とりあえずこの場でもう1回発表するんだ。というわけでもずは基本の3人!他のキャラについてはあとがきで」

天醒 士 イメージCV 阿部 敦(とある魔術の禁書目録 上条 当麻)

日々野 美莉 イメージCV 高橋 美佳子(緋弾のアリア 星伽 白雪)

向井 聖麻 イメージCV 鈴木 達央(バカとテストと召喚獣 坂本 雄二)

竜王「原作ライダーは原作通りです。それではどうぞ!」

## 迫りくるM/悪化する闇

レーザードーパントの光線が直撃し、3人は爆発に巻き込まれ吹き飛ばされてしまった。

「くっ…何なんだよ…！」

「いたたた…」

「クソッ！本当に何でああなるんだ!？」

3人とも大ダメージを受けたが何とか無事だった。3人はすぐに起き上ると再び構える。

「原因がわからない…何なんだあの現象は？」

「とりあえずメモリブレイクすりゃ2つとも出るはずだ！」

「あ、ああ…ならこれでいこう」

フィリップは疑問に思っているようだがWはサイクロンとジョーカ  
ーのメモリを抜き黄色と青のメモリのスイッチを押した。

『LUNA』

『TRIGGER』

そしてルナメモリとトリガーメモリを差し込みドライバーを展開す  
る。

『LUNA×TRIGGER』

メロディーが流れると右が黄色、左が青のルナトリガーへとハーフトエンジした。

「んじゃ反撃といきますか」

ディフェルはライドブッカーへヴンをガンモードに変えカードを装填した。

『ATTACK RIDE BLUST』

引き金を引くと複数の光弾がレーザーガードパントに放たれる。しかしレーザーガードパントはそれを光線で破壊し、さらに連射してきた。

「うわぁ！もう、危ないからこれ！」

ディカエルは光線に腹を立てながらカードを装填した。

『ATTACK RIDE EYE』

複眼が一瞬発光すると連射されたレーザーを見切り最小限の動きでかわし矢を放つ。矢は光線のわずかな隙間を通り見事にヒットした。

「2人ともやるな。じゃあこっちもお返しにくらっとけ！」

Wは左胸についでいたトリガーマグナムを構え黄色の光弾を放つ。レーザーガードパントは光線を放ち潰そうとする。





聖麻の言葉の後、亜樹子が救急車を呼び風都病院へと搬送された。  
いまだに意識不明のようだ。

5人は面会が出来ないということで暗い面持ちのまま病院の廊下を歩いていた。

「なあ、お前の技ってメモリブレイクは可能だよな？」

翔太郎が土に尋ねてきた。

「ええ、可能ですよ。ディフェルもディケイドみたいに特殊な条件じゃないと倒せない怪人を倒せるようになってるんで」

「そうか…（チクショー、何疑ってたんだよ俺は…）」

翔太郎は額に手を当てた。そのまま無言で受け付けのロビーまで行くと思なれた人物がいた。

「あ、竜君！」

亜樹子が呼ぶとその赤いジャンパーを着た男は振り返った。

「ん？ 所長、それに左か」

彼は風都警察署に勤めるアクセルの変身者であり亜樹子の婚約者である照井 竜である。

「よお、照井。こんなところでどうしたんだ？」

翔太郎が尋ねると照井は話し始めた。

「実はさっきドーパントを見かけてメモリブレイクして連行したんだがあまりにも目が覚めなかったから確かめたら脈が止まってただ」

照井の話聞いた5人は驚いた。そして亜樹子が尋ねる。

「ねえ竜君。そのドーパントって姿が変わらなかった？」

「ああ、最初はバードでその後にコックローチに変わったが…まさかそつちも」

「やっぱりか…こつちもマグマからレーザーにな。フィリップもわからないらしいんだ」

「そつか…」



照井は難しい顔をした。あのフィリップでもわからないとなると相  
当な事である。

「ところで左」

「なんだよ？」

照井に尋ねられ翔太郎は首を傾げる。

「そこにいる子供たちは誰だ？被害者か？」

照井の質問に翔太郎は苦笑いしながら答えた。

「信じられないかもしれないが、このうち2人が仮面ライダーだ」

「何だと!？」

照井が驚く中美莉が話しかけた。

「私とその…目を輝かせてる子がそうです」

見ると明らかに周りとは違う表情をしている少年が一人。言わなくては  
つてわかるだろう。

「本物の照井さんだあムグウ!？」

「病院では静かに」

叫ぼつとした士を後ろから美莉が口を抑える。

「むぐ！…んぐう！！！！（胸が！！胸があ！！！！）」

暴れている理由は全く別なことなのだが周りは気づかない。やがて土はぐったりして静かになった。

「照井さんはどういうお方なんですか？」

ライダーを知らないため美莉は照井に尋ねるが

「俺に質問をするな」

いつも通り断った。さすがに美莉も、えー、といった表情をしている。

「そのくらい答えてあげなよ竜君」

「す、すまない…つい」

亜樹子に言われ反省する照井。こつ見えて亜樹子には頭が上がりな  
いのだ。

「照井は風都警察署の超常犯罪捜査科の課長で仮面ライダーだ」

翔太郎が照井の代わりに美莉に説明する。警察という言葉で美莉は  
すごく関心したようだ。

「そうなんですか！よろしくお願いします」

美莉は丁寧にお辞儀をする。

「ああ。で、本当に仮面ライダーなのか？」

照井の疑問に美莉はポーチを開き中からドライバーを出した。

「これで変身するんですよ。そっちは違ってカードで」

「カード？」

照井はディケイドを知らないためカードと言われてもピンとこなかった。

「そうか、照井はディケイドを知らなかったな」

翔太郎は照井におおまかにディケイドのことを話した。

「じゃあ、この子たちはその世界を旅するライダーと同じ種類というわけか」

「そういうことです」

答えたのはいつの間にか復活した士だった。さすがに照井も驚いている。

「復活早いな。胸当てられてたから今日はもう起きないと思ったが」

聖麻は士の復活に呆れていた。しかもどうやらさっきのことは言わなかっただけで気づいていたようだ。

「え…当たってた…？／／／／」

当然顔が赤くなる美莉。主人公ならラツキースケベは付き物となるらしい。

「せっかく照井さんに会ってアクセルも見えないのに起きないわけないだろ！」

士は相変わらず士だった。士が鈍感と知っている翔太郎と亜樹子は同じことを考えていた。

(何故美莉ちゃんのことには気づかない…)

「とりあえず事務所に帰りませんか？フィリップさんが終わってれば調べることが出来ますし」

聖麻の言葉で一行は事務所に戻ることとなった。

「翔太郎！聞いてくれ！ついにわかったんだ！」

事務所に帰るなりこれである。とりあえず調べ終わったのは都合良かったが。

「マジですか！？何でなんですか！」

士は自分がフィリップの調べてる「モテる鈍感少年」ということに気づかずに食いついた。

「何故気づかないのか。それは自己暗示だったんだ！」

「自己暗示なあ？」

翔太郎もとりあえず聞いてみる。

「ああいう少年は自分を過小評価しすぎているんだ。自分がかっこよくない、絶対モテないと。その結果自分に向けられるそういつた類の感情に全く気付かなくなってしまっただ。これが答えさ！」

「ああ、そうか。よおおおく分かった。だからあの姿が変わるドーパントについて検索してくれ」

翔太郎はとつと要件をすませるためフィリップに頼んだ。

「そういえばそうだった。わかった」

そういうとフィリップはガレージへと入っていき士たちもそれに続く。ちなみにガレージのホワイトボードは白い部分がないくらいに先のこと書きこまれていた。

「検索を始める」

フィリップは両手をゆっくりと広げていく。するとフィリップの精

神は真っ白な空間に無数の本棚という不思議な場所にとんだ。これは地球の記憶の全てがある「地球の本棚」である。

『キーワードはマグマ、レーザー、変化』

キーワードを言うと次々と本棚から本が抜き出され、本棚が遠くへ飛んでいく。そしてフィリップの目の前には複数の本が並んだ。

『ダメだ。やはり1つに絞れない』

フィリップはとりあえず目の前の本を読んでいくがこれといったものはなかった。

「やっぱりキーワードが足りませんか…」

土ががっかりした様子で呟いた。

「ん？すまない左、フィリップ。言い忘れていたことがあった」

突然照井が何かを思い出した。翔太郎や土たちは耳を傾ける。

「実は3日前から行方不明が多発している」

「行方不明？」

行方不明というのはガイアメモリ関係で何回かあったが照井の表情を見る限り深刻なようだ。

「3日前に1人、2日前に3人、昨日に4人、そして今日の午前0時から正午にかけて」

照井は一瞬ためるとんでもない人数を言った。

「20人だ」

「……20人!?」

全員が一斉に驚愕した。

「20人つて増えすぎだろ!」

「28人も3日で……」

翔太郎が声を張り上げ、亜樹子が呟いた。

「でも、あまりにもペースがおかしくないか?」

聖麻の言う通りペースにはらつきがありすぎる。徐々に増えいるが、昨日と今日で16人も増えている。

「照井さん、何か被害者に接点とかないんですか?」

美莉が照井に聞くと今度は答えてくれた。

「それが全くないんだ。規則性も皆無だ」

「つまり……無差別?」

「……そういうことになるね」

士の言葉にフィリップが頷いた。

「今回の行方不明と変化するドーパントってのは関係があるのか？」

翔太郎が顎に手を当てて考える。

「よくわからないが同じタイミングで起きた以上、関係性があると思われるだろう」

「そうなれば情報収集に行きましょう！」

士が若干高めのテンションで叫ぶ。彼はウォッチャマン等のサポーターに会うのも楽しみにしている。

「そうだな。これ以上被害を出さねえためにも行くか」

こうしてフィリップ以外の6人は再び外へ出ることとなった。

「何か物騒だよな。行方不明に変わったドーパント、さらには雪女までね」



亜樹子の言葉をよそに士は考えていた。

「うーん、もしかしたら雪女も関係があるのか？」

「わかんねえな。翔太郎さんが言うには危害は加えてないからな」

聖麻も一緒に考えていたが当然これといった答えは出ない。

「ただ、わかつてるのは変化するドーパントは人間の姿の時ふらついているってことだけだな」

「ああ、ただメモリブレイクすれば昏睡状態か…」

翔太郎は少し悲しそうな顔をした。やはり待ちの人が危険にさらされてるのは辛いようだ。倒さなければ街の人が襲われ、倒せばその人は起きない。倒した時のメリットが何もないのである。翔太郎はそれを天秤にかけることも出来ない。どちらも救うことが彼の優しさである。

「そついやどこに向かっているんですか？」

「ん？最初はクイーンとエリザベスのとこだな。この時間ならいつもの場所にいるだろ」

そう言って再び歩き出した瞬間、士の足元が撃ち抜かれた。

「な！」

士は突然の出来事に数歩下がった。それに気づきみんなが駆け寄る。

「おい士！大丈夫か！」

「何とか…で、犯人お出ましってどこですか」

「相手が射撃なら私が行くよ！」

美莉はドライバーを取り出しカードを装填した。

『KAMEN RIDE』

「変身！」

『DEKAER』

美莉は矢を上には放ちデイカエルへ変身した。

「初めて使うカード、いくよ！」

デイカエルは1枚のカードを取り出し再び装填した。

『ATTACK RIDE SENSE』

このカードはデイカエルの感覚をさらに上昇させるものである。デ  
イカエルは感覚を研ぎ澄ます。そして何かを感じ取りやや上を目掛  
けて矢を放つと何かと相殺した。

「4人とも早く行って！また狙われちゃうから！」

「本当にお前1人でいいのか！？」

デイカエルは頷くとビルの屋上へとジャンプしていった。

「とにかくまずいな。一体何で俺達を…」

翔太郎が考えていると近くで悲鳴が聞こえた。

「次から次に！どうなってんだよ！」

悲鳴のあった場所へ向かうとバイオレンスドーパントが暴れていた。

「コイツも変化するドーパントなのか？」

「わかんねえが可能性は高いな。とつとと決めるぜ」

翔太郎がドライバーを取り出した瞬間スタッグフォンが鳴りだした。翔太郎がタイミングの悪さにいらつきながら出るとフィリップの焦った声が聞こえてきた。

『翔太郎！変身だ！』

「落ち着け！何があったってんだよ！」

『事務所に来た男がドーパントになって襲われているんだ！』

「クソッ！こつちも今日の前にドーパントがいるんだぞ！」

翔太郎の声を聞き土が話しかけた。

「フィリップさんが危ないならそつちを優先してください！俺やりますから！」

「じゃあ頼むぜ！」

士はドライバーを装着しカードを装填した。

「変身！」

『KAMEN RIDE DEFER』

士はディフェルに変身するとバイオレンスドーパントに向かっていった。

数分前。

フィリップが検索しているとドアが開く音がした。

「ん？誰だい？」

ガレージから出るとそこには眼鏡をかけた男が立っていた。そしてその男は突然殴りかかってきた。

「くっ！」

何とか回避するとそのままドアを開け事務所から離れた。しかし相手の男も追ってきていた。

フィリップは立ち止まると男に話しかけた。

「君は一体何者なんだ！」

「そうですね。我々の目的のためにあなた方を殺しに来ただけ言っておきましょう」

丁寧な口調で話すとガイアメモリを取り出した。

『STATUS』

男は手の甲にメモリを差すと全体的に機械的なフォルムをした色が青のステータスドーパントへと変貌した。

そして現在に至る。

翔太郎がドライバーを装着したのかフィリップの腰にダブルドライバーが装着される。

「おいで！ファング！」

フィリップが呼ぶと白い恐竜の形をしたファングメモリが現れフィリップの手の上に乗った。フィリップはファングメモリをメモリモードへ変形させた。

一方の翔太郎もジョーカーメモリを取り出した。

『JOKER』

『FUNG』

「「変身！」」

普段とは逆に翔太郎が先にメモリを差し込み倒れた。

フィリップのドライバーにジョーカーメモリが差しこまれさらにフ  
アングメモリを差し展開した。

『FUNG×JOKER』

フアングメモリの恐竜の口のような形をした部分を倒すと右が白、  
左が黒で全体に棘が生えたフアングジョーカーへと変身した。

『何だよいつ！』

「わからないが僕たちを狙っているらしい。気をつけよう」

そしてWとステータスドーパントは一斉に飛びかかった。

デйкаエルはドライバーを構えていた。その視線の先には右手にス

ナイパーのような物をもった白いライダーがいた。

そして2人は同時に矢と弾丸を放ち相殺した。

デйкаエルはジャンプしてそのライダーの元へ着地した。

そのライダーは全体的に白く身軽そうな形をしていた。眼は片方しかなく色は緑。ドライバーを見ると『A』と書かれていた。

「何で土君を狙ったの？」

デйкаエルの問いにライダーは答えた。

「計画の邪魔だからだ」

「次狙ったら許さないよ」

デйкаエルは少し強めの口調で言うと矢を放った。だが、ライダーの姿が消えてしまった。

デйкаエルは『アタックライド センス』を使っていたため場所がわかった。

後ろにいつの間にかスナイパーではなく短い刀を持ち、振りかざしたそのライダーがいた。

デйкаエルは後ろを振り返りながらドライバーを横に振った。

そして署に戻ろうとしていた照井にも不審な金髪の男がガイアメモリを持って立っていた。

「貴様、何の用だ」

「殺しに来たんだ。警察相手にはそれだけ語ればいいだろ」

照井はその返答に小さく笑うとバイクのハンドルの形をしたアクセラドライバーを腰に装着した。

「そうだな。あとは力づくで吐かせてやる」

照井はアクセラメモリを取り出しスイッチを押した。

『ACCEL』

「変…身！」

アクセラメモリを差し込みグリップをひねった。

『ACCEL』



音声が鳴ると赤いバイクをイメージした仮面ライダーアクセルへと変身した。

それを見た男もガイアメモリのスイッチを押した。

『METEOR』

男はメモリを首に差すと赤と青の線がところどころに入ったメテオドーパントへと変貌した。

それぞれの場所で4人の戦いが繰り広げられようとしていた。

迫りくるM/悪化する闇（後書き）

竜王「てわけで先に他の声優発表！」

日々野 風牙 イメージCV 浪川 大輔（家庭教師ヒットマンリ  
ボーン ボンゴレ？世）

ライ（ヒューマンイマジン） イメージCV 釘宮 理恵（FA  
IRY TAIL ハッピー）

クリエイターオルフェノク イメージCV 福山 潤（コードギア  
ス 反逆のルルーシュ ルルーシュ）

九条院 蓮夜 イメージCV 岡本 信彦（とある魔術の禁書目録  
一方通行）

竜王「こんな感じですよ」

美莉「クリエイターオルフェノクの声って前はキバットの人がって  
いてたよね？」

竜王「そうなんだけどさ、後々考えたら何か違う気がしてそしたら  
素晴らしい皇帝ボイスの福山さんを見つけたんだ」

聖麻「で、今回の話しだが一気に敵が来たな」

士「スナイパー持ったライダーにステータス、メテオ、さらには姿  
がかわりそうなドーパントまでな」

美莉「どうなるんだろうね？敵の狙いもわからないし」

竜王「見てて思うよ。今回本当に微妙」

士「それではまた次回」

襲いかかるA /そして彼女は現れる(前書き)

今回から音声のかっこを変えました。

今回も色々とおかしいでしょうがどうぞ。

襲いかかるA /そして彼女は現れる

WVSステータスドーパント

「はあ！おら！」

「ふっ！はああ！」

Wとステータスドーパントは激しい肉弾戦を繰り広げていた。

殴られれば殴り返し、蹴られれば蹴り返す。だが、どちらの攻撃も全て防御される。そんな一進一退の攻防を戦闘開始から続けていた。

Wは一旦間合いを取るため後ろにジャンプし構えた。

『クソッ！こいつファンゲジョーカーの動きに追いついてきやがる  
』！』

「それだけ強力なドーパントということだね。土や美莉ちゃんのこともあるから早めに片付けよう」

そう言うとファンゲメモリの鼻先のタクティカルホーンを1回弾く。

【ARM FANG】

右腕に鋭い牙の形をしたアームセイバーが装着されると、再び飛びかかっていった。

Wはアームセイバーで斬りかかるがそれもあえなくかわされてしま  
う。しかしそれに怯むことなく連続で斬撃を放っていく。

「なるほど。さすがはこの街のヒーローですね。中々手強い」

『はっ！褒めても何も出ねえぞ！』

翔太郎の声とともにキックがステータスドーパントの腹部に直撃し  
吹き飛ばした。

「くっ、少々まずいですね。では、こちらも本気を出しましょう」

ステータスドーパントは片膝をついた状態から起き上がると一瞬ま  
るでゲームで何かの性能を上げたときのような緑のオーラを放出し  
た。

「それでは行きますよ」

ステータスドーパントはWに向かって走り出した。だが、そのスピ  
ードは先ほどまでとは比べ物にならなかった。あっという間にWの  
懐まで潜り込むと今度は赤いオーラを放出し殴り飛ばした。

「『がはあ！？』」

反応出来ずにモロにくらったWは何故か10m以上も吹き飛ばされ  
てしまった。

『何だ？さっきよりパワーとスピードが上がってやがる！』

「とにかくあのパワーはまずい。遠距離で攻めよう」

Wはタクティカルホーンを2回弾いた。

【SHOULDER FANG】

腕からアームセイバーが消えると、それに代わって右肩にシヨルダ  
ーセイバーが装着される。

「『はあ！』」

シヨルダーセイバーを外しステータスドーパントにブーメランのよ  
うに投げつける。シヨルダーセイバーはまるで意思があるかのよう  
に動きまわりステータスドーパントを切り裂いていく。しかし、切  
り裂かれる直前に青いオーラを放出したステータスドーパントには  
傷一つつけられなかった。

「シヨルダーセイバーが効いてねえ！？」

翔太郎は驚愕していたがフィリップは何か気づいたようだった。

「そうか。…翔太郎、あのメモリは厄介だ。あのメモリの能力は恐  
らく自分の性能を自在に変化させることだ」

フィリップの言葉を聞いていたステータスドーパントは拍手してい  
た。

「さすがWの頭脳なだけありますね。正解です」

「素直に言っているのかよ」

「言ったところでどうにもなりませんので」

「行くよ翔太郎！このままじゃ奴にやられるだけだ！」

Wはシヨルダーセイバーを構え走り出す。同時にステータスドープアントも緑のオーラを放出し、高速移動で距離を詰めてきた。

「くっ！」

何とか身を捻ることで高速移動をかわし、即座にシヨルダーセイバーを投げつける。

ステータスドープアントは黄色のオーラを放出すると後ろをを向いたままシヨルダーセイバーを掴んで受け止めた。

「バカな！シヨルダーセイバーを受け止めるだなんて！」

「なあに、今のは感覚を上げただけですよ」

シヨルダーセイバーを投げ捨てるのと三度高速移動を使い、さらに赤のオーラによるパワー上昇の力でWを蹴り飛ばし、追撃に後ろに回り込みもう1度蹴り飛ばした。

Wはそのまま近くの空きビルの壁を突き破り、がれきとともに倒れてしまった。何とか起き上がるもその体は既にふらついていた。

『こうなったらマキシマムでケリ付けてやる！』

最後の力を振り絞ってタクティカルホーンに手を伸ばし3回弾いた。



【FANG MAXIMUMDRIVE】

Wの右脚にマキシマムセイバーが装着されると、ジャンプしそのまま高速回転をしながらステータスドーパントに突撃した。

「『フアングストライザー!!!』」

これには反応出来なかったのかそのまま直撃し、恐竜のオーラと「F」のオーラを浮かべ大爆発を起こした。

『はあはあ…、やったか?…』

爆炎が晴れるとそこには少しふらついたステータスドーパントが立っていた。

「くっ…、さすがにマキシマムを受け止めるのは無理がありましたね」

Wは驚愕していた。理由がわかってても信じられなかった。

「まさか、青のオーラで防御力を上げて対抗したのか…」

『だからってマキシマムに耐えることが出来んのかよ!?!?』

過去にはウェザードーパントのように能力を使って直撃を避けることで生き延びるドーパントもいたが、同じく能力を使ったとはいえ直撃して耐えられたのは今回が初めてだ。驚くのも無理はなかった。

「どうしますか?私はまだ動けますがあなた方はもうそんな体力は残されてはいない」

ステータスドーパントが言うようにWにはもうファンゲジョーカーの特性でもある戦闘本能むき出しの戦い方をするような体力は残っていないかった。ステータスドーパントは赤いオーラを放出し宣言した。

「チェックメイトです」

アクセルvsメテオドーパント

アクセルはバイクからエンジンブレードを取り出し構える。メテオドーパントも手を構え互いに様子を探っていた。2人は横に数歩進むと動きを止めた。

そしてメテオドーパントが手から放った小型の流星のような光弾によって沈黙が破られた。それと同時にアクセルも走り出した。

エンジンブレードを使って光弾を切り裂き距離を縮める。メテオドーパントは更に3発の光弾を放った。

アクセルはエンジンメモリを取り出すとエンジンブレードに装着し、

トリガーを引いた。

【ENGINE STEAM】

エンジンブレードの先端から高温の蒸気が噴き出し光弾を防いでいく。ついにエンジンブレードが届く間合いに入ると再びトリガーを引いた。

【ELECTRIC】

「はああ!!」

アクセルは電撃を纏ったエンジンブレードを振るう。それを身を低くすることでかわすとローキックを放つ。しかし、アクセルも低くジャンプすることでそれをかわし2度目の斬撃を放つ。だが手ごたえはなかった。

見ると左手に生み出した光弾でエンジンブレードを受け止めていた。

「そついう使い方も出来るのか」

「遠距離しか能がねえと思ってたか? 甘え!」

メテオドーパントは空いていた右手から光弾を放つ。アクセルはそれを紙一重でかわすがエンジンブレードを受け止めていた光弾が叩きつけられるように腹部に零距离で炸裂した。

「ぐあああああああああ!!!」

炸裂した部分で爆発が起こり吹き飛ばされる。エンジンブレードを

杖のようにして起き上がるとメテオドーパントは宙に浮いていた。その両手には大量の光弾が生み出されていた。

「クソッ！」

「おらおら逃げ切ってみるよー！」

アクセルはドライバーを外し一回転すると変形し、バイクモードになるとUターンし全速力で走り出した。それと同時にメテオドーパントが光弾を連発してくる。

巧に避けていくアクセルだがその弾数と爆発の範囲の広さに次第に追い詰められていった。

（このまま逃げても埒が明かない。ならばッ！）

光弾から逃げていたアクセルは再びUターンするとメテオドーパントの方へ向かっていった。

「な！？バカかコイツ！」

予想外の行動に一瞬手を止めてしまうがすぐに光弾を放つ。アクセルは向かってくる光弾やその爆風に目もくれずに走り続ける。

しかし、距離が近づくごとに危険になっていく。そして、遂にアクセルに数発の光弾が炸裂し爆発した。

「はああー！」

だが、アクセルは倒れず逆にその爆風をいかしてメテオドーパント

と同じくらいの高さまで飛んでいた。

アクセルはドライバーの左にあるクラッチ部分を引き、右のパワー  
スロットルを捻る。

【ACCEL MAXIMUMDRIVE】

複眼が発光し、全身から凄まじい炎が噴き上がると必殺技である後  
ろ回し蹴り、アクセルグランツァーを放つ。

「でやああ!!」

完全に捉えた、と思ったアクセルだったがアクセルグランツァーは  
空を切るだけでメテオドーパントに炸裂しなかった。

「何!？」

徐々に落下していく中振り向くとそこにはメテオドーパントがいた。

その時アクセルは一瞬だが、光弾と同じエネルギーがメテオドーパ  
ントの体からまるで何かが解除されるように分散するのを見た。

「さっき言ったよなあ。遠距離戦しかできねえ訳じゃねえってなあ  
!」

すると光弾と同じエネルギーがメテオドーパントの体に集まり、自  
身が光弾となって突撃してきた。空中では身動きがとれず腕を組む  
ことで防御するがそのまま押されていき、地面に激突してしまった。

アクセルは叩きつけられ悶えたが、その視線の先には中に浮いたメ

テオドーパントが光弾を生み出していた。

「あばよ警察さん！」

アクセルに雨のように大量の光弾が降り注ぎ大爆発を起こした。

ディフェルVSバイオレンスドーパント

ディフェルはライドブツカーヘヴンを構えバイオレンスドーパントに斬りかかるがその岩のような体は傷一つつかなかつた。

「げ、やっぱり効かねえか」

バイオレンスドーパントは巨大な左拳でディフェルを大きく殴り飛ばした。

「がはあー!!」

あまりにも重い一撃にむせかえるが、そこに追い打ちをかけるかの

ようにバイオレンスドーパントに左拳が伸びディフェルに襲いかかってきた。

それを転がるように避けるとカードを取り出した。

「んじゃ拳には拳で語ってやるよ」

ディフェルはそのカードを装填した。

【FORMRIDE KIVA DOGGA】

ドライバーからドツガハンマーが飛び出すと胴体と両腕が鎖に覆われキバドツガフォームへ変身した。（以下Dキバ）

Dキバはドツガハンマーを引きずりながら距離を詰めていく。引きずられたところからは火花が散っていた。

バイオレンスドーパントは左拳を伸ばしDキバに叩きつけるがドツガフォームの装甲の前では無意味だった。

その後も何度も叩きつけるが全く効かず距離を詰められ、残り2mぐらいで自ら殴りかかってきた。しかしDキバは左手でそれを軽々受け止めると投げ捨てるように離し、ドツガハンマーを大きく振りあげバイオレンスドーパントに叩きつけた。

さらに連続で重い一撃をくらわせていき、ドツガハンマーで突くと持ち上げて後ろに投げ飛ばした。

「やっぱドツガハンマー重いな……、筋肉痛になるかも」

ちなみに拳で語りあうというのはドツガハンマーが拳の形をしているからということである。

起き上がったバイオレンスドーパントは苦しみだした。

「ぐっ、あああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああ！！！！！！！」

女性の甲高い声で叫ぶと今度は花をイメージしたフラワードーパントへ変貌した。

「女性がバイオレンスって…何か怖いな」

どうでもいいことを呟くと攻撃が効かなくとも身軽さの面で不利になるためカードを取り出した。

「花かぁ、合うのいないな。…じゃあコイツで」

珍しく適当にカードを選び装填した。

【FORMRIDE AGITO STORM】

Dキバの体が青い光に包まれると風の力を宿したアギトストームフォームへと変身した。(以下Dアギト)

フラワードーパントは花弁を撒き散らして攻撃するがDアギトがストームハルバートで巻き起こした風でそれを全て吹き飛ばされた。意外と適当ではなかったのである。

「……これで決めるぜ」



意識不明になってしまつことを思い出し、カードを装填することをためらつたがそれを振り切り装填した。

【FINALATTACKRIDE A A A AGITO】

Dアギトは素早く走るとハルバートスピンを放ち、フラワードーパントを一閃した。

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！」

フラワードーパントは爆発し、変身者が倒れる音とメモリが碎ける音がした。

変身を解いた士は振り返り変身者を見て驚愕した。

「なあ、聖麻。これどう思う…?」

聖麻が建物の影が出てきてそれを見ると同じように驚いていた。

「奇妙って言うしかねえだろ。だがまあ、これで手掛かりが手に入つたわけだ」

そこに倒れていたのは20歳程度の男性だった。

デイクエルVS「A」のライダー

デイクエルは苦戦していた。最初の後ろからの一撃を防ぐことに成功したが、その後も白いライダーは後ろなどとにかくデイクエルの死角に回り込み攻撃してきた。その戦法にデイクエルは防戦一方だった。

「もう！さつきから後ろからばかりだなんて卑怯だよ！」

「これが私の戦い方だからな。文句を言われても仕方が無い」

落ち着いた女性の声が聞こえてきた。ライダーはまたも後ろに回り込み刀を振りかぶった。

「だーかーらあ！」

デイクエルは振り返りそれをドライバーで受け止める。

「卑怯だよそれ！」

弦を引く動作をすると受け止めたまま矢を放つ。これを避けることは出来ず大きく吹き飛ばした。

「ふう、で、あなたのメモリは何？」

ディカエルは尋ねるとそのライダーはさっきと変わらぬ口調であった。さり答えた。

「アサシン（ASSASSIN）だ」

「つまり暗殺者ってことだね。どうりで後ろから攻撃するわけだよ」

「さっき言ったじゃないか。これが私の戦い方だと」

アサシンは話し終えた瞬間にどこかへ消えた。ディカエルはそれを見てカードを装填した。

【ATTACKRIDE EYE】

感覚だけでなく視力を強化しその2つでアサシンの居場所を探る。

そして何かを感じ取りその場から飛び退いた。ディカエルがいた場所には弾痕があった。見ると遙か離れたビルの上のアサシンがスナイパーを構えていた。

「あんなところまで移動できるの！？こうなったらこっちもカードのオンパレードだよ！」

ディカエルはカードを装填した。

【ATTACKRIDE RANGE】

このカードは射程距離を強化するものである。ディカエルは射撃強化のカードを主に持っているのだ。

ディカエルはドライバーを構え、アサシンがスナイパーを構える。2人は同時に矢と弾丸を放った。空中で相殺し2人は同時に動いた。ディカエルがジャンプして別のビルに飛び移る。するとアサシンがその死角へと瞬間移動する。

アサシンはすかさず弾丸を放つが研ぎ澄まされた感覚でディカエルはそれを避け矢を放つ。

その矢を瞬間移動することで避けると今度は左手に持った刀で斬りかかってきた。

『アタックライド アイ』の能力で後ろにも視界があるディカエルはそれを難なく躲し、カードを装填する。

【ATTACK RIDE BLUST】

「ッ！」

危険を察知したアサシンは瞬間移動する。ディカエルは上に向かって矢を放つと矢が5つに分裂し離れた場所にいたアサシン目掛けて軌道を変えた。

「くっ！」

アサシンはスナイパーから弾丸を撃ち矢を破壊するが、スナイパーは連射には向いていない。そのため破壊できなかった2発がアサシンにヒットした。

「出来れば降参してほしいな。それと意識不明の人たちを救う方法を教えて」

アサシンは起き上がると小さく笑った。

「それは出来ないな。何より私達には目的がある！」

声を張り上げるとメモリをマキシмумスロットへ差しこんだ。

【ASSASSIN MAXIMUMDRIVE】

マキシмумを発動したことでディカエルは身構えるがアサシンは変わらずスナイパーを発砲した。しかしいつまでたっても弾丸が放たれることはなかった。

「え？不発…うつ！？」

首を傾げた直後にディカエルの背中に弾丸が炸裂した。しかしアサシンは目の前にいた。

「何で…？」

それには答えることなくアサシンは弾丸を放ち続ける。その弾丸は本来の軌道を描くことなく死角から現れディカエルを襲っていた。

（まさか弾丸を死角へ転移させてるの？）

それに気づいた時にはアサシンの姿はなかった。

ふらつく体に鞭を打って感覚を研ぎ澄ます。

【ASSASSIN MAXIMUM DRIVE】

下からその音が聞こえた時にはディカエルの体に白い高速のレーザーが直撃していた。

ディカエル、W、アクセルが窮地に立たされたその時、Wの元であることが起こった。

「まずい…体が動かない」

『このままじゃやられるぞ！』

体力が尽き、動くことの出来ないWにステータスドローパントが歩み寄り遂にその距離は0となった。

「さようなら風都のヒーロー」

赤いオーラを纏った拳で殴りかかった瞬間、数本の氷柱がステータスドローパント目掛けて飛んできた。

それが全てステータスドローパントに炸裂し、吹き飛ばした。

「一体…、まさか」

Wがステータスドローパントがむいた方向と同じ方向を見る。

そこには吹雪が起っておりその隙間からは薄黄色の複眼と水色の装甲が見えた。

「まさか……」

『嘘だろ………』

「『雪女！？』」

凍てつく吹雪の中、薄黄色の複眼が2人を眺めていた………

襲いかかるA /そして彼女は現れる(後書き)

竜王「あーあ」

士「何だそのテンション」

竜王「別にー。いつかあることやってやると決めただけー」

美莉「何やるの?」

聖麻「ていうか決心したのに落ち込み気味って意味わかんねえよ」

士「まあそれより、アイツら強くな?」

美莉「アサシンの能力が……」

聖麻「Wもアクセルもやられたもんな。んでついに雪女が出たが、ライダー?」

美莉「どういことなんだろ?」

士「変化するドーパントも何か変だったしな」

竜王「それではまた次回ー」



現れたS / 深まる謎 (前書き)

お待たせしました。

今回も微妙です。最後はフッフ… (黙れ)

それではどうぞ！

## 現れたS / 深まる謎

Wは目の前に現れた雪女に驚きを隠せなかった。

あくまで都市伝説の中での存在ということを目撃者がいたと聞いても信じられなかったのだ。

『見た感じ、敵じゃなさそうだな…』

「だけど何者かわからない以上、気を抜かない方がいい」

確かに彼女はステータスドーパントを攻撃したとはいえ、両方の敵という可能性もある。

仮にそうだとすれば間違いなく今の状態ではやられてしまう。

するとステータスドーパントが呆れながら妙なことを言った。

「はあ、貴女の敵は私たちではないですよ」

その言葉に雪女のライダーは反論する。

「あら、私は貴方たちの味方になったつもりはないわ。街のヒーローがやられそうなら助けるのは当然よ。ただ、アレは別だわ」

(アレ？一体何のことを言ってるんだ？)

Wは彼女の『アレ』という言葉に憎しみが籠められているように感じた。

「そうですね。なら引くとしましかね。貴方が入ってきてはヒーロ  
ー退治もままならないので」

そしてWの方を向くと

「命拾いしましたね、ヒーローさん」

そう言うとステータスドーパントは移動速度を上げ、高速で走り去  
ってしまった。

『おい、ありが…あ？』

Wは雪女に礼を言おうとしたが、いつの間にか彼女は姿を消してい  
た。

「一体何だったんだ？」

メテオドーパントは真下の焼け焦げた地面を見下ろしていた。  
光弾は確実にアクセルに当てたはずだが、異形の顔の奥では不満気  
な表情を浮かべていた。その視線の先には

「チツ、しぶてえ警察だなあ」

青くスマートな鎧に身を包んだアクセルの高速移動形態、アクセル

トリアルがいた。

時を少し遡り、メテオドーパントが宙に浮いているのを確認した時、アクセルは素早くトリアルメモリを取り出し、手首のスナップだけでメモリモードに変えるとスイッチを押した。

「TRIAL」

音声が鳴ると、ドライバーに差し込みグリップを捻った。

「TRIAL」

赤から黄色に鎧の色が変わる中、ダメージの残る体を無理矢理起こし回避のため走り出す。

レース開始の音声と共にアクセルトリアルへと変身し、高速移動をするが同時に落ちた光弾の爆風で吹き飛ばされてしまい、現在に至る。

「生憎死なないことには定評があつてな」

アクセルは皮肉っぽく言うと戦闘体制に入る。だが、アクセルトリアルになったことで防御力が下がったため、先の爆風はかなりのダメージとなっている。

（決めるのは、次の攻撃だ！）

「いい加減に楽になれ！」

メテオドーパントは苛立ちながら光弾を乱射する。

それを高速移動でかわしながら、トリアルメモリを抜き、マキシマムモードへと変えスイッチを押した。

メモリにタイムが表示され徐々に進む中、アクセルは光弾をかわしながら距離を詰めていく。

アクセルは高くジャンプしメテオドーパントと同じ高さに到達すると、すかさず蹴りを放つ。

威力は少ないが少しずつ加速し次第に目で捕らえ切れない程のスピードで連続で蹴りを放つ。これがアクセルトリアルの必殺技のマシガンスパイクである。

『T』の文字を描くように放たれる連続蹴りに成す統べなくくらくていくメテオドーパントだったが

「なめんじゃねえぞ！ライダー風情があ！」

何と蹴りの嵐の中、光弾を形成しアクセルにぶつけた。

「なっ！？ぐあああああああ！！！！！！」

予想外の動きに対処できるはずもなく吹き飛ばされてしまい、地面に叩きつけられる。その際に手に握っていたトリアルメモリを離してしまった。

メモリのタイムが10秒をきつたと同時にアクセルに莫大なダメージが体中を駆け巡った。

「があああああああああああああ！……！！……！！……！！」

あまりの激痛に変身が解除されてしまう。

（まずい……！）

照井がメテオドーパントを見ると、かなりふらついており、終いには人間の姿に戻った。

どうやらマシンガンスパイクが途中までとはいえ、かなり効いたらしい。

「クソツ、次あった時はけり付けてやる」

「待て！お前は何者なんだ！」

照井の問いに答えることなく男は立ち去った。

照井は取り逃がした悔しさから拳を地面に叩きつけた。

デйкаエルはアサシンのマキシマムドライブをもらにくらったため、変身が解けその場に倒れてしまった。

そして倒れた美莉の前にアサシンが現れた。

「ビルの中から撃つだなんて……」

「ビルの中だって君の死角だろう？ならば私は移動できるぞ」

彼女はゆっくりとスナイパーを構え、引き金に指を掛ける。

「すまないな。これで終わりだ」

「ッ！」

撃たれる、と思った美莉は目をつぶった。  
しかし一向に銃弾は放たれなかった。

恐る恐る目を開けた美莉は目の前の光景に一瞬疑問符を浮かべた。

(何で...)

アサシンの腕は小刻みに震えていた。

「撃たなければならぬんだ...！」

アサシンは自己暗示のようにその言葉を繰り返すが震えは収まらない。  
い。

するとそこに一発の銃弾が放たれ、アサシンのスナイパーを弾き飛ばした。

2人が目を向けた隣のビルにはライドブッカーヘヴンを構えたデイフェルがいた。

「片目でスナイパーのライダーか。中々斬新だなっと！」

言い終わると同時に美莉たちがいるビルへ飛び移った。

「つ、土君…」

士が助けに来てくれたことで安堵した美莉は涙を流した。

「はぁ、泣くなよ泣き虫」

久々にからかうと再びアサシンと向き合う。

「さっき俺を撃つたのはお前か」

「そつだ。だが今思い出した。あれはミスだ」

「ミス？」

「ああ。君を狙うのは私ではないからな」

そう言い残すと瞬間移動でどこかへ消えてしまった。

「おい、立てるか？」

美莉に聞くと何故か美莉は黙り込んで何かを考え始めた。

(もしここで立てないって言ったらおんぶしてもらえるのかな／＼？まさかお姫様抱っこ／＼！？)

拳げ句の果てには顔を手で覆いながら、キヤー！、と言う始末。

「大丈夫そつだし、早く戻ろうぜ。フィリップさんがやばいらしいから！」



「え？う、うん」

こうして2人は下に降りていったのだが、美莉は若干落ち込んでいた。

「亜樹子さん、あの人は？」

「うん、救急車で運ばれたけど意識がないって…」

「そうですか…」

暗い雰囲気になる中、変身を解いた翔太郎が駆け寄って来た。

「翔太郎さん、フィリップさんは？」

聖麻が尋ねると翔太郎は、何とかなかった、と簡単に答えた。

「そっぴゃ、雪女に会ったぜ」

「『『『え！？』』』」

全員驚愕した。当然と言ったら当然だろう。

「どどど、どんな人でしたか？」

美莉が怯えながら聞いてみた。

「意外にも仮面ライダーだったんだよな……」

「なん…だと…」

これを言ったのは当然士である。

「私聞いてない！」

亜樹子も同様に驚く。

「とにかくもう観光どこじゃねえ。奴らのこともあるし一旦事務所に戻るぜ」

場所は変わって超常犯罪捜査科

「そっぴゃ課長。何であんなところで倒れてたんですか？」

肩にマッサージ機具を当てながら照井に尋ねたのは刃野しんの 幹夫みきおである。翔太郎とは結構長い付き合いだ。

「しっかもあんなボロボロになって。殉職なんてやめてくださいよ」

続いて言ったのはマッキーこと真倉まぐら 俊しゅん。基本こき使われたりされる。

「俺に質問するな」

刃野の質問を照井はいつも通り切り捨てる。

半ば刃野たちに押される形で病院で手当を受けた後、照井は過去の犯罪者の写真を眺めていた。  
先程戦った男に見覚えがあったのだ。

(もしかしたら左たちの処に奴の仲間が……。そうなる)

そう考えると近くにあったダンボールにファイルを詰め出て行った。

「左のそこへ行ってくる」

「まあたあの探偵のどこですかあ？」

真倉が嫌そうな声を上げるが照井は既にいなかった。

「…暇だなあ」

「そつすねー」

「……………」

「「ジャンケンポン！」」

刃野がチョコキ、マツキーがパーを出していた。

「よおし、お茶入れてこい」

「へい」

### 鳴海探偵事務所

「フィリップさああああん！！！！大丈夫ですか！？」

事務所に戻るなり士の叫び声が響く。

心配されたフィリップは耳を塞ぎながら椅子から立ち上がる。

「ああ、大丈夫だよ。しかし中々手強いドーパントだった」

「アイツら何者なんだ？」

みんな考え込むがわかるはずもなく、黙ってしまふ。

するとドアが開き、ダンボールを持った照井が入って来た。

「あ、照井さん！？！？」

照井の姿を見て士は驚いた。

「照井さん大丈夫なんですか！？」

「一体何があったの！？」

美莉と亜樹子が慌てながら尋ねる。

「少しトライアルのマキシマムを失敗しただけだ」

何故か当たり前のように答える照井。

それを聞いた妻である亜樹子は更に慌てた。

「つまり照井 竜。君も襲われたのかい？」

「ああ。そう言うフィリップたちも？」

フィリップは頷いた。

「そうか。なら良かった」

そう言うところ照井はダンボールから犯罪者のファイルを大量に出した。

「見覚えがあったからたぶんこの中にいるかもしれない。捜すぞ」

### 3時間後

「やっと見つかったか…」

「ふええ、疲れた…」

「だっりい」

「ぐだー」

翔太郎、士、聖麻、亜樹子はバテていた。

「ちゃんと探して見つかったから良かったよ」

「もう、翔太郎。情けないよ」

「全くだな。所長は別だが」

反対に美莉、フィリップ、照井は普通にしていた。これが、日頃の行いの差なのだろう。

「とりあえずこいつらは…」

机の上には資料が二つあった。

一つはフィリップを襲った眼鏡の男。

「秘充 直樹と…」

もう一つは照井を襲った金髪の男。

「架西 亮か」

「でも私と戦ったアサシンさんがいないですよ」

「女スナイパーで結構見つきやすいと思ったら一人も該当しないんだもん…」

ただそれ以前に驚く点があった。

「この2人、既に死んでるじゃねえか…」

聖麻が言うように秘充は5年前に牢の中で自殺、架西は3年前に銃撃隊に射殺されていた。

「てことは、NEVERですよな」

士の言葉に美莉は首を傾げた。

「NEVERって何なの？」

「簡単に言えばゾンビ兵だ」

翔太郎が答え、美莉は納得した。

「とにかく向井の言ったことも気になるな」

資料を探している時に姿の変わるドーパントについて聖麻は話していた。

「とりあえず今日は遅いし、解散だな」

激動の一日は終わりを告げたのだった。

???

「どうですか？見つかりましたか？」

平坦な声で中学生くらいの少女は語りかける。

「いいえ、まだよ」

傘を差した水色のふわっとした感じね長髪の女は返事をする。

「そうですね。早く倒せるといいですね。あなたを此処に連れてきた彼を」

「ご武運を、と言い残し少女はオーロラの中へと立ち去った。

「絶対に倒すわ……」

残された彼女の周りには雪が降っていた……

次の日

全員事務所に集まるなり、手分けしてあの2人の目撃情報、姿の変わるドーパントになりそうな人を探しに出た。

「風都って広いなあ」



「今回は観光じゃねえぞ」

士と聖麻は風都公園の近くを歩いていた。  
今だに手掛かりは無しである。

すると急に肌寒く感じた。

「何か寒くねえか？」

「そうだな。晴れてんのに…な…」

「どうした？」

士は聖麻の見ている方向へ顔を向ける。そこには

「雪女…？」

浴衣のような胸元を露出した水色の服にミニスカートを穿いた水色のふわっとした長髪の女がこちらへ歩いてきた。  
不自然なことに、彼女の周りだけに雪が降っていた。

「やっと見つけたわ…」

彼女は持っていた写真を握りしめる。

「世界の滅殺者！」

「な!？」

士が驚く中、彼女は右手の雪の結晶を模した指輪に口づけをすると、

見せるように構える。

「変身」

すると指輪を中心に吹雪が巻き起こり、彼女を包んだ。

吹雪が晴れると薄黄色の複眼、水色の雪と妖精をイメージした鎧を纏ったライダー、スピリアへと変身した。

「ディフェル、あなたを倒すわ」

現れたS / 深まる謎（後書き）

竜王「遂に雪女降臨！」

士「すごい恨まれてた…」

美莉「何でなの？」

聖麻「さあな」

竜王「それは次回のディフェルVSスピリアでわかります！」

士「それではまた次回！」

お知らせ

現在ベルトさんの「仮面ライダーエターナル」風都を守る永遠の戦士」とコラボさせてもらっています！  
よろしければ見てください！

Yの正体／それはSとK（前書き）

タイトルの意味は最後に解ります。

今回は短いです……

それではどうぞ！

## Yの正体／それはSとK

全体的に雪と妖精をイメージした鎧を纏った薄黄色の複眼のライダー、スピリアからは女性ライダー特有の美しさが漂っていた。

「やっぱり女性ライダーってかっこいいよりさ、綺麗とかの印象強いよな、聖麻」

なので土も騒がずこんな反応をしている。もちろん女性ライダーが嫌いな訳じゃない。

「緊張感無さすぎだバカ！ 来るぞ！」

聖麻に怒鳴られスピリアを見ると既に走り出していた。

「はああ！！」

スピリアは低めにジャンプすると土の頭目掛けて回し蹴りを放った。

「うわっ！」

土はそれをギリギリのところまでドライバーを装着しながら転がってかわす。

起き上がるとカードを構え装填した。

「変身！」

「KAMENRIDE DEFER」

士はディフェルに変身すると、スピリアに向かって駆け出した。

スピリアもそれを見てキックを放つがディフェルに受け止められてしまう。

「俺は世界の滅殺者じゃない！ だから世界を滅ぼしも殺しもしねえ！」

「黙りなさい！ 貴方の言葉なんて信用出来ないわ！」

士は必死に『滅殺者』であることを否定するが、全く聞こうとしなかった。スピリアは右脚を捕まれたままジャンプし、左脚でディフェルの顔面を蹴り飛ばした。

「ぐあ！？」

蹴り飛ばされ顔を抑えていると、起き上がったスピリアは容赦なく向かってきた。

ディフェルはそれに気づき、パンチを放つがスピリアはそれを腕でいなした。2人はそこから互いに打撃の応酬に入った。

パンチやキックを次々と放っていく。互いに一步も譲らない勝負だった。最初だけは。

（ちくしょお！ 動きが速い！）

スピリアの攻撃速度はクウガドラゴンフォームに匹敵していた。

それでいてパワーはあまり低くなく、さらには体術が優れていた。

あくまで喧嘩程度でしか格闘に馴染みのない士にとっては、スピリ

アの体術は非常に強力であった。徐々に均衡が崩れ始め、ディフェルは防戦一方の状態になってしまった。

「はああ!?!」

だが、スピリアは一切休めることなく怒涛の攻めを繰り広げていく。それにより、遂にディフェルが押し負け、5発のパンチと回し蹴りを胴体にくらい吹き飛ばされた。

「がつ、ああ……ッ」

ディフェルは強烈な打撃をくらったため呼吸困難になっていた。

「あら？ これで終わりではないでしょう？」

「当たったり前だろ」

ディフェルはライドブッカーヘヴンを構え走り出した。

「武器には武器ね」

スピリアは腰から鐔が雪の結晶の形をした、やや細い白い刀身の剣、フラウサーベルを構えディフェルと同時に斬撃を放ち、鐔迫り合いになる。

「貴方、何故私をこの世界に飛ばしたの!?!」

「? どういう意味だよ」

「とぼけないで！」

ディフェルはスピリアの言葉に疑問を感じながらも、鏝迫り合いから斬り合いの勝負へと入っていく。

(剣ならいけるか?)

ディフェルは結構剣による戦闘が多かった。そのため士は自信があった。

スピリアは中世ヨーロッパの騎士の戦闘にありそうな、華麗な剣裁きだった。しかしディフェルはそれにどうにかついていった。

(なんとなくサガに似てるな。だったら！)

ディフェルは突きを放った時の伸びきった腕を掴み、キックを放った。

ヒットすると、さらに追撃として斬撃を放つがあと少しのところで止められてしまう。

「ちっ！」

「中々良かったわよ。でもまだまだ！」

スピリアはディフェルに蹴り飛ばし距離を取ると、中距離にも関わらずフラウサーベルを振った。

ディフェルは疑問に思ったが、上を見たことで行動の意味がわかった。

「マジかよ!?!」



「間接剣だったのか！」

聖麻が言う通り、フラウサーベルはいくつもの小さな刀身がワイヤーのような糸で繋がり、かなりの長さに伸びていた。

ディフェルはそれを何とかかわすが、次に放たれた横薙ぎの一撃はかわせずくらってしまふ。

「くそ！」

「まだまだいくわよ！」

スピリアはフラウサーベルを縦横無尽に振るう。そのたびにワイヤーで繋がれた刀身が降った方向と同じ方向に意思があるかのように動く。

ディフェルは不規則に来るフラウサーベルの攻撃を全てかわしきることが出来ずに装甲を斬られていき追い詰められていった。

「間接剣なんて素晴らしき青空の会以外見たことねえよ！」

過去のライダーでは、組織の携帯武器として間接剣はあったが、ライダーの武器として間接剣はない。

そのためか、全く戦い方がわからなかった。

そのまま次々と斬られディフェルはダメージの影響で膝をついてしまった。

追い詰めるには絶好のタイミングだが、ここでスピリアが奇妙な行

動をとった。

「はあ…、あのね、遊びじゃないのよ。大人しくしなさい」

何故か急に誰かと話すかのように独り言を言いはじめたのだ。

「アイツ、誰と話してるんだ？」

聖麻は何とかその行動の意味を探ろうとするが、仮面に隠れていては表情を見ることが出来ずお得意の観察力もはたらかない。

ディフェルはその隙についてカードを装填した。

「氷の剣には炎の剣だ！」

「FORMRIDE AGITO FLAME」

ディフェルは炎の力を宿したアギト、フレイムフォームへ変身した。  
(以下Dアギト)

「姿が変わっても意味ないわよ！」

スピリアは再びフラウサーベルを振るう。当然刀身が伸び、Dアギトに襲い掛かる。

「悪いが反撃させてもらうぜ！」

Dアギトはフレイムセイバーで弾きながらカードを取り出し、装填した。

「ATTACKRIDE DOUBLE-FLAMESAVER」

すると元々右手に持っていたフレイムセイバーとは別に、もう一本のフレイムセイバーが左手に現れ、再びフラウサーベルを弾いた。

「なっ!? はああ!」

スピリアは二刀流になったことに驚きながらもフラウサーベルを連続で振るう。

しかし、今のDアギトはフレイムフォームの超感覚に加え、二刀流であり優れていないスピードを補っているため、全て弾ききった。さらに、弾きながら走り出し、スピリアとの距離を詰めていった。

「間接剣なら近距離戦にもちこめばいいだけだ!」

間接剣の有利なところはそのリーチにある。だが、その分近距離での斬撃の威力は大幅に下がってしまう。さっきの斬撃の連続でDアギトはそれに気づいていた。

「しまっ…!」

スピリアは慌ててフラウサーベルを戻すが、既に左手のフレイムセイバーによる斬撃が迫っていた。

何とかその一撃は元に戻るのが間に合った為防げたが、二本目の右手のフレイムセイバーの斬撃をくらってしまう。

「はあ! おりゃあ!」

Dアギトはお返しと言わんばかりに次々とダブルフレイムセイバー

の斬撃を次々と放っていく。

スピリアは受け止めようとすも、数の差で全て受け切れず斬撃をくらっていった。

「うおりゃあああ！ー！ー！」

「きゃッ！ー！」

最後にDアギトは交差斬りを放ち、スピリアを吹き飛ばした。

「なあ、頼むからもうやめてくれ。これ以上やっても無意味だ！」

Dアギトは呼び掛けるが、それには答えずスピリアはまた誰かと話しているような独り言を言いはじめた。

「さっきから言っているけれど遊びではないのよ！………そう  
ね。変わったほうがいいかもしれないわ。頼んだわよ、かい海華か」

すると、水色に光っていた右手中指の指輪が光りを失い、代わりに薬指の水滴を模した指輪が青く輝いた。

「フフフ……」

聖麻はその笑い声に首を傾げた。

「何だ？声が高くなった……？」

スピリアは変身時と同じように指輪を構えた。

「へっんしゅん！」

さっきとは全く違う明るい調子で言つと指輪から吹雪ではなく、水流が巻き起こつた。

水流が晴れると、複眼はオレンジになり、雪ではなく水と精霊をイメージした鎧を纏い、青い三叉の槍を持ったスピリア、ウィンディーネフォームがいた。

スピリアは左手の人差し指を口に当て決め台詞を言つた。

「はっあぁ〜い！ こつからは雪華<sup>せつか</sup>ちゃんルートに代わり、海華ちゃんルートだよ。攻略出来るかな〜？」

「な、何だ！？ 急にギャルゲー！？ イマジンか？」

いきなり変わった雰囲気ニアギトは首を傾げていた。

そこに聖麻が、違つ、と否定した。

「じゃあ何だよー！」

「さっきの独り言や今の性格の変わりよう、電王ライダーじゃないのを見ると、アイツは……二重人格者だ」

今、ディフェルvsスピリアの第2ラウンドが始まるうとしていた。

Yの正体／それはSとK（後書き）

竜王「どうしよう……」

士「宇宙キターー!!」　フォーゼが始まってテンションMAX

美莉「士君は置いていて、どうしたの？」

竜王「W編が他より長くなりそうなんだ（指を鳴らしてロケットモジュールの形をしたロケット射出）」

士「ぐぼあ!？」　ロケットと激突し、一緒に空に飛ばされる

聖麻「スピリアのこともあるし、まだ終わりそうにはないよな」

美莉「にしても雪女さんは二重人格者なんだね」

聖麻「性格のギャップがありすぎだ」

士「ごげぶ!!」　ロケットに地面に叩き付けられる

竜王「ちなみにイメージC Vはこの方」

雪華　イメージC V　櫻井浩美　（Angel Beats　ゆり）

海華　イメージC V　伊瀬茉莉也　（緋弾のアリア　峰理子）

美莉「それではまた次回!」

SとKの悲しみ／居場所という光（前書き）

今回色んなことが起こる為グダグダグダグダです。

でも前回の短さを取り戻すため長いです。  
それではどうぞ！

## SとKの悲しみ／居場所という光

デイフェルとスピリアが戦い始める数分前

「今日テストだっけ？ 超ダルい〜！」

「仕事やる方が良いよね〜」

歩きながら愚痴を言っているいまどきな感じの女子高生はクイーンとエリザベスである。フーティックアイドルにて歌手デビューしている。

「ん？ ねえ、あれって…」

「どうしたの？」

クイーンが指をさす先には、不自然にも周りだけ雪が降っている女性、雪華が写真を見ながら歩いていた。

「「ゆ、雪女!?!」」



一方、翔太郎は手掛かりがない事に苛立ちを募らせていた。

「あ〜！ やっぱNEVER見たいに大々的にアピールしてないからな。全く手掛かりが無え！」

とりあえず辺りをうろろろしていると、スタックフォンが鳴った。出るとクイーンの声が聞こえた。

「お、どうしたクイーン… 『翔ちゃん翔ちゃん!!!』 すごい見ちゃった!』 な、なんだよ朝からテンション高えな…!」

高いテンションで話すクイーンの声に耳を塞ぎながら用件を尋ねる。

『さつき噂になってる雪女を見ちゃったんだよ!』

「何だと!? おい! どこで見たんだ!?!」

『う、うん。えっと……風都公園の近くだけど…、翔ちゃんこそ慌ててどうしたの?』

翔太郎の慌てように不思議がりながら答える。翔太郎の頭には嫌な予感が過ぎっていた。

（風都公園だと? 確かそこは土と聖麻が向かった場所じゃねえか!）

「悪い! また後で聞く!」

『え！ ちよっ』

クイーンの言葉の途中でスタッグフォンを切ると歩いていた方向とは、逆へ走り出した。

（まさか雪女が言ってた『アレ』ってのはディフェルのことか！？  
だとしたらヤベェ！）

翔太郎は知らない。その嫌な予感が当たってしまうことを……

場所は戻り、 風都公園

「フフフ、さあてどうするの？」

Dアギトとスピリアは睨みあっていた。

( どうする？ さつき剣が間接剣になったからあの槍も…………… )

最初の雪華の時の形態、フラウフォームは間接剣と体術を駆使してきた。ああも、変わった戦法だとこのウィンディーネフォームもあるかもしれないと考えた為、下手に動けないのである。

「もう、早くしてよお。来ないなら海華ちゃんから行くぞ〜！」

痺れを切らしたスピリアは走り出した。

それに対してDアギトはダブルフレイムセイバーを構え、じっと待つ。

スピリアが突きを放ち、そこを裁き斬撃をカウンターで決めようとするが、

「は!?!」

スピリアのとつた行動は予想外だった。何と地面に突きを放ち、棒高跳びのように跳んだのである。

「ふっふ〜ん。甘いよ甘いよ。これじゃ攻略出来ないぞ！」

スピリアは素早く槍、ウィンディーネジャベリンを抜くとDアギトを斬り上げた。

「ぐああ!?!」

対処出来ずモロにくらい吹き飛ばされ、更にディフェルへ戻ってしまった。

「フフツ、まだまだいくよ！」

スピリアは再びディフェルに向かって走り出しジャンプすると、回転しながらウインディーネジャベリンを振るった。

「たああ！」

「クツソ！」

ディフェルは辛うじてライドブッカーヘヴンで受け止めたが、回転の勢いもあってかかなりの威力を持っていた為耐え切れず、膝を着いてしまった。

（あの海華って奴の方だと槍を利用したアクロバット戦法になるのか。どっちの人格も厄介だな）

聖麻はスピリアを見て戦法を推測してみる。

（どっちの人格にしろ、見た目感じ場数はアッチが多く踏んでるし、知識と素人レベルの格闘で戦う土じゃ相手が悪すぎる……！）

聖麻が思った通りディフェルは苦戦していた。

スピリアは受け止められたジャベリンを振り上げディフェルを狙う。ディフェルは転がることで避けたが、スピリアは素早く近づき地面をジャベリンで突く。

（くるか！）

ディフェルは警戒し宙を見上げるが、

「ざっんね〜ん！ ハズレだよ〜」

スピリアは跳ばずに槍を支点として、回転蹴りをくらわせた。更に、  
怯んだところに突きを放った。

「がはあ！」

ディフェルは吹き飛ばされ倒れてしまった。

「あつれ〜？ まさかのバッドエンドお？」

スピリアは意外にも残念そうな声を上げた。

『ちょっと！ 何で残念そうにしてるのよ！』

「だって〜、海華は楽しみたいんだもん」

『はあ〜、遊びじゃないって何度言ったら……』

「わかったから静かにしてて。来るみたいだから」

スピリアの視線の先には立ち上がったディフェルがいた。その手にはカードが握られていた。

「はあ…はあ…、やるからにはハッピーエンドにしよっぜ」

皮肉っぽく言うとカードを装填した。

「FORM RIDE KIVA BASHARE」

ディフェルは緑の装甲の水の力を宿したキバの射撃形態、バツシャ  
ーフォームに変身した。(以下Dキバ)

「はあああああ!!!!」

Dキバは両腕を大きく広げ擬似水中空間を発生させた。これは、本  
来水中戦が得意なバツシャーフォームが地上でも有利に戦えるよう  
にするものである。

「くらえ!」

Dキバはバツシャーマグナムを取り出し、水の弾丸を水面を滑りな  
がら放つ。

「くっつ!」

スピリアは反応出来ずに弾丸をくらっていったが様子がおかしかつ  
た。

「あははははははは!!!!!! じゃあ、こっちもいくよ!」

急に笑い出すと、ジャベリンで水面を斬り上げた。すると、

「はあ!?!」

何と巨大な水の道が噴き上がる噴水のように現れた。

スピリアはその上にジャベリンをのせ、サーフィンのようにジャベ

リンの上に乗った。

「んじゃ、いつけー！」

スピリアの声に反応するかのように、ジャベリンは猛スピードで様々な場所へ伸びる水の道を滑り出した。

「攻略したければ海華を捕まえるのだー！ わっはっはー！」

「上等！」

Dキバが水面を滑りながら弾丸を放つ。スピリアはそれを自在に伸びていく水の道の上をジャベリンで滑り避けていく。

二人ともさすがにクロックアップ程ではないが、かなりのスピードで移動していた。

だが、戦況はDキバが弾丸を放ち、スピリアがそれを避けるの繰り返しだった。

そして、スピリアが動いた。

弾丸をかわしながら接近してきたのである。

Dキバは近づけさせないように、後ろへ滑りながら弾丸を連射するも、ことごとくかわされてしまう。

「まずはーかーいつ！」

「がはっ！」

スピリアはジャベリンの先端でDキバを跳ね飛ばし旋回すると、二

発目をくらすため突撃する。

「2かい、3かい！……………」

「ぐあ！があっ！！」

その後もスピリアは の字を描くように旋回し、Dキバを追撃していく。

バツシャーフォームはアギトフレイムフォームのように、視力や感覚を強化している。だが、その分他のステータスが低くなっている。そのため、この追撃はかなりのダメージとなっている。

スピリアは7発目を当てるとDキバに直進した。

「これで、8回目！」

猛スピードでスピリアが迫る中、土は仮面の奥で小さく笑うと、バツシャーマグナムを投げ捨てた。

「え？」

スピリアはその行動に驚いたが、そのまま突撃しDキバを貫……………  
… かなった。

Dキバが両手で先端を掴んでいたのだ。  
先に述べたようにバツシャーフォームは感覚に優れている。  
そのため、受け止めるのは容易なのだ。

「くっ！ なら力押し！」



スピリアはスピードを上げて押し切ろうとする。  
確かにパワーの無いバツシャーフォームは押されていったが、それを気にせずカードを取り出した。

「ずっとこれを待ってたんだよ!!」

Dキバはカードを装填した。

「FORM RIDE KUUGA DRAGON」

Dキバは青い水流の力を宿したクウガドラゴンフォームに変身した。  
(以下Dクウガ)

ドラゴンフォームは長い棒状の物を手にすると、専用武器のドラゴンロッドへ変えることが出来る。つまりスピリアのウィンディーネジャベリンは、

「ええ!? きゃあ!」

ドラゴンロッドへと変化し、その拍子にスピリアは落ちてしまった。

「もらった!」

Dクウガはドラゴンフォームにはあまり相応しくないが、力任せにスピリアを薙ぎ払った。

「うわあ!」

スピリアは転倒し、喉元にドラゴンロッドが突き付けられる。

「これでいいだろ。もうやめてくれ」

Dクウガは降参するよう頼む。

「うん、わかった」

意外にもスピリアはあっさり承諾した。

だがスピリアは、ただし、と付け加えた。

「海華はやめるね！」

すると右手中指の指輪から吹雪が巻き起こり、Dクウガは吹き飛ばされてしまった。

「何でだよ……。何でそこまでして俺を……」

吹雪の中から現れたフラウフォームは今までにないくらいの声で叫んだ。

「私にだって……………、負けられない理由があるのよッ!!!!」

一方、美莉は亜樹子と一緒に行動していた。

「全然手掛かりが無いですね」

「ほんとだよね。歩くの疲れたし……」

バットショットを引き連れて歩いて早2時間。

二人は休むことなく歩き回り、手掛かりを集めていたが、翔太郎同様全く無かった。

「でも、こうしている間にも被害が増えるかもしれないんですから………はっ！……！」

突然真面目な事を言っていた美莉の目がくわっ！と見開かれた。

「ど、どうしたの！？」

目をぱちくりさせながら恐る恐る尋ねる亜樹子。

「つ、土君がとんでもないことをする気がする……！」

「……えっ？」

美莉はキョトンとしている亜樹子を余所に辺りを見回した。

「えーっと、あっち……！」



スピリアフラウフォームはサーベルを軽く振った。すると、振った軌道上に二つ水の塊が作られた。

「何だ？」

Dクウガが不思議に思っていると水の塊は徐々に凍り氷柱となり、発射された。

「げっ！ マジかよ!？」

Dクウガはドラゴンフォームの俊敏な動きでかわす。だが、スピリアは連続で氷柱を精製し放っていく。

「残り少ない体力で避けられるかしら？」

スピリアの言う通りもうDクウガに体力は少ない。そのため、Dクウガのスピードが落ちていき、氷柱との距離が狭まってきた。

「くっ！」

Dクウガはドラゴンロッドを振り回し氷柱を防いでいく。しかし体力が少ないため、振り回しにキレがなく、少しずつ氷柱を

くらってしまった。

「いい加減に倒れなさい！」

スピリアは更にサーベルを振るう。

それと同時にDクウガは高くジャンプし氷柱の連射を避ける。だが、逃げ場を失ってしまった。

「終わりよ！」

好機と見たスピリアはサーベルを伸ばし渦を描くように振った。するとサーベルの渦から今まで以上の数の氷柱が発射された。

Dクウガはライドブッカーヘヴンに手を伸ばした。

「勝つにはこれしかねえ！」

Dクウガは金色のふちのカードを取り出し装填した。

「S I N F I N A L K A M E N R I D E F A F A F A  
F A I Z」

Dクウガから凄まじい赤いフォトンブラッドの光が放たれ全ての氷柱を破壊した。

フォトンブラッドの光が晴れ、Dクウガはファイズの真・最強フォームであるガーディアンフォームへと変身した。(以下Dファイズ)

聖麻はその様子を見て舌打ちをした。

「あのバカ！ 今の状態でなったらマジでヤバいことになるぞ！」

シン・ファイナルカメンライドは恐ろしく負担がかかる。現に、ファイズの世界で電王レジェンドフォームになった後は倒れ、終いは気絶してしまっている。  
今の状態でやればかなり危ないはずだ。

それをわかってやっているのかは定かではないが、Dファイズは構わずカードを装填した。

「ATTACK - RIDE      PHOTON - WING」

DファイズのフォトンフィールドローターがX字に展開され、赤い光の翼、フォトンウイングが現れる。

「くっ！」

スピリアはあれだけの氷柱を破壊したDファイズに一瞬脅威を感じるが、すぐに連続で氷柱を放った。

「悪いがもう効かないぜっ！」

Dファイズはフォトンウイングから氷柱より遥かに多い量の赤い光弾を放ち、氷柱を砕きつつスピリアへ攻撃する。

「何よアレ!?!」

あまりのスペック差に驚愕しながらも光弾を避けるべく、ジャンプするがすぐにそれがまずいことに気づいた。

「今度はそっちが逃げ場無くしたな」

互いに空中にいるなら、飛行しているDファイズが圧倒的に有利だ。

「うっ……。はあぁ！」

無駄とわかりながらスピリアはサーベルを伸ばし斬撃を放つ。

「無駄だ！」

しかしDファイズは両肩のキャノン砲からエネルギー弾を撃ち、サーベルを弾く。それによってスピリアは大きくのけ反った。

(まずい…！)

「終わりだ！」

Dファイズは高速飛行で接近し、ガーディアンブラスターブレードモードを振り下ろす。スピリアは何とかサーベルで受け止めるが、そのまま急降下していき、高速で地面に叩きつけられた。

「うっ…」

「もうやめだ」

叩きつけられた痛みに呻きながら起き上がろうとするが、Dファイズが左腕のキャノン砲を顔に突き付けていたため動きを止めた。

「……………私の負けよ」

スピリアが降参すると同時に二人は変身を解いた。同時に雪華の周



りだけに雪が降り、士は倒れそうになるが聖麻が肩を掴んで支えた。

「無茶しやがって。あんな状態でなるからだ。まだやることあるなら倒れんじゃねえよ」

「ああ……、そうだな」

士は雪華の方へ向き直り尋ねた。

「なあ、どうして俺を倒そうとしたんだ？」

雪華はしばらく黙っていたがやがてゆっくりと口を開いた。

「目的はあなたが私の世界を滅ぼすと聞いたからよ」

『聞いた』という言葉に聖麻が反応した。

「おい、まさか…錫杖みたいなのを持った女からか？」

「そつよ」

「チツ。やっぱそいつが布教役かよ」

雪華は話を続けた。

「発端は四年前。私が仮面ライダーになってからよ」

## 四年前のある世界

一人の少女が突然現れたクラゲをイメージしたアンノウン、ハイドロゾアロードから逃げていた。

周りの人はやられてしまったのかピクリとも動かない。

ハイドロゾアロードは手を翳し、雷を逃げ惑う少女へ放った。

「きゃあー!!」

雷は直撃はしなかったものの、少女を吹き飛ばした。

倒れた少女の懐から雪の結晶と水滴の形をした二つの指輪が転がった。それを少女は慌てて拾った。

「ソノ指輪ヲ……渡セ……」

ハイドロゾアロードはこの世のものとは思えない気味の悪い声を発しながら少女の握り締める指輪を指差した。

「絶対に渡さない……」

少女は怯えながらも指輪を渡さなかった。この指輪は祖母の形見であり、大切にしていた。渡すわけにはいかなかった。

ハイドロゾアロード無言では再び手を翳し雷を放った。転倒したま

ま避けられるはずもなく、雷は少女に直撃した。

本来なら少女は無惨な焼死体となるが、雷の炸裂した場所には吹雪が巻き起こっていた。その中心には雪と精霊をイメージした戦士、スピリアとなった少女がいた。

「訳がわからないまま戦って何とか勝ったわ。その後も私の指輪を狙う奴らと戦って町の皆も守ってきた。それを続けていたある日、とうとうばれた私はどうなったと思う？」

突然の問いにしと聖麻は何も答えられなかった。だが、聖麻はその悲しげな表情を見て何かを感じ取り、下を向いた。雪華はその答えを告げた。

「町の人全員から迫害を受けたわ。友達から、知り合いからとにかく全てから」

たった一言だが、その言葉には彼女の悲しみが込められていた。

「理由なんてわかっているわ。変身してから髪の色は黒から今の水色に変わったし、変身を解除した後の感情次第で雪が降るようになった。更にはこの指輪が原因と気づかれましたね」

仕方がなかったのかもね、と皮肉気に笑う。

「じゃあお前は元の世界でも……」

「『雪女』って呼ばれたわ」

士が続きを言うのを遮って雪華は言う。それと同時に士は思った。彼女は此処に来て何も境遇が変わっていないのでは、と。

「それに耐えながらもみんなを守ってきたわ。でも、一週間前に突然現れた銀色のオーロラでこの風都に飛ばされたわ。あっちでは受け入れられた二重人格も此処では恐怖の対象だったわ」

「更に此処で『雪女』って噂させれるようになったってことは一度ドーパントとやり合ったんだな」

「でもドーパントってメモリブレイクじゃなきゃ……」

士の言う通り、ドーパントはメモリブレイクでなくては安全に倒せない。メモリブレイク以外で倒してしまえば変身者に怪我を負わせることになる。

「ええ、結果は重傷を負わせてしまったわ……。一命は取り留めたけど。そして病院でさっき言った子に会って……」

「今に至るってわけか」

二人は内心驚いていた。彼女にはもう何年も味方が、支えてくれる誰かがいなかったのだ。辛すぎる経歴に二人は何も言えなかった。

再び雪華を見ると彼女は泣いていた。

「何だよ…。何で私達から色んなものを奪っていきこうとするの!? 信頼も、住んできた町を、その町の人々を！」

彼女の口から押さえていた感情が溢れだした。

「もう奪わないですよ！ 私から、海華から！ 何でこうなってしまうの!?」

時には二人で悔やんだ。二重人格であることを、ライダーになったことを。守る為に力を使った結果、それが失われていくことを。

「こんな周りに誰もいない、居場所がないだけでも嫌なのに………、かつての居場所まで奪わないですよ！」

その言葉に黙っていた士が口を開いた。

「お前は……、すごいよ」

あまりに以外な言葉だった。だが、言われた雪華はそれに対して更に叫んだ。

「何よ！ この境遇が!? ふざけないですよ！ こんな辛いのに……、結局何もわかってないじゃない！」

士はその怒声にも一切優しそうな表情を変えず言葉を続ける。

「確かに今聞いただけの俺にはお前がどれだけ辛い思いをしたかは

全部はわからない。でも、3つだけわかることがある」

「……………何よ」

士はふらつきながらも1つ目を言った。

「1つ目はお前がやっていることはすごいってこと。みんなに嫌われても自分たちが好きな町やみんなを守ろうとしてたんだから。そんなすごいこと余程強くなきゃ出来ねえよ」

雪華はそれを黙って聞いた。そして少しだけ心が軽くなった。

「2つ目は、お前のその二重人格も、ライダーであることも、変身後に雪が降ることもさ……………うっ」

士は倒れそうになったが自力で踏みとどまり、笑顔を浮かべ続けた。

「誇っていいんだよ」

「……………え？」

雪華は士の言葉を疑った。今までそんなことを言われたことが無かったから。

「だって二重人格は確か雪華と海華だよな。どっちもおもしろい性格だし、ライダーについては俺はすごく好きだし、雪が降るなんて綺麗じゃねえか。実際レイってライダーはお前とは逆だけど変身してから雪が降るぜ」

雪華には士が一つ一つ自分の嫌だったことを言うたびにさっきとは

違う意味で涙を流した。

誰もがみんな拒絶し、嫌がり、離れていった元凶である全てを褒められ、受け入れられたから。みつともないと思いい手で涙を拭うが止まらなかった。それだけ嬉しかった。

士は最後の1つを話し始めた。

「3つ目は。お前の周りに誰もいないなら、居場所がないってんなら。そんな絶望は破壊して俺達が居場所になつてやる！そしてお前のかつての居場所を取り戻してやる！」

雪華は、精神内で海華は大量の涙を流した。今まで流した悲しみによるものではなく、嬉しさで。その様子を見た士は手を差し伸べた。

「でも世界を渡れるの？」

「俺達は世界を旅してるから、いつかそこへ絶対連れて行く。そんなみんなの誤解を解いてやる。だから一緒に旅しに行こうぜ。きつと他にもお前を受け入れてくれる奴がいるからさ！」

士は笑顔を見せながらも一度手を差し伸べる。

雪華は手を取ろうとして止めてしまった。裏切られるかもしれないと、心のどこかで思ってしまった。すると海華が話しかけてきた。

『ねえ雪華。士のこと信じようよ。こんな優しい言葉言われたの始めてだもん。それに士は絶対本心で言ってるもん。一緒に行こうよ』

雪華は顔を上げる。そこには変わらず笑顔でいる士がいた。それに少し顔を赤く染めると、今まで見せなかった笑顔で士の手を取り二

人分の声で言った。

「『』ありがとう」



## SとKの悲しみ／居場所という光（後書き）

竜王「ヘーイ！今回から新メンバー登場！」

雪華「そういうわけよ。よろしく。それと…」

海華「はっあぁ〜い！みんなのみんなによるみんなのためのみんなだけの海華ちゃんだよ〜！」

竜王「何その自己紹介」

雪華「悪いわね。海華が騒いじゃって」

海華「いーじゃん！やっと出れたんだもん」

竜王「ちなみにみなさん気づきましたか？土は彼女たちに居場所を与えたと同時に、いらんものまで作ったことに」

雪華「なんのこと言ってるのよ」

竜王「こ、殺される！うわぁ〜（橘さんぽく叫びながらボードを投げて逃亡）」

雪華「何かしらこのボード。えっと『仲間になんの早いだろ！とか文がきもいーなどの苦情は覚悟しています。でも申し訳ありません！僕にはこの展開しか思いつきませんでした！』。……聞いてた通りクソ作者ね」

海華「それではまた次回〜。バイバーイ！」



登場人物紹介 その3 (前書き)

雪華と海華についてです。

## 登場人物紹介 その3

凍空<sup>いっぞら</sup> 雪華<sup>せっか</sup> イメージC V 櫻井浩美 (Angel Beats  
ゆり)

18歳 12月12日生まれ

身長162cm 体重44kg

Wの世界で都市伝説とされていた雪女の正体。

髪は水色のふわふわした長髪で、肌は雪のように白い美人。

性格は冷静で頼れる姉的存在。

人を呼ぶときは名字にさんづけだが、土と海華だけは呼び捨て。

服装は水色の胸元が開いた半袖でへそ辺りまでしか丈のない浴衣のような服に、黒のミニスカートと結構露出が多い。

こんな格好の理由は暑さが極端にダメだからで、春の陽気でも結構ギリギリな程。

裁縫の腕が達人並で上記の服や他の服は全て自分で作ったもの。料理も出来るが、あくまで一般程度。

3サイズはBとHが美莉より上であり、それでいてWは美莉と大差がない。

髪は元々黒のストレートだったがスピリアに変身してから今の色になり、更に変身後の感情次第で雪が降るようになった。

それが原因で迫害を受けた過去がある。

体術が優れており、単純な格闘戦ならば基本は負けない。

海華という人格を持った二重人格者で、会話をするときには独り言のようになってしまう。今でも海華のテンションに慣れていない。

土の説得を受けてから、土が好きになるが素直になれず殴る蹴る等して照れ隠ししている。つまりツンデレであり、それをネタに海華や聖麻によくからかわれる。

美莉とは普段は普通に接しているが、土関係で暴走した美莉と言い

合いになることが多い。

凍空 いてぞら 海華 かいが イメージC V 伊勢菜李也 (緋弾のアリア 峰理子)

雪華のもう一つの人格。

性格は常にテンションが高く、誰にでもそれを変えないと、雪華とは正反対。

趣味はギャルゲー・コスプレと、萌えやオタ要素が強く、口調もそれを意識しているため状況によって口調が変わる。コスプレの服は雪華に頼んで作ってもらっている。

一人称は海華 (ちゃん)。

雪華同様、土が好き。だが、雪華と違い積極的で土に甘える、抱き着く等平気で行い、色仕掛けもやったりする。

美莉とは仲が良いが、やはり土関係でもめることも。その時は挑発したりすることが多く雪華の時より酷いことになる。

## 仮面ライダースピリア

### フラウフォーム

身長192cm 体重90Kg

パンチ力4t キック力6.5t ジャンプ力ひと跳び45m 走力100mを2秒

雪華の人格で変身した形態で、変身時には吹雪が巻き起こる。薄黄色の複眼に、雪と精霊をイメージした鎧を纏っている。スピードが早く、元々優れている体術は更に強化されている。戦法としては体術やフラウサーベルを使ったスピードを生かして戦う。

必殺技はスピリットリングをサーベルの窪みにはめ、雪の力を溜めて雪の竜巻を放つアブソリュードスピント、相手を竜巻で凍らせながら拘束し、周囲に生み出した複数の氷柱で相手を突き刺すアブソリュードメイデン。威力は共に35t。

### スピリットリング

スピリアに変身するための指輪。

雪の結晶の形と水滴の形をした二種類がある。

口づけすることで変身する。

祖母の形見であるため、とても大事にしている。

### フラウサーベル

鍔が雪の結晶になっている白く細い剣。

間接剣にもなっている。

## ウィンディーネフォーム

身長同じ 体重91Kg

パンチ力6t キック力8.5t ジャンプ力40m 走力100mを3秒

海華の人格で変身した形態で、変身時には水流が巻き起こる。オレンジの複眼に、水と精霊をイメージした鎧を纏っている。フラウフォームより力がある分、スピードは少し下がっている。

決め台詞は戦闘開始時の「はっあぁい！ こっから先は海華ちゃんルートだよ！ 攻略出来るかな？」。

戦法はウィンディーネジャベリンを使ったアクロバットな戦い。ジャベリンを使つて棒高跳びのように跳んだり、回し蹴りをしたりする。

ジャベリンで水を斬り上げることで、自在に伸びていく水の道を作りだすことができ、ジャベリンを使つてサーフィンのように高速移動する。

必殺技はジャベリンの又の部分の窪みに指輪をはめ、水の力を溜めてから相手突き刺し、先端から高圧水流を放つことで相手を貫くリヴァイアストライクと、アギトのライダーブレイクのようにサーフィン移動から停止した勢いでジャンプし、跳び蹴りを放つリヴァイアキック。威力は37t。

### 登場人物紹介 その3 (後書き)

竜王「で、わけで載せました!」

海華「やっぱりプロフィールは必要だよな!これでバッチシだお!」

雪華「また変な口調して……。それと私はツンデレじゃないわよ!」

竜王、海華「『ダウト!』」

雪華「うるさいノノ!」

竜王「次からいよいよクライマックス!」

海華「見逃したらバッドエンドだぞ!」

雪華「それではまた次回」



ユニーク5000突破記念コラボ 童話ディカエレラ前編（前書き）

てわけで今回は水音ラルさんの『仮面ライダーディージェント』破壊の代行者』とのコラボです。

- ・元はシンデレラ
- ・語り手方式で進みます。
- ・そして語り手は作者
- ・カオスすぎてやばい

最初に言っておきます。ラルさん、マジでごめんなさい。

昔々のそのまた昔って何年前？　なんてそんなことは気にせずとにかく昔。

あるところに美莉という可愛くて、つい最近絵に描かれた（メタ）女の子がいました。

彼女は幼くして両親を亡くしたため、義母の家に引き取られました。しかし、そこでは義母や2人の姉に雑用の如く扱われていました。

「美莉！　まだ埃が残ってるわよ！　しっかり掃除しなさい！」

「は、はい！　すみません、加奈お姉さま！」

この少し短い亜麻色の髪をツインテールにしてるが、クセツ毛の為左右の二つの束は蟹の鉗みたいに真ん中が開いている女の子は次女の加奈。苗字は話の都合上無しで。

ディーゼントに出てくるキャラの一人で、得意技は脳天チョップ。どれくらいの威力かというと、たっくんをあつちの世界に送って木場さんと会わせることが出来るレベル。

「いつもいつも言ってるでしょ！　何で出来ないのよ！」

「ごめんなさい！　今すぐやります！」

深々と頭を下げ謝ると、加奈は溜息をついてどこかへ行ってしまうました。

慌てて雑巾を取り出し、床を拭いていると背中を誰かに強く叩かれました。その痛みに美莉は顔をしかめました。

「痛い！」

「おい美莉。早く夕食作れよ！ 時間なんだからな！」

少し日に焼けた肌に天真爛漫な印象を受けるそれなりに整った顔をした男勝りな口調の女の子は長女の皐月。同じく苗字は無しで。加奈と同じくディージェントのキャラ。『乙女』と自分を称しているが、その理由は中学時代に……

「とにかく早く作れよ！ いいな？」

「はい……」

シユン、と頂垂れながら返事をした美莉を見た皐月は舌打ちしながらどこかへ………ってアレ？ 何でこっちに来てんの………ぎゃあああああああああああああああああ！！！！！！

「中学時代のことは絶対言つなよ。次言ったら殺す……！」

語り手を葬った皐月は流れ通りどこかへ行ってしまう。

まだ痛む背中をさすりながら台所へ向かい、夕食の支度をしていると玄関が開く音がしました。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい！ お母様！」

美莉は急いで玄関へ駆けつけ義母の雪華に挨拶しました。しかし雪

華はと言つと、

「お帰りなさいませ、でしょ？　ちゃんとしなさい！」

と細かいところで怒り、美莉の頬をはたきました。その痛みには涙を流しそうになりましたが泣くわけにはいかなかったのでこらえました。

『うつわ〜、DVだDVだ〜！　DVは犯罪なんだぞ〜！　フラグクラッシュしちゃうんだよ！』

「この子が悪いのよ。私に非はないわ」

もうひとつの人格である海華がこの空気には全く似合わない調子で話しかけてきましたが、雪華は適当にあしらうと部屋へ入って行きました。

「はあ…、何で皆こうなっちゃったんだろう…」

美莉は一人呟きました。元々この4人は優しかったのですが日に日に態度が変わってきてしまいました。

その理由を4人はこう言いました。

加奈の場合

「私はたぶん2番目かな。結構仲良くやってたんだけどね……」

ある日加奈は美莉に暖炉の掃除を任せていました。もちろん灰や煤

がたくさんあるため女の子には結構嫌な仕事ですが、心優しい美莉は引き受けました。

しばらくして、加奈は美莉の様子を見に行くと予想通り美莉がせき込んでいる様子が入りました。それを見て加奈は、変わってやるう、と思い美莉に声をかけました。

「ねえ大丈夫？ 何なら変わるわよ」

美莉は加奈の方を向き笑顔で答えました。

「大丈夫ですよ。もうすぐ終わりますから……ゲホッゲホッ！」

その時加奈の目つきが変わりました。

「だってさ、せき込みながら涙目で胸についた埃を手で払う仕事なんてギャルゲー以外で見ないわよ！ それを平然とやって女の子の私ですらときめいたのよ！ 何より年上の私よりも胸大きかったし……！」

こうして理不尽な怒りが込み上がってきた加奈は得意の脳天チヨッブを炸裂させて美莉を悶絶させました。そして現在に至るのである。

皐月の場合

「アタシも加奈と同じで仲良くやってたんだけどな……」

ある日美莉と皐月は街へ服を買いに行ってきました。

「いつやく、良い服変えて良かったな！」

「そうですね。可愛い服があつて良かった〜」

二人とも買い物に満足したようで、無駄話をしながら帰路をたどつていました。すると、目の前を歩いていた男性がハンカチを落としました。

「お、ハンカチ落としたな」

「拾つて渡さなきゃ！」

美莉がハンカチを拾うと、2人は小走りでその男性のもとへ駆け寄り声をかけました。

「すみません！ ハンカチ落としましたよ！」

「ん？ ありが…と…」

その男性が目にしたのは天使のような笑顔でハンカチを差し出す美莉でした。

そして、その様子を目の当たりにした皐月の目つきが変わりました。

「だってよ、あの笑顔こそアタシの言う『乙女』って奴だと思っただよ。アタシは必死に努力して『乙女』になろうとしたのに何で何もしてないアイツが出来るんだ！？ アタシが美莉と同じことすると男子は逆に引くのによお」

そりゃあ、中学時代を知ってる男子にやったらドン引きするにきま  
……………（爆砕）

と、とにかくこうして皐月は帰ってから美莉を追い詰めるようにな  
っていきました。

#### 雪華の場合

「私が最初だったかしら？ 色々あるのよ……………」

雪華は確かに美莉が来たことで生活が少し大変になりましたが、そ  
れでも雪華は美莉を我が子のように接しました。

しかし、美莉を引き取ってからある夢をみるようになりました。

それは、美莉に似た女の子と自分に似た女の子が1人の男子を巡っ  
て言い争いをする、という何かデジャヴュを感じさせるものでした。  
その夢はだんだんエスカレートしていき、仮面ライダーになって戦  
ったり、拳銃の果てにはその男子のそこへ夜這いするとこまで行き  
ました。

「最初はもちろん気にしていなかったのだけれど、だんだん腹が立  
つてきて遂に手を上げてしまったわ」

2人よりも遥かに理不尽だった。

## 海華の場合

「え？ 海華は別に美莉ちゃんのことは恨んでないよ。ただ、3人が突然美莉ちゃんをいじめるようになったからSM感覚でやっただけ。最近そういうのもありかな〜って思って来たんだよね〜」

フッフ、と妖艶な笑みを浮かべた。つまり、雪華よりさらに理不尽だったのだ。

とにかく、こんな理不尽な理由でいじめられてるなんてことは知らずに美莉は風呂掃除をしていました。すると姉と義母の話声が聞こえてきました。

『そつえば、もうすぐ舞踏会だよな』

『王様も急よね。ま、出れるからいいか』

『何か今の王様ってかなり変わってるらしいわよ…』

『いいねいいねえ！王様主催の舞踏会なんて超イベントじゃん！』

姉達の言う舞踏会とは加奈の言う通り前日に突然発表されたのだ。もちろん街の人は全員大興奮である。参加条件はたった一つだけだが、この条件はまた後に。

何でこのイベントが開催されたかと言うと、二日前に遡る。



## 王様の城

この城に住む王様は小さい太鼓を叩きながら仮面ライダー響鬼を見  
ていました。この王様はもう気づいての通り士である。

「やっぱ響鬼ってかつこいいよなあ〜。楽器つてところが斬新」

一人で語りだすと後ろから声をかけられました。

「また仮面ライダー見てんのか。お前ちったあ王様らしいことしろよ」

彼は王様の大臣である聖麻。ちなみに一度も『王様』と呼んだことはない。

「別にいいだろ。仮面ライダーかつこいいし」

「理由になんねえよ。仕事もまかせっきりだしお前ワルズギルか？」

「あんなのと一緒にすんな！」

さすがに特撮好きでもあの駄目船長はお気に召さなかった。士と聖麻はしばらくもめたあと、この際何か開こう、という結論に至り二人で考えていました。考え始めて数分後、士が聖麻を呼びました。

「あ？ どうした？」

「俺さ、出会いが欲しいんだけど」

「……………」

聖麻は無言でその場を離れると、さっきまで土の使っていた太鼓を持ってきました。

「死ねこのゲス野郎っ！」

「ゲフウ!？」

そして顔面目掛けて太鼓を投げつけ、土は顔を押しさえてのたうち回りました。

「何しやがる！」

「黙れこのフラグ乱立野郎！ テメエ今まで何人フラグ立てやがったか数えてみる！」

「んなの0に決まってんだろ！」

その後も土は0と言い張りますが正解は、街のおもちや屋の女性店員全員+城にいる女性使用人全員+助けてきた街の女性多数でざっと1000人を超えていました。こんなに立てたら聖麻じゃなくてもブチギレして当然です。

「本当に鈍感バカだなお前……」

あまりにも0と言い張ったため、聖麻は逆に呆れてしまいました。土はそれも見て勝った気でいました。つまりバカです。

「だからライダーの舞踏会を開く！」

そう、これが開催された理由はただ出会いが欲しいがためだったのです。

「つまり、仮面舞踏会ってことか？ なるほどな。王様命令だしや

るっきゃねえか」

ちなみに、これを知った街の女性は大喜奮だったとか。

たった一つの条件とは仮面ライダーになれることでした。それも知らず、綺麗なドレスを着た舞踏会を美莉は想像しました。

「でも私のもってる服にドレスはないしなあ…。はあ…」

考えて虚しくなってきたため、頭を振って妄想を振り払い風呂掃除を再開しました。その顔はどこか悲しそうです。

そんな美莉をダディの如く体を半分だけ小さな穴からだして覗いている5cmぐらいのライダーがいました。

このライダーの名前は仮面ライダーディジェクト。変身者の名を皆みな葉なは好太郎こうたろう。

ディジェントで言うDシリーズ、つまり次元ライダーの1人でシステム名を『アプローチアウトシステム』。

基本カラーはダークレッドで複眼の色は紫で、全体的に恐竜をモチーフとした頭部と体全体に鋭利なライドプレートが斜めに刺さっており、特に頭部の大きなライドプレートはトリケラトプスの2本角のように見えると、刺々しい容姿のライダー。

『アタックライド リジエクシオン』という対象を一つ選択し、それを拒絶するといふかなりチートな力を持っているが、今回はデフォルメ化されているため刺々しさも、少し怖い感じも全くなく言うなら『怖可愛い』状態になっている。

（あの女舞踏会に出れそうになくて困ってるのか……。柄じゃないがやってやるか）

こうしてディジエクトは美莉の為にドレスを作ることを決めました。最初に言っておく。コイツのやることは無駄な行為だ！

とりあえず穴の中に裁縫道具や布があるわけないので、穴から出て調達というの名の盗みをするにしました。

（確か雪華という奴が裁縫を趣味にしてたな。そいつの部屋に行けばあるかもな）

と、さすがに長い間住みついでただけあつて義母や姉のことは知っていました。

数分後には部屋へ侵入することが出来ました。

「……青ばつかだな」

ディジエクトは思わず呟きました。雪華の部屋は壁以外のほとんどが青系の色で染まっていました。理由としては雪華が暑さに弱いため、涼しさを感じる青を使ったからでした。

「ま、とにかくさっさと取ってくか」

部屋を探索してすぐに机の上の裁縫道具に気づきました。

ディジエクトは机へジャンプしたどり着きました。いくらデフォルメされているとはいえライダーなので身体能力に問題はありませんでした。

ディジェクトは裁縫道具から必要最低限のものと布を持ち出して軽々と運んで行きました。

Dシリーズと一部の例外を除いて外部の人間から拒絶される体質であったため、見つかつてもおつちが逃げるだろう、と思ったディジェクトは堂々と廊下を歩いて戻っていましたが、途中で臯月と出逢ってしまいました。

1人と1匹はしばらく睨み合っていました。

(何だこのちっこいの？ 何か見るとムカつくのは気のせいかな？)  
しばらく考え込んだ臯月は何かを決断し、指を鳴らしました。その様子にディジェクトは得体の知れない恐怖を感じ後ろを向いて走り出し、同時に臯月も走り出しました。

「待て変なちっこいのおおおおおおおおお！！！！！！」

「何で避けないんだああああああああああああああ！！！！」

！！！！

何でこうなってしまうのかはディジェントのあとがきを見ればわかるはず。

1人と1匹はしばらくの間、某猫とネズミの追いかけてこのように追いまわし、追いまわされました。

なんとか柵の影に隠れることが出来たディジェクトは様子をつかがいました。

「チクショー、どこ行ったんだ？」

どうやら撒いたようで、ディジェクトは安堵しました。ですが、妙なことにディジェクトの周りの影が濃くなりました。上を向くと足を振りあげた皐月がいました。

「見つけたぜ、ちっこいの！」

ディジェクトは慌てながら一枚のカードを装填しました。

「ATTACK - RIDE REJECTION」

「物理干渉を拒絶する！」

すると皐月の足はディジェクトに触れた瞬間弾かれてしまい大きく転倒しました。

「いって〜、何だ？」

皐月が腰をさすりながら前を見た時には既にディジェクトはいませんでした。

今ディジェクトが行ったのは言葉通り物理干渉の拒絶。つまり実体のある攻撃は全て弾くのである。何てチート。

「はあはあ、危なかった……」

どうにか穴の中に戻ったディジェクトは肩で息をしながら座り込みました。息を整えているとあることに気づきました。

(そもそも裁縫出来ないよな俺……)

何でやるうだなんて思ったんでしょう。ご利用は計画的に。途中でやめるわけにもいかないのどうにか出来ないか必死に考えました。そして何かを思いつき、カードを装填しました。

「ATTACK-RIDE REJECTION」

「(やったことはないが試してみるか…)俺が裁縫が出来ないことを拒絶する!」

何か無駄遣いのような気がします、この無駄遣いによってダイジエクトは雪華レベルの腕になり、着実にドレスを作って行きました。

そもそもこのダイジエクトはどうやって美莉のBWHを測ったんだろうね？

ちなみに美莉は上から85・5、57、86です。

何だかんだでドレスも完成し、出会いのための舞踏会当日。え？ 早いつて？ だってドレスの作り方知らないもん。

「じゃあ行くからね」

「やることやっつけよ!」

「1つでもやり残したら招致しないわよ」

『おう、こっわくい!』

「はい、お気をつけて」

大量に仕事を押しつけられながら美莉は加奈、皐月、雪華を見送りました。

しかしその表情はどこか悲しそうなものでした。

しばらく歩いたところで皐月が2人に話しかけました。

「なあ、やっぱ変身してった方がいいのか?」

「一応ドレスみたいな扱いだしやったほうがいいよね」

「じゃあ、海華。お願い」

『りょうか〜い!』

雪華は人格を海華に変えると水滴の形をしたスピリットリングに口づけし、構えました。

「へっんし〜ん!」

スピリットリングから激しい水流が巻き起こりスピリア、ウィンディーネフォームへ変身しました。

「じゃあ皐月、私達も」

加奈はそう言うとサイクロンメモリを取り出しました。

「よっしゃあ! やつと変身か! 派手に行くぜ!」



皐月は某海賊の決め台詞を言いながら勢い良くダブルドライバーとジョーカーメモリを取り出しました。超ノリノリである。

「CYCLONE」

「JOKER」

「変身！」

加奈、皐月の順にメモリを差し込みドライバーを展開すると2人はWへ変身しました。

「あ、加奈の体どうしょ？」

確かに道端に放置なんて出来るはずがありません。すると鳥の形をしたメモリがどこからともなく現れ加奈の体を吸収しました。更にそのメモリは勝手にドライバーに差し込まれX字に展開しました。

「XTREME」

虹色の光を中心から発しながらW最終形態のサイクロンジョーカーエクストリームへ変身しました。

「こう言っちゃうとあれだけど、本編より先に出ていいの？」

「仕方ないんじゃない？」

「そもそもここの作者がやったんじゃない」

スピリアは変身時に出来た水たまりをウィンディーネジャベリンで斬りあげ水の道を城まで伸ばしました。



見るとそこには白く綺麗なドレスを持ってきたディジェクトがいました。

それを見た美莉は一言。

「あ、ネズミさん！」

「俺の元は恐竜だ！ 役はネズミだが呼ぶならディジェクトか恐竜にしる！」

このネズミ（笑）こまけー。美莉はいきなり怒鳴られたことに驚きながらも質問しました。

「どうしてネズミさんは喋るの？」

「舞踏会に行けなくなつた状況で！ ドレスを持ってきたのに何で着眼点にドレスがないんだ！」

そう言われてやっとドレスの存在に気づいた美莉。そのドレスを見て美莉は目を輝かせました。

「ありがとうネズミさん！ すごく嬉しいよ！」

「お、おう…／／／」

ディジェクトは美莉の豊満な胸で抱きしめられ仮面の奥で顔を赤くしました。

「じゃあ着替えるから待っててね」

「ああ」

美莉が着替えるというのでとりあえず撤退したディジェクトはあることに気づきました。

(ん？ 何であいつ俺を拒絶しないんだ？)

どうでもいいか、と切り捨て美莉の元へ戻りました。

「すごいよネズミさん！ こんなにきれいなドレスを作れるだなんて！」

現在美莉はさっきの白いドレスを着ていました。胸は少し露出していたり派手でしたがとても気に入ったようです。

美莉はディジェクトを肩に乗せると部屋を出ました。

しばらく歩いていると灰色のオーロラから少し長めの真ん中分けにした黒髪に、目が虚ろでそれ以外は結構端正な男性とポニーテールで前髪は真ん中分けの黒髪に、水音ラルさん曰く結構可愛い女子が出てきました。

この2人はそれぞれディージェントである須藤<sup>すどう</sup> 歩と、ヒロインでワールドウォーカーというオーロラを自在に生み出し様々な場所へ行くことが出来る体質の須藤<sup>すどう</sup> 亜由美である。

「あ、その格好ってことはやっぱり知らなかったんだ」

「間に合って良かったよ」

亜由美と歩が何かを話していると美莉は声をかけました。

「あの…、どちら様ですか？」

「ああ、名前を言ってなかったね。僕は須藤 歩でこっちは須藤

亜由美。君を仮面ライダーにするために来たんだ」

「仮面…ライダー？」

「実は今回の舞踏会は仮面ライダーじゃないと行けないの。だから



ディケイドのツッコミを受けてディージェントは手をポンと叩き納得しました。

「そっか。僕は藍色だからブルーじゃないとダメか」

「そっという問題じゃなくて…」

ディケイドが横を見るとおろおろしている美莉と自分をじっと見ているディジエクトがいました。

「ほら歩、美莉ちゃんが困ってますよ！」

「あ、そうだった」

ディージェントは気を取り直し癖であるグローブをはめ直す仕草をすると、美莉の元へ歩み寄りしました。

そのことで美莉は困惑しました。

「えっと…、私はどうしたらいいんですか？」

ディージェントはそれに答えました。

「それはね、僕と契約して魔法少じ…」ATTACK-RIDE  
BLUST「あばばbbbbbbbbbb」

ディージェントは背中にディケイドがライドブッカーから放った大量の弾丸を浴び、倒れました。

「何で今日そんなに他作のネタを使うの!？」

「だって僕達魔法使いだからさ、それっぽくしなきゃと思って……」

どうやら彼なりに頑張っていたようですが、さすがに某外道生命体のセリフはまずいです。

ディケイドは呆れると変わらず困惑してる美莉にディカエルドライブバーを渡しました。

「これは…?」

「あなたが仮面ライダーに変身するための道具だよ。カードを装填して上に矢を撃つてみて」

美莉はディケイドに言われた通りカードを装填しました。

「KAMEN - RIDE」

「えっと…、変身?」

そして上に向かって光の矢を放ちました。

「DEKAE」

そしてやっと美莉はディカエルに変身しました。

「うわ、本当に変身した!」

「じゃあ、後は乗り物だけど……」

いつの間にか立ち上がったディージェントが辺りを見渡し視界にディジェクトが映ると、ディケイドに声をかけました。

「亜由美、好太郎君でいい? ずっと亜由美を見てるし」

「うん、わかりました。ちょっとくすぐりたいぞってね」

「……………」

嫌な予感がしたずっと亜由美を見つめていたディジェクトは、ディカエルから離れ後ろを向き逃げ出しました。  
ですが、そんなことはお構いなしにディケイドはカードを装填しました。

「FINAL - FORM - RIDE DE DE DE DE  
CT」

「がはあ!？」

突然ディジェクトの体が元の大きさに戻ると、更に体が紙のように折れ曲がり恐竜をイメージした赤と黒のバイク、マシンディジェクターとなりました。

「これに乗ればすぐ城につくよ」

ディジェントが乗るよう勧めるとディカエルは少し困りました。

「あの…、私バイク乗れないんですけど…」

その言葉を聞いたディジェントはマシンディジェクターを叩きました。

「ほら、拒絶して」

『感情の籠ってない声で言うな! 美莉がバイクを運転出来ないことを拒絶する!』

すると、マシンディジェクターに電流が走りました。元々この拒絶能力は結構負担がかかり、その内容の大きさ次第で負担が大きくなる。



本日は何かが出来ないという人の才能に関わることを2回拒絶したため、かなりやばいのだ。

「大丈夫、ネズミさん？」

「あ、ああ……」

辛そうですが、そんなことは気にしない。

とりあえず乗れるようになったのでディカエルはマシンディジェクターに乗りました。

「ありがとうございます！ 行ってきます！」

「あ、1つだけ守って。午前0時になったら変身が解けちゃうからね」

「わかりました」

「楽しんできてね！」

こうしてディカエルはディージェントとディケイドに見送られながら城へ向かいました。

ディカエルの姿が見えなくなると2人は変身を解きました。

「何かこれで半分らしいので続きは次回で！」

マジです。こうして、亜由美が締めくくった横で歩は

「!?!? (。。(」

自分の役目を取られたことで驚愕していました……

ユニーク5000突破記念コラボ 童話ディカエレラ前編（後書き）

というわけで、後編に続くことになりました。

果たして美莉は原作通り王様（士）と結ばれることが出来るのか！？

それは次回のお楽しみに！

ps・ラルさん、皆さんの口調は大丈夫でしょうか？特に亜由美が心配です。

ディカエレラ後編／カオスと崩壊とフラグ乱立／（前書き）

お久しぶりです！私情で更新出来ず1か月経ってしまいました。  
オーズみたいなタイトルで文が変わらず気持ち悪いですがお楽しみ  
ください！

ラルさん、ごめんなさいマジごめんなさい。

## ディカエレラ後編／カオスと崩壊とフラグ乱立

王様のお城

「本当にこれ準備時間1秒かよ……」

「相変わらずお前チートすぎるだろ……」

使と聖麻は驚いていました。当然パーティーだし、王様の財力があれば目の前に広がる豪勢な様子は普通なのだが2人が驚いているのはそこではありません。

これにかかった金額が0であり、土の言うように準備にかかった時間がたった1秒だったことに驚いていました。

「これも全部僕のおかげだね！ えっへん！」

こんなことが出来るディフェルのキャラはただ1人。土の横で胸を張ってる熊の着ぐるみパジャマを着ている男の子ライ兼ヒューマンイマジンのおかげでした。ちなみに役職は本人曰く大臣<sup>2</sup>。その<sup>2</sup>じゃなくて<sup>2</sup>。

ライの能力は知つての通り『好きな物を好きなだけ、好きな時間の好きな場所に配置する』というランクに合わないチートなものです。彼はその能力で今回の舞踏会に必要な物を全てたった1回の手拍子で出現させていたのです。

「ねえねえ、僕も舞踏会出ていい？ フラグ乱立変態お兄ちゃん」

「……何で『ディフェルのお兄ちゃん』から呼び方変わってんだよ」

士が尋ねるとライはキョトンとしながらこう答えました。

「え？ だってここ最近のお兄ちゃんアレでしょ？ コラボで周りのユーザのお兄ちゃんお姉ちゃんに変態の印象付けまくったり、前回のフラグ乱立っぷりのせいでユーザのお兄ちゃんから爆死願望来てるでしょ？ だからああ呼んだんだけど…」

「ああ、なるほどな。確かにMさんから爆死願望来てたしな」

「何だその嘘偽りしかない印象！？ 俺は変態じゃないしフラグは立たない！ それと聖麻！ メタ発言やめろ！」

お前の方が嘘偽りだらけだろ、と言いたくなりますが堪えましょう。とりあえずライの言ってることは真実でした。メタだけど真実です。

「でさあ、出ていいの？」

「別にいいけど、お前ライダーじゃないだろ」

ライはライダーではなくイマジンです。つまり舞踏会には出れないのですが…、

「そんなことは僕の能力でどうにかなるっ！」

ライは手拍子すると手に4つのスイッチが嵌められ、右側にレバーのついたドライバーを出現させました。そう、フォーゼドライバーです。

「また本編に先駆けて登場かよ！」

「やりたい放題だな」

ライは2人の言葉を聞き流しドライバーをはめると、4つのレバー

をいれ起動させると、右手でレバーを掴み構えました。

「3・2・1」

「変身！」

そしてレバーを動かして右腕を高々と上げるとワープゲートのようなものに包まれ煙が巻き起こりました。それを右手で払うと白いスペースシャトルもイメージしたライダー、フォーゼに変身しました。ただ、ライの身長に合わせたのでミニ電王ならぬミニフォーゼでした。

「宇宙キター！」

両腕を思い切り上げお決まりの台詞を言いました。

「これで行けるよね？」

「お前、とりあえずドライバーくれ」

士が無茶なお願いをしてみました。仕方がないので右側に黄色のスイッチをはめ、ONにしました。

「FLASH」

「FLASH ON」

するとミニフォーゼの右手に電球のような形をしたフラッシュモジュールが装着され、激しく発光しました。

「つぎゃあああああああああああああああ！……！！ 目が、目があああああああああああああああああああ！！……！！」

あまりの光に土は某大佐の叫びを上げながら目を押さえました。ちなみに聖麻はサングラスをしていたので無事でした。

「あ、悪口のお兄ちゃんにこれあげるね」

ミニフォーゼは手を叩くと聖麻の手中に黒龍の紋章が描かれた黒いデッキケースを出現させました。

「それじゃあ、いつてきまーす！」

ミニフォーゼは背中のパニアを使い柵を飛び越えるとそのまま会場へ行ってしまうました。

「あのガキ…、戻ってきたらお尻ペンペンだ。で、聖麻は何貰ったんだ？」

目がやられていたため貰ったものがわからないので、それを聖麻に尋ねるため横を向いたら黒龍のライダーであるリュウガが立っていました。

「……お前、リュウガになったの？」

「……………」

リュウガは無言で土に近づきながら、デッキからカードを取り出し左腕のドラグバイザーに装填しました。

「GARD・VENT」

右手に契約モンスターであるドラグブラッガーの腹部を模したドラ

グシールドが現れると、それで士を思い切り殴り飛ばしました。

「ゴフツ！？ テメエ、せめて殴るならドラグクローだろ！ 何でシールドなんだよ！」

「それだとありきたりだろ？ それと単純にこれからフラグを乱立しそうなお前を殴りたかった」

こっちもこっちで理不尽でした。まあ、この舞踏会に来てるほとんどの女性が前回説明した100人以上の士の餌食になった人なので理由としては正しいです。

「よおしわかった。いますぐブチのめす。変身！」

士は腰にディフェルドライバーを装着しカードを装填し、ディフェル……

「KAMEN RIDE RYUKI」

ではなく赤龍のライダー、龍騎へ変身しました。もちろん以下D龍騎です。

「リュウガだから龍騎ってか。上等だ、お前の攻撃なんて表情見なくてもわかりきってたんだよ！」

「ハッ、戦闘経験は俺の方が上だ。『前』みたいにはならねえぞ！」

士の言う『前』とは何なのかは秘密。とにかく、この後劇場版並の激闘が約20分に渡って繰り広げられました。



一方、主役であるディカエルはマシンディジェクターに乗って森の中を駆け抜けていました。

「すごい！ 本当にバイク運転してる！」

『そりゃあ拒絶したからな……』

バイクに乗れるようになったことに喜んでいましたが、バイクになったネズミさん（笑）は反動のせいで辛そうです。

そのせいか、徐々にディカエルの運転に関係無くぐらつき始めました。

「だ、大丈夫ネズミさん!？」

「ああ、何とかな……」

正直辛そうです。ラルさん曰く反動は尋常じゃないらしいです。なのに城まであと少しのところで走るなんて本当に良く頑張った！  
ということだ

「じゃあ私は降りるから、ここで休んでて」

「……は？」

「だってこんなに辛そうにしてるネズミさん見てるのは苦しいよ。だから休んでて」

なんて優しいのでしょうか。もちろんネズミさんだって優しさが身に染みていましたが、同時に別の意味を考えてしまいました。

(ん？ これってつまり………退場…か？)

正解です！ 美莉にはそんなつもりはありませんが事実上T A I Z Y O Uです。悲しくて泣きそう………(ノー…)

「その涙絶対目薬だろ！ お前俺に何の恨みが………って女がいない！？」

ネズミさん(笑)が虚空に語りかけている内に、ディカエルは召喚した仮面ライダーアクセルバイクフォームに乗り換えて既に見えなくなってしまう。別に美莉は浮気癖があるわけじゃないよ。彼女は白銀のグレンデが一瞬で砂漠になっちゃうくらいに土を愛してる一途な子だよ。

「そんなことはどうでもいいだろ！ それより俺はどうなるんだ！？」

うーん、とりあえず休んでて。

「だからそれ退場だろug(ry」

再びお城に戻り、土は変身を解いてポロポロな体で舞踏会場を歩いています。聖麻リユウガとの勝負は何と負けでした。

確かに土の方が実戦経験はあるはずですが、元々土は聖麻とまともにやり合って一度も勝ったことが無く更に聖麻曰く、「土の戦い方なんて顔見なくなつてわかる」、らしいので全部読まれ惨敗。意外と強いんです。

「クッソ、あいつ何であんな強いんだよ。仮面ありや表情見えねえはずなのに……」

と、グチグチ言っていると土の目が輝きました。そりゃ仮面舞踏会ですし、踊っているのはみんなライダー。正直ガノンムが正座するくらい変な光景ですが気にしない。でも、土の目が輝いた理由は別でした。

「おお！ 黒髪じゃないけど茶髪ロングの巨乳！ しかも美人！ よし、あの人と………」

せっかく好みのタイプを見つけたのに土は踊りに誘うのを躊躇しました。脳裏に聖麻が浮かんだからです。

（あいつに見つかつたらたぶん、1か月くらいそのネタで馬鹿にされからかわれる。しかも精神的ダメージ大で。てか何で周りから殺気が漂つてるんだ？）

そりゃあ、この舞踏会に来てる女性の8割が土目当てで来てるわけですし、大声であんな変態丸出しなセリフを言えば睨まれて当然でしょう。

その後、どう考えても聖麻に馬鹿にされるエンドしか見えなかったため、溜息について諦めました。

そしてその土のターゲットにされかけたウエーブ掛かった首筋まである茶髪、鋭い目つきでプリツとした柔らかそうな唇の美人、犬飼美玖は目の前の2人を見て溜息をついていた。ちなみに猫舌。

「何度言つたらわかるんや！ 美玖と踊るのは現恋人のウチや！」

「確かに現恋人は君だけどさ、たまにはいいじゃない」

「いくら社長でもダメや」

「ケチだなあ。久々に美玖とそういうことしてもいいじゃん」

明るい茶髪をカチューシャで纏めたオールバックに、細長い目でシヤープな輪郭の顔でエセ関西弁を喋る男は三木章司、焦げ茶色で長めのサラサラとした髪、優しげで子供っぽい好奇心旺盛な目で若干童顔の男は岸辺正幸である。

この二人がもめているのは、会話の通り誰が美玖と踊るかについて

です。

3人の関係は

美玖 正幸の第一秘書で元恋人。章司とは現恋人。

正幸 スマートブレイン社長。美玖とは元恋人。

章司 正幸の第二秘書。美玖とは現恋人。

というキバ並の三角関係だが、別に問題無く逆に仲が良い。ただ、せっかくの舞踏会なので正幸は久々に美玖とそういう系になりたい、というわけです。

「社長もこんなところでめないてください！ 章司も止める！」

美玖が仲裁に入ると二人は何故か動きを止め、美玖をじつと見始めました。

「な、何だ二人とも……」

嫌な予感がしたため後ずさる美玖。  
章司は正幸の前に手を出しました。

「正幸、カイザショットだすんや！ 今すぐ！」

「分かってるよ、美玖のドレス姿なんてめったに見れないし」

「は？」

今の美玖の格好は赤のドレスで胸はかなり大きいため、大きく胸元が開いています。

そしてその本人は啞然としていました。  
喧嘩を止めたと思えば、今度は自分を撮ろうだなんて言ったからです。

「そっぴや美玖の胸また大きくなった？」

「言われて見るとそっぴやな。まだ成長するとはさっすがウチの彼女や！」

「じゃあ成長記録ってことで胸接写で良い？」、という正幸にG.Oサインを出す章司。そんな彼等を見ていた美玖は遂にキレました。

「START UP」

「へ？」

明らかにまずい音声が鳴ると、二人の周りに計10個の赤いポイントが現れました。

どうやらいつの間にかファイズアクセルフォームになったようです。

「待つて！ 変身もしてない状態でそれ受けたら死んじやう！」

「せや！ ウチらオルフェノクやで！」

「知るかそんなことおおおおおおおお！！！！！！」

そして、アクセルクリムゾンスマッシュが炸裂し二人の悲鳴が城の中に響き渡りました。

士は城の外に出て落ち込んでいました。

今になって変身してたら顔分かんねえ、ということに気づいたからです。

「とりあえず戻って誰かと踊るか……」

気を取り直して戻ろうとすると、後ろから声をかけられました。

「すみません、王様さんですよね？」

振り返るとそこには、黒髪ロングの巨乳っ娘、つまり美莉がいました。

「ああ、そうだけど……、そうだ、踊ろう」

「は、はい！」

展開早いとか気にしない。ようやくメインに入りました。

二人は城に入るとそれぞれディフェルとディカエルに変身して踊りはじめました。

「何かこの姿で踊るって変じゃないですか？」

「まあ、バトルフオーフォーみたいなもんだろ」

二人は無駄話をしながら踊り続けました。あ、踊りの描写はわからないのでカットで。

踊りを終わると二人は再び外へ出ました。

「そっぴや名前聞いてなかったな」

「あ、美莉っていいいます。踊ってくれてありがとございました」

ディカエルはぺこりとお辞儀をしました。

「俺は……って言わなくても分かるか。てかさ」

「何ですか？」

「お前ライダーの姿もそうだけど、綺麗だよな」

「ッ！／／／」

美莉は士の無自覚な言葉に仮面の中で顔を赤くしました。

「そ、そんなこと……／／／」

と、目を反らしたら時計が見えました。時間は11時59分でした。

美莉は急いで階段を降りていきました。

「お、おい！ どうした!？」

「ごめんなさい!」

美莉は振り返らずに謝罪して、行ってしまいました。

「何だったんだ……、ん？」

士は階段を下りるとある物を見つけました。それはディカエルが慌てて落としたディカエルドライバーでした。



森の中を走っていたディカエルは勝手に変身が解けてしまいました。

「はぁ、危なかった。変身できなかつたら参加出来ないし」

安堵しながら歩いていると美莉は退場したはずのロン毛を見つけました。

ただ、状況はひどいものでした。

はさみを持った髪の長い不気味な女が、リジエクシヨンの反動で動けないロン毛に馬乗りになって、そのロン毛をケタケタ笑いながらずたずたに切っていたからです。

当然美莉は恐怖に震えながら無視して通りすぎました。

「おい待て！ こんな状況でもスルーされるのか！？ おい！ 助けてくれ！」

途中でロン毛が助けを求める声がしましたが、女の怖さに負けスルーしました。

シンデレラのメインである踊りが無知な作者のせいで蔑ろにされた翌日。

「てわけでこれの持ち主を探してほしい」

「顔も名前もわかってんなら1人で行ってこい」

「でもさあ、その美莉ってお姉ちゃんがどこに住んでるかまでは知らないよ。僕的能力で行くにしても、それがイメージできなきゃ無理だし」

というわけで、美莉を探しに出かけた3人。  
だが、ここでライのゲーム魂に火がついた。

「国民のみなさーん！ 王様のお兄ちゃんが変身アイテムの持ち主をおたずね中だよー！ 本人なら何と王様の彼女に！ それ以外はそうだなあ、1か月外出禁止！ ではではあ、ゲームスタート！」

ライが広報でそんなことをほざいた結果……

「おい、どういうことだこりゃあ……」

「好みだけど逆に気味悪いな……」

「まずいことしちゃった……」

10件訪問した内、その全ての女性が黒髪ロングの巨乳のふりをしていたため、シンデレラ本編以上に厄介になってしまいました。

当然ディカエルドライバーが使えるはずもなく、1か月外出禁止の女性が次々と増えていきました。

「おい、あのおもちや屋の店員さん、茶髪のポニーテールだったの  
に変わってる……」

「どんだけこの国の女共は土の餌食になってきたんだよ」

土のフラグ乱立っぷりにだんだん腹が立ってきた聖麻は土を蹴り飛ばしました。

その結果1人の女性を押し倒してしまいました。

「あ、すいませ……………」

謝罪した土、更には聖麻とライの顔が固まりました。

「お、王様！？ すみませんでした！」

その女性も黒髪ロングの巨乳だったからです。

「もうやだこの国……………」

聖麻は思わずそう呟いていました。

一方の舞台裏

「土君のフラグ乱立凄すぎ……………」

「ああなることってそんなに凄いの？」

もう出番の無い2人、亜由美と過去に色々あったため世間に疎い歩は土の様子を疑問に思いながらモニターで様子を見ていました。

「ところで歩は何の本を読んでるんですか？」

歩の手にはかなり厚い本がありました。

「聖麻君から貰った。結構おもしろいよ」

「ふくん、でさあ、この人は好太郎さんなの…？」

「そうだよ」

あゆみが指さしたのはボドボドになって倒れている髪の毛の長さも形も滅茶苦茶になっている男、元ロン毛でした。

「何なんだあの女は…、それと俺の髪が…」

好太郎が嘆いていると、亜由美の携帯にメールがありました。

「あ、竜王さんだ。えつと…」

無いようは次のとおりでした。

『次の選択肢から1つ選んでね。選んだ選択肢でエンディングが変わるよ。』

1、普通のエンディング

2、R - 15エンディング

『

「これは当然1…」「2…」「…え？」

亜由美は2人の方へ顔を向けました。

「ここは普通2だろ」

「だってシンデレラって最後は王様と結ばれるんでしょ？ 結ばれると「ピー」とか「ズガガガガ」とかするんだから、2じゃないと」

変態の元ロンゲと何かまじめなこと言ってるようで実はバカなこと言ってる歩は2を選びました。

亜由美は選択肢より、歩がここに来てからキャラ崩壊しすぎてるとに泣きたくなりました。

そうしてる内に元ロン毛ネズミが『2で頼む』と返信していました。

(1)のコラボどうなるの……)

王様一行は黒髪ロンゲの巨乳っ娘にうんざりしながら雪華達の家に着きました。

「ここでラストだな…」



「ちょっと母さん、何してんだよ!？」  
「し、死刑になっちゃうって!」

加奈と皐月が慌てていると雪華は土を指さしました。

「この人……、夢に出てた人よ」

「え?」

読者の皆様は勘づいていたでしょうが、雪華の夢に出ていた男子と  
いうのは土のことです。

「とりあえず……、殺つてもいいわよね?」

加奈と皐月は首を何度も横に振りしました。そして雪華を羽交い絞め  
にしました。

「離しなさいよ!」

「いや、さすがに殺すはダメだから!」

「あーもう! 美莉! 手伝え!」

皐月が呼んだことで美莉が奥から出てきました。

「どうしたんですか、皐月お姉様!」

土は腹を抑えながら驚きました。

「やっと見つけた! これお前のだろ!」

「あ、それ……」

美莉は土から出されたディカエルドライバーを受け取りました。

「え？ 何で美莉が？」

「どういうことだよ？」

「何で？」

『何この急展開。超燃えるっす』

4人が驚く中、ライが美莉に近づきました。

「良かったねお姉ちゃん。王様のお兄ちゃんと結婚だよ」

「け、結婚／＼！？」

美莉は士の顔を見て、更に顔を赤くしました。

(土君と結婚土君と結婚土君と結婚……／＼／＼／＼)

「げ、素で喜んでやがる。こりやもうダメだな」

美莉はどうやら劇ではなく素で妄想タイムに入ってしまった。  
その時、広報で作者の声が聞こえてきました。

『悪イが、こつから先はR 15エンドだ！ 15歳以下は侵入禁止ってなァー！』

(R 15ってことはちょっとエッチなことも……／＼)

妄想タイム10分拡大…、と思いきや美莉は雪華の方を向きべー、と挑発しました。明らかにざまあみろの意が込められています。雪華はそれに素でムカつきました。

『うわぁ！ このままじゃ美莉ちゃんと士があんなことやこんなことしちゃっ！』



海華の言葉で雪華の何かが切れました。たぶんツンデレ特有の嫉妬でしょう。

「ちよつと、今のはどういう意味かしら？」

「何ってそんなの土君は諦めてって意味だけど」

その様子を見ていた舞台裏を含めた皆は嫌な予感を感じました。

「やべえ、台本と全く違ってきてる」

「逃げたほうがいいのかな？……」

「とりあえず舞台裏に撤退するぞ」

「じゃあ僕の能力で送るね」

「やばそうだなあ……」

話合った5人はライの能力で舞台裏に撤退しました。その間に喧嘩は激しさを増していました。

「土のことは好きじゃないって言うてるでしょ！ そんなこともわからないのお子ちゃま！」

「だったら土君から5km離れてよ露出狂！」

『修羅場キター！』

悪口の応酬が続き、遂に2人は互いの変身アイテムを出しました。

「もういいわ。わからずやお子ちゃまには徹底的に常識を教えるあげるわよ！」

「ふん！ 露出狂が土君の近くにいたら迷惑だよ！ だから今ここで駆除します！」

「変身！」

2人はディカエル、スピリアに変身すると戦い始めました。この2人の喧嘩ってひどいところなるんだよ。

一方避難地と化した舞台裏

「おい、好太郎！ お前止めてこいよ！」

「何で俺なんだ！ 無茶言っな！」

「文句言わずに行け！」

「ふざけるな！」

皐月と好太郎がもめている中、歩意外の皆は震えていました。歩は相変わらず虚ろな目で聖麻から貰った本を読んでいた。

「あいつら大人気無さ過ぎだろ……」

「何でああなっただ……？」

「それはお兄ちゃんのせいだよ」

「加奈、脳天チヨップしてきてよ……」

「それこそ無茶でしょ……」

すると舞台裏の壁にひびが入りました。そしてその壁が砕け、ディカエルが飛び出し、更に追いかけるようにスピリアも飛び出しました。



「（2人は今接近戦中か…）物理干渉を拒絶する！」

この状態で飛び込めば間違いなく2人は吹き飛ばでしょう。しかし、今の彼女達は戦闘力は53万どこじゃじゃなかった。

「「邪魔！」」

何と競り合いの状態を瞬時に解いて、ほぼ0距離で矢と氷柱を放ちました。

「ぐああああああああああああああ！！！！（バカな…！あそこから遠距離攻撃だ…）」

デジエクトは装甲から火花を散らしながら吹き飛び、壁に激突しました。その様子を歩は指さしていました。

「マジワロス」

「何言ってるんの歩！？」

亜由美はツツコミをすると素早く駆け寄り歩の持っていた本を見ました。そこには某巨大掲示板の用語がずらりと並んでいました。

「聖麻くうつうつうつうつうつうつうつん！！??」

亜由美は聖麻を睨みましたが当の本人は笑いをこらえながら無視。

「とにかくこれは没収！」

「あ…」

歩は没収されたことに悲しそうにしましたが、間違い無く教育に悪

いのでおかまいなしでした。

ディジエクトはがれきから何とか出てきました。

（何で俺がこんな目に合わなきゃならないんだ！）

そしてディジエクトの頭によぎる1人の男。そう、目の前で2人の戦いを見てオロオロしている士である。

（臆月に強制的に行かされたのもあるが、士がこんなにフラグを立てなければこうならなかつただろ！）

ディジエクトはかなりのダメージを負いながらも全速力で走り、士の元へ向かいました。

「士！ 前を向けえ！」

「え！？ は、はい！」

ディジエクトの言う通り前を向く士。そしてディジエクトは叫んだ。

「物理干渉を思いっきり拒絶する！」

別に「思いっきり」と言っても言わなくても拒絶の度合いは変わらないがそれは彼の気持ちの問題だろう。

ディジエクトはその拒絶した状態で士の背中に触れました。

「お前が止める！ このフラグ野郎おおおおおおおおおおお  
お！！！！！！！」

「ぎいやああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああ！！！！！！！！」





「いいよ。こっちも歩や好太郎さんが…」

「結局劇が滅茶苦茶になったわね……」

「恋する乙女って怖いな」

「でも楽しかったしいいや！」

士はというと見るも無残な姿になって倒れ、歩に棒でつつかれてました。

「大丈夫土君？」

「……………」

「返事が無い。ただの屍のようだ」

美莉と雪華は作者が笑顔で連行しました。その間ももめてたけど。

亜由美は目の前にオーロラを出現させました。

「歩！ 行きますよ！」

「うん、わかった。じゃあね土君」

「好太郎も落ち込んでないで来いよ！」

「あ、ああ……」

「じゃあねー！ ディージェントのお兄ちゃんお姉ちゃん！」

「またなあ」

オーロラの中へ歩達が入り、オーロラはそこから消滅しました。

「……………すごくひどい終わり方だね」

「ああ。恨むなら作者を恨め」

『水音ラルさんの『仮面ライダーディージェント』破壊の代行者』



、おもしろいから見てみてね。海華ちゃん  
の宣伝でした〜！バイ  
チャ〜！』

ディカエレラ後編／カオスと崩壊とフラグ乱立（後書き）

次回からようやく本編です！

おおまかな内容は……『いくぜ、クライマックス！』です。  
タイトルのアルファベットは『F』です。

え？電王っばい？気にしない気にしない。

それではまた次回！

ラルさん、苦情等がありましたら何でも言ってください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6294r/>

---

仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～

2011年11月21日22時50分発行